

竜に選ばれし赤龍帝

榛猫(筆休め中)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

兵藤一誠は、おっぱい大好きな変態高校生  
ある日ひよんなことから

ドラゴンボールの世界に飛ばされる、

果たして一誠はこの世界で生き抜くことができるのか!?

悟誠の超サイヤ人龍のイメージです

活動報告にてアンケート実施中です。そちらもご覧ください

## 目次

作者報告コーナー	1
番外編？【作者報告】	
長期休載のお知らせと各作品の主人公達	7
作者報告とおまけ	9
if (番外編)	
戻りし時？赤龍帝の帰還	13
閉ざされた未来……二人を守り抜け兵藤一誠！	27
ドラゴン入り・ラディッツ襲撃編	
異世界から訪問者!!その名は赤龍帝！	36
赤龍帝の向かう先、目指せ悟空親子と武天老師の家	44
赤龍帝の向かう先……待ち受けるは武天老師	49
唐突な乱入者！正体は悟空の兄!!	55
語られる籠手の正体？赤龍帝の籠手に眠る秘密	62
サイヤ人編	
サイヤ人对地球人？赤龍帝の本領発揮だ！	65
目覚めた先は冥界？悟空の元へ走れ！	71
走れイツセー！目指すは界王星	75
おっさん登場？その名は界王様	78
龍と猿？界王様の修行開始だ！	84
十倍重力を克服せよ！悟空と一誠猛修行	88
当ててみなさい！グレゴリーの高速を見切れ！	91
修行終了！皆の元へ走れ！	94
走れ悟空にイツセー！サイヤ人地球到着	99

乙戦士の敵を討て！イツセー怒りの界王拳

104

報告とコラボ

115

遂に出るか！悟空限界を超えた界王拳

118

激突！大猿ベジータvs赤龍帝イツセー

124

遂に覚醒！イツセー決死の禁手化

127

放てクリリン！地球の想いを込めた元気玉！

131

これで終いだ！イツセー渾身のドラゴン波

138

フリーザ編

訪れた平和 次の行き先はナメツク星？

145

問題解決？手段は神様の宇宙船！

148

遂に出発！悟空とイツセーナメツク星へ

154

二人を救え！急げ悟空に悟誠

159

圧倒的！修行の成果を見せる時だ！

165

ギニューを止める！悟空とVS悟誠ギニュー

172

取り戻せ元の身体！悟誠決死の大奮闘！

175

取り戻せ義父の体！ギニューを倒せ！孫悟誠

179

先代の赤龍帝！？神器の中に潜れ悟誠

185

ついに復活！孫悟誠vsフリーザ！

193

これで最後だ！放て超元気玉！！

200

ついに覚醒！超サイヤ人を超えろ！孫悟誠！

210

蘇れ孫悟誠！英雄の義息子の帰還！【番外編】

217

人造人間編

英雄の帰還！待ち受けるは地獄か再会か！

224

お帰り孫悟空！本当の英雄の帰還だ！

234

各々の修行！三年後に備えろ！

244

ついに出現！非道な人造人間を追え！

251

迫りくる病魔！絶体絶命！孫悟空！

259

20号を追え！探せドクター・ゲロの研究所！

265

動き出した脅威…17号と18号機動！

268

遂に激突！超サイヤ人VS18号！

275

遂にひとつへ！ピッコロと神様融合の時！

279

急げ悟誠！悟空に迫る命の危機

284

恐るべき真実！もう一つのタイムマシン

289

タイムマシンの真実！もう一人のタイムトラベラー

294

出撃！超ナメック星人&超サイヤ人！

302

英雄の復活！探せ怪物セル！

310

超サイヤ人を越えろ！いざ精神と時の部屋へ！

315

オラ達の番だ！修行に入るぞ二人とも！

322

悟誠退場？18号のもとへ急げ！

328

新たな力！セルを倒せ孫悟誠！

336

遂に降臨！完全体龍帝セル爆誕！

347

龍帝セルの本気！猛攻に耐えろトランクス！

357

十日後に備えろ！セルを越えろ！孫一家

363

修行終了！大会まであと九日

370

三日休んで三日特訓！んでまた三日休む！

377

戦士の休日！セルゲームに備えろ！

382

動き出す防衛軍！セル打倒なるか！

386

神を探せ！悟空新ナメック星探索！

395

### 悟誠強化転移編

新神様着任！復活のドラゴンボールと修行のイツセー！

402

飛ばされた悟誠！向かう先はもう一つの時空!?

408

異世界での会合！赤龍帝と赤龍帝！

414

禁手の限界を超えろ！悟誠次のステージへ！

419

## セルゲーム編

帰ってきた孫悟誠！そして始まるセルゲーム開催！

425

セルゲーム開始！起き上がる謎の挑戦者

432

父から子へ！第二ラウンド突入！

438

悟誠暴走!?! 暴れ狂う赤き龍！

454

悟誠よ元に戻れ！悟飯と18号の共闘！

471

## 魔人ブウ編

クリリンに春!?! クリリンの花嫁は誰だ！

478

頑張れ悟誠！18号とのハチャメチャデート！

488

七年の月日、悟飯を見守れ孫悟誠！

492

誕生！次代のニューヒーロー!?! その名は悟菜帝！

495

初実践!?! 頑張れ悟菜帝！

500

ビーデル達を救え！赤龍帝と悟菜帝！

505

守り抜けるか！悟菜帝の秘密！

512

復活の戦士！用心棒赤龍帝！

517

復讐のレッドシャーク！二人を救え孫兄弟！

522

密漁者に拐われた!?! チビを救え悟菜帝！

528

因縁の再開！ビーデルVS龍兄弟！

536

参加者続々！天下一武道会再開！

547

大会に備えろ！悟誠一家の帰省

560

修行開始だ！赤龍帝のスパルタ特訓！

563

気を掴め！ビーデルのトリックマスター修行！

567

気を御せよ！空を駆けろビーデル！  
ようやく開始だ！満を持しての悟誠の修行！  
悟空の帰還！そして始まる天下一武道会！  
どこまで隠せる!?戦士達の苦難の予選！  
試合前の小休憩、力を蓄える戦士たち！  
正体はなんだ!?謎の戦士シン！  
訪れる暗雲。動き出した闇の者たち！  
爆発寸前!?持ち堪えろ孫悟誠!!  
明かされる真実！界王神と魔道士ビビディ  
強襲！暗黒魔界の王ダーブラ！  
キビトを守れ！悟誠決死の防衛戦！  
乗り込め宇宙船!!魔人ブウ復活を止めろ!!  
待ち構える第一の刺客!!挑め先発ベジータ!!  
攻め込め戦士たち!! 下層にて待ち受けるもの  
降りてくぞ下層!! 次なる相手はダーブラ!!  
最強はオレだ！魔人ベジータ爆誕！

645 642 637 632 627 624 621 618 615 609 604 601 590 584 578 574

## 作者報告コーナー

アイルーくん」というわけで始まりました！作者報告のコーナー  
!!」

齊木『ニヤ…？

幽々子「多分、などニヤ、をかけたんだと思うわ〜」

17島「なるほどな…。」

アイルーくん「…とりあえず自己紹介していくニヤ！」

(((((無理やり話逸らした…))))))

---

上条「じゃあまずは俺からだな。

『新約、とある提督の幻想殺し』で提督をやってる上条当麻だ」

悟誠「次は俺だな！

『龍に選ばれし赤龍帝』で孫悟空の義息をやってる孫悟誠だ」

一誠「次はオラだな

『DRAGONBALL D改』で赤龍帝やってっぞ、兵藤一誠だ！」

榛名「お次は私ですね

初めまして『榛名さんの苦労話』で一味の姉役をやらせていただきます。榛名です」

齊木『次は僕か…。



『鎮守府提督のΨ難』で提督をやらされている、斉木楠雄だ…。

アイルーくん「お次はボクだニヤ！」

『女王領域の獣人種』でニヤンター、ニヤイダーをやってるアイルーですニヤ！」

「お次は私ね〜♪」

『駒王の街の亡霊姫』でオカ研の副顧問をさせていただいてます西行寺幽々子と申します」

17島「次は俺か…。

『17号は戦艦霧島に憑依するようですよ?』で霧島をやっている。17号だ」

霧島「私の中にいる元の霧島です」

燐空「最後は俺か…。

『Re, 喪失から始める幻想生活』で放浪者をやってる。霊焰路燐空だ。

呼びにくければリクって呼んでくれ」

アイルーくん「ありがとうございますニヤ!ここにいる人たちがギオス。r 榛猫の書いている作品の主人公たちだニヤ!これからこの人たちと今後の予定について話していくニヤ!」

上条「つーか、今度はなんで俺達集められたんだ?」

悟誠「また長期休載とかか?」

一誠「それはさすがにねえんじゃねえかな?」



17島「気まぐれすぎて俺達は気が気じゃないんだがな…」

燐空「17島さんに激しく同意だよ…」

アイルーくん「更新頻度はボクは知らないけど以前やってたらしい週替わり更新にしていくらしいニヤ」

上条「ああ、あの方法ね…」

悟誠「大丈夫なのか？」

一誠「まあアイツの事だから何か考えがあつてのことなんじゃねえか？」

榛名「そうだと良いのですけど…」

斉木『案外何も考えていないかもしれないぞ？』

幽々子「考えていることを祈るばかりね」

17島「問題ない、更新が滞ることがなければそれでな」

燐空「作者信用ねえんだなあ…」

上条「そういや思ったんだけどさ、週替わりにするってことは前みたいに作品ごとに組み分けがあるんだろ？」

悟誠「そういえば前はあったよな、何がありましたっけ？」

一誠「えーっとな… あん時は確か、前の『ドラD』が週六更新で…。」

悟誠「『龍選』が週五だったっすね」

榛名「『榛クロ』は週四でした」

斉木「おまけで『新約とある』と『鎮Ψ』が週三だったな…。」

幽々子「『亡霊姫』は週二の更新だったわね、確か」

17島「『17戦霧』は週一更新だったな、途中で止まったが…。」

燐空「その頃からやってたのかよ… で、今回はどういう分け方なんだ？」

アイルーくん「それについては後から書く活動報告を見て欲しいぞうニヤ」

斉木「露骨な誘導だな…。」

アイルくん「さつきも言った通り、詳しいことは作者の活動報告を見て欲しいニャー！」

上条「どうやら今後の更新の予定や優先度なんかも書いていくつもりらしい」

悟誠「つもりねえ、いったいそれがいつまで続くのやら…」

一誠「まあ試してみたらいいじゃねえか、色々やってみりや方法も思いつくかもよ?」

榛名「今は作者を信じるしかないですね…」

齊木『僕の所は直に終わるだろうから早めにしてほしいものだが…』

幽々子「それも作者のやる気次第かしらね」

17島「久しぶりに動けるんならそれでいいさ」

燐空「17島さんの言う通りですね」

『『『そういうことですので、こんな作者ですがよろしくお願ひします』』』

## 番外編？【作者報告】

### 長期休載のお知らせと各作品の主人公達

一誠「そういうわけで、オラ達がここに集められたちゆうわけか」

悟誠「お、俺にそっくりだ！でも口調が……」

幽々子「あらあら、ホントにそっくりね♪」

齊木『全く…僕は海域の問題を調べるので忙しいというのに何故こんなところに来なければならぬんだ……』

17島「まあアイツが動かなきゃ俺達も動けないんだから仕方ねえだろ？」

上条「上条さんは今度は何をやらされるのか気が気ではありませんですことよ？」

吹雪「あはは……苦勞してるんですね」

榛名「仕方ありませんよ…作者は気まぐれですから」

齊木『ん？吹雪、お前のところの提督はどうした？』

吹雪「それが…『なんで俺がそないなめんどい所にいかなあかんねん…俺ア嫌じゃ、いかん！吹雪ちゃん代わりに行ってきてくれ』と言われてしまつて……」

幽々子「責任感のない人なのね〜」

一誠「とんでもねえ奴だな…オラがぶっ飛ばしてやる！」

悟誠「止めとけて、お前にぶっ飛ばされたら命がいくつあつても足りねえよ……」

上条「全くもつてその通りでせう……」

17島「醜い肉のオブジェの出来上がりだな……」

齊木『霧島と同意見だ……』

榛名「榛名もそう思います……」

一誠「ひつでえな…おめえ達……」

幽々子「それだけあなたは強すぎるのよ…何よ敵を蹂躪つて……」

一誠「んなこと言つたら幽々子だつて無双してんじゃねえか……」

幽々子「あなた程酷くやつてはいませんわ〜♪」

悟誠「そうかな？にしても良いおっぱいだあ…♪」

17島「お前、18号に殺されるぞ……」

吹雪&榛名「……………」【引き】

悟誠「引かないでごめん！俺が悪かった！」

上条「うわあ……。俺のところでそんなことしてたら即殺されちゃうよ……」

斉木『まずそんなことをする意味がわからない……。』

一誠「はははっ！おめえの場合裸見れねえもんな」

幽々子「笑い事じゃないと思うわ〜」

17島「その通りだな…中の奴も引いてるじゃないか……」

上条「にしても、どうしてまた長期休載なんだろうな……」

一誠「おめえ持ち前の不幸が作者にも移ったんかもしんねえぞ？」

上条「それだけはマジで勘弁してくれ……」

榛名「榛名には分かりません……」

斉木『どうやら気力が続かないらしい…またその内気が向いたら書くそうだ……』

悟誠「気が向いたらって……いつたい再開は何時になるんだよ……」

幽々子「それも作者の気まぐれなのよね〜……」

一誠「その通りなんだよな…っと、そろそろ終わりみてえだ！んじゃ、読者のみんな！またな！」

全員「ご迷惑をお掛けしますが少々お待ちください……」

## 作者報告とおまけ

「皆様今回はある少年について取材をしていこうと思います！」

その人物は防衛軍をセルの魔の手から守り懸命に戦い抜いた異世界からの放浪者！孫悟誠さんです！では早速聞いていきましょう！」

### 【孫家の場合】

「悟誠さんと出会ったのはどういた経緯で？」

悟空「ん？えつと…。」

悟飯「お父さん、僕がパオズ山で迷子になっていた時だよ」

悟空「あり？そうだったっけか？」

チチ「まったく悟空さは… おめえはもういいべ」

「あのう…ご質問については…。」

悟飯「あつすみません！悟誠兄ちゃんとは僕がパオズ山で迷子…というか遭難していた時に助けてもらった時なんです」

チチ「オラは悟空さが悟飯ちゃんを探しに出かけて連れて帰って来た時だな」

「なるほど、それでそのまま受け入れることにしたのですね」

チチ「いや、そんな時はまだお客さんと思っただけでなかったべ」



悟飯「悟誠兄ちゃんが正式に家族になったのはベジータさん達を追い払ってからだだったんです」

悟空「そのめえは悟飯と一緒<sup>前</sup>に連れ去られちゃってたかんな」

「つ、連れ去られたのですか!?!」

チチ「んだ、しかもそんな時に悟空さんと一緒になって死んじゃったもんだから決めてたことを伝えるのがかなり遅れちゃっただよ」

「そ、そうだったのですね、いろいろと貴重なお話しありがとうございます!」

悟飯「また来てくださいいね!」

---

#### 【ベジータ一家の場合】

ベジータ「なに?小僧の話聞かせろだど?」

「はい、孫さんの所でもいろいろ聞かせてもらいましたのでこちらでもいろいろとお聞きしたく」

ブルマ「あら、私は良いわよ?ね?トランクス」

トランクス (Baby) 「あいゝ」

ベジータ「フン、好きにしろ」

「ありがとうございます。では、悟誠さんの強さの秘訣を教えてください」

さい」

ブルマ「悟誠君の強さの秘訣？ああ、そう言えば昔はよく私の胸をジロジロ見てきてたわね」

「む、胸…ですか？」

「そうなの、本には気づいかれてないと思ってたようだけどかなりガン見してきたからバレバレだったのよね」

ベジータ「ダニイツ！それは本当かブルマ！」

ブルマ「え？本当だけど…なによ？」

ベジータ「あの野郎…ぶん殴ってやるぞおお!!」

ブルマ「あ、ちよつとベジータ！…もう、行っちゃった」

「あの…悟誠さんは大丈夫なんでしょうか？」

ブルマ「大丈夫だと思うわよ？今の悟誠くん、ベジータや孫君より強いから」

「は、はあ…」

ブルマ「それで、私から離せるのはこのくらいだけれど、いいの？」

「あ、はい。色々とお聞かせいただきありがとうございます」

「と、いうわけで皆さんいかがでしたでしょうか？」

正直あまり大したことが聞けなかった気もしますが今回はここま  
でにしましょう。ではまたお会いしましょう！」

if (番外編)

戻りし時？赤龍帝の帰還

sideイツセー

セルを悟飯くんとともに倒してから  
二年がたった。

俺は禁手化（バランスブレイカー）を習得して  
別の形の覇龍を編み出すことに成功した。

その名も神覇龍（ジャガーゴットドライブ）

ドライブや神龍、ポルンガにも協力してもらい

赤龍帝の籠手内にいる先輩たちを説得

更にその先輩達を神族に

昇華させることに成功したんだ。

セルとの戦いするとき

悟空さんは死んじまったけど

界王様の所で楽しくやってるみたいだ

今まで悟空さんの：いやチチさんの家に厄介に

なってたんだ。チチさんは俺のことも

家族同然に育ててくれた。

それでいつも通り一日が終わって俺は休んだんだ。

そして起きたら、俺は知らない場所にいた。

いや、正確には知ってる場所であった。

司会そこはもう二度と戻るだろうことは

無かった筈の世界

俺の部屋だったのだ。

もしかして、今までの出来事は夢だったのか？

試しに軽く気を出現させてみる

ポウツ……

ホツ……気は使えるな、ということ箱今までの出来事は

夢ではなかったといえる。

だが何故今こっちに戻って来たんだ？

「うくん… 考えてても仕方ないし行くとするか」

俺は制服に着替え家を出た。

その時に気づいたんだが俺は亀と書かれた

オレンジの道着を着ていた。

あの後、松田や元浜が覗きをしていて

追いかけていたの

鉄拳制裁をしてシバいたら周りが唾然としていた。

俺ってあつちに行く前そんなに酷かったのか？

「松田、元浜、なにしてんだよ…」

「おお！ イッセー！ 今、覗きしていたのが

バレて追いかけてらるんだ

悪いが後にしてくれ！」

そう言っ走り去ろうとする二人を

ラリアットで打ちのめし、

女子たちの前に突き出す。

「ほら、しっかりと制裁してやれよ?」  
すると女子達は顔を不審にしかめながら

「どういうつもり? あんたが  
そんなことするなんてどういう風の吹き回し?」

「ん? 別になんもねえよ?  
止めたのがそんなに悪かったか?」

「いや、それはまあ助かるけど…」  
まあここでは昨日まで一緒になって覗きして  
追いかけられてたんだから不審に思っても  
仕方ないよなあ…

「なら、いいじゃねえか、またな」

その後何度もそんな現場を止めているうちに  
皆は俺を学園の良心と言い出した。  
ただ悪友の犯罪を止めているだけなんだが…  
どうしてこうなった…?

そしてそれからまた少し経ったある日  
俺は学校が終わって一人帰路につき歩いていると

「あ、あの！兵藤一誠さんですか？」

と、声をかけられたので振り向くと

そこにはかわいい感じの女子が立っていた。

(気は人間のそれとは違う・・・こいつ人間じゃないな)

「ああ、兵藤一誠は俺だけど？」

とりあえず目的を探るために

気を抑えて応じてみる

「あ、あの！兵藤君！

私と・・・付き合ってください！」

・・・へ？

予想外の答えに俺は思考が

ショートしてしまう

「えーっと・・・とりあえず

名前を聞いてもいいかな？」

「あ、私、天野夕麻っていいいます。」

なるほど、天野夕麻さんね・・・

「じゃあさ、天野さん、

なんで俺と付き合いたいのか

聞いてもいいかな？」

とりあえず理由を聞いてみよう

この時の俺って確か

かなりエロエロだったもんな

そんな奴に告白するなんて何かあるはずだ。

「そ、その・・・以前ここで偶然見かけて・・・

その：： 一目惚れ：： です。」

オオ：： マジか、

こんなことってあるもんなんだな

『感心してるところ悪いが相棒：：』

こいつは墮天使だ』

(墮天使？ってかドライグ起きてたのかよ)

『ああ、随分前から：：』

だが、そんなことはどうでもいいんだ』

(ああ、確か墮天使が

どうとか言ってたっけ

確かに気は人間の物じゃないのは

分かったけど：：)

『奴の目的は分からんが：： どうする？』

(とりあえず乗ってみる、襲ってきてても

返り討ちにすればいいだけだしな)

『それもそうか、なら俺は口を出さん

協力が必要な時は呼べ』

(了解)

つと、とりあえず返事しておかねえとな

「天野さん：： だっけ？俺なんかでいいなら是非」

俺はそう返事をした。

「本当ですか！やったあー！」

凄いうれしそうだな、演技には見えないけど

こうして、俺と夕麻ちゃんは付き合うことになった。



それから数日後デートの帰り道

「はあく楽しかった！」

今日はありがとうイツセー君！」

俺達は噴水公園に来ていた。

今日のは結構頑張った方だ

今まで悟空さんやベジータさんに

鍛え抜かれた所為か

考え方がすぐ修行に行つちまうんだよな…

これは直さないとヤバい…

「おい、小僧修行をつけてやる

行くぞ…」

とかいって重力室に連れていかれたり

「おお！イツセーまた組手すつぞー！」

とかいって何度死にかけたことか…

そのせいで考えが脳筋とかしてる…アカン

「楽しんでくれたなら考えた甲斐があつたよ」

「うん！それでね？イツセー君、

お願いがあるんだけどいいかな？」

うん？お願い？また買い物に付き合えとかか？

「なにかな夕麻ちゃん？」

「あのね？死んでくれないかな？」

……ん？

『名にボケてるんだ？』

(いや、なんでも)

『なら、しつかりしろ不意打ちで  
殺されたなんて知られたら

悟空やベジータに笑われるぞ』

(うっ… それだけは嫌だ… 分かったよ)

「あはは… ごめん夕麻ちゃん…

俺、耳が変みたい

もう一回言ってくれろ?」

「死んでくれないかな?」

やっぱ聞き間違いじゃなかったよ畜生!

「貴方と過ごした少しの日々楽しかったわ」

そう言いながら格好が変わる夕麻ちゃん

おいおい… あれは露出が激しすぎだろ…

俺が格好に呆れていると

「恨むならその身に宿した

神器を恨んでね?死ね!」

結構な大きさの光槍を投擲してきた。

だが遅すぎるな、これなら

ガシッ!!

簡単につかみ取れる

「!?嘘… 槍を素手でつかんだ?」

「これ、返すぞ?」

ドヒュン!

俺は軽く夕麻ちゃん改め変態鴉女に投げた

ザクツ！！！！

「あがつ… な、なんで…」

「急所は外してやったから

早いところ戻って治療するんだな

それと、もう俺にちよっかい

だすんじゃねえぞ？」

少し睨みを利かせ変態鴉女をみる

「くっ…！ 覚えてなさい必ず殺してやるわ！」

おーおー！ 負け惜しみの強い鴉さんですこと

さーて、彼女のもフラれちまったし帰るか

俺は家に向かって歩き出した、すると

「ちよつと待ってくれるかしら？」

背後から声がかげられた。

おかしいな、さっきまで人の気配は

なかったんだけどな…

そう思いつつ振り向くとそこには

学園のお姉さま

リアス・グレモリー先輩が立っていた。

「リアス先輩じゃないですか、

どうしたんです？」

「貴方、今墮天使を撃退していたでしょう？」

なぜ殺さなかったの？」

「なぜってそりゃあ… 世界を破壊するわけでも

全宇宙を支配するだのじゃなくて俺個人が狙い

だつたみたいですし、殺す必要もないかなつて」  
フリーザだとかベジータさんは  
とんでもないこと考えてたもんな…  
あれくらいなんてことない

「せ、世界を破壊や全宇宙の支配…？」

変わってるわね、貴方とりあえず

明日部屋に来てくれる？」

あれ？俺なんかすごいことに

巻き込まれようとしてない？

『気の所為だろ』

(そっか気の所為か、ならいいや)

「わかりました、いいですよ」

「ありがとう、じゃあ放課後に使いを出すわね」

「了解です」

そうしてリアス先輩と俺は別れ帰っていった。

翌日の放課後に木場とかいうリアス先輩の使いが来て  
オカルト研究部に連れて行かれた  
俺はそこで先輩達が悪魔だと知る  
そして、自分も悪魔にならないかと聞かれたので

「悪魔になったら強くなれますか？」  
って聞いたらにこやかな顔で頷かれた。  
その時の回想がこちら

「ねえ、貴方悪魔になってみる気はない？」

「悪魔ですか…」

「正直に言うかね？私は貴方が欲しい  
神器も持っていないのに墮天使を撃退出来る程の  
力を持っているのだから」

「…1つだけ、聞かせてください」

「何かしら？」

「悪魔になれば俺はまだ強くなれますか？」

「ええ、貴方が望むならきつとね」

「分かりました。良いですよ」

なのでOKした。そしたら悪魔の駒？とかいう奴で転生する  
らしくて、その転生に兵士の駒8個必要だったりと  
てんやわんやな一日だった。

その後はアーシアというシスター（女神）に合って  
その子を教会に届けたり、  
契約を取りに行ったら  
フリードとかいう腐れ神父がいたから  
消し飛ばした。

「とりあえず切り刻み世界新記録に挑戦ですねぇ！」

「煩いな…ドラゴンショット！」

「なっ!?ちよっ待っ…」

そしてフリードとか言うクソ神父は消し飛んだ。

その後アーシアが協会から

逃げてきて一緒に遊んでいたら

墮天使どもに隙を突かれて

アーシアをさらわれちゃった。

その後アーシアが神器を抜かれるとかいう

儀式が行われるとのことだったので

すぐに教会に乗り込み

墮天使たちを血祭りにあげた。

「あら、やっと来たの?でももう遅いわ

儀式はもう終わったんだから」

「黙ってる変態…かめはめ波!!」

「ぎゃあああああー!」

こうしてレイナーレを消し飛ばして

周りのはぐれ神父は半殺しにしてやった、

その後、ライザーとかいう焼き鳥が部長の所に来たとき

何故か兵士の女の子が俺に攻撃してきたので

気弾で吹き飛ばしたら  
焼き鳥がめっちゃ怒ってた。あれ、俺が悪いの？  
命令してきたのそっちだよな？

「貴様のその目、気に入らないな…」

ミラ、やれ」

「はい」

俺はその突撃をかわして

「ハッ！」

気弾をぶつけてやった。

「きゃっ!!」

ミラとか言う子はそのまま吹っ飛んでいって  
壁に激突して気絶した。

「なっ…：貴様あ!!!!貴様はゲームで俺が必ず

ぶち殺してやる!!」

素晴らしい残してライザー達は消えていった。

その後、ゲームの為の特訓の為に山籠もり合宿をして  
皆を鍛え上げてやった。

ふう、疲れてきた。ドライグあと宜しく

『仕方ない奴だな』

じゃあここからは俺が簡単に説明していくぞ

合宿後ライザー戦

「これで消し炭にしてやる小僧!!!!!!」

巨大な火炎球がイツセーを襲う

「なら、ベジータさん直伝

ビックバンアタアアツク!!!」

「なんだと!?ぐあああ!!」

『ら、ライザー・フェニックス様、戦闘不能

よって勝者はリアス・グレモリー様です』

『これがライザー戦だ次はコカビエル戦』

「魔王は誰が来る?サーゼクスか?セラフォルか?」

「いや?お前の相手は俺だコカンヒエル」

「コカビエルだ!!舐めやがってえええ!!!!」

特大の光槍を投げてくる

「なら、これだ禁手化!! (バランスブレイク)

ドラゴン波!!」

「なっ!!ぐつがああああ!!」

コカビエルは消し飛んだ。

それを見ていた白龍皇は

「.....これは任務も何もないな

それにしても面白いな俺のライバル君は

戦い甲斐がありそうだ」

「なら、今ここで消し飛ばしてやろうか?」

俺は声の主(白龍皇)の背後に立っていた。

「.....今はひかせてもらうよ.....」



また会えたら戦おう俺の宿敵君」  
こうして白龍皇は飛んで行った。

「・・・変な奴」

『とりあえずはこんな所か・・・』

続きがあるかどうかわからないが  
まあ気長に待っている、じゃあな』

閉ざされた未来… 二人を守り抜け兵藤一誠！

side 一誠

オッス！オライツセー

ん？なんでオラが悟空の話し方をしてんのかって？

そりゃあれさ！悟空や皆が死んじまって残された奴らは意気消沈しちまつてる

だから少しでも元気づけようとオラは悟空の代わりになろうと思つて

こんな喋り方してんのさ！

ベジータやピッコロ、それにクリリン達… 皆人造人間に殺されちまつた…

生き残った戦士はオラと悟飯、それにベジータの息子のトランクスだけだ。

あれから二十年、ずっと三人で戦い続けてきたがあいつらは強すぎる…！

オラ達だけじゃとても倒せねえ！

悟飯は超サイヤ人になれっけど、

今までの戦いで片腕を無くしちまつて思うように戦えねえ

それにトランクスは戦闘経験が無く超サイヤ人にもなれない…

実質万全に戦えるんはオラとドライグしかいねえってことだ。

『悩んでいる所悪いが相棒、どうやら奴らが現れたようだ…』

なに？奴らがもう現れたのか!?

すると、遠くで爆発が起こった。

「！出やがったな人造人間ども…！今度こそ決着つけてやる！」

「兄さん！僕も行きます！」

「俺も戦います！これ以上アイツらの好きにさせてなるものか！」

二人も戦う気満々か… だけど

「トランクス…お前はここにいるんだ」

これ以上こいつを危険な目には合わせらんねえ…

「!?… 何ですか一誠さん！俺だってもう戦えます！

もうずいぶん強くなったはずだ！」

「……………」

どうすつか… こいつはまだ若い、オラ達と違ってまだ未来がある  
すると悟飯がこそつと話しかけてきた。

(どうするんです？許可してやるんですか？)

(いや、許可は出さねえほうがいいと思う…)

(こいつじゃ戦ってもすぐに殺されちまうだろうからな)

(じゃあどうするんですか？)

(まあ見てろって…)

「… 分かった、なら行くか！トランクス！」

「はい！ウツ…！」

オラはトランクスの首元に手刀を落とし気絶させた。  
フリーザ戦で悟空にやったのと同じものだ。

「悪いな、トランクス…おめえはこんなところで死んじやいけねえん  
だ」

トランクスをが見つからないように瓦礫で隠し、オラは悟飯の方を  
向いた。

悟飯もオラの意志に気づいたようだ、コクリと頷く

オラもそれに合わせて頷いた。

「オラは17号の方をやる…悟飯は18号を頼む！ぜってえ死ぬなよ

「？」

「はい！兄さんも気を付けてくださいね」

「ああ、そんじゃ、いっか！」

オラ達はそれぞれに散っていった。

.....

轟音のする方へ着くとそこには17号が待ち構えていた。

「ようやく来たのか、孫悟誠、待ちくたびれたぞ」

「できればおめえより18号の方が良かったんだけどな」

「18号はお前の事毛嫌いしてるからな、そりゃ、服なんか消し飛ばされりゃ

毛嫌いもするだろうさ」

やれやれと首を振る17号

良いじゃねえか！相手は女なんだしよ！それに犯罪者だぞ！

「そりゃ悪かったな…だが、今度こそおめえをぶっ倒す！はああああ…っ！！！！」

『Saian! transform Legend!!』

さて…変身完了だ、更に！

「究極<sup>アルティメット・ブースト</sup>倍化！」

『Welsh super saian! Ultimate Booster!!』

「さらに追加だ…バランスブレイク！」

『Welsh Dragon! Balance Breaker』

!!』

俺を紅い鎧が包み込む

「さて… はじめっか!」

「やっと本気になったのか、精々楽しませてくれよ!」

気を全開にしてオラ達はぶつかり合うのだった。

.....

数時間後…

オラ達の戦いはまだ続いていた。

「はあ…はあ…くっ…!」

「どうした?もう終わりなのか?超サイヤ人龍つてのも大したことないんだな」

くそお… あいつまだピンピンしてやがる、化け物め… こっちはもうボロボロだぞ…

すると、オラ達の間降りてくる影があつた。

「なんだ17号まだ戦ってたの?」

「ああ、18号、そりや折角なんだし楽しまないと損だろ?」

「はあ… 相変わらずだよねアンタってさ… それにしても、良い様だね孫悟誠

これ、返してやるよ、ほら」

そう言っって投げ渡されたのは…

「!?… 悟飯…!」

義弟の孫悟飯だった。その姿はボロボロで痛々しかつた…。

「悟飯…？悟飯…！おい！目え開けろよ悟飯…」  
しかし悟飯は動かない。

「悟飯… 悟飯… うわああああああ!!ゴハーハーハー!!」  
『その人造人間ども…浅はかだったな…お前たちは、選択を間違えた』

すると、籠手からおかしな声が聞こえてきた

『始まったよ…始まってしまっうね…』

オラは怒りに身を任せある呪文を唱えだす

「我、目覚めるは覇の理を神より奪いし二天龍なり…

無限を喰い、無限を憂う…

我、赤き龍の霸王となりて 汝を紅蓮の煉獄に沈めよう…」

その瞬間！オラの身体は赤い龍帝そのものになっていた。

「な、なんだよ！あれ！」

「なんだかヤバそうだよ！どうするのさ！17号!？」

「とにかく迎え撃つしかないだろ！」

「くっ… やはりそれしかないか…」

そう言つてオラに突っ込んでくる二人… だが

「アアアアアアアアアアゴハーハー… !!!!!」

すると胸の装甲が開き膨大なエネルギーを溜め始めた。

『Boost Boost Boost Boost Boosty Boost  
Boost Boost Boost

B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t  
 t B o o s t B o o s t B o o s t  
 B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t  
 t B o o s t B o o s t B o o s t  
 B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t B o o s t  
 t B o o s t B o o s t B o o s t!!』

『R o n g g i n a s u ! S m a s h e r !!』

刹那、極太のエネルギーが放たれた。

「なっ?!?!?!?  
?!?!?!?なんだいこれは!?!」

「18号！生き残れよ！」

ドンッ！

し、エネルギーが迫る中17号がフルパワーでエネルギーバリアを放出

18号を遙か彼方へとふっ飛ばした。

だが、完全に躲ききることはできずに18号は足に酷い火傷を負っ  
てしまう。

そのまま飛んでいく18号

「なっ?!?17号!!ああああ...!」

「じゃあな、18号...」

その言葉を最後に17号なエネルギーの奔流に呑み込まれ姿を消した。

「アアアアアアアアアアアアアア...!!」

その後にはオラの猛獣のような叫び声がいつまでも響いていた。

side out

「…ん…こは…」

俺は荒れ果てた瓦礫の中で目を覚ました。

頭がボーっとしている…俺は何をしていたんだっけ？

しばらくして頭が冴えてくると気絶する前の事を思い出した。

「ハッ！そうだ！一誠さんと悟飯さんは？」

俺は急いで二人を探し始めた。

二人の気を感じない…無事だと良いが…

しばらく町の中を歩いていると小さな覚えのある気を感じた。

それはとても小さく今にも消えてしまいそうなほどに弱々しかった。

「！…一誠さん!!」

俺は急いでその場所に向かいました。

…

その場に着くと壁に背を預け傍らに悟飯さんを寝かせた一誠さんがいました。

俺はすぐに一誠さんのもとに駆け寄ります。

「っ！…一誠さん!!」

「ん？…ああ、トランクスカ…起きたんだな…」

「はい…そんな事より！大丈夫ですか!?ボロボロじゃないですか!」

「へ…へへ…ちつと、神器が暴走しちまってな…寿命をほとんど



持っていかれちゃった…」

「なんですって!!それじゃあ悟飯さんは…」

その言葉に一誠さんは悲しそうな顔をして…

「ああ…殺られちゃった…すまねえ…!!オラの力が足りなかったばかりに…!」

「そんな…悟飯さん…」

「それと悪い…トランクス…オラもそろそろ時間みてえだ…だからちよつと…」

「つちに…」

「…?はい…」

俺が一誠さんに近づくと、一誠さんは籠手を俺の胸辺りに付け

ブーステッド・ギア・ギフト  
「赤龍帝の贈り物」

『Transfeer!!』

ドクンツ!!

直後、俺の中に力がみなぎりました。

「こ、これは…!」

「それは、オラの最後の力だ…よく考えて使うんだぞ…

孫じゃトランクス…すまねえけど、後は任せた…ぞ…」

それを最後に一誠さんは息を引き取った。

悟飯さんを守るようにして…

『小僧、俺が消える前にお前に一つ教えておくことがある…』

「…！その声はドライグさん…なんですか？」

『相棒は…兵藤一誠は、人造人間の一体を破壊した…そしてもう一体を損傷させた…』

「…!？」

一体を破壊した!?今までだって無理があったのに！  
神器の暴走はそれほどまでに強力なのか？

『それだけ伝えておきたかった…じゃあな、幸運を祈るぞ』  
それを最後に籠手は光を失った。

「っ…！！うああああああああ!!!」

俺は泣いた…ただひたすら泣いた。

自分が無力だった…。誰一人守れず死んでいってしまう俺の無力さが許せなかった。

その怒りは限界を超え、俺を超サイヤ人へと至らしめてくれたのだった。

「… 人造人間！絶対に許さない!!」

ドラゴン入り・ラドイツ襲撃編  
異世界から訪問者!!その名は赤龍帝!

side???

君たちは聞いたことはあるだろうか…

駒王町の神隠しのうわさを……。

曰く——夜道を一人歩いていると現れる女性がいると。

曰く——異世界に興味はないかと聞かれる。

曰く——飛ばされた者たちはその先で必ず死亡していると。

曰く、その女性の誘いに乗ったものは二度と日の目を浴びることはできない……。

そんな噂に少しでも興味を持ったものは探ししてみるといい……。

しかし、二度と平穏な生活に戻れなくなることを覚悟があるのなら……だが……。



side一誠

よおつ!俺は兵藤一誠!みんなからはイツセーって呼ばてるぜ!

……って俺はいつたい誰に紹介してんだ?まあいいか……。

「にしてもすつかり遅くなっちゃったなあ……。最近この辺りも物騒だし、早めに帰らねえと」

そうやって俺は帰路へとついている足を速める。

そう、今ここ駒王町では奇妙な噂が流れてる……。

内容はこういうもので、夜道を一人で歩いていると、不思議な女性

が現れて異世界へと誘われるといった信憑性のないもの……

「それに最近は何方不明者も出てるって話だったし、もし、噂が本当なら巻き込まれたくないしな……」

「あら、それはどういった噂なのかしら？」

そう声がかけれ振り向くと、そこには紫のフリルの parasol を片手に持った女性が立っていた。

それを見て俺が第一に思った印象はこの一言に尽きる。

「……胡散臭え」

いや、けどよく見たらあの人かなりのおっぱいをお持ちのようだ……。

「あらあら、初対面の人にいきなり言うセリフではないわね、それは……」

ちよつと傷つくわよ……と、女性が苦笑しながらそう話す。

……ん？もしかして今の口に出た？

「えつと……もしかしてきこえてました？」

恐る恐る尋ねてみると

「ええ、バツチリとね♪」

笑顔で返されてしまった……。

やっべえええええええ!! 恥ずかしい!! まさか口に出してるなんて……!!

「あ、いや、えつと……すいません!! 急に失礼なことを……  
急いで謝ると女性はクスリと微笑み……」

「別に気にしてないわ、知り合いにもよく言われるから」

と、許してくれた。

「つか、知り合いからもそんなこと言われるって相当なんじゃないか?この人……。」

「あ、あはは……。それで俺に何か用つすか?それにあなたは?」  
疑問を聞いてみる。こんな時間に歩いている人はそういないからな……。

「そうね、自己紹介が先よね。ごきげんよう……」

私は八雲紫、この辺りに住んでいる者よ。それと用と言うのは貴方、異世界に興味はない?」

「……はい?」

え……?今なんて言った?この人異世界って言ったか?!?!?  
ちよつと待って待って……それじゃあこの人が噂の……!!?!

「だから、異世界に興味は……」

「いやいやいやいやつ!!待っててください紫さん!いきなり何言ってるんすか!」

再度言い直そうとする女性を俺は慌てて止める。  
本当に分かんねえよ!

「そうね、その反応が普通よね。でも、それが貴方が憧れている者がいる世界だったとしたら?」

「憧れている者がいる世界?」

一瞬頭に空孫悟そらまごごころの姿がよぎる  
俺がドラグ・ソボールの世界に行けるってのか?

「そうよ、行ってみたくはない?」

確かに行ってみたい、だけど……。

「俺なんか行っちゃってすぐに殺されて終わりですよ……」  
「そうだ、俺なんか行っちゃったところで悟の役に立てると思えな  
い……。」  
寧ろ足を引つ張り兼ねない。

「そのあたりは心配無用よ♪私がそうならないように手を貸してあげるから」

「……手を貸すって何かしてくれるんすか？」

「ええ、例えば簡単に死ぬことがないような力をあげる……とかね  
それが本当なら夢のような話だ。」

「確かにかなり魅力的な誘いですね」

「ええ、どうかしら？」

「そこまで言われたら断れるわけがないじゃねえか！」

「紫さん、その誘い受けます！」  
「そういうと紫はニコリと笑み。」

「分かったわ、ようこそ、こちら側の世界へ……」  
手を差し出してくる。俺は迷わずその手を取った。

「じゃあ、行きましょう」  
すると紫の背後から歪な何かが現れ二人を飲み込んだ。  
こうして駒王の町から兵藤一誠は消えた。



謎の空間を潜った俺は紫さんの隠れ家へと来ていた。

「あの… 紫さん？ここで何を？」

「異世界に行く前の下準備よ、先程教えたでしょう？」  
「当然じゃない…と紫さんは言う。」

「あはは… ですよね…。でも、具体的にはどうするんです？」

「そうね、まずは…と書いてもやることはそうないのだけどね…」

「え？そうなんすか？」

「そうよ、それにもうやることも終わっているの」

「…え!？」

「一体いつやったんだ？ここに来てから何かしてるの見てないぞ？」

「さあ、じゃあ準備も済んだことだし行きましょうか」  
いきなりそう言い放つ紫さん。

「え？俺まだ準備なにもできてないんですけど…」

「大丈夫大丈夫、それじゃ、頑張つて行ってらっしゃい♪」  
すると俺の足元にあの歪なナニカが開いた。

「えっ…？な、なんじゃこりやあああああつ!!」  
俺は何かの穴に落っこちていったのだった。

「頑張つて生き残りなさいね」

そんな紫さんの言葉を聞きながら……。



sideパオズ山

「痛つてええ…… ったく、なんてことしてくれやがんだよ……」

紫さんに穴に落つことされた俺は、知らない森の中で目覚めた。  
辺りを見回しても樹ばかりで何にもわからない。

「紫さん…… どこに落としてくれてんだよおおおおつっ !!!!!!!!」

思わず叫んだ。これが叫ばずにいられるか!

こんな訳の分からない場所に落とされるなんてわかってたら  
絶対にあんな誘い受けなかったのに……

「はあ…… とりあえずこの森から出るしかないよな……」

そうでなきや話にならない、このままここで飢え死に何て御免だ!  
するとその時……。

「うわああああんっ!!お父さああああん!!!」

「な、なんだ!?今子供の声が!?!」

急いで声のした方へ向かうと、子供が滝から落ちているじゃねえか  
!?!?!

「な……っ!なんでこんなところに子供が!?!と、とにかく助けねえと!!」

軽く助走を付け、俺は崖から跳んだ。

頼む!間に合ってくれ!

無我夢中で落ちている子供を助けるためにその手を伸ばした。



そのおかげでなんとか子供の所にたどり着き抱き抱える。

「…うえ？お、おにいちゃんだれ…？」

見知らぬ顔に子供が少し不思議そうな顔を俺に向ける。

「今はそんなこと後だ！丸まって俺から離れるなよ」

「ううっ… お父さああん!!怖いよおお!!」

泣きじやくる子供を庇うようにして抱きかかえ、俺は襲い来る衝撃に目を強く閉じ、死を覚悟した。

だが、いつまで経ってもその衝撃はやってこなかった。

代わりに誰かに受け止められたような感覚が背中に感じた。

もしかして痛覚が麻痺しててそう感じるだけなのか？

すると上の方から

「ふいゝ危なかったなあ…大丈夫かおめえ」

「…ッあ、おどうぞああああん!!」

子供の声に反応して声の聞こえてきた向くとそこには…。

「あ、はい、助けてくれてありがとうございますs… って…え？

………………そ、空孫悟ううう?!?!」

そこには俺の憧れの空孫悟?!が立っていたのだ。

「ん??ソラマゴサトル? って誰だ? オラ孫悟空だ! おめえは?」

え?..そんなごう…? 空孫悟じゃないのか? 一体どういうことだ!?

「それよりオラの息子助けてくれたんだろ? ありがとうな!」

混乱している俺に、悟空さんはそう声を掛けてくれた

見ると、さっきの子供は悟空さんに抱かされていた。

良かった…無事だったんだな…

その様子を見て俺は胸を撫で降ろす。

「とりあえず一旦帰るか。オメエもくんだろ？」

「あ、はい！お願いします！」

「決まりだな、んじや行くか！」

そうして俺は悟空さんに連れられ、の悟空さん達の家へと向かっていくのだった。

## 赤龍帝の向かう先、目指せ悟空親子と武天老師の家

オツス！俺イツセーだ！

何となく空孫悟の真似をしてみたけど気持ち悪いな…

今は悟空さんの家に向かつてる途中だ。

凄いなだぜ？何かよくわからない雲みたいな奴に載って

空を飛んでるんだから…助けてもらったときは

混乱してて気づかなかつたけど、

俺のいた所じゃありえない事なんだよな…

「おっ見えてきた！あれがオラ達の家だ」

悟空さんの声にそちらを向くと、そこにはぼつかりとそびえ立った山の上に

小さな家が建っていた。

「あれが悟空さん達の家…」

なんかこういうところまで空孫そらまご悟ごそっくりなんだよな

いったいなんなんだここ？ドラグ・ソボールの世界って訳じゃ

あ…ないんだよな

そんなことを考えているうちに家に着いた。

「オーツス、チチ！今帰けえったぞ」

俺達を乗つけていた黄色い雲？から降り、悟空さんが扉に手を掛けながらそう声をかける。

それに続いて入っていくと…すると中から

「悟空さ、悟飯ちゃん見つかったただか？」

女の人が出てきた、チチさんというらしい、悟空さんの知り合いだろうか

「おお、ちゃんとみつけて来たさ、その時にもう一人見つけてよ、連れ

てきたんだ」

「もう一人？誰だべ？」

「オラの後ろにいるじゃねえか！ほれ、おめえも挨拶しろよ」  
そういうと悟空さんはその人の前に俺を引っ張った。

「あの…兵藤一誠です。悟空さんにはさつき助けてもらって知り合いました」

俺が自己紹介するとチチさんは俺の事をじっと見つめ…

「おめえ、ここら辺じゃ見ない顔だな、

いったい何処から来たんだ？」

そう聞かれ俺はどう答えたら困惑してしまう

どうするべきか、不思議な力を持つおB（異次元に消されたい）…

ゴホンツでも、あれこれ考えても応えはなにも浮かばないので

素直に話すことにしよう…

「実は俺この世界の人間じゃないんです」

「ん？それって…どういう事だ？」

悟空さんはピンと来ないのか首をかしげている

「異世界って言うとおの世みたいなもんだべか…

でもどうやってそんなところから来たんだ？」

チチさんが疑問を口にするのを聞き俺は答える

「俺の住んだ所ではある噂が流れていたんです、

神隠しの噂が…」

俺はそこから自分に起こった出来事を

大まかに悟空さん達に話した。

悟空さん達はことのほかすんなりと信じてくれた。  
俺の心配してたことは全くの無意味であることに  
溜め息をつくしかなかった。

「そういえば悟空さ、おめえ武天老師様の所に行くんじや  
なかったか？」

「ああ！いっけねえ！すっかり忘れてたぞ…」  
チチさんの言葉に思い出したかのように驚く悟空さん  
というか、むてんろうし様って誰なんだ？

「なら、早く行くべ！いつまでも待たせてちや駄目だべ！」

「わ、分かったよ…んじや悟飯、行くか！」

「うん！」

二人が出掛けようとしているが俺はどうすればいいんだ？  
どうしようか迷っているとチチさんが

「悟空さ、折角連れてきたんだべこの子も連れていくだよ人数は多い  
ほうが楽しいべ」

「え!？」

その言葉に俺は驚きチチさんを見ると悟空さんが

「それもそうだな！そんじやおめえ…えっと、  
名前なんて言ったっけか？」

「あ、兵藤一誠です。呼びにくければ  
イツセーって呼んでください」

「分かった！・そんじやイツセー行くぞ」

「はいー」

俺は悟空さん達に続いて外に出る

外に出ると悟空さんが何かを叫んだ

「金斗雲ー!!」

すると空の向こうから金色の雲が飛んできて悟空さんの前で止まった。

「あ、これってさっきの…」

「ああ、これに乗って行くんだ！・さあ、おめえも早くのつてくれ」  
そう急かされ雲に乗ろうとするが…

「おわっ!?痛つてえ!!」

何故か雲には乗れず下に落ちてしまった。

「え?・なんで?・さっきまで普通に乗ってたのに…」  
いきなりすぎて混乱してくる…・なんだこれ?  
すると悟空さんが

「あちやあ…おめえ清い心じゃねえな?」

そう言ってきた。へ?清い心?・なんだそれ

…ちよつと待てよ?・それって

「俺はこれには乗れないってことですか?」

「そういうことだな」

「…不幸だ…」

何処かの不幸高校生のような台詞を吐きその場に崩れ落ちる

「仕方ねえな、よつと！」

崩れ落ちている俺の視界がいきなり変わり混乱する

「え？うわっ!?なんだなんだ？」

よく見ると悟空さんが俺を担ぎ上げて雲に載っている

「これなら大丈夫そうだな！じゃあ行くか！」

「はい！おとうさん」

「わ、分かりましたけど……これは……」

しかし悟空さんはそのまま飛び出してしまった。

「ちよつと待て！俺の話を聞いてくれええく!!」

後には一誠の絶叫だけが残るのみだった。

赤龍帝の向かう先… 待ち受けるは武天老師

「は、はええ〜…」

イツセーだぜ、今は悟空さんの金斗雲で武天老師様って人のところに向かつてる最中だ、

「もうすぐ着くぞ、お！見えてきた」

悟空さんの声に下を見ると海の上にはぽっかりと浮かぶ島がありその島の上に

小さな小屋が建っていた。

あそこにその武天老師様が住んでるのかどんな人だろう？

そんなことを考えている間に金斗雲はその島に降り立ち俺は地面に降ろされた。

「ここが亀仙人のじっちゃんの家だ、オッス！」

そういいながら悟空さんが小屋に入っていた。俺もそのあとに  
続く

「お？悟空！」

「久しぶりじゃの」

「孫くん！遅かったじゃない、あれ、その子たちは？」

「おお！オラの子と山で拾ったイツセーだ」

中に入るとききれいなお姉さんが一人と禿げのチビと甲羅を背負ったへんてこな

老人がいた。その老人と目が合った瞬間…

「……………」

「……………」



「お、おい…！一体どうしたんだよアイツ武天老師様と睨み合ったまま

動かないけど悟空何か知ってるか？」

「ん？いや、オラにもさっぱりだぞ」

禿げの人と悟空さんが何か言ってるけど今は気にしない今はこの爺さんだ

「……………」

ガシツ！無言で二人が腕を組んだ

!!やはりこの爺さんは同志だ俺と同じエロを愛する同志なんだ！

「な、なんなのよこの二人は…」

それを横から呆れて見ているお姉さんがため息をついていた

それから少しして

「そういえばお前イツセーっていったよな？どうしてここに来たんだ？」

「いや、それがですね…」

俺がどう答えようか迷っていると

「どうやらよおイツセーの奴異世界っちゆうところから来たらしいんだ

それで一緒に連れて来たのさ」

と、悟空さんが代わりに説明してくれた

「い、異世界い？なんだそりゃ」

「あの世みたいなものなのかのう」

「あの世も異世界のうちに入るのかしら？」

上からクリリンさん、亀仙人のじいさん、ブルマさんが  
各々の答えを出しているが正直答えようがないので黙ってるしか  
ない

すると亀仙人のじいさんが急に

「そうじゃ悟空よイツセーにあの技を見せてやったらどうじゃ？異世  
界人なら

珍しいじゃろうて」

「ん？おお！あれかそうだな！おし！それじゃイツセー

ちよつと来てくれ」

「え？あ、はい」

あの技ってなんだ？俺が疑問の思いつつ悟空さんについていくと

「よし……ここならいいか」

と、海のほうに向き何かの構えを取り出した

その構えは見覚えのあるものにそっくりだったのだ。そう、あの空  
孫悟の

ドラゴン波に……

悟空さんは両腕を前に包むように突き出し合わせそれをそのまま  
腰まで持つていき何かを唱え始めた。

「かあーめえーはあーめえー波ああ!!!」

刹那前に突き出された両手から青い閃光が迸り海を割ったのだ  
「なっ!？」

それをみた俺は目を奪われた。これほどの威力の技をこんな至近  
距離で

見られたことに興奮が止まらない

「す・す・すっげえ!!!悟空さんなんですか!今の」

「あれはかめはめ波じゃよ儂が編み出したんじゃ凄いじゃろ?」

「亀仙人のじいさんが!?凄いつすね俺にも撃てますかね!」

「どうじやろうな儂は編み出すのに50年かかったが:」

「ごっ!50年!」

「でもオラ一発でできたぞ」

みるとかめはめ波を放ち終わった悟空さんがごっちに来ていた。

「いつ!!」発!?よおしなら俺も!」

俺は先程の悟空さんのように海に向かい構えを取った

「いくぞ!かあーめえーはあーめえー波あ!」

しかしかめはめ波は出ない

「く、くそう:俺には出せないのか:」

「イツセーは異世界から来たんだろ?」

ならそつちの世界の技をやってみればいいじゃないか」

そうクリリンさんからの助言をもらって俺はそれを試してみることにした。

「お?異世界の技が見れんのか楽しみだなあ」

悟空さんが何だか楽しそうに見ているけど正直打てる気がしない:」

とりあえず当たって砕けろだ!

「いくぜ！ドラゴン波!!」

漫画の通りの構えを取り放つしぐさをする、すると？

「な、なんだこりゃあ!」

ドラゴン波波でなかったが左腕が輝きだし赤い竜のような籠手へと変わった

「うわあ... なにこれカッケエ!」

俺が変わった腕に興奮していると横から悟空さんが

「おお? イッセーおめえそれなんだ? それがドラゴン波っちゅうやつか?」

興味深そうにのぞき込んできた。

「いや、俺にもさっぱりですて...」

ちなみにドラゴン波はさっきの悟空さんが放ったみたいなものですよ」

「え? じ、じゃあこれはドラゴン波じゃないんかあ! それにしても

不思議だなあ引つ張つても抜けねえぞ」

そういいながら悟空さんが俺の腕を引つ張る

「いっだいっだい!! 腕がもげる!! もげますからあ!!」

そうして訳が分からないままいると

悟空さんの顔がいきなりかわり空を見た

「? どうしたんすか?」

つられて空を見るとそこには髪の毛長いおかしな格好の男が浮いていた。

「ようやく見つけたぞ、カカロット」

これがイツセーを巻き込み大変なことになっていくことを  
このときはまだ知る由もない

唐突な乱入者！正体は悟空の兄!!

「ようやく見つけたぞカカロット…成長したな、  
だが一目で分かったぞ…父親そっくりだ」

長髪の男が降りてきて悟空さんに向かつて言った。  
悟空さんは不思議そうな顔をして

「カカロット？」

誰かの名前なのか？でも、

この場の誰も知らなさそうだけど…

その後ろではブルマさん達が

「どういうこと…？」

「な、なんだよ、こいつ何言ってるんだ？」

等と話しているが長髪の男は

それらを無視して話し出す

「それにしてもこの星のありさまは何だ？

この星の生き物を死滅させるのが

お前の使命だったはずだ、

いったい何を遊んでいたんだ！」

「……………」

人類を死滅？何言ってるんだこの人は？

それに格好もおかしいし…

そんなことを考えているとクリリンさんが

「ねえねえ、ちよっとお兄さんどこのどなたか

知らないけど帰った帰った！…しっしっ！

…んもう、昼間っから酔っぱらってちや駄目だつてえ」

と言いながら長髪の男に近づいていった。すると  
ヒュンっ！つと風切り音がしたと思ったら  
クリリンさんが吹っ飛んでいった。

「クリリン！貴様あ…!?!」

その瞬間この場の全員が固まった。

何せ、男の腰には尻尾が  
ついていたのでから…:

「フッフッフッフ… やつとこの俺の正体に  
気づいたようだな」

「正体？どういうことだ！」

そう言いながらも悟空さんは  
足にしがみついている

悟飯くんを引き離そうとしていると  
ブルマさんが急いで引き離した。

「カカロットよ、貴様

そんなことまで忘れてしまったのか？」

「オラはそのカカなんとかなんて

おかしな名前じゃねえぞ！孫悟空だ！」

「くっ… 何ということだ」

話を聞いている限りだとこの人は悟空さんの  
ことをカカロットとかいう奴と思っっているらしい  
なら、やることは一つだな

「あの、ちょっとお聞きしますけど… あんたは  
この人がホントにカカロット…」

だっけ？その人で間違いはないんすか？」  
俺は男に聞いてみる、一度状況を整理しないと  
頭が追いつかねえよ…

「当たり前だ、俺がカカロットを見間違えるわけないだろう

こいつは先程も言った通り父親にそっくりだからな」

なるほど、ならなぜ悟空さんのことを

カカロットなんて呼ぶんだ？

男はまた悟空さんに向き直りこう問いだした。

「おい、お前以前に頭に強いショックを受けたことがあるか？」

なんだ？いきなりそんなことを聞いてくるなんて

「なに？」

「幼いに頭を強く打ったことがあるのか？質問に答えろ！」

痺れを切らしたのか男が怒鳴りだした。

どうなんだ？そんなことがあったら普通は死ぬはずだが…

「ある！オラ覚えちゃいねえが、ホント小せえ頃に頭を打った」

「くっ！やはりそうか…」

そうか！それで悟空さんは記憶を失って…

でも、それじゃ悟空さんはいったい何者なんだ？

「だがよ、それがどうしたっていうんだ!!」

「悟空よ…」

その声に全員が亀仙人のじいさんの方に向いた。

亀仙人のじいさんのじいさんが話してくれたのは

悟空さんがなぜ頭を打ったのかだった。



その後男が悟空さんの尻尾がないことに気が付き  
サイヤ人について話していた。

数年かければ悟空さんでも人類を絶滅させられるとも…  
その話でブルマさん達が納得していたけど

俺にはよくわからなかった。

一つ分かったことは悟空さんは地球人ではなく

サイヤ人という種族らしいということ

この男が悟空さんにの兄だということだ。

「オラがよその星から来たなんとかって奴だろうが

オメエが兄ちゃんだろうが関係ねえ!

人間を絶滅させるなんてそんな奴は最低だ!

オラはここで育った孫悟空だ!とつとと帰えれ!」

「馬鹿な奴め!!!!」

男、ラディッツはそう叫ぶと悟空さんとの距離を詰め  
思いつき蹴りを食らわせた。

「がはっ…!!」

その蹴りの勢いで悟空さんの体が九の字に折れ曲がる

「ふんっ!」

その勢いのままラディッツは悟空さんのを蹴り飛ばした。

「ぐああああつ!!」

「ああ!!お父さくん!!」

吹っ飛んでいく悟空さんに

悟飯くんが半泣きになりながら走っていく

すると、ラディッツが悟飯くんをつまみ上げると

「カカロットよ、お前に最後のチャンスをやろう

明日までにこの星の人間をとりあえず100人程殺して

ここにその死体を積んでおけ…  
それまでお前の子供は預かっておく」

「フッフッフ… 明日を楽しみにしているぞ？  
弟の子供だできれば俺も殺したくはない」

「ぐ… 悟飯… !! お… オラの子返せ… !!」

そう言つて去つていこうとするラディッツに  
必死に止めようとする悟空さん  
させるかよ！悟飯くんを連れて何て行かせるか!!

『Boost!!』

俺は走り踏み上げられている悟飯くんを  
ラディッツからひったくり  
その場から距離を取った。  
なんだか少し身体が軽かったけどどうなってんだ？

「っ！大丈夫か？悟飯くん！」

「う、うう… イッセーのお兄ちゃん… 怖がつだよお…  
半泣きになりながらもなんとか耐えてるみたいだ。」

「ん？また貴様か小僧、お前も俺の邪魔をするのか？  
早くそのガキを渡せそうすれば死なずに済むぞ？」  
ラディッツが俺の方を向く

俺は悟飯くんを後ろに隠すようにしてラディッツの前に  
立ちはだかる、こんな奴に悟飯くんは渡さねえ！

「うるせえ！お前なんか悟飯くんは渡してたまるかよ！」

『Boost!!』

どこからか機械音のような声がするが気にしない  
今は、こいつをどうにかするのが先だ

「うおおおおおお!!」

俺はラディッツに突っ込んでいった。

「い…イツセー…逃げろ…!!」

オメエが勝てる相手じゃねえ…」

「そうだ、早く逃げろ！悟空があんな簡単に

ぶっ飛ばされたんだ！早く悟飯を連れて逃げろ！」

悟空さんやクリリンさんが止める声が聞こえるが

俺の耳には届いていなかった。

『Boost!!』

「ん？戦闘力が上がったけど？」

先程から気になっていたがその左腕は何だ？」

「知るかよ！今はお前をぶっ飛ばするのが先だ!!」

俺は勢いをつけたままラディッツに殴り掛かるが…

「ふんっ！それでもまだ戦闘力15か…雑魚め！」

目の前にいたラディッツの姿がブレ姿が消えた。

「なっ!?消えた!？」

「こっちだ間抜けめ！」

「くっつ!?!?…がっ!!…」

その直後首に強い衝撃が襲ってきて、

俺は意識を失った…

side out

side 悟空

ラディッツの攻撃を受けて気絶したイツセー

それに泣きながら駆け寄る悟飯

その二人を物でも持つかのように

ラディッツ持ち上げた

「「い： イツセー!!」「」」

「こいつも仲間に加われれば多少は使えるだろうこいつも連れていくか」

「ま…： まで…： !二人を…： 置いてけ!」

「カカロットよこの二人を生きて返して欲しければ

この兄の命令を聞くんだな!ふははははは!!」

そう言い残すとラディッツは二人を抱え飛び去ってしまった。

「悟飯!!イツセーええええ!!!!」

後にはオラの叫びだけが残るだけだった…

語られる籠手の正体？赤龍帝の籠手に眠る秘密

sideイツセー

気が付くと俺は真っ黒な世界にいた。

「ここは…それに俺、どうやって…」

なんだか記憶が曖昧だ、すると

「ここはお前の精神世界だ、小僧…」

背後から声がかけれ俺は振り向く

見るとそこには、赤い巨大な竜がいた。

「ドラゴン!! つかお前は誰だよ!

精神世界ってどうゆうことだ!!」

「そこからか… まあいい、

俺はドライグお前の中に宿るものだ」

それを聞いた俺は耳を疑った。

「どういうことだよ!」

訳が分からない、どうしてこんな奴が

俺の中にいるんだ?

俺が考え込んでいると

「それに関しては私が答えるわ」

また、背後から声が出た。でもこの声って…

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには紫さんが立っていた。

「紫さん!? どうしてここに?」

「また来たのか、スキマ妖怪…」

ドライグがいやそうな声を上げる二人は知り合いなのか?

「あら、嫌そうな顔をしないでくださいな赤龍帝様  
今回はこの子に真実を伝えに来たのですから」

「真実？何を言ってますか？」

「今から話すことは全て真実よ、心して聞いてね  
まず、貴方の左腕についているその籠手、

それは神器であり神滅具（ロンギヌス）である  
ブーステッド・ギア  
赤龍帝の籠手一よ」

「… 神器？神滅具？」

聞いたことのない単語に頭が回らない

「そこから知らないのね… 分かったわ教えてあげる」  
紫さんが説明してくれたのは神器とは  
ある一部に人間にしか宿らない不思議な力で  
その神器の中でも上位にあるのが神滅具って奴らしい  
俺の腕の奴もその神滅具の一つなんだそうさ。

「最後に赤龍帝の籠手の能力は宿主の  
力を10秒ごとに倍にしていくの、  
上手く使えば神すらも屠れる神器よ」

「じ… 10秒で倍化!!すごいじゃないっすか!これ」

「俺の生前に持っていた能力の一つだからな…」  
ドライグの生前の能力?どういうことだ?

「つまりねイツセイさんこの赤龍帝の籠手には  
ドライグさんの魂が宿っているのよ」

それで俺の中に宿るものだって言ってたのか。

「じゃあお前は どうして俺の前に現れたんだよ？

まさか俺を食い殺すとかじゃないよな？」

「ははは!! お前なんか喰っても腹の足しにもならんさ、  
なに、これから共に戦う相棒になるんだ。

挨拶をしておこうと思うってな」

「相棒だって？」

「ああ、 そうだ俺の力が必要な時はいつでも言うがいい  
すぐに力になってやる…」

と、 そろそろ戻した方がいいかもしれない」

ドライブがそう言うのと紫さんもうなずく

「そうですわね、 それじゃイツセーさん、 ご武運を」

「へ？」

するとまた俺の足元にスキマが開き

俺は真っ逆さまに落ちていった。

「またこの展開かよおおお!! 不幸だああ!!」

## サイヤ人編

サイヤ人対地球人？赤龍帝の本領発揮だ！

俺が目を覚ますとそこは深くえぐれた穴のようなところだった。

「つてて… 何処だよここ…」

ふらつく頭を押さええなんとか立ち上がる

「だしてえーだしてよお…!!」

見るとそこには白いボールのような機械があった

声はその中から聞こえてくる

中をのぞいてみると、悟飯くんが閉じ込められていた。

悟飯くんは俺を見つけると

「いゝ…いゝ… イッセーのお兄ちやあん!!」

「ごごからだじでえ…!!」

ものすごい勢いで泣き始めた。

「ああ！すぐに出してやるからなくぜー！ブーステッドギア!!」

俺は悟飯くんを助けるため力をため始めた。

イッセー side out

悟空 side in

ピッコロの切り札を打たせるために

時間を稼いでいたオラだけど

ラディッツの猛攻に手も足も出ねえ…

へへへっ… こりややばいかも知んねえな…



「受けてみるー!!魔貫光殺法!!!!」

ピッコロの大技が放たれた。

これが当たれば勝てるかもしれないねえ、  
辺りに爆炎が広がるこれでやったか？

徐々に煙が晴れていく…そこには  
来ていた鎧？が少し砕け

傷を負ったラディッツが立っていた。

「よ…避けやがった…！」

ピッコロが技を避けられたことに啞然としている

「この俺様の体に傷をつけるとは…貴様許さんぞ！」

ラディッツがピッコロに意識を取られてる

今なら！こいつの尻尾を掴める！

オラはなんとか体を起こしラディッツの尻尾に手を伸ばした。

「くたばれえ!!!!」

良し！掴んだぞ奴の尻尾を

奴の動きが途端に鈍くなった。

「はっはっはっは…油断したなあ尻尾を掴んだぞ…っ！」

「ぐっ…!!き、貴様…いつの間に…！」

力が入らねえだろ？オラがそうだったかな!!

「いまだピッコロ！もう一回今の奴を!!」

オラは大声でピッコロに叫んだ。

あの威力だ、ちゃんと当たればこいつを倒せる!!

「でかしたぞ悟空!!しっかり尻尾を捕まえておけ！

この技はあと一回が限界だ…」

「か… カカロット… 貴様… たった一人の兄を… つ殺す気か!!」  
ラディッツがの奴が懸命に何か喋っているが気にしねえ

「うるせえ！オメエなんか兄貴じゃねえって言っただろ！…  
オラのこと殺そうとしたくせに!!勝手なこと言うな…！」

「も… もう辞めた… !! 大人しくこの星から出ていく…！」

「騙されるなよ？孫悟空… 嘘に決まっている！」

「……………」

オラはその言葉を信じて尻尾を離した。

「孫悟空!!!!」

離れた瞬間ラディッツはいきなりオラに攻撃してきた。  
攻撃に当たり、オラは吹っ飛ばされていく

「うぐあつ… !!」

追い打ちをかけるようにラディッツはオラを踏みつけ  
高らかに言った。

「愚か者めが！貴様のような間抜けは珍しいぞ！」

そう言つてラディッツはオラを踏みつけながら高笑う  
すると、(ドゴオオオオオオン!!)

悟飯たちがいるはずの穴から爆発音がした。

その直後悟飯が穴から跳び出してきた。

「… 悟飯… !!」

「ぐぐぐぐぐぐつ… !! お父さんを!! 虐めるなあ!!」

悟飯が叫びながら凄い速さでラディッツに突進していく

「!?!?!?…ニヤリ」

だが、ラディッツはそれを難なく回避し悟飯に止めを刺そうと手を向ける

「このガキ!!」

「や、やめろお…!!」

オラの制止の声も聞かず奴は悟飯に向けて気功波を放った。

悟飯は力を使い果たしたのか倒れたまま動かない

そのまま気功波に呑みこまれる直前

一つの影が悟飯の前に立ちふさがった。

その影は悟飯を庇うように気功波を浴びたのだった。

side out

イツセーside

穴から飛び出た俺が最初に見たのは

悟飯くんがラディッツの攻撃に呑み込まれそうになっっている光景だった。

このままじゃ悟飯くんが!!そんなことさせるか!!

考えるより先に体が動いていた。

俺は赤龍帝の籠手で倍化しまくって跳ね上がった身体能力で悟飯くんの前に立ちはだかり攻撃を受けた。

「ぐあああああつ!!!!」

あまりの激痛に意識が飛びそうになりながらも俺は悟飯くんの様子を見る

「……………」

良かった、無事だ…

俺は悟飯くんを穴の近くに置くと

ラディッツに向け歩き出した

ラディッツは驚いたように後ずさる

「何故だ！何故倒れん!？」

雑魚があれを食らえば骨も残らんはず…

俺は黙々と歩を進めながら答える

「ああ、いてえよ…今でも激痛に

意識がどっかに飛んでつちまいそうだよ…

でもな！そんなことどうでもいいくらい！

お前がムカつくんだよ!!」

『DragonBooster!!』

「うおおおおお!!」

俺は猛スピードでラディッツに突っ込んでいく

「ば!!馬鹿な!!せ、戦闘力1850だと!!くっ!!

ふざけるなあ!!俺が地球人如きに負けるかあ!!」

自棄になって気功波を打ってくるが

《バシンツ!!》と右腕で気功波を弾く

「なっ!!くそう…」

ラディッツは逃げだそうと空に飛びあがる…が

「逃がすか… 馬鹿!!」

ジャンプだけで跳び上がったイツセーに捕まれた

「ぐっ!!触れるな雑魚があ!」

「うるせえ!! 吹っ飛ベクソ猿人!!!!」

俺はそのままラディッツを地面に殴り飛ばした。

地上に勢いよく落ちたラディッツは

そのまま悟空によって拘束されたが

最早抵抗するだけの気力は残っていなかった。

「く…くそっ!! 離せ! カカロット!」

「ピ、ピッコロやれえええ!!」

「魔貫光殺法!!!!!!」

勢いよく放たれた閃光はラディッツと悟空を貫いた。

それを見届けた俺は、

「へ、へへ…ぎまーみろ…!」

その言葉を最後に俺は意識を手放したのだった。

その後悟空さんが死んだ後にクリリンさん達が来て

俺の様子を見て悲しんでいたことを知るのは

また別の話…

目覚めた先は冥界？悟空の元へ走れ！

side 閻魔

「どうしたのもんかのう…。」

ワシはそう言っただけ息をつく。

その原因は目の前で眠っている小僧だ。

先日のサイヤ人とやらの戦いで孫悟空と共に戦い、戦死した  
この小僧……。

「一応善行は積んでいるんだが、それ以前の素性がなあ…。」

そう、この小僧には孫悟飯を助けてからの記録しか残されていない  
のだ。

「孫悟空の奴はまだ来とらんし…困った…。」

もう、適当に天国にでも送ってやろうかと匙を投げかけた時だっ  
た。

「あら〜？それならその子、私が預かってもいいかしら？」

ふわりとした声が聞こえ、そちらを向く。

「おお、西行寺殿いらっしやられたのか…。」

ワシはそう声をかける

「ええ、お久しぶりですわ、龍の世界の閻魔様」

そう挨拶してきたのは西行寺幽々子……

幻想郷という世界の冥界に住んでいる亡霊の姫だという

滅多にこちらに来ることはない者が何をしに来たのか、ワシには想  
像もつかんが……

「そうですね、それで西行寺殿、貴女は今この者を連れていきたいと申

していたが、その理由を聞いても？」

「理由？そ当然了わね〜面白いから… でよろしいかしら？」

西行寺殿の言葉にワシは呆れてしまった。

この方はいつものこうだ、フラリと現れては予想だにしないことを言つてのける。

だがまあ… この方なら任せても構わんだらう

「分かりました。ではこの者の身は西行寺殿にお任せしましょう」

ワシはため息を抑えお願いすることにする。

「ええ、任されましたわ、しばらくは此方に居るつもりなので

何かあれば訪ねてきてくださいな」

「分かりました。そうさせてもらいましょう」

ワシの返事を聞くと西行寺殿は小僧を従えていた亡霊に浮かばせると出て行った。

さて、これからどうなるやら……

小僧、無礼をして囚われるなよ？

そんなことを考えながら、ワシは仕事に戻るのだった。

◆◆◆SIDECHANGE◆◆◆

目が覚めると、そこは知らない布団の上だった。

「……………知らない天井だ」

なんて、某少年パイロットの台詞が出てくる。  
寝かされていた布団の上から身体を起こし、辺りを見回す。

「あら？目が覚めたのね？どう？気分は」

そんなフワリとした声が掛けられ、俺はそちらを振り向く。

そこには和服のような衣服を身に纏ったピンクの髪の優しそうな  
ゆるふわお姉さんがいた。

それにしてもこのお姉さんすっごい美人だな……………

おっぱいも大きいし、こりや二大お姉さま以上の持ち主なんじゃない  
かろうか？

「あらあら？どこを見ているのかしら？顔がいやらしいわく　クスク  
ス」

俺の視線に気づいたのか、お姉さんがクスクスと笑う。

「えつと… あんたは　？それにここって…」

そうだ、俺はラディッツって奴と戦いで悟飯くんを庇って攻撃を受  
けた……………

ダメージを貰いつつもなんとかあの猿野郎をぶん殴ってやったん  
だ……………

その後なんとか悟空さん達がアイツを倒したのを見届けて……………

そうだ！悟空さんは！悟空さんはどうしたんだ！！

「ご、悟空さんは！！悟空さんはどうなりましたんですか！！」

無事なのか？無事ならいいんだが……………

「あらあら、元気のいい子ねえく。」

順に説明するわここはあの世…………… 私は西行寺幽々子…………… 亡霊な  
の…………… あなた達に分かりやすく言うなら幽霊と言った方が分かるか  
しらね。今の現状の説明だけど、貴方は地上でサイヤ人から受けた傷



が元で死んでしまったの。孫悟空という人と一緒にね……」

あの世……幽霊……西行寺……俺の死……悟空の死……？

嘘……だろ……悟空さんまで死んじまうなんて……

これじゃ悟飯くんに何て謝れば……

「そうですか……じゃあその、悟空さんはどこにいるかわかりますか？」

一緒に死んだなら会えるはずだ。

会って謝らないと……

「そうねえ、今頃界王様の所に行くために蛇の道でも走ってるんじゃないかしら？」

「界王様？じゃあその人のところに行けば悟空さんにも会えるんですね！」

ならやることは一つだ！俺も悟空さんを追いかけて蛇の道に行く

「あら、界王様の所に行くの？それならあの階段を使っていくのがいいわよ？」

そう言つて幽々子さんは上へと続く階段を指す。

その指先を視線で追つてみると……見上げる程長い階段が……

なつがっ！！あれを登っていけばいいのか……！?

ちよつとヤバそうだけど、やるしかねえか!!

「分かりました、幽々子さん！色々ありがとうございます！それじゃー！」

走れイツセー！目指すは界王星

sideイツセー

おつすイツセーだ！今は界王様の所に行くために  
幽々子さんから教えてもらった階段をただひたすら上ってる最中  
だ

ドライグ『おい、相棒』

なんだよ、ドライグ？今急いでんだよ

ドライグ『走りながらも話は出来るだろう、  
少し聞け…』

つたく、それで話ってなんだ？

ドライグ『実はな、神器というのは宿主が死ぬと  
そいつの体から消える筈なのだ』  
あ？でも今こうして喋れてるじゃないか

ドライグ『それが不思議なんだ：  
どうやら、この世界が特殊なのか  
はたまたあのスキマ妖怪が何か細工したかの  
どちらかだろうがな…』  
へえ〜そつか、それは助かるな

ドライグ『それに関しては同感だ、  
俺もこれだけ付き合いで終わるのは  
詰まらないからな…』  
だな、にしてもこの階段何処まで続くんだよ…  
もう足が痛くなってきてんだけど…

ドライグ『このくらいで値を上げてたら孫悟空には追い付けんぞ

？」

分かってんだよ！そんなこと！言われなくてもこんなことで諦めたりしねえよ

ドライグ『それでこそ俺の相棒だ…』

ドライグ『ってなんか偉そうだよな…』

ドラゴン『ってのは偉そうなやつが多いのか？』

ドライグ『ドラゴンっていうのはプライドの塊だからな、

大抵の奴は似たような者だ』

なるほどな、ってあれ？なんだか先が見えないんだけど…

ドライグ『光で見えなくなっているだけということじゃないのか？』

いや、まぶしくて見えないって感じじゃなくて

ホントの先が見えないんだよ

ドライグ『もしかしたら着いたんじゃないのか？』

あの亡霊の言っていた界王とやらの所に』

そういうことか！なら走り抜ければいいってことか

なら、一気に行くぜ！

そう心の中でつぶやいた俺は足に力を入れ俺は突っ走った。

そして見えないところに突っ込んだのだが…

ドライグ『おい、相棒下を見ろ…』

へ？…

ドライグに言われ下を見ると…

「足場がないな…やばい…!!おわああ!!」

思いつきり突っ込んだ所為で俺は真つ逆さまに落ちていった。すると、目の前に丸い球体の物が見えると俺の身体は

凄い勢いでその球体に吸い寄せられていった。

(ズボオオオオン!!!!!!!!)

俺はそのまま地面に落下した。

ドライグ『相棒、大丈夫か?』

ドライグの声で目が覚める

「痛つてててて… ってなんだ?! 体が重い!!」

身体があまり重く起き上がることができない  
なんだこれ! いったいどういうことなんだよ!

ドライグ『これは重力だ、

相棒が今起き上がれないのはそれが原因だ』

「ぐぐぐっ!!!! ファイトオ! イツパーツ!!」

俺がなんとか起き上がるともがいていると

?? 「… なにしとるんだ? お主は…」

そんな呆れた声が聞こえてきた。

これが俺の人生を大きく変える出会いということ  
俺にはまだ知る由もないのだった。

おっさん登場？その名は界王様

sideイツセー

『Boost!!』

もう何回目か分からない倍化でなんとか起こす  
すると、背後から呆れたような声が聞こえてくる

「なにしとるんだ？お主は…」

なんとか体を起こした俺を見ていたのは

黒いGのような頭をした、

へんてこなおっさんだった。

「あ、いや…幽々子さんに言われた道を走ってたら

ここに落ちてしまったんです。

ところでおっさん誰？」

こんな変なおっさん見たことないぞ…

つてか、見たくもない見るんだつたら

幽々子さんみたいな美人がいいよな！

「誰がおっさんだ！誰が！ワシはまだ

おっさんという歳ではないわー!!

それとワシはな？」

そう言っつて俺に尻を向けだすおっさん

なにするつもりだ？まさか尻をこいたりしないよな？

「ぽりぽり…ぽりぽり…かいいよう…かいいよう…

かいよう…界王じゃ」

え？まさかこのおっさんが？

『ぶふっーあ、ああそのようだ

どうやらこいつが界王様とやららしいな』

納得しているドライグ、お前今笑ってなかった？

ってそんな事より

「え？おっさんが界王様？」

「半信半疑で聞き返す

「だからそうだって言っておるだろうに…」

うん、この人で確定みたいだわって

「ええええええええええええ！！！！！！」

あまりの衝撃に俺は叫んでしまった。

「うるさい奴だなあ…そんなに驚くことか？」

耳を抑えながら文句を言っている界王様

そりゃ驚くだろ！こんな変なおっさんが界王様

だなんて知ったら誰だって驚くわ！

するとまた別の所から、

「お？イツセーじゃねえか！オメエも界王様に

修行つけてもらいに来たんか？」

と、声がしたのでそちらへ振り替えると

猿を追っかけている悟空さんがいた。

何してんだあんたは…

「悟空さんを追って来たんすよそしたら

ここにいて言われたので」

「なに？お前悟空を追ってきたのか？

ん？いや待てよ？

お前、先程誰に教えてもらったと言った？」

突然話に割り込んでくる界王様

「え？幽々子さんっすけど」

俺はそのまま答える、嘘言っても仕方ないしな

「ゆ、幽々子ってまさか…」

少し聞くがその人の名前は

西行寺幽々子じゃないだろうな？」

なんだか慌てだす界王様いったいどうしたんだ？

「たしかそんな名前だった気がするけど…」

それがどうかしたんすか？」

「ぶあつかもーん!!あのお方は

ワシら界王より地位の高いお方だぞ！

その人をさん付けとはなにごとか！」

げっ!!…そんなに偉い人だったのかよ！

でもあの人怒ってなかったよな？

「まあまあ、いいじゃねえかそんな事

折角イツセーも来たんだ！

一緒に修行つけてくれよ！

な？いいだろ？界王様」

悟空さんが特に気にした様子もなくそう提案する。

「え？いいんですか？」

俺はいいのか界王様の方を見る

「うーん…そうだな、テストして

ワシを笑わすことができたら

お前にも修行をつけてやろう」

「え!?!笑わす!?!」

「こう見えて界王様シヤレが大好きですよ、オラもやられたんだ、頑張れよ？イッセー」  
なんだかやらないといけない流れにされちまったよ

「分かりました、少し待っててくださいね…」

俺はそう言っただけ考える

どうする？普通にギャグをいうべきか？

それとも、エロいの織り交ぜた方がいいか？

「うーん…テルマエはホテル前！」

とりあえず浮かんだギャグを言ってみる

「うっぷぷぷぷ…!!」

お？いい感じか？ならー！

『待て、相棒…ここから先は俺の言うとおりに言え…』

次はゴニョゴニョ…』

お、おう分かった

「コンドルが地面にめり込んでる！」

ドライブに言われた通り言ってみる

「ぷぷぷぷぷぷつ!!!!あーはっはっはっは！」

笑った！やったぜドライブ！

『ああ、そうだな…くくつ…!!』

…しばらくほつとこう

「お？やったじゃねえか！イッセー

界王様大笑いだぞ！」



「ひい…ひい…やるのうお前、わかった。

お前にも修行をつけてやる。とっておきの  
シヤレをな！」

……へ？

俺が呆けていると悟空さんが

「ちげえよ界王様、

オラと一緒にの武術の修行だつて」

「なんじゃ、お前もか、分かった。

ならワシが見てやろう」

そう言つて構える界王様に俺は慌てて答える

「ちよ！ちよつと待つてくれよ！俺、武術なんて  
やったことねえよ！

それにここ滅茶苦茶体が重いんだよ！」

「は？その割には随分しつかり動けておるじゃないか  
その言葉に悟空さんも驚いている

「ホントだなあ！イツセーオメエ実はとんでもなく  
強かつたんか」

「え？何言つてんすか、俺強くないですよ？

多分、普通に歩けているのは俺の力が倍化して  
いつてるからだと思ひます。」

そう答えると、二人はそろつて？

「ば、倍化あ！！！！」

素つ頓狂な声を上げている

これどうすりゃいいんだ？

俺はそんなことを考えながら

これから起こるだろう出来事に  
思いを馳せるのだった。

龍と猿？ 界王様の修行開始だ！

side 悟空

「ば、倍化あ!？」

イツセーの言葉に驚くオラと界王様：

「それってよイツセーいっただいどういうことなんだ?」

(ズコッ!)

オラの言葉に二人がそろってずっこける

ん? オラなんか変なこと言ったか?

「えつとですね、倍化しているのは俺がの身体能力とかですね

この籠手の力で10秒ごとに一段階力が上がっていくんですよ。

まあ簡単に言えばこいつの中に入ってるドラゴンの力ですね」

『そういうことだ...』

イツセーの説明の後に知らない声が聞こえてきた。

「ん? 誰の声だ?」

オラは声の主を探すが見当たらない

「あ、悟空さんここですよ、これですよこれ!」

そう言いながらイツセーが籠手を指す、見ると

籠手の宝玉の所が点滅していた。

「へえ〜! この籠手がしゃべってたんか! すっげえなあ」

籠手がしゃべるなんて珍しいな、中に誰か入ってんのか?

『初めましてだな、俺はドライグこの籠手に封印されてるドラゴンだ』

籠手の宝玉が点滅すると籠手から声が聞こえてくる

「ドライブといったか？籠手の中に封印とはどういうことなんじゃ？」

界王様がドライブ？つちゆう奴に問いかける

『俺は、というより相棒は元々この世界の人間じゃなくなてな

相棒が元いた世界には俺みたいな物がいくつもあつたのさ』

ドライブの言葉を聞いたオラは疑問を聞いてみる

「つちゆうことはよ、そつちの世界にはイツセーみたいな腕の奴が何人もいるんか？」

『まあ、似たようなものを持つてる奴はいるが

全員がこういうものを持っているというわけじゃない』

そつかあ、なるほどな！

「ふむ、まあそのことは置いておいてお主の

その倍化は体に負担が掛かるわけではないのか？」

界王様がまたドライブに聞いているな、そんなに気になるんかな？

『いや、かなりの負担が掛かっているはずだ、こいつが今平然としてるのは

あのスキマ妖怪がこいつの身体をいじっているからだ…』

「なるほどのう、ではイツセーよ、倍化をしていなかったらどうなんじゃ？」

「えっと… やってみます。ドライブ頼む」

『Reset』パシユンツ！

籠手から声が聞こえたたん一世の様子が激変した。

「——ツグググ!?!?!?」

いきなり顔を真っ赤にしながら足をガクガクし始めた。  
どうしたんだ? さっきまで平気そうだったのに

「こっ…こんな風に立っているのがやつとな状態です…!!!!」

『今は倍化した力がりセットされているからな当然だ』

「そういうことか、ならイツセーよお主の最初の修行はこの星  
を素の状態全力で走り回ることからだな」

お? イツセーはオラがやつてるのとは違うことをすんだな!

「は、走り回れるように…ですか?」

「そうじゃ、素の状態でそこまで出来るようになれば  
次の修行に移ってやろう」

オラでもあるのがやつとなんだ、イツセーにはもつとキツイだろう  
な

「わ、分かりました…。頑張ります」

なんとか答えるイツセー

「有無、いい返事だな、それと倍化は使ってはいかんぞ?  
場所はそうだな…あの道を使うといいぞ

ドライグ、倍化をできないようにしておいてくれよ?」

『ああ、了解だ界王とやら』

「悟空は早くバブルス君を捕まえてこんか!」

イツセーたちの様子を見てたら怒られちゃった…

「ははは!!悪い悪い!んじややか!」  
そうしてオラ達は修行を開始するのだった。

## 十倍重力を克服せよ！悟空と一誠猛修行

sideイツセー

おっすイツセーだ！

あれから数日たつてようやくなんとか歩けるようになったんだ。頑張れば小走りも行けるがまだちよつとキツイな…

悟空さんもバブルス君を捕まえられそうなほどになってきてる俺も負けてらんねえ！

「ほっほっほっほっほ…！」

歩きながら徐々に足を速めていく

だけど、やっぱり小走りからスピードがあげられない

まだ体がこの重力に慣れてないんだろうから仕方ないけど…

普通の高校生にこの重力はキツツイよなあ…

でも悟空さん達に追いつくにはこうするしかないんだ!!

でも普通高校生がこんな重力の中で数日で歩けるもんなのか？

『ふつうはありえないだろうな… どうせあのスキマ妖怪が

何か細工をしてるんだろう』

紫さんがか？でもいじるってなにすんだよ？

そう言いながら俺は小走りから徐々にスピードを上げる

『それは俺にもわからん… だが一般人ならこの

重力の中数日で歩き回れるようになることなど不可能

なのは確かだ…』

そうだよな、やっぱり紫さんには感謝しないとな

そうして、俺達はその日の修行を終えた。

因みに俺たちの飯は界王様が作ってくれてるんだぜ？

凄い旨いんだ！ってか悟空さんが阿アホみたいに食ってて

こつちが腹膨れそうだよ…。

それからさらに十日程時間が経った。  
俺は全力で走れるようになった。  
因みに今は二十分ほどあればこの星を一周できるようになった。

『よく走れるようになったな、相棒倍化もなしに』

「ああ！今ならなんでもできそうだ！つとそうだ、界王様に伝えてこないと」

そう言つて俺は界王様を探して歩きだした。  
少し歩くと界王様はすぐに見つかった。

「よっしやあ！！バブルス君つかまえたぞお！」

近くには悟空さんもいる、悟空さんバブルス君を捕まえられたんだな。

そんなことを思いながら俺は界王様に近づいていき報告する

「界王様！俺全力で走り回れるようになったぜ！」

「おお、そうか、では、見てやろう…」

試しにこの星を一周してきてみなさい」

テストか？よっし！特訓の成果を見せてやるかな！

「わかりました。じゃあ早速！」

俺は成果を見せるため走り出した。



その十分後

「はあ… はあ… ど、どうですか？界王様」

「うむ、合格じや悟空もクリアしたようだし次の修行じやな」

「お！次はどんな修行なんだ？」

悟空さんがわくわくした顔で聞いている

正直俺もちよつと気になる

すると、界王様の近くに空を飛ぶバツタのような生き物が現れた。  
なんだこいつ…？

不審に見ていると界王様が俺達にハンマーを投げ渡してきた。

受け取ってみるとかなり重い… 気を付けないと危ないな、これ

「今度はこのグレゴリーをハンマーで叩き落すんじや、二人がかりでも構わんぞ」

そっか、こんどはあのバツタをこのハンマーでぶつ飛ばせばいいんだな！

「分かりました。やりますよ悟空さん！」

「おう！どっちが早くやれるか競争だ！」

そうして二人は第二の修行に打ち込み始めるのだった。BY界王

当ててみなさい！グレゴリーの高速を見切れ！

side 帝王

ハンマー持って二週間

アイツらはメキメキと実力をつけてきておる

最初ここに来たとき重力で一歩も歩けなかった、イツセーの奴も今では悟空同様軽々と走り回っておる…

あのハンマーかなり重いはずなんだが…

あの小僧本当に人間か？

それにあの小僧が言っていた紫とかいうスキマ妖怪…どこかで聞いた気がするんだが…

何処だったかのう…そんなことを考えつつ二人の方を見ると

二人がグレゴリーを追いかけておった。

(イツセー！オメエはそっちから回れ！オラは逆から！)

(分かりました！)

ほう…アイコンタクトで意思疎通をしてくれるのかなかなかいい判断じゃわい

すると悟空の奴が方向転換して走り出した。何をするつもりだ？

「うおおおおおおおおおおおお！！」

イツセーの奴はそのまま追いかけておるが…

見ていると、悟空が反対から走って表れおった。

そうか！一人が追いかけてもう一人が逆から回り込む

挟み撃ち作戦だったというわけか、なるほどかんがえたな

するとイツセーの奴が持っていたハンマーを投げた。

い、いったい何をしとるんじやアイツは…

投げられたハンマーはグレゴリーを追い抜き悟空の方へと飛んでいく

「ナイスだ！イツセー！」

悟空はそれを片手で受け取ると両手でハンマーを振りかぶった

「なっ!!しまった!!」

悟空の不意打ちに驚き動きを止めてしまうグレゴリー

「覚悟グレゴリー!」

そう言いながら悟空はもう片方のハンマーをイツセーの方へと投げた。

ハンマー勢いよくイツセーの方に飛んでいき……

「食らいやがれええ!」

ハンマーをうまく受け取ったイツセーが振りかぶる

その反対では悟空も振りかぶっておる……あれ、不味いんじゃないか?

「だああああああああ!!!!!!」

二人がそのままハンマーを振り下ろす。ありやグレゴリー大怪我待ったなしだな……

すると、イツセーの方のハンマーが止まった。

ん? 一体どうした? 今度は何が起きた?

見ていると悟空の方もハンマーのスピードが偉く遅いなにをしたらんだアイツらは……

すると、悟空が軽くハンマーで殴りおった

「悟空さんが終わりましたね、じゃあ俺も」

そう言っつてイツセーの奴もコツンとグレゴリーを殴るなるほど、動きを止めたところを確実に当てる作戦にしたのか……

「思いつきり叩いたら痛てえもんな」

「痛いどころじゃないでしょ! さすがにこれで一緒に叩いたらつづれ



修行終了！皆の元へ走れ！

sideイッセー

グレゴリーさんの修行を終えてからさらに数か月  
俺と悟空さんは界王様の修行最終日を迎えていた。

俺も悟空さんも界王拳を覚えられたが元気玉だけは覚えられな  
かったんだよな

悟空さんの方は覚えてたみたいだけど…

「お前たち斗の修行も今日で最後じゃな、ではこれまでの復習じゃ  
やってみろ？」

「うん！」

「はい！」

俺たち二人は元気よく返事をする

「まずはバブルス」

すると、バブルス君が前に出てくるとりあえずは悟空さんからかな  
？

「一気に二人やるからお前も構えんか」

「あ、はい」

俺もすぐに構えるバブルス君が俺達の間立つと

界王様がストップウォッチを手に持った。

「よーい、スタート！」

ダダダツ!!俺達は一斉に走り出しバブルス君を捕まえる

捕まえた時に軽く砂煙が上がったが捕まえた時は二人ともほぼ同  
時だったから驚いた

「おおく!!0. 8秒!!新記録!」

一秒経ってないのかよ... すぎえな

「へへっ」

捕まえているバブルス君を離す

「次!!グレゴリー!」

「はい、ふふふ」

グレゴリーさんが今度は出てくる、するとバブルス君が俺達にハンマーを持ってきてくれた。

バブルス君意外と力あるのな、片手で二つ持ってきやがったよ...

「初め!」

グレゴリーさんが光をまとい突進してくるが

シュインツ!!

俺達は高速移動(俺は剃って呼んでる)でグレゴリーさんの背後に回り

悟空さんが上から俺がしたから殴った。

「っ!うわああああ!!」

あ、いっつけね... 勢い着けすぎて飛んでつちまった... まあ大丈夫だよな?

「ええええ!!一秒二... 信じられん...」

界王様が驚いてる俺も驚いてるよ... これまだ倍化使ってないんだぜ?

「さて、次は?」

悟空さんが聞いている、それ俺も気になった。

「よし、最後に元気玉のチェックじゃ、イツセーは気がうまく使えておるかの特ストじゃな」

まあ俺元気玉使えないしな…

「待つてました!!」

「了解です」

悟空さんは元気玉の準備に俺は邪魔にならないように離れたところで気を溜め始める

「……ハッ!!!!」

手を軽く突き出し一発の気弾を発射する。

「ふむ、ではイツセー次は界王拳じゃ」

「はい!はあああああつ!」

俺はまた気を溜める、すると俺の周りに赤いオーラが出てくる

「いくぞ!界王拳!!」

ドンッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

軽い衝撃の後、俺の周りに赤いオーラが纏われている

「よし、ちゃんと出来ておるな」

ふう、これかなり苦労したんだよな…

俺最初気なんて使えなかったから悟空さんや界王様に教えてもらって

ようやくできるようになったんだ。

「よおしーいいよ、界王様!」

悟空さんの声が聞こえてくる、あつちも準備できたみたいだな

「うむ、では行くぞ」  
すると界王様はバカでかいレンガを持ち出してきた。  
な、なにする気だ？

「この大レンガの超スピードを見事捉えてみよ！」

「うん！」

元気よく返事する悟空さん大丈夫か？

「それえー！」

すると、界王様が大レンガを思いつきり投げた。  
投げられた大レンガは悟空さんの横をすり抜けとんでいく  
これ戻ってくるよな？  
黙って見守っていると超スピードのレンガが戻ってきた。

「ん!!だりやああああ!!」

声とともに元気玉を放ち見事に破壊した。

おお…！相変わらずすげえ威力…！

その後、界王様の元気玉の説明をして俺達の修行は終了した。

「ところで界王様、俺達どうって帰れば？」

「ん？そりやお前蛇の道を通って帰るに決まっているだろうが」  
何言ってるんだこいつとといった顔で見てくる界王様  
いやわかるわけねえよ！

「俺、幽々子さんに言われた道しか使って無いから  
それがどこにあるか知らねえんだけど」

「おお？そういうえばそうじゃったな、なら、その道を使つて行け



その方が早く着くじやろう」

「分かった！イッセー道案内よろしくな！」

「分かりました！界王様色々お世話になりました！」

そう言って俺達は俺が来た近道へと飛んで行くのだった。

走れ悟空にイツセー！サイヤ人地球到着

sideイツセー

俺達は幽々子さんに教えてもらった道を走っていた。  
かなり修業したおかげで息よりも体が軽い  
これなら予定より早く着けそうだ！すると  
ぐぎゆるるるるるるる…

と、凄く聞きなれた音が聞こえてきた。  
音のした方へと振り向くその音の正体は…

「…へへっオラ腹減っちゃった。」

「悟空さんの腹の音だった。」

「いやアンタ来る前に

御飯たらふく食ってたじゃないすか！

どんな胃袋してんだよ!!」

俺はあまりのアホさに

ツツコまずにはいられなかった

「はははー」

のんきに笑ってやがる…大丈夫かなこの人…  
俺凄く不安になって来たんだけど…

「笑ってる場合ですか！早くしなないと

サイヤ人達来ちまいますよー！」

「でもよお腹減っちゃまってオラもう動けねえぞ…

この雲喰えねえかな？」

そう言っつて悟空さんは

周りに浮いている雲を食いだした。

「いやいやいやいやいや！悟空さん  
何いきなり雲喰いだしてんだよ！」  
俺は慌てて悟空さんを止めるが

「でもこれうめえぞ！イツセーも食ってみろ」  
進められてしまった…

「いや悟空さん雲に味がするわけないだろ…」  
呆れてそう返すと悟空さんが雲を差し出して来た。

「少し食ってみろよ旨いからさ」  
その迫力に少し押され、雲を受け取り口に含む…

「っ…！！旨いー！」  
なんだこれ！絶妙なスパイスの効き具合に  
堪らない味わい  
これは手が止まらない！  
俺は夢中になって雲を手当たり次第に食い始める

「お！イツセーも食うんだな！じゃあオラも！」  
悟空さんもまた雲を食い始めた。

あれから、かなりの時間が経った、  
俺達はいまだに雲を食い続けていた。  
すると、どこからか声が聞こえてきた。

「おーい二人ともどうじゃ？」

もう地球に着いたか？」

その声に俺は驚き

辺りを見回すが誰もいない…

「お？この声は界王様か！」

どうしたんだ？」

悟空さんが声に返答した。

え？まじで界王様なの？

どこから話しかけてんだ？

「お主の心の中に話しかけておるんじや一誠よ」

フアツ!!まじかよ！

流星神様だなそんなことも出来るのか…

「マジじゃよ、それでお主ら

今どこにおるんじや？」

え？あ、いや…どこと言いますか…

まだ着いてないと言いますか…

「雲食つててまだ着いてねえんだ!!ははは！」

「っ、悟空さん…そんなこと言ったら…」

「…… バツカモン！何をやっとなるんだお主等！  
サイヤ人どもはもう地球に着いとるんだぞ！」  
なっ!?まさかもう一日経ったってのか？

「そういうことじゃ、分かったなら早く向かわんか！  
地球の神が迎えに来ておるから早く行け！」

「は、はい！」

「分かった！行くぞイツセー！」

俺達は走るのをやめ空を飛び突っ込んでいった。

しばらく飛んだ所なんとか  
閻魔のおっちゃんの所に着いた。

「あら？戻ってきたのね〜」

「悟空！」

幽々子さん以外にも人？がいた誰だ？

「お！神様来てくれてたんか！」

ええええええええ!?この人が地球の神様!?

思いつきり人間じゃねえ!

「今はいい！とにかく掴まれ！」

そうだった。今はそれどころじゃない!

「ああ、サンキュー神様！イツセー掴まれ！」

「はい！」

俺達はそして地球に戻った。

「あら、行っちゃったわね〜」

「あいつが起き取るとこ初めて見たわい…」

あの世ではそうつぶやく二人の姿があったとき

## 乙戦士の敵を討て！イツセー怒りの界王拳

sideイツセー

地球の神と呼ばれる者に地上まで連れてきてもらった俺達はサイヤ人のもとに向かっていた。

遠方を感じる大きな気のぶつかり合い…

サイヤ人達とクリリンさん達が戦っているのか？

「皆の気がどんどん小さくなっていく…

頼む間にあってくれ！」

「もつとスピードを上げましょう！悟空さん！」

「ああー！」

俺達は更にスピードを上げ、気の感じる方向に飛んだ

飛んでいる間にも感じる気はどんどん少なくなっていく…

しばらく飛んでいるとまた一つ気が消えた…

「気が一個消えた…この気は、ピッコロか！」

ピッコロさんが！嘘だろ…？

俺は残りの分かる気を探った。

「悟飯くんの気も感じます！微弱ながらクリリンさんの気も」

「ああ、急ぐぞイツセー！」

「はいー！」

感じる気はもうすぐそこだ、早くしないと！

すると、視界に悟飯くんが膝をついて立っている姿が見えた。

悟飯くんの目の前には禿げた半裸の大男が今にも悟飯くんを

踏み潰さんとばかりに足を振り上げている

「そうはさせるか！赤龍帝の籠手！（ブーステッド・ギア）」  
『Boost!』

俺は力を倍加させ、一気に悟飯くんと距離を詰める

「はっはっは！グシャングシャンにされた息子を見た時の  
はっはっは！カカロットの顔が楽しみだぜえ！」

そう言つて足を振り下ろす禿げ半裸男（変態）

しかしそれより早く俺が悟飯くんを抱き上げその場から  
離脱する、ふう、危機一髪セーフだな。

「お!?!:」

「ん!?!」

踏み潰したはずの悟飯がいないことに気づいた禿げ半裸男（変態）  
辺りを見回し、ようやく俺を認識する

「ん: : ?あ!イツセーお兄ちゃん!」

「よう！悟飯くん久しぶりだな！」

俺はそう言つて、悟飯くんを降ろす

「てめえ、何者だ?」

変態が俺に聞いてくる、美女ならともかく  
こんな変態に聞かれてもな: :

「ただの地球人だよ: : 神器持ちのな!」

「くっ: :!」

後ろのヒョロイ奴が何かに気づき上を見る  
そこには怒の表情をした悟空さんがいた。



「悟空さん、悟飯くんは無事です。」

「ああ、助かったぞイッセー!」

そう言つて地上に降りてくる

「アあ……!お父さん!」

「…… 悟空!それにイッセー!」

悟空さんは無言でサイヤ人達を無言でにらみつける

「…… ふっ…… ついに現れたな」

「……………」

「なにしに来やがったカカロット?」

まさかこの俺達を倒そうなんてくだらんジョークを

言いに来たんじゃないだらうな?」

ヒヨロイ奴の言うことを無視して悟空さんは

ピッコロさんの方へと向かい脈をとる

「…… ピッコロ」

「ピッコロさんは僕を庇つて死んじやったんだ……」

悟飯くんがうつむきながら答える

その後、悟空さんは辺りを見回し他の倒れた人たちを見つける

俺も一緒になつて探すと……

一人、二人、三人…… こいつら!がやりやがったのか!

「天津飯、ヤムチャ……」

そうか、あの人たちはそんな名前だったのか……

俺の中で大きな怒りが沸き上がる

「へっへっへー！バカな仲間が死んじまってショックか？

そういうや、ボロボロになったチビもいたっけな」

その言葉で悟空さんの顔がさらに変わり

身体がワナワナと震えている

俺もこいつの言っていることにとてつもなく腹が立つ

悟空さんが変態の方へと歩き出す。

「お？なんだ？もう死ぬつもりか？」

変態が何か言うも悟空さんは全く反応せず歩き続ける

「こいつを躲せるか！てやああ！！」

しかしパンチが当たる前に悟空さんの姿が消える

「悟飯、イツセー、こつちへ…」

「はい」

「う、うん」

俺達はクリリンさんの元へと向かった。

「悟空、イツセー…」

「遅れてすまなかったなあ、二人ともよく堪えてくれた

」

「すみませんクリリンさん遅くなりました。

これしかないですけど悟飯くんと分けて食ってください」

そう言っって俺は一粒の仙豆を取り出す

「え…？いいのか？お前たち二人が

食べたほうが良いと思うんだが…。」

「心配すんな！オラ達ならもう食ってきた」

「そうですよ、それに俺達なら負けません、

そうだろう？ドライグ」

『ああ、当然だ俺が力を貸しているんだからな』  
籠手の宝玉が点滅し男の声が聞こえてくる

「二二、籠手がしゃべったあ！！」

まあ、こんな反応するよな…」

つてか悟空さんは知らなかったかな？

「ま、まあ、とりあえず食べてください

ほら、悟飯くんも」

「…すまん…」

「う、うん…」

二人の口に仙豆を入れる

「ははっ！」

二人がなんとか元気を取り戻し立ち上がった。  
これで一安心だな

「それにしてもイツセーお前

滅茶苦茶強くなってるじゃないか

悟空と一緒に死んだって聞いた時は

どうしたもんかと思っただぜ」

「あはは…ご迷惑をおかけしました。

でも凄いじゃないですか！クリリンさん  
だってかなり強くなってますよ、気で分かります」

「はは… まあな、でも駄目だった…」

「ってイツセー今お前『気』って言わなかったか？」

「？言いましたけど？」

俺、何かおかしなこと言ったか？

「…いや、今はいい…それよりもあいつらだ…」

悟空にイツセーが加わってくれりやあ  
一人くらいなんとかなるかもしれない」

「いや、クリリン奴らとはオラ一人で戦う」

そういう悟空さんを俺が止める

「チツチツチ♪一人じゃないっすよ？」

「ああ、そうだったなクリリン、悟飯おめえたちは  
離れて見ててくれ巻き添え喰らわねえようにな」

「む、無茶だ！俺達五人でも敵わなかったのに

お前たち二人じゃ勝てっこない！」

慌てて止めるクリリンさん、

だけど俺達はもう止められそうにないんだよな

俺達はサイヤ人の方を見る

こいつらを見ていると無性に腹が立ってくる

怒りでどうにかなりそうだ…

すると籠手が

『Dragon Booster second revelati

on!!」

『Transfer!!』

「あ…… ああああ…… ああ……

あれ？なんか力が沸いてくる？」

クリリンさんが俺達の様子を見て言葉を失いつつも自身の変化に気づく、するとドライグが

『それは相棒が溜めた力をお前に譲渡したんだ

それにしてもやっと二段階目か…… 先は長そうだ』

ドライグがなんか言ってるがそれは無視し

サイヤ人達の方へと向かう

サイヤ人達の前に来ると変態が

「なんだあ？その面気に入らねえな、

そんなにあっさり殺してほしいのか？」

アホみたいなのを言ってくる…… 変態のくせに

「…… つぐぐぐ!!許さんぞ貴様らああ……!」

そう言っって力を解放しようとする悟空さんだが

「悟空さん、ここは俺に任せてくれ……

こんな奴に悟空さんの手を煩わせることはねえよ」

そう言っって俺は前が出る

「…… イッセー、だがあいつ等は!!」

そう言っって食い下がろうとする悟空さん

「俺だっってあいつらにはむかつ腹が

立っって仕方ねえんだよ!!ピッコロさんを……

それに名前話知らないがあいつ等を倒そうと  
頑張った人達を鼻で笑うアイツ等がよお!!」

そういうと、俺は気を解放させると同時に倍化を始める  
『Boost!』

「そうか、なら分かったただけど無茶だけはするなよ?」

悟空さんが納得してくれたところで俺は構えをとる

「ベジータ、あの人間の戦闘力は幾つになった?」

変態がそう聞くとベジータとかいうヒョロイ奴は  
メガネのようなものを外して

「ちっ!10000以上だ..」

その言葉に驚く変態

「なっ!一万以上だと?!そりや何かの間違いだ!  
故障だぜ!」

「心配すんなよ、お前みたいな変態には

まだ界王拳は使わねえから

一段の倍化だけで充分だ」

『Boost!』

『Explosion!!』

俺の言葉にカチンときたのか変態が俺に向かってきた

「うるせえ!俺は変態じゃねえ!!」

てめえなんかがこのナツパ様に敵うわけがねえんだ!!」

そう言っつてラリアットを放つてくるが

俺は一瞬で背後に回り込み

「オラアツ!!」

思いつき後頭部を蹴り上げてやった。

「うぐっ!!!!」

生き王よく倒れる変t... ナツパ

「おいおい、こんなもんなのか？」

サイヤ人つてのも大したことねえのな」

俺はやれやれといった感じで首を振る

「な、なんだと!!こ、この俺様がたいしたことないだ!!」

「ああ、いったぜ?さっきの攻撃で大体わかった」

まさかこんな弱いなんてな... これならあの

ラディッツの方が断然強かったな、

まあ、あの時は俺が弱すぎただけだが

「... どう分かったのか、じっくり教えてもらおうじゃねえか!」

そう言つて俺にラツシユを仕掛けてくるナツパ

俺はそれらを躲しながら

「ふわぁ... 眠くなる遅さだな、これならラディッツの方が

よっぽど強かったんじゃないか?」

「お、俺様が... あんな弱虫野郎より弱いだとお!! 舐めやがってえ!!」

更にラツシユを仕掛けてくるがやはり当たらない

「おらあつー!」

シユインツ!!

俺は剃を使い距離を取った。

ナツパは俺を見失つて探し回っている

「俺ならこつちだ!変態!!」

そう言つて俺はナツパへと走り出す

そうして、目の前で飛び上がり牛○丸よろしく頭の上に乗った。それに気を取られて攻撃してくる隙をつき腹に一撃を入れる

「でりやあ!!!!」

「お、おぐう…」

「みたか、これからあんたに打つのはアンタに殺されていった人達に分だ!!」

俺は見下ろして告げる

「ち、チクシヨオ… うおおあ!!」

懲りずに殴りかかってくるが

バキイツ!

と、再度殴り飛ばす

「ぐおおお…!!」

それを追撃するように俺は距離を詰め

ラツシュを叩き込む

「オラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラ

オラア!!」

あまりの勢いにナツパの身体はノーバウンドで飛んで行く

「はあ… もう飽きたこれで終わらせてやる! 界王拳!!!!」

すると俺を紅いオーラが包み込み力をさらに倍化させる

「お前に殺されていった者たちの恨み!! 食らええ!!!!」



俺は高速でナツパに突っ込み連続で殴り飛ばした。

「ぐおおおおおおお……」

地上に落ちる直前背中にさらに打撃を入れそのままベジータとかいう奴のもとに転がす

「おおおおお…… 助けてくれベジータ……」

「ふんっ！無様だなナツパ」

そう言つてナツパの腕をつかむベジータ

そしてそのままナツパを空中へと放り投げた。

「な、なにをするんだ?!ベジータ」

「動けないサイヤ人など必要ない！死ねええ!!!!」

「ベジータア——!!!!」

ベジータは気功波を放ちナツパを消し去ってしまった。

「「「なっ?!」」」

俺達はそのあまりの出来事に目を疑うのだった。

## 報告とコラボ

どうも、作者のギオスです。

今回は、ちよつとした報告をしたいと思います。

実は、最近リアルの方が忙しくなってきたておりまして、小説更新にまで手が回りそうにないので

リアルのほうが落ち着くまでは更新をお休みしようと思います。毎回読んでくださっている読者の方には申し訳ないのですが…しばらくの間、休載とさせていただきます。

なるべく早く再開できるように頑張りますのでどうか気長にお待ちいただければ幸いです。

それでは、私は失礼してキャラたちのコラボという名の雑談をお楽しみください、それではどうぞ！

あ、それとドラゴンボールの方のイツセーは一誠と表記します。

sideコラボ

一誠「と、いうわけだけど…どうするんだこれ…」  
幽々子「どうしたものかしらね〜…」

悟空「ん？いいんじやねえか？大勢いた方が楽しいじゃねえか！」  
イツセー「すげえ！そ、空孫悟がいる！」  
クリリン「ソラマゴサトル？違うぜ、あいつは孫悟空  
俺達の友人で仲間なんだ。すごく強いんだ」  
リアス「確かに底知れない何かを感じるわ……」  
朱乃「あらあら、うふふ、虐めたらどんな顔をするのかしら？」  
ピッコロ「やめておけ、お前がかなう相手じゃない」  
小猫「……：：：：：なら、試してみます。えい！」  
悟空「おつと！あつぶねえなあ」  
イツセー「余裕で躲してる人が言う台詞じゃないでしょそれ!!」  
一誠「いや、あれくらい余裕だろ？動きがよく見えるしな」  
祐斗「なら、僕の動きは捉えられるかい？」  
悟飯「わっ！早い……僕見えないよ」  
亀仙人「確かに凄いがまだまだじゃの……  
それにしても、ええのう……目の保養になるわい」  
一誠「確かにきれいだけどもあんまりガン見すんなよ  
亀のじいさんそれと、追いついたぞ木場」  
祐斗「なっ!?流石だね騎士【ナイト】の僕に追いつくなんて」  
悟空「そりやそうだ、一誠の奴はオラの次に強えからな」  
小猫「……：：：：：そろそろ当たってくださいー！」  
クリリン「すげえ……あのお嬢ちゃん、悟空について行ってるぜ」  
イツセー「でも、あの小猫ちゃんが一発も当たってない……  
どんだけだよ！」  
幽々子「悟空ちゃんも一誠ちゃんも面白いわね」  
悟飯「ところでお姉さんは？」  
朱乃「あら？私は姫島朱乃というの、坊やは？」  
悟飯「僕、孫悟飯です。」  
リアス「と、言うことは貴方、悟空さんの息子さん？」  
ピッコロ「そういうことだ、今は弱いがいずれ化ける大物だ」  
朱乃「貴方は……不思議な体の色をしてらっしゃいますね？」  
ピッコロ「俺はナメック星人だからな、元々この色なんだ」

小猫「……全然当たらなかったです」

悟空「ははは！惜しかったなあ、もつと強くなれよ？楽しみにしてっぞ！」

小猫「……次は負けません」

一誠&幽々子『それじゃ、またな！』

遂に出るか！悟空限界を超えた界王拳

side イッセー

「へっ！汚ねえ花火だ」

俺達はこの光景に驚いていた。

あのベジータとかいうサイヤ人は仲間のはずだった  
変態改めナツパを粉々に吹き飛ばしたのだから

その光景を見てクリリンさんが言う

「あ、あいつ…自分な仲間を消し飛ばしやがった…」  
すると、ベジータは此方を向き

「次は俺が相手だ、ナツパのように行くと思うなよ？」  
俺を睨みつけてくる、だけど

「残念だけどあんたと戦うのは俺じゃないぜ？」

「なに？では誰が戦うつもりだ？」

俺の言葉にベジータが不審な顔をして問うてくる

「アンタの相手はこの人だ、それでいいですよね？」

悟空さん

「ああ、イッセーにだけ戦わせるつもりはねえ…

オメエはクリリンたちを頼む」

その返事に俺はクリリンさん達の元へ向かう

「俺の相手はカカロットか、いいだろう

カカロットを殺した後は次はお前だ小僧」

「オメエにイッセーの番はねえさ」

そうして、二人は構えをとる

俺達は邪魔にならないように二人を連れ少し場所を離れた。

side out

sideクリリン

俺は目の前の光景に驚きを隠せないでいた。

なんたって、悟空がサイヤ人相手に互角に

渡り合ってるんだ、驚かないわけがない

「す、スゲエ… 悟空の奴どれだけ修行してきたんだよ」

悟空とサイヤ人の戦いも凄いが何よりも驚いたのは

イツセーにだった。こいつは初めて会った時は

悟飯より少し強いくらいだったのに

今じゃ見違えるほど強くなってやがる…

「いえ、悟空さんの方が押されてます…」

イツセーのその言葉で悟空の方を見ると

確かに押され始めていた。

悟空は気をまた溜め始めているみたいだ

こつちにまで圧力が来てる…

「体保つてくれよ…三倍界王拳!!!」

すると悟空の身体は先程より赤く輝いていた

そのままものすごいスピードでサイヤ人に

突っ込んでいくそのまま二人はすごいスピードで

ぶつかり合っていくその様子は悟空がサイヤ人を

押していた。

「悟空さん… あれだけ界王様に言われてたのに…」

イツセーがそうつぶやいている

まさか悟空の奴かなり危険な技を…

「絶対に許さんぞおおお!!!!」

もうこんな星など要るもんか！地球もろとも粉々に打ち砕いてくれるわああ!!!!」

そう言つてサイヤ人の奴は真上に飛びあがり構えを取った、な、なにをする気だ!?

「まずい、二人ともすぐにここを離れます！

ここにいたら巻き込まれちまう！」

イツセーが何かを察知してそう叫ぶ

すぐさま俺達はその場から離れるのだった。

s i d e o u t

s i d e 悟空

「避けられるものなら避けてみる

貴様は助かっても地球は粉々だあ!!」

奴から尋常じゃない気を感じるくつ… こうなったら

「賭けるしかねえ！

三倍界王拳のおかあめえはあめえ…」

ベジータに奴も気を溜めながら言つてくる

「俺のギャリック砲はだれにも止められんぞおお!!

地球もろとも宇宙に塵になれえええ!!!!」

その言葉とともに奴は技を放った。

「波ああああ!!!!」

それと同時にオラもかめはめ波で迎え撃つ

二つの技がぶつかり合い拮抗する

仕方ねえ、こうなりや使うしかねえ!!!!

「界王拳… 四倍だああああ!!!!」

自身にかけていた界王拳さらに上げた。

すると、撃っていたかめはめ波がギャリツク砲を押し戻していく

「なっ！なにつ！！うおおああああ!!!!」

ベジータはそのままかめはめ波に呑み込まれ飛んで行った。

「うっ！く。くく… つ！はあ… はあ… はあ…」

やべえ体に負担をかけすぎたみてえだ…

身体が想像以上に動かねえや…

「孫、やったでねえか！」

そんな声に振り返るとヤジロベーが走ってきていた。

「え…？ヤジロベーなんでオメエがここに？」

ヤジロベーはオラの前で止まると話しました。

「なんだ、気づいてなかったんだわにい

おみやあともあろう者がよっぽど必死だったんだなや」

「へへへ… まあな…」

少し苦笑してそう返す

「しかし、あんなどえりやあ奴よくぶっ飛ばしたわにい

やあっばたいしたたまげた野郎だわ！」

そう言っって軽くオラを叩いてくる…が

「ぐあああああつ!!!!」

あまりの痛みに叫んじまった…



「な、なに？どしたん？」

「身体に無理な技を使っちゃまってな…。」

戸惑いつつもそう聞いてくるヤジロベーになんとか  
答えるけど正直かなりきつい

「へえ〜まあ普通じゃなかったもんやな」

「そ、それよりヤジロベー… オメエ逃げた方がいいぞ…。」

「な…なんで？ま、まさか…。」

ぎくりと顔を変えるヤジロベー

そのまさかで間違ってるねえよ…

「奴は生きてる、あれぐれいで死ぬような奴だったら  
苦労はねえ…。」

「で…でもよ、平気やにやーきや？おめえの方が  
どえりやあ強かったでねえ」

「言っただろ… オラ無理してっから体がガタガタなんだ  
もう限界に近いかもな…。」

そう言うヤジロベーの奴呆けた顔して

「そ、そか… じゃあ… な、が、頑張れよお？」

そーい言っつて走り去っちゃまった…

オラはそれを見送るしかできなかった。

そのすぐ後に奴が戻ってきやがった…

ちくしょう、タフなヤローだ…

こっちはも限界だつてのによ…

「さつきはよくもやりやがったな、こうなったら

大猿に変身して貴様をぶっ殺してやる！」

そういつて奴は手に光り輝く何を作ると空に向け放った。

「弾けて!!混ざれ！」

すると、光の玉は光を強くし弾けた

それを見た奴は……

「俺の大猿は半端じゃないぞおおおあああ……」

姿が変わっていき巨大な猿になりやがった。

へへへ……こりや不味いかもな……

オラはこいつにどう立ち向かうか考えを巡らせるのだった。

# 激突！大猿ベジータ V S 赤龍帝イツセー

side 悟空

「俺の大猿は半端じゃないぞおおおああ…!!」

その言葉とともに大猿の化け門に変身するベジータ

「お、大猿?! 大猿の化けもん!!」

…そうか、ようやく分かったぞ…じつちゃんを踏み潰したんも  
武道会場に現れて会場をぶっ壊した化け物つてのも…

全部オラだったのか…!!!!」

その間も変身を終えたベジータはオラの方へと歩いてくる

「ごめんよじつちゃん…死んだら謝りに行くから…」

だからそれまで…待っててくれよ!!!!」

ベジータが売ってくる攻撃を躲して距離を取る

「見せてやるぜベジータ！

オラと地球の元気玉！腹いっぺえ喰らわせてやる!!!!」

そうしてオラは元気玉を作るための準備に入るのだった。

side out

side イツセー

俺達は今悟空さんの邪魔にならないようにあの場を離れ  
亀ハウスへと向かっていた。

「つつ!!!!」

感じたことのない気に俺達は足を止めた。

「な、なんだ？ものすげえ気が上がってる…」

クリリンさんがそう口にする

「お父さんの気がまた上がったんじゃないですね」  
そういうのは悟飯くん

確かに悟空さんの気ではない、このままだと悟空さんが危ない

『行くのか？相棒』

(ああ、ドライグ倍化ほどのくらい上げたらいけると思う?)

『この気の高さだ、並みの倍化では歯が立たんだろうな...』

(だろうな、俺でもわかるくらいだしな)

『まあ一つ方法がないこともない...』

珍しく歯切れの悪い返事をするドライグ

(なんだよ、その方法って、あるなら教えてくれ)

『いいのか？後で後悔するかもしれないが』

(俺のことはどうだっていいんだ、

このままじゃ悟飯さんはおろか悟飯くん達まで死んじゃう

そんなのは嫌なんだ)

その言葉にドライグは苦笑しつつ答えてくれる

『方法は俺に代価を支払い期間限定で俺の力を使うんだ』

(ドライグの力？それに代価って何を渡せばいいんだ?)

『相棒の身体の一部だ、そうすることで俺の力が使えるようになる』

(一時的にでも使えるならその方がいい、分かった)

俺の左腕をドライグ、お前に捧げる、だから俺に力を書いてくれ)

『取引成立だ、ではいくぞ』

すると、籠手からとてつもない力が流れ込んでくる

これならいけるかもしれない！でもその前に...

「クリリンさん、悟飯くん、悪いけど先に行ってください

俺は戻って悟空さんの手伝ってくる」

俺のその言葉に二人は驚いた顔をする

「む、無茶だぜイツセー！

お前一人が行っても足手まといになっちまうよ…  
もしどうしても行くなら俺達も付いていくからな」  
その強い表情に俺は折れるしかなかった。

「分かりました。じゃあ行きましょう！二人とも」

「ああ！！！！」

「はい！！」

俺達は悟空さん達が戦っている場所へと向かったのだった。

遂に覚醒!? イツセー決死の禁手化

sideイツセー

俺達が戻ってみるとおかしな服を着た  
見上げるほど大きな猿?の化け物がいた。

「な、なんだよあのでかい猿は...」

俺が驚いている横でクリリンさんが声をなくしていた

「お、大猿だ... なんでこんなところに...まさかアイツが!」

クリリンさんは何か知っているみたいだが後だ、今は

悟空さんを探さないと!

急いで気を探ると微弱な気を見つけた

「見つけた!悟空さん!!」

悟空さんは大猿化したベジータに締め上げられていた。

「はっはっは!死ねえええ!!」

「ぐあああああつ...!!」

今にもやられそうになっている悟空さんに

俺はいてもたってもいられず

「やらせるか!!悟空さん!」

「お、おい待てイツセー!!」

クリリンさんの制止も聞かずベジータへと突っ込んでいった。

「赤龍帝の籠手!!さらに三倍界王拳!!」

『Boost!』

突っ込みながら神器と界王拳を発動させ大猿めがけて突っ込んだ。

「うおおおおおおお！！！！」

(ドゴンツ！！！！)

俺は腕を振りかぶり、大猿の腕を殴りつけた。

「ぐあっ！な、なにいつ！！」

痛みに驚いた大猿は悟空さんを落とした。

すぐさま悟空さんを助け出すとその場を離れる

「ちっ！くそつたれ！まだネズミが一匹残ってやがったか！」

ベジータは自身の失態に悪態をつきながら

二人の姿を探す

俺は岩陰に身を隠し悟空さんを寝かせた。

「い… イッセー… どうしてここに…」

「二人を連れて行く途中にとんでもない

気を感じたので急いで戻って来たんですよ

そしたら大猿に悟空さんがやられかけていたので驚きました

後は俺に任せて悟空さんはそこで休んでいてください」

俺はそういつて悟空さんに背を向け出ていこうとすると

「ま… 待つんだイッセー…」

悟空さんに呼び止められた。

「大丈夫ですよ、悟空さん

クリリンさん達にもすぐ来るように伝えますから」

そう言う俺は岩陰から跳び出していった。

岩陰から出るとクリリンさん達が近くに寄ってきた。

「イッセー！無事だったか、あの大猿についてなんだが

あいつの尻尾を切れればアイツは元に戻るはずだ  
だから協力してくれ」

「いえ、クリリンさん達は悟空さんといってください  
アイツは俺が倒します!! それと尻尾が弱点なんです  
ありがとうございます」

「あ、おい! 待ってってイツセー!!!!」  
クリリンさんに悟空の場所とお礼を言うと  
俺は大猿に向け跳び出していった

「やっと出てきやがったか、カカロットの奴はどうした?」

「悟空さんは俺が帰した、お前の相手は俺だ!!」  
大猿の前に飛び出した俺はそう宣言した。

「はっはっはっは!! 貴様なんぞが俺様に敵うものか!!」

「そんなものやってみなくちゃ分からねえだろ!!  
輝きやがれ!! オーバーブーストオオオツ!!!!」

『Welsh Dragon over booster!!』  
聞いたこともない音声とともに俺の身体が輝きだし  
俺の身体を紅い鎧が包み込む

「ど、どういうことだ!!!!」  
俺の異変に驚いている大猿

「これが赤龍帝の鎧(ブーステッドギア・スケイルメール)だ!  
覚悟しやがれ猿野郎!!!!」  
俺は大猿に向かって突っ込んでいく

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost』



B o o s t

B o o s t B o o s t !! !! !!』

『相棒、これを維持できる時間は三十分だ…』

「それだけあれば充分だ！十分で決着をつける!!」

「鎧を着た程度で俺が倒せると思うなあああっ!!」

そうして俺は大猿との戦いに臨むのだった。

放てクリリン！地球の想いを込めた元気玉！

side 界王

「あああ… な、なんじゃあの姿は…」

界王星から様子を見ていたワシは驚きのあまり声が出なかった。何故なら今地球ではイツセーがあの大猿と戦っておるのだがその姿が異常なのだ、赤い鎧を纏ったそれは、龍を連想させる

「ワシはとんでもない奴に修行を着けちゃったのかもしれない…」

そう言っつてワシはこれからあるだろう未来に思いを馳せた。

side out

side 悟飯

僕は目の前で起こっている戦いが信じられませんでした。

イツセーお兄ちゃんが赤い龍みたいな鎧を着て

あのサイヤ人に一人で戦いを挑んでいるんですから

横で見っていたクリリンさんも

「す、すげえ… イツセーの奴ほんとに一人で倒しちゃうんじゃないか？」

っつて言いながら二人の戦いを見ています。

「いや… 確かに… 今のイツセーはすげえ… だけんど

あれは多分… 一時的なもんだ… あれが切れたら…

イツセーは間違いなく死ぬ…」

「そんな… じゃあどうすれば…」

僕がそう言うとお父さんはキツそうにしなながらも

「なんとかして… アイツの尻尾を切るんだ… そうしたらオラが…  
… なんとかして見せる… イッセーには…

オラが伝えておくから… 頼んだぞ…」

その言葉に僕たちは頷きサイヤ人の様子をうかがうのだった

side out

side イッセー

戦いを始めてからすでに7分が過ぎようとしていた。

現在俺は禁手にプラス五倍の界王拳で相手をしている  
隙を見て尻尾を狙ってはいるんだけど思いの外頑丈で

引きちぎることができてない… おまけに結構殴っているのに  
いまだに動けやがると来てる…

タフすぎてこつちが疲れてきちまうよ…

倍化にプラス界王拳の所為で俺の身体自身かなり悲鳴を上げてい  
る

「ちっ…！有効打が与えられない…どうすりゃいいんだ!!」

「はっはっは！貴様にこの俺を倒すことなどできんだ！」

俺が歯噛みしていると何処からか

(… ツッセー… イッセー… 聞こえるか?)

悟空さんの声が聞こえてきた。

「え？悟空さん?! どうしたんです？」

驚きながらも答えると悟空さんが話し出す

(今、クリリンたちがアイツの尻尾を切るために準備をしてる…  
だからオメエはそれに合わせて隙を作ってくれ…)

「わ、分かりました… さあ今度こそお前をボコしてやるよ

大猿！」

そう言いながら俺は二人の気を探る

見ると、クリリンさんがもう準備を終えていた。  
悟飯くんが俺に向けてサムズアップしてくる  
それを合図と感じ取り俺は大猿の近くまで寄ると

「見てやがれ！これで決着をつけてやる太陽拳！！！！」  
大猿の目の前で太陽拳を放った

「ぐあああああつ！！チクショお！！目があ！！」

大猿が目を抑え呻いている隙を狙い

二人に合図を送る

するとクリリンさんが

「気円斬！！！！」

その言葉とともに金色の円盤型のエネルギー弾が  
奴の尻尾を捉え切り裂いた。

尻尾が切られた奴は

「ぐおおお…俺の尻尾をおおおお…！！！！」

そう言いながら縮んでいった。

やったぞ…と思った瞬間禁手が解けた

「おい！まだ三十分経ってないぞ！どういうことだよ！」

『それはお前が界王拳を使っていたからだ…』

あの技を使ったことによってお前の身体に負荷がかかり  
維持できる時間が減ったんだ…』

くそっ！！！！あと少しだったのに！！

「ほう？あの鎧は時間制限だったのか、残念だったな

あれがあれば俺を倒せたかもしれないなあ？」

(ドライブ、倍化の方はまだいけるか？)

『ああ、だがお相手さんがそうさせてくれるかだな…』  
『Boost!』

「まずは貴様から…とりたいところだが

その前にあのガキを殺してからだな」

そう言つて悟飯のほうに歩いていくベジータ

不味い！あのままじゃ悟飯くんが…

「界王拳四倍!!!!うおおおおおっ…!」

俺は界王拳を発動させベジータに突っ込んだ

「なっ?!なに!!」

思いつきりベジータを殴り飛ばし悟飯くんの下に転がる

「い、イツセーお兄ちゃん!!!!」

慌てて駆け寄ってくる悟飯くんは声をかける

「はあ…はあ…悟飯くん…今から俺の力を君に渡す…だから

アイツを倒してくれ…悟空さんの息子ならきっとできる…」

そう言つて俺は何度目かになる倍化を渡すために構える

「ブーステッド・ギアギフト!!」

『Transfer!!』

倍化された力が悟飯くんに譲渡される

「あ、ああああ…す、凄い…」

渡された力に驚いている悟飯くん、だがベジータは此方に迫ってきている

「今ので俺にはもう戦える力がなくなっちゃった…悪い…」

『Burst!』

その音声と共に俺は急激にかかった負荷によって

吐血する。

「なんだ、自滅しやがったか、まあいい止めを刺してやる」

「へっ…好きにしろよ…」

俺は死を覚悟して目を閉じた。

「てござらせやがって…死ね！」

「やめろおお!!!!うわあああ!!」

「ぐああっなんだとお!!」

どうやら悟飯くんが戦ってくれてるみたいだ…

悟空さん…後は頼みました…

それを最後に俺は意識を手放した。

side out

クリリンside

イツセーが悟飯に力を分け与えて時間を稼いでる間に

俺は悟空から譲り受けた元気玉を当てるために狙いを定めていた。

「くそっ!!あんなに動かれちゃ俺の腕じゃ当てられない!!」

俺が諦めかけていると突然誰かが話しかけてきた

『元気玉は目で見て当てるのではない、悪の気を感じ取って放つのだ』

「だ、誰だ!!」

『孫悟空に元気玉を伝授した界王だ』

「か、界王…様」

『お前のその一撃に全てがきまる、その元気玉は地球中の願いを込めた球だということを知れ』

その間にも悟飯とベジータの戦いは進んでいく

「……！！！！捉えたあ！！」

ベジータの悪の気を捉え放とうとした瞬間

「なにやつとりヤーすばかたれ！！早くそれやってまえ！  
タイミング悪くヤジロベーが叫んでしまった。

それによりベジータがこちらの存在に気づいてしまった

「ちっ！何やってんだあのバカ！！くそつたれええ！！」

破れかぶれで元気玉を放った。

元気玉はまっすぐにベジータの方に飛んで行ったが

「なっなんだこれは！うおっ！！」

上に飛ばれ躲された。

「なあっ！！！！躲された！！！！」

元気玉はまっすぐ悟飯へと飛んで行く

誰もが終わったと思うのだった。

side out

side 悟飯

気が付くと青い球がこっちに向かってきていた。

僕もう死んじやうのかな…

(悟飯…跳ね返せ…そいつは悪の気がなければ跳ね返せるはずだ…)

お父さんに言われるがまま僕は手を突き出した。  
そして飛んでくる元気玉を弾き返そうとするが

「うううう… ぼ、僕じゃあ無理だろう… !!」

すると、急に力がみなぎってきた。それにこの気って

優しくとても暖かい気… いるんだね、イツセーお兄ちゃん…

僕はその力と共に元気玉を弾き返した。

玉はそのままサイヤ人のもとに飛んで行って

そのまま天高くまで飛ばしていつてしまった。

終わったんだ… そう思ったら一気に身体から力が抜けてしまっ  
たのだった。



これで終いだ！イツセー渾身のドラゴン波

sideイツセー

「おい、起きろ相棒」

その言葉に目覚めると目の前にはあの赤い龍帝  
ドライブグがいた。

「あれ？ここって・・・」

以前にも一度来たことがある

「そうだ、ここはお前の夢の中だ」

ドライブグがそう説明してくれる

「でも何でここにいるんだ？」

俺は確か大猿の尻尾が切れてアイツが元の姿に戻って  
悟飯くんに限界まで力を溜めた力を譲渡したところまでは  
覚えてるが・・・

「お前は孫悟飯に力を譲渡した後倒れたんだ

今はあいつらがあのサイヤ人の相手をしている」

「!!・・・こうしちゃいられねえ！」

俺は足早にドライブグに背を向け歩き出す

「おい、相棒どこに行くつもりだ・・・？」

「決まってるんだろ！早く目覚めて悟飯くん達を助けに  
行くんだよー！」

「相棒らしいな、じゃあ行くか」

「ああー！」

俺は夢から目覚めるのだった。

目覚めるとそこにベジータの姿はなく

喜んでいるクリリンさんとポロポロになりながらも笑っている  
悟飯くんと悟空さんがいた。

サイヤ人の奴は倒せたのか？

そう考えながら体を起こすとある物が目に入ってきた

それは切り落とされたサイヤ人の尻尾だった。

俺はそこまで歩いていくと

(なあドライグ神器は宿主の思いに伝えてくれるんだったよな?)

『ああ、だがそれがどうかしたのか?』

(今から俺が思うイメージってできるか?)

そうすると俺はあることを考える

『ああ、それは可能だろうな』

(良かったぜ、なら早速やるから頼むよドライグ)

『任せておけ... 相棒』

俺は尻尾を拾い上げると神器の宝玉の所にち近づけると

「俺の思いに応えろおお!! 赤龍帝の籠手!!!」

すると、籠手の宝玉の所が光だし尻尾が籠手に吸収されていく

(成功... したのか?)

『ちゃんと成功しているぞ相棒』

ドライグの言葉に安心していると

腰のあたりに違和感を感じたので見ると

「な、なんじゃこりやああああ!!」

尻尾が生えていた。

その叫び声に気づいたクリリンが寄ってくる

「イツセー！お前起きてたのかって… いいっ…!!」

俺の姿を見て驚いているようだ

それもそうだ俺自身も驚いているんだから

「い…イツセーお前どうしちまったんだよ？」

お前、なんで尻尾なんか…」

俺がどう説明しようか悩んでいた時

空からある者が降ってきた。そう、サイヤ人だ

サイヤ人はそのまま地面に叩きつけられると動かない

それを見たクリリンさんがサイヤ人の所まで行き

「… とんでもない奴だったけど、墓ぐらい作ってやるか」

そう話した時だった。

「… 貴様らの墓をか」

先程まで動かなかったサイヤ人がいきなり目を開けたのだ

「いいいいっ!!」

三人が驚きを隠せないでいる俺も驚いてはいるが

何があったのか分からなかったためそこまで驚いてはいなかった。

サイヤ人はなんとか体を起こすとクリリンさんを殴り飛ばすと

悟飯くんのほうへと歩いていくと

「ふんっ！たあああああ!!!!」

気を爆発的に放出させた

「「うわあああああ!!!!」」

俺達は吹き飛ばされてしまった

ヤバイ… ダメージが大きすぎる…

なんとか仰向けに寝返りを打つと光の玉が目に入った。

『Saian Power moon is taken!!』

「なん…だ?…!!!!」

突然体にとんでもない力があふれ出した

それと共に俺の姿が徐々に変わっていく

『相棒、それは大猿化だ』

(大猿化? ってことは…)

『相棒の想像通りだ、お前は奴の尻尾を取り込みサイヤ人となった  
だからあの玉を見て大猿化し始めた』

俺はそのまま巨大化していき大猿へと変わった

見ると、もう一体大猿がいた。

感じられる気からして悟飯くんだとわかった

大猿は手当たり次第に周りを破壊し始めた。

俺は大猿を止めようと動こうとする…が

「悟飯…!! サイヤ人だ!! イツセーと一緒にサイヤ人をやれえ!!

!!」

悟空さんとクリリンさんが叫ぶと暴れていた大猿がベジータへと

標的を変えたようだ、途中チラリと俺の方を見てこくりと頷き

ベジータへと向かって言った。

俺は大猿の邪魔をしないように今ある力を溜め始めた

「イツセー!! 聞こえるか?」

声が聞こえ振り返るとクリリンさんがこちらに飛んできていた。

「良かった、お前は理性があるんだな…今は悟飯が

時間を稼いでくれる…だからお前は今撃てる全開の技で

アイツを倒してくれ」

『分かりました、クリリンさんは危ないので

悟空さん達と離れていてください』

「ああ、わかった！頼むぞ」

そう言うときクリリンさんは悟空さんを抱えると飛んで行った

『相棒、もういけるぞ?』

ドライグからの合図が来た。待ってたぜその言葉！

『喰らえ！サイヤ人!!ドラゴン波だああああ!!!!!!』

俺は左腕を構え残っている気力を全て打ち放った。

ちようど尻尾を切られた悟飯くんはなんとかそれを回避したが

サイヤ人は回避できずもろにドラゴン波を食らった。

「うつくああああああ!!!!」

かなりのダメージを受けたサイヤ人はそのまま地面に落ちた。

『Reset!』

その音声と共に俺の姿も元に戻った。

「はあ…はあ…うっ…!!」

まだ死んでいなかったベジータはリモコンのようなものを捜査していた

そのすぐ後ボールのような機械がサイヤ人の近くに降りてきて

サイヤ人の奴は船に乗り込もうと体を這っていく

「逃がしてたまるか…!!!!」

クリリンさんがやってきてサイヤ人を逃がすまいと追いかける

「待て!… 殺された皆の恨みだ！覚悟しろ!」

そう言いながら何処で拾ってきたのか刀を振り降ろす

が、それはサイヤ人には刺さらなかった。

「なっ?!なんで止めるんだイツセー!」

そう、俺がギリギリのところまで刀を止めたからだ

「悟空さんに言われたんすよ」

そういつて悟空さんの方を見る

「なんだつて？悟空が？」

そう言いながらクリリンさんも悟空さんの方を見る

《すまねえな…イツセー…クリリン…そいつを…

行かせてやってくれ…オラ…今度はオラ一人の力で倒してえんだ  
…》

「…分かったよ、お前には我儘を言う資格があるもんな…」

《ありがとな…クリリン…》

そんな風に二人が話している間俺はサイヤ人の様子を伺っていた。  
乗るのに苦労していたようだったので少し手を貸してやると

「き…貴様…何のつもりだ…」

「何のつもりもねえよ…悟空さんがあんたを見逃すって言ってんだ  
だから俺はあんたが無事帰れるように手伝いをしてやるだけさ」

『Boost!』

「赤龍帝の贈り物!」

『Transfer!!』

俺は一段階倍化をしてベジータに譲渡してやった。

「これで少しは動けるだろう？気を付けて帰れよ…」

サイヤ人の奴はなんとか宇宙船に乗り込むと

「よく覚えておけよゴミ共…もう奇跡は起こらんで…」

「今度会った時は皆殺しだ…!! 精々楽しんでおくんだな…」

「そう言うどボールは閉まり飛んで行くのだった。」

「俺達は地球を守り抜いたのだ。」

## フリーザ編

訪れた平和 次の行き先はナメツク星？

sideイツセー

ベジータが去った後、俺は気が足りずその場に倒れてしまった。

悟飯くんは大猿の時に受けたダメージが元で裸のまま気絶している

仕方ねえよな・・・普通の服じゃあんな巨大化耐えきれねえだろうし

そんなことを想いながら空を見ていると空に何かの影が・・・

クリリン「なっ・・・まさか・・・！」

クリリンさんが慌てて空を見る降りてきたその影はなんとブルマさん達が乗る飛行機だった。

飛行機は地面に降り立つとドアが開き中から人が飛び出してきた。その人影は悟空さんやクリリンさんを飛び越えたと俺達の方に走ってくる、その人影はチチさんだった。

「悟飯ちゃん！イツセー！大丈夫だか！」

「ち・・・チチさん・・・ ははは・・・」

情けないですけどこんな状態です・・・

かなり痛めつけられちいました・・・」

「別のところから来たばっかだのにいきなり宇宙人に

攫われるわ殺されるわで酷い目にあつたなあ・・・

もう悟飯ちゃんもイツセーもおつかあのところから離さねえぞ」

ははは・・・ 心配かけちまったな・・・ え？



「チチさん…？あの…今なんて言いました？」

「ん？おつかあの元から離さねえぞって言っただよ？」

それがどうしたのけ？と不思議そうに聞いてくるチチさん

「いやいやいや！俺、チチさんの子供じゃないですよ？！」

なんでそうなってんすか！」

俺は体が動かないことも忘れて叫ぶ

「オラの子供じゃなくてももうオメエは子供みたいなもんだ！

親が子供の心配して何が悪いだ！」

その言葉に俺は泣きそうになる

まさか、こつちに来て親代わりの人ができるなんて

思ってもいなかったから…

「…ありがとうございます…チチさん」

「そんな他人行儀な呼び方もしなくてええだぞ？」

オラはオメエの母親だべ家族にそんな話かたはおかしいべ」

確かにそうだな…じゃあ親しみを込めてこう呼ぼう

「分かったよ…母さん…」

それを聞いたチチさんはうんうんと満足げに頷いた後、

悟飯くんを抱き上げて飛行機のなかにのりこんだ。

俺も悟空さんの後に運んでもらって中に入った。

その間ブルマさんはずっと泣いていた。

聞いてみたら殺された仲間の中に恋人が居たそうなのだ

「とりあえず皆の死体も回収しなきゃな…」

飛行機が発進戦士たちがなくなつた現場まで飛び

その亡骸を回収した。

そこから、病院に向かったのだがその途中  
クリリンさんが殺された皆を

生き返らせることができるかもしれないと言った。

その内容は死んでしまった神様の故郷、ナメツク星に行けば  
地球に会ったドラゴンボールより強力な力で  
皆を生き返らせると言うものだった。

それを聞いたブルマさんは反対していたけど

界王様に聞いた海王星の場所、どうやって行くか等の見当もついて  
いるらしく・・・最後には乗り気になっていた。

はは・・・これなら何とかかなりそうだな・・・良かった・・・

俺はそう心の底から安堵していた。これから待ち受ける

困難が今までとは全く別物だということを知らずに・・・

## 問題解決？手段は神様の宇宙船!?

side 悟空

死んじまったみんなの身体を回収したオラ達は  
すぐさま病院へと向かった。

オラとイツセーは緊急入院っちゅうものだった。

二人とも身体中に包帯を巻かれて絶対安静と言われちゃった。

「さて、それじゃあこのリモコンを使ってあの宇宙船を呼んでみま  
しょうか」

ある病室で皆がいる中ブルマがそう言った。

「ブルマさん、本当に大丈夫なんですか？」

クリリンが不安そうに聞いているけどブルマは自信満々に

「大丈夫よ！ちゃんと調べて来たんだから、見ててよ！」

ピッピッピ！

ブルマがリモコンを操作していたら・・・

『ボツガアーン!!!!!!!!』

ついていたテレビに映し出されていた宇宙船が爆発した。

「!!「ええっ!?!」」

皆が唖然とするなかブルマがこう呟いた。

「な、なんで・・・？今の自爆スイッチだったのかしら・・・

どうすんのよ！あの宇宙船が無きゃナメツク星になんか行けっこ  
ないわー！」

ブルマの叫ぶもう手はねえんかな？

「最後の望みが…」

「完全に断りたな…」

「もう… 駄目だ…」

「まさかの大爆発落ちかよ… って!! おわああ!!!!」  
完全に打つ手がなくなっちゃったんか…

ってどうしたんだイツセー?

「…おい」

その声の聞こえた方を見ると窓の外にオラ達に見覚えのある顔がいた。

「…ういーす」

「ああ…! ミスターポポ!」

そう、神様のお付きの黒人? であるミスターポポだった

「誰かついてこい… 宇宙船ある… 多分」

「…「え!」」

そうして機械のことに詳しいブルマがポポについていくことになった。

その間イツセーは終始騒いでいてチチに殴られてたぞ…  
病院なんだから静かにしとけよな…

side out

side 三人称

あれから、10日の月日が流れた。

悟空とイツセーはいまだに入院していた。

「ドラゴンボールを集めに行くだけだからアンタ達は早く体を治しちゃいなさい」

そう二人に言い残しクリリンと最後まで行くと言ってガンとして動かなかった

悟飯、それにブルマがナメツク星に行くことになった。

乗っていくのはポポが教えてくれた神様の乗ってきた宇宙船を使うことになった。

『いってきまーす!!』

こうして三人はナメツク星へと旅立つたのであった。

s i d e o u t

s i d e イツセー

ブルマさん達がナメツク星に旅立つてから

約一か月が経った。

あのおっぱいを拝めないのは寂しいぜ！

・・・まあ、そんなことしてたら殺されちまうけど  
んなことより・・・

「ふんっーふんっー！」

「ふむ・・・あと四回」

俺より重体のアンタがなんで腹筋なんかしてんだよ・・・

つてか亀に爺さんも数えてなくていいから止めるよな・・・

「悟空さん、あんた大人しくしてろよ・・・まだ傷治ってないんだろ？」

「けどよお、イツセー、オラもつと強くならねえと

次はベジータの奴に勝たねえとならねえんだ」  
いや、それは分かるけど…

「あー！孫さん！また体なんか動かして！  
動いちゃ駄目って言ってるじゃないですか！」

「あ…すんません」

ほら、また怒られるんだからさ

「おお、生きとっただか」

ん？この声は

「おお！ヤジロベージやねえか」

「やあ〜つと仙豆が出来上がったんだわ、ちいっただけどな  
カリン様がよ、できた八粒全部持つてけつてよ」

お！仙豆が出来たのか！これならもう大丈夫だな！

「おわあ〜！やったあ！！ナイスタイミング！早くオラに食べさせてく  
れよー！」

悟空さんも大はしやぎだ

「ほらよ、それと赤龍の兄ちゃんもほれ」

悟空さんに投げ渡した後俺の方にも投げってきた。

「お、ありがとっす…（ガリガリガリ…ごくん！）」

「へへ！待ってたぜこ時をよ！」

「ふう、ようやくちゃんと動けるな！」

「だな！よしじゃあ早速ナメツク星に行くぞイツセー！」

「はい！あ、ヤジさん残りの仙豆全部もらっていきますね」

ドラグ・ソボールの展開だとこの後とんでもない敵が出てくるから  
な

こつちだとかかわかんねえけど…

「待て待て、二人ともナメツク星まではどうやっていくつもりじゃ？」

「その点なら心配ねえぞ！オラ、ブルマの父ちゃんが

見舞いに来てくれたとき頼んでおいたんだ！

念のため宇宙船作っておいてくれってな！」

「宇宙船で、神様と同じ奴か？」

ふつうはそう思うよな？でも違いうらしい

「あれは地球にはねえもん使ってるから

ブルマの父ちゃんでも無理だつてよ」

流星に天才でも地球外の物質はお手上げだったみたいだ

「じゃ、じゃあ…。」

「それがですね、じいさん実は宇宙船はまだあったんですよ」

「なに？まだ宇宙船があったのか？」

「おお！オラよく考えてみたらサイヤ人の宇宙船が

まだ二つ地球に残ってることに気が付いたんだんだ、

オラの兄貴が乗ってきた宇宙船と

オラがガキの頃に乗ってきた宇宙船がな！」

「そ、そうか！」

そうなのだ、でもラディッツの乗ってきた船は  
悟飯くんがぶっ壊してしまったから駄目だったけど  
悟空さんが乗ってきた宇宙船は昔の奴だったから  
かえって無事だったそうだ。  
それを直して改造してもらうことになってたんだ

「んじや行くぞー！イッセー！！筋斗雲ー！」

俺は筋斗雲には乗れないから武空術で行くかな

悟空さんの筋斗雲が到着するのを見計らい

俺達はブルマさんの家に飛んで行くのだった。



遂に出発！悟空とイツセーナメツク星へ

sideイツセー

俺達は急ぎブルマさんの家に向かっていた。

その途中悟空さんがこんなことを言ってきた

「なあイツセーおめえに新しい名前つけてもいいか？」

「・・・はい？どういふことすか？」

俺は言葉の意味が分からず首をかしげる

「いやな、前にチチの奴がよう・・・」

『悟空さ、これからはイツセーも家族だべ！だから悟空さが

新しい名前を付けてやってけろ』って言ってきたよ」

「は、はあ・・・母さんがそんなことを」

なんで急にそんなことになったんだ？

別に名前はそのままでもいいだろうに

「そうなんだよ、だからオラがおめえの

父親つちゆうことになるらしいんだけどよ、どうだ？」

その言葉に俺は考え込む

確かに今の俺は悟空さんの所に養子に來たみたいなものだ

それを前の名前のままだと少し違和感があるかもしれないしな

悟空さんが名前を考えてくれるみたいだし・・・はオツケーしてみ  
るか

「いいっすよ？せつかく家族になったんですから是非お願いします  
！」

それを聞いた悟空はとても嬉しそうな顔をして

「そっか、じゃあおめえの名前から少し取って孫悟誠って名前にすつか！」

孫悟誠・・・俺の新たな名前か

「孫悟誠ですか・・・いい名前ですねありがとうございます！

悟空さん・・・いや、父さん」

「気に入ってもらえてよかったぞ！そんじゃ、これからよろしくな！

悟誠」

「はい！」

悟空さん改め父さんに元気よく返事をし俺達はブルマさんの家へと飛んで行った。

side out

side 悟空

イツセー改め悟誠となった息子と少し飛んでいるとブルマの家が見えてきた。

オラ達は家の近くに降り立ってブルマの父ちゃんを探した

「あ、いた！おいブルマの父ちゃん！」

「おお、悟空きたのかイツセー君も一緒なんだね」

「はい、先日はどうも・・・」

ブルマの父ちゃん名前はブリーフ博士つちゆうんだけどブルマよりも頭が良くて昔から色々と世話になっている人だ

「オラ達の宇宙船ってこれか？」

オラはブリーフ博士の後ろにある乗り物を見た

「これが…父さんが昔乗ってきた宇宙船なのか」  
悟誠もびっくりしてるな

「ああ、そうだ、でもまだ完成しとらんのだ」

『いいっ!!!!これでもまだ完成してねえの!!』  
思わずオラと悟誠の声がハモった。

「そうなんじゃよ、ステレオのスピーカーの位置が  
なかなか決まらんのじゃよ」

「な、なあこの船もうだ飛べんだろ？」

ステレオの位置はいいから！オラ達急いでっから  
今すぐ出発するよ！」

悟誠もうんうんと頷いている

「何をそんなに慌てるの？」

ブリーフ博士はオラ達早く行きてえのに！

「えっとですね… 以前ブルマさんから通信がありました

それで俺達が急いで向かわなければならなくなりました。」

悟誠が簡単に説明してくれる

ってそんなこといいから早くしてくれよ！

「早くオラにこいつの飛ばし方を教えてくれ！」

「ん〜わかった、データは全てインプットしてある

後はスイッチをポポン!!と押すだけで六日後には

ナメック星へ到着する」

「む、六日?!そんなに早く着けるんですか!」

悟誠も驚いてるオラもビックリしたぞ

まさかそんなに早く着けるなんてな

「なんたつてワシの頭脳とサイヤ人の科学力の賜物じゃ

それで、すぐに行くのか?」

「ああ!すぐに行く!宇宙船ありがとなブルマの父ちゃん!」

「俺からもお礼を言いますありがとうございます」

「いいんだよ気にしなくてじゃあ体に気を付けて行っておいで」

そう言つてブリーフ博士は宇宙船から降りていった。

「よし!そんじゃ出発だ!」

「はい!」

オラはスイッチを押し宇宙船を発射させた

side out

side 悟誠

宇宙船が大気圏を抜けたころ

父さんが重力装置に手を付けた

「さて、早速修行するとすつか!六日間で着くのはありがてえけど  
それまでにあのベジータつて奴を超えなきゃなんねえもんな  
えーつと確か界王様の星の重力は十倍の重力つて言つてたな…

とりあえず二十倍の重力から慣れてった方がいいかなあ？」  
ピッピッピッピつと重力装置のボタンを操作していく  
父さん機械弄れたのか。等と失礼なことを考えていると  
いきなり身体が鉛みたいに重くなった。

「お？…：！！んぐぐぐつ！流石に効くぜつ…！」

父さんもかなりキツイにか中腰になって歩き出した。

俺もそれに倣い歩き出す。でも

「父さん流石にいきなり界王様の所の倍はないんじゃないっすか？」  
そう言ったら父さんは『はははっ！』と朗らかに笑っていた

二人を救え！急げ悟空に悟誠

side 悟空

オラ達が地球を出発してから六日が経った。

『ナメツク星に到着いたしました。』

その音声と共に宇宙船の扉が開く

「ついに着きましたね、父さん」

悟誠がそう話しかけてくる

「ああ、早く悟飯達を見つけねえとな。…」

オラは外に出て気を探ってみる

(… あつちに一つ… こつちに一つなんてことだ！

バカデカイ気を持った奴らがゴロゴロいやがる！)

もう少し探ると覚えのある気を二つ感じた。

「不味いですよ父さん！悟飯達の気が！死にかけてます！」

「ああ、分かってる…」

すぐ近くに気が五つ集まってるよ…待ってるよ！

今こそ百倍の重力にも耐えた修行の成果を見せてやる！」

「はい！行きましょう！父さん」

悟誠の言葉に頷き俺達は界王拳を発動して飛んで行った。

side out

side 悟誠

気を頼りに飛んでいると二人の姿が見えてきた！

見ると悟飯は横たわっておりピクリとも動かない

俺は急いで悟飯のもとに向かつて飛び悟飯を抱え男から距離を取った。

勢いが強すぎたのか男はコマみたいにぐるぐると回っているそんなバカは放っておき、俺は近くに降りてきた父さんに伝える

「父さん不味いぞ！悟飯の奴首の骨が折られて虫の息だ！」

「そう慌てんな悟誠仙豆がある：オラと変わってくれ」

父さんのその言葉に軽く頷き俺は場所を開けた今の状態の悟飯を動かすのは不味いからだ：

「よし大丈夫！父ちゃんが食べさせてやる」

そう言つて父さんは悟飯の口に仙豆を押し込み無理やり食べさせた。

痛そうだけど、ああでもしないと悟飯が死んでしまうから仕方ないよな

つてそんなことを考えているとコマ男が口を開いた。

「おいおいおい！なんなんだ貴様はよ！

そのガキたちの仲間なのか！」

うるさい奴だな… 静かにしとけよ

俺達はコマ男の言葉を無視して悟飯に向き直る

すこしすると瀕死だった悟飯の目が生氣を取り戻した

「……ん」

パチリと目を開き悟飯が目覚めた。父さんも顔を綻ばせ

「おお！立てるか？」

「悟飯…間に合つてよかった…」

悟飯は俺と父さんの顔を交互に見てから

「お、お父さんにイツセーお兄ちゃん来てくれたの!？」

「ああ、助けられてよかった…」

俺はそう安堵の声を漏らす父さんは悟飯を立たせて

「大丈夫か？悟飯」

「お父さん気を付けて！あいつ等…」

「待てよ、クリリンにも仙豆食わしてやんねえとな！

悟誠クリリンにも仙豆を食わしてやってくれ」

「はい、父さん」

そうだった、まだクリリンさんもいるんだった。

俺達はクリリンさんの所に向かった。

「……ござ、悟空、イツセー……」

「遅れてすみませんでしたクリリンさんはい、仙豆です。」

「あははは……嬉しいような……嬉しくないような」

仙豆をもらいながらクリリンさんがそう口にする

……  
なんでだ？

『嬉しくない？どういうことだ？（ですか？）』

俺は不思議に思い尋ねるそうしたら父さんとハモツた  
クリリンさんはなんとか立ち上がって答えてくれた。

「二人とも、お前達にだってわかるだろ？あいつ等の強さが…  
仙豆で元気になったってまたやられるだけだ



いくら悟空達だって…無理だ  
奴らの強さはケタ違いなんだ！  
あのベジータでさえ全く歯が立たなk…」

「あ、そうだそうだ」

「え…？」

クリリンさんが言い終わる前に父さんが喋り出した

「そーういやどうしてベジータが奴らに…仲間じゃないんか？」

「ああ、いや、元々仲間だったらしいけd…」

「喋んなくていい、探らしてくれ」

「は？え？探るって？」

またクリリンさんの言葉を遮り父さんが喋った。

それもクリリンさんの頭に手を乗つけて

その様子にクリリンさんが素っ頓狂な声を上げる

父さんはしばしクリリンさんの頭に手を置いた後

「いろいろ分かったぞ！

おめえら二人がやけにパワーが上がった訳やブルマが無事だった  
こと

奪われちゃったドラゴンボール、

それからフリーザって奴やアイツらの事なんかもな

悟誠オメエもやってみろ」

父さんに言われ俺もやってみることにした

「それじゃあクリリンさんちよつと失礼しますね」

そう謝りクリリンさんの頭に手を置く

「え？あ、おう」

そうして集中してみる、すると確かにイメージが伝わってきた。  
俺は頭から手を離し

「なるほど、話は大体わかりました」

それを見てクリリンさんは驚きながら

「う、嘘だろ!?なんでそんなことがわかるんだよお!!」

「さあ？なんとなくこうしたらわかるような気がしたんだ」

「そうっすね父さんの言うとおりです」

俺がうんうんと頷いているとクリリンさんが

「それとイツセーお前なんで悟空の事を父さんって呼んでるんだ？」

「あ、それ僕も気になってました」

悟飯も話に乗っかってきた。

「それはですね…」

俺は簡単にそのわけを話した。

「なるほど、チチさんがお前を養子にな…」

「それじゃあイツセーお兄ちゃんは僕のお兄さんになったの？」

「まあ簡単に言うそうなんだ」

ほけっとした顔の二人を置いて話は進んでいき

「悟誠！仙豆は後いくつある？」

「えツと…あと一つです！」

「そうか、そんじゃあその仙豆をこっちにくれ」

「は、はい」

俺は父さんに残りの仙豆を渡した。

「… 残る仙豆はあと一つか…」

そうつぶやいた父さんはチラリとベジータの方を見ると

「ベジータ！」

そう言っただけの仙豆をベジータに投げた。

ベジータは受け取ると仙豆を見ていた。

「そいつを食ってみろ！」

そう声をかけた父さんの指示に従いベジータは仙豆を食った

「おおう！な、なんだ？身体が…」

これで大丈夫だろ今は危ないだろうけど父さんは

まだベジータとの決着がついていない

だからこそ復活させたんだろうな…

さて、これからどうすつかな？

俺はチラリとコマ男とその他ゆかいな仲間たちを見たのだった。

圧倒的!! 修行の成果を見せる時だ!

sideイツセー

父さんがベジータに仙豆をやって仙豆は無くなった。けど、こんな奴らなんかに負ける気がしねえな。父さんは悟飯達にあることを伝えた。

「おめえ達はあいつらの宇宙船に行つて

奪われたドラゴンボールを探してきてくれ

ここはオラ達がなんとかする」

「で、でもー」

父さんの言葉に悟飯が納得がいかないといった様子で食い下がるが

クリリンさんがそれを止めた

「行こう悟飯ここは悟空達に任せるんだ

俺達がいても二人の足を引っ張っちゃまうよ」

それを聞いて悟飯は納得しようで

「分かりました…。」

「じゃあ行こう! あ、そうだイツセー

あ、いや悟誠って呼んだ方がいいのか?

まあいいや、お前が来たら来るようにブルマさんが言ってたからそれだけ伝えておくよ」

それだけ言うと二人は飛んで行った。

「行ったか… さて、これからどうします? 父さん」

「悟誠はブルマに来るよう言われてんだろ? じゃあ先に行つて来い

「ここはオラだけで充分だ」

確かに、今のうちに行っておかないと時間はなさそうだもんな

「分かりました。すぐ戻ってきますから父さんも

無茶だけはしないでくださいね」

「ああ、大丈夫だ心配すんな」

そう言われて俺はブルマさんの気を探り飛び立った。

「おいおい、逃がすと思うのか?」

いきなり目の前に現れた青い愉快な仲間A… だけど

「うるさい! 邪魔すんじやねえよ! 太陽拳!」

俺は即座に太陽拳を発動させた。

「なっ?! ぐああああ!! 目がああ!!」

愉快的仲間Aが悶えている間に俺はブルマさんの居る方向に飛んで行った。

少し飛ぶとブルマさんの気を強く感じるようになってきた。

「お! いたいた」

俺は地面に降り立ちブルマの所に向かった。

「あ! やつと来たのねイツセー君が来たってことは孫君も来てるの?」

「はい、一緒に来てますよ? 今は別の場所で敵と戦ってます

それで、用って何ですか?」

俺もすぐに戻らないといけないから早く済ませないと

「え? ああ、そうそう! これを渡そうと思ってね」

そう言ってブルマさんは二つの指輪を渡してきた。

「あの…ブルマさんこれは？」

「一つはその腕を隠す為の物よそれともう一つは

あんたが前に話してた禁手…だっけ？それを使うのに  
代価が必要なんですよ？それはあんたの代わりに

その指輪が代価になってくれるっていう優れモンよ」

俺は驚きで言葉も出なかった。

まさか軽く話しただけでこんなものが作れちゃうなんて

この人ホンマもんの天才じゃねえか！

「ありがとうございます！ブルマさんすっごく助かります！」

「いいのよ、もうすぐにでも帰りたいところだけど

急いでるんでしょう？ほら、もう行きなさいな」

「助かります。なるべく早く迎えに来ますから！それじゃ！」

しっしと腕を払うブルマさんに感謝しつつ俺は父さんの所に飛び  
立った。

指輪をつけた俺は急いで父さんのもとに向かっていた。  
やがてその現場が見えてくると父さんが紫色の奴に  
おかしな技をかけられそうになっていたのが見えた

「チェーンジ!!!」

「なにっ!?!」

「父さん! 危ない!」

俺はスピードを上げ紫の奴と父さんの間に割って入った。

「なっ!?! 貴様ああ!!」

「ご、悟誠!」

俺はおかしな技にかかりながらも念話でドライグにあることを伝  
えた

(ドライグ、聞こえるか?)

その呼びかけに俺の中のドラゴンはすぐに応えてくれた

『なんだ? 相棒』

(これから俺が良いって声をかけるまで神器を発動させないでくれる  
か?)

『なんだ、そんな事か構わんが何故だ?』

(ちよつと面倒なことになりそうなんだ。だから頼むぞ)

『分かった、では俺は眠りについておこう』

(助かる)

その言葉を最後に俺の意識は一瞬だけ途絶えた。

意識がはつきりしてくると目の前には『俺』がいた  
俺は恐る恐る自身の体を見てみると

「な、なんじやこりやああああ!!!」

俺の予想を遥かに上回る展開だった。

俺の身体はさつきまで目の前にいたあのへんな奴  
そいつそのものになっていたのだから...

「??いったいどういうこった?」

父さんが首をかしげてうなっている

「クソオオ!!!!貴様!!よくも邪魔を!!」

『俺』になった変な奴が怒鳴り散らしている

「それはこっちの台詞だ!身体返しやがれこの野郎!

こんな変なもん押し付けやがって!迷惑なんだよ!

「なにいい!!」

そんな不毛な争いはこの後しばらく続くのだった

side out

side回想【悟空】

イツセーが飛び立ってからオラは  
パイナップル頭に向き直っていた。

「そろそろ飽きてきちゃったかな!もう終わりにしていいか?

リクーム!!ウルトラファイティング!... おぐう!

余計な動きが多いせいで攻撃しちまった。



「わりいわりい！あんまし隙だらけだったもんでよ」

「お…おづ…おづ…このや…ろう…」  
弱えなあゝこいつさて次は

「次はおめえ達の番だ！悟誠が戻ってくる前に終わらせてやる」

「舐めた口をききやがって！」

「その態度がいつまで保つかな？」

「我々を甘く見るなよ？行くぞお前達！リクームの敵を取るのだ！」

「はい！隊長！」

そう言っつてオラに向かってくる三人オラはその攻撃を全て躲し  
気合で三人を吹き飛ばす

「「はあ…はあ…ちよこまか動きやがって」」

攻撃が難なく躲されイラつき始める赤い奴と青い奴

「どうした！こねえんか？」

オラのその言葉に紫の奴が笑い出しやがった

「ふふふふ…ふはははははははははは！」

「？何がおかしい？」

「お前が強いからだ！」

そう言いながら奴はおもむろに目の奴を外す

「…？」

「ふはははは！… チェーンジ!!」

その言葉と共にオラの身体の自由が利かなくなった

「なっ！なにっ?!?身体が!」

すると紫の奴からエネルギー波のようなものが打ち出された

刹那、オラと紫に奴の間に入ってくる影があった。

「父さん！危ない!」

それはブルマんとこに行つてたはずの悟誠だった

ギニューを止めろ！悟空とVS悟誠ギニュー

sideイッセー

身体が入れ替わっちゃった俺は目の前のを奴を睨みつけながら

「はあ…はあ…叫び疲れた…」

「はあ…はあ…それは此方も同じだ…」

あの後しばらく続いた不毛な言い争いは十数分続いていた。

「えっと…？今の言い合いからすつと…今は紫の奴が悟誠で、悟誠の奴がああ紫の奴ってことなんだな？」

父さんが状況を整理するようにしゃべりだす。

「「そうです！（だ！）」

「ここでまさかの敵とハモってしまった…」

「そっかあ！んじゃ、悟誠！おめえはクリリン達のところに行ってくれ！」

父さんのまさかの発言に若干驚くがすぐに納得した。

「分かりました。父さんの方こそ気を付けてくださいね！」

俺はそう忠告だけしてクリリンさん達の所に向かうのだった。

side out

side 悟空

「それじゃ父さんご武運を！」

「逃がす訳がないだろう！」

飛び立つ悟誠を阻むように紫の奴…ギニューつつつたか？そい

つが悟誠を追おうと飛びあがった

オラはそれを阻むようにギニユーの前に立って言い放った。

「おめえの相手はオラだ！悟誠は追わせねえぞ！」

「チツ…：こうなったら貴様を倒しきつきの奴を追うまでだ!!」

「へへっ…：やれるもんならな」

そうしてオラ達は激突した

さすがに悟誠の身体だけあってかなりやりやがんな

ドンツドンツドンツドンツドンツドンツドン!!!!

オラ達がぶつかり合うごとに辺りに衝撃波が生み出される

ギニユーのパンチや蹴りを躲し時に受け止めながら隙を見てオラも攻撃していく

その場で強く打ち合い互いに距離を取る

「それでも喰らえ！かめはめ波！」

オラは溜め無しでかめはめ波を放った

「ふんっそんなもの！」

バチンツッ！

簡単に弾かれちゃった。

なんだか悟誠と戦ってるみてえでワクワクしてきたぞ！

「ははっ！おめえ強えなあ！オラ、ワクワクしてきたぞ！」

「それはこっちも同じだ！これほど楽しい戦いは中々無い！」

こうしてオラ達はまたぶつかり合った

「だりやりやりやりやりやりやりや！」

オラは気を乱射していく

「そんなものは効かん！」

ギニユーは気弾を避けながら時に弾き

オラの方に距離を詰めてくる、そして

「食らえー！ミルキーキャノン！」

その叫びと共にピンク色の気弾が放たれた。

だがその気弾はゆっくりとこっちに飛んでくるだけで中々届きそうもない

その間にもギニユーの奴は攻撃をしてくる

オラはそれなんとか躲しつつ先程の気弾を気にする

すると……

【ドガアーンン！】

どうやらオラは上手いこと気弾の方に誘導されていたらしい

その爆発をなんとか躲しオラはギニユーから距離を取った。

するとギニユーの奴が急に

「……！！くそっあいつらめ！」

そう悪態をついて飛んで行ってしまった。

「あーおいー待てー！」

オラもすぐさま後をおっと飛び立つのであった。

取り戻せ元の身体！悟誠決死の大奮闘！

side 悟誠

おつす！イツセー改めゴセーだ！

今はクリリンさん達とフリーザって奴の宇宙船から奪われちまったドラゴンボールを奪取したところだいやあ…初め二人と合流したときは凄く警戒されて攻撃までしかけられちまってひどい目に遭った…

まあ、俺が悪のりしてこいつのフリなんかしたのがいけないんだけどな？

つとそんな訳で俺達は今ドラゴンボールを宇宙船の外に運び出していた所だったんだ。

「ふう…これで全部ですな？クリリンさん」

ボールをすべて運びだし俺はクリリンさんに確認する

「ああ、七個全部ある…これで死んだ皆を生き返らせることが出来る！」

その目的が達成したら後は

クリリンさん達を地球に返すだけだな

すると二つの気がこちらに近づいて来ている事に気がついた  
気のやってくる方角を睨み付けていると

その方角から一つの影がこちらに飛んできて

俺達の前に降り立った。降り立ったのは…俺だった。

「お前達それをどうするつもりだ？」

「くっ…」

不味い…今の俺達じゃあアイツには太刀打ちできない…

しかしそのすぐ後にもう一つ降り立つ影があった。

父さんだ、父さんは俺？の直ぐ側に降り立ち

「おいおい、オラとの勝負はまだ着いてねえぞ」

父さん…何気に俺？との勝負を楽しんでませんか？

「チイツ…邪魔を！」

ってか俺の体でおかしな事言わないで！悲しくなるから！

「ほ、ほんとに入れ替わっちゃまってたんだな…ははは…」

「あはは…」

クリリンさんそんな顔しないで泣きたくなるから  
悟飯も苦笑しないでくれ…本当に泣きたくなる…

「と、とにかく二人は下がって…」

もうこうなったら俺？に八つ当たりしてやる！

それと隙をみて元に戻らなきゃな！

俺は二人を下がらせて俺？の前に立ち言い放った

「おい！お前がこんな風にした所為で二人に引かれちゃまったじゃねえか！」

しかし俺？も負けじと言い返してくる

「それは貴様が割り込んでくるのが悪いのだろう！」

だがこの体もなかなか使い勝手がいいから気に入っているぞ？」

「俺の体でおかしな事するんじゃないやねえ！こんな辛い状況

さっさとおさらばしてやる！」

俺は叫び俺？に殴りかかった。

だが俺？は軽く俺の攻撃を避け吹っ飛ばしてきやがった

「はっはっはっ！遅い遅い！ぬおりやあ！！」

「ぐはっ……！ちくしょう……」

吹っ飛ばされたのを止めてくれたのは父さんだった。

「でえじょうぶ（大丈夫）か悟誠」

「あ、ありがとうございますございます父さん……」

「おめえその体まだ慣れてないんだろ？」

あんま無理すんじゃないやねえ、オラが引き付けるから

おめえは隙をみて攻撃しろ」

父さんの提案に俺はコクリと頷き答える

「よし、そんじゃ！だああああつー！」

「うおおおおお！」

一通りのやり取りの後父さんが俺？に向かつていった

俺もすぐ後を追い俺？の隙を見つけては攻撃を仕掛けていく

しばらくそんな戦闘が続いていた時だった。

俺？が父さんに狙いを替えだしたのだ

俺は警戒しながらその様子を見守りつつ攻めた

「くっ！今度こそ！チエーンジ！」

父さんと対面しボティエンジを放った俺？

来た！このタイミングなら！

俺は直ぐ様二人の間に割って入り

ボティエンジを喰らい辺りが光で包まれた。

光がやむとそこにあつたのは見覚えのある俺の体だった



「……よし！戻ったぞ！」

俺がガッツポーズをとっていると俺だった奴が毒づいていた。

「くっ……！またしても貴様！」

「へっ！返してもらったぜ俺の体！」

はっ！だっせえよなあんたの体」

これ見よがしに俺だった奴を挑発していると

先程宇宙船内で逃げ出した緑のイボ野郎が出てきた

「隊長！ちえああああ！」

「なにっ!?ぐっ……！」

イボ野郎は父さんに金縛りをかけやがった

あの野郎……！俺だった奴……隊長はドヤ顔で

「でかした！グルド……チエーンジ！」

堂々と父さんにボティチェンジをかけやがった

「！……しまっ!？」

「父さん！」

父さんは動けずにボティチェンジにもろに当たってしまった。隊長と体が入れ替わってしまった。

「くっ……！オラの体けえせ！（返せ！）」

「はっはっはっ！遂に手にいれたぞ！」

そこには父さんの体を手にいれた隊長がドヤ顔でおおわらいしているのだった。

取り戻せ義父の体！ギニューを倒せ！孫悟誠

sideイッセー

「はーっはっはっは！ついに手に入れたぞ!!」  
ドヤ顔で高笑いする隊長

「ぐぐぐっ…！動かしづれえ…！」  
入れ替わってしまった体に苦戦している父さん  
俺は父さんの方に近づき静かに話しかける

「父さん俺が囷になって何とかまたあの技を使わせます。  
なので父さんはその隙を見てそれに当たってください」

「ああ、だがどうするつもりなんだ？」  
父さんの疑問ももつともだな、だけど

「それは見ていれば分かりますよ」  
それだけ伝え俺は隊長の方に出て言い放った。

「はあく…アンタ馬鹿だよな、あのまま欲をかかずに  
俺の身体で満足しときやよかつたのに…飛んだハズレ引いたね  
しかも変態だし…」  
その言葉に高笑いをやめ顔をしかめる隊長

「どういうことだ、それと私は変態なんて名前ではない！  
ギニュー！様だ！」  
へえ、あいつの名前がギニューか、なるほどな

「どういうことって俺にはまだ隠し玉が残ってるってことだよ！  
行くぜ！ブーステッド・ギア！」

『Boost!』

機械音声と共に俺の左腕に装着される赤龍帝の籠手

(いくぜ!ドライブ!)

『ああ、赤龍帝の力を見せてやろうじゃないか相棒』

それに驚きを露わにするギニュー

「なっ…なんだそれは!」

「聞かれたって教えねえよ!

いいか?俺は今から素の身体能力だけで戦う覚悟しろよ!!」  
俺はそれだけ言っつて、ギニューに向けて突っ走っていった。

「うおおお!!」

渾身のパンチをギニューめがけて撃つが

「ふん!その程度の速さで今の私に敵うと思っっているのか!」

あっさりと受け止められてしまい勢いが殺される

『Boost!』

二回目の倍化か、これで俺の力は素の四乗…これなら!

「なら!これならどうっだよ!」

勢いが完全に殺されてしまう直前にその勢いを利用して回し蹴りを放った。

「なっ!うぐおああ!」

蹴りが腹に命中し吹っ飛んで行くギニュー

俺はそれを追いかけるように地を駆けギニューに追い打ちをかける

「これだけじゃ終わらせねえぞ!オラララララア!」

吹っ飛んで体制が立て直せないギニューを乱打し

最後に力を溜めた一撃を叩き込み打ち上げる

「なっがつぐあぁっばかなあ！」

撃ち上がったギニューとほぼ同時に俺も跳び上がる  
あつという間にギニューに追いつくと

「これで終いだ！だぁあつ！」

とどめとばかりにアームハンマーを叩きつけた。

「ぐあぁあぁあ！！」

勢いよく地面に打ち付けられるギニューはなんとか立ち上がると

「どういうことだ！貴様の先程の戦闘力はこの身体より下だったはず  
！」

だが、その籠手が現れた途端に急激に戦闘力が上がった…まさ  
か…」

ギニューが一人でつぶやいている間に俺は地面に着地する

「…読めたぞ、貴様ドーピングしているな？」

それならばこの急激なパワーアップも辻自妻が合う、  
どういう原理か知らんがその籠手が原因だということは分かった」  
へえ〜意外と勘が鋭いみてえだな

「ご明察、これは赤龍手の籠手って言って

十秒ごとに俺の力を挙げていってくれる優れものだ」

『Booster!』

これで四回目！もう素の父さんなら圧倒してるな

「十秒だとお！クソ！こうなれば仕方ない！」

グルド！ぼさつとしてないで貴様も戦わんかー！」

「は、はい！」

あのイボ野郎が出てきやがるか、気を着けねえと

しかし、イボ野郎が俺達の方に来る前にソイツの前に現れた影があった。

ベジータだ

「貴様の相手は、この俺だ！』…俺がこいつを仕留めてやる、お前はさっさとそいつを始末しろ』」

去り際になんか言ってやがったけど

言われなくてもやるっての！

『Boost！』

これで倍化も五回目か、もうそろそろ止めるか

『Explosion！！』

「そろそろ決めてやるぜ、うるあー！」

思い切り地を蹴りギニューに向けて突っ込む

それを見てニヤリとするギニュー

来るか？あの技が…

「チェンジ！！」

遂に来やがったなボディチェンジ！

「今です！父さん！」

「間に合ってくれえ！！」

間一髪俺とギニューの間に入った父さんは見事にボディチェンジに当たった

辺りがまばゆい光に包まれる

「な、なにー！」

「へ…：へへ…：どうやら元の戻れたみてえだな…：」

父さんも無事に戻れたみたいだ

ベジータの方はどうだ？お？あつちも終わったみてえだな

「くそっ今度こそ！チェーレンジ!!」

ん？この声っ…：てまさか！

下を見たらボディチェンジが向かってきていた。やべえ！

「そうはいかねえぞー！」

今度は父さんの声だなにするつもりだ？

見ていると俺の目の前にカエル？のようなものが飛んできた。

カエルがボディチェンジに当たりまた辺りにまばゆい光が包んだ  
光が収まると何故か四足歩行になったギニューがカエルのように  
ピョンピョコ跳ねてどこかに行ってしまった。

なんか…：締まらねえ終わり方だな…：

達者で生きろよ？ギニューー

「な、なんとか…：間に合ったみてえだな…：」

あ、やべ…：俺仕方ないとはいえ父さんを思いつきり攻撃しち  
まった…：

「ははは…：それにしても悟誠おめえ結構本格的に痛めつけてくれたな  
…：」

「あ、あはは…：すいません…：」

父親に思いつきり手を上げるのって親子としてどうなのよ！  
帰ったら母さんにどやされそう…：

「おい、小僧カカロットを連れて俺についてこい

お前たちもだ禿げとチビ」

ん？俺達呼んで何するんだ？

俺は父さんに肩を貸しベジータについていった。  
連れてこられたのは変わったカプセルの置いてある部屋だった。

「メデイカルマシーンだ、まずはカカロットをここに入れろ、

入れたら次は隣のマシーンにお前が入れ」

俺は言われた通り父さんを入れた後自身も隣のカプセルの中に入った。

ベジータはその中に俺と父さんを閉じ込めると外の機会をいじり出した

すると液体が俺達を包み込んだ。なんだかとても気持ちがいい…

「お前もダメージがデカいんだそこでしばらくじっとしてろよ…」

そうやってベジータはクリリン達を連れて出て行ってしまった

俺は仕方ないとばかりに目を閉じ眠りにつくのだった。

## 先代の赤龍帝!? 神器の中に潜れ悟誠

sideイツセー

目を覚ますとそこは戦場だった。

場所もナメツク星にいたはずなのだが、  
それも宇宙空間へと変わっている

いったいどう言うことなんだ? これ:

俺は訳がわからず辺りを見回す、すると

一際目立つ人物がいたのだ。

「フリーザー!出てきやがれ!ぶっ殺してやる!」

そう叫んでいたのは俺の義父:孫悟空にそっくりだったのだ

(すげえ父さんにそっくりだ:でも、纏っている雰囲気が違う:それに、頬のあの傷:間違いなく別人だ:)

父さんの頬にはそんな傷はない:

そんなことを考えながら男をみていると

それに対面するように人間ではない何者かが姿を表した

「.....」

機械のような物に乗り、ただじっと男をみている

こいつがフリーザーなのか:?

「へへへっ:これで全てが変わる:」

惑星ベジータの運命:この俺の運命:

カカロットの運命:そして!貴様の運命も!」

男のその言葉共に手にエネルギー弾が展開される

待てよ?今アイツはカカロットと言った:

カカロットつてのはベジータやナツパ、それにラディッツが

父さんと呼ぶときに使っていたものじゃねえか:

父さんそっくりな容姿、ベジータが着てたみたいな戦闘服



まさかこの人が…

「……………」

対するフリーザも指を空に向け巨大なエネルギーの塊を作り出す

「これで最後だあー!!」

男が叫びと共に放ったエネルギー弾はフリーザのエネルギーの塊にいつも容易く飲み込まれてしまった。

「な、なに!？」

渾身の攻撃だったのだろうはずの攻撃が飲まれるのを男は驚きを隠せないでいた。

「……………ホーツホツホツホツホツ!」

高らかに笑いながらフリーザはエネルギーの塊を男の方に向け放つ

男は成す術なくその塊に飲み込まれていく…その最中

「へへっ…カカロットよー!!」

その声を最後に男はエネルギーの中に消え惑星ベジータもそれによって崩壊していった。

そうか…これが真実だったんだな…

ラディッツの奴は巨大隕石が衝突して

故郷は滅びたと言っていたけど真実は違った…

フリーザがこうして壊していったんだな…

それにあの男…あれは父さん…

いや、悟空さんの父親だったんだろう

悟空さんの父親…爺ちゃんは

この時どんな気持ちだったんだろうか…

「無念…だっただろうな…」

「そうかもしれないな…」

俺の呟きに返事が聞こえ俺は驚き声の方を向いた。

「ドライブグ…お前がここにいてことはここは精神世界か？」

「ああ、そういうことだ…早速だがお前に逢いたがっている奴がいる…付いてこい」

俺に逢いたがっている奴？精神世界でそんな奴いるのか？

不思議に思いつつもドライブグの後についていくと

そこには一人の女性が立っていた。

「こんにちは今代の赤龍帝兵藤一誠くん孫悟誠と言った方がよかったですか…」

「呼びやすい方で良いですけど、どうして俺の名前を？それに貴女は…」

俺を赤龍帝と知っているのは元の世界でも

この世界にもいないはずだ…

「私はエルシャ、貴方より前に赤龍帝をやっていた者よ」

「ついでに言えば女の中で歴代最強でもある…」

つまりは赤龍帝の先輩ってことか…しかも最強って…

「貴女が誰かは分かりましたけど俺に何か用ですか？」

「ええ、貴方に渡したいものがあったね…」

俺に渡したいもの？なんだろうか…

「不思議そうな顔ねそれも当然か、とりあえずついてきて」

歩きだすエルシャヤさんについて俺とドライグも歩きだす

「うんうん」

連れてこられたのはとても広い空間だった。

俺は中に入るとその中にいたものに目を見開いた。

「お、大猿！しかも金色だ?!」

そう、俺の目の前には金色の大猿が眠っていた。

「貴方にはこれを貴方自身の力で倒して

その力を取り込んでもらうわ」

つまり赤龍帝の籠手は使えないってことか…面白いじゃねえか

「分かりました！やってやろうじゃないっすか！アイツを倒せばいいんですよね?」

「ええ、でも手強いわよ?勝てそう?」

少しばかり心配そうにエルシャヤさんが聞いてくる

「大丈夫っすよ!むしろ今とてつもなくワクワクしてます!」

その言葉にエルシャヤさんは苦笑して

「流石はサイヤ人ね…あれを前にしてワクワクするなんて」

「仮にもサイヤ人の血が流れてるんです、なんにも不思議じゃありませんよ、それじゃ、ちよつと行ってきます!」

俺は大猿の方に向け歩いていく

「危なそうなら止めにはいるわ、しっかりね…」

「心配ないっすよ、必ず勝ちます!」

エルシャさんに返事を返し俺は大猿に向き直り声を張り上げた

「おい！そのデカブツ！いつまでも寝こけてんじゃねえ！起きて俺の相手をしやがれ！」

その声に反応して大猿の体がピクリと動く  
ゆっくりとした動作で立ち上がったそれは  
以前に戦ったベジータの大猿戦を思い起こした。

「…グオオオオオン！」

ようやく目を覚ました大猿は

俺をみるなり瞳に怒りの炎をたぎらせ勢い良く咆哮した。

それに俺は吞まれそうになりながらも構えしつかりと大猿を見据えた

「さあ！来やがれ！デカブツお前の後も予定が詰まってんだ！さっさと片付けてやる！」

「グオオオオオ！」

大猿は俺を叩き潰そうとその巨大な拳を降り下ろす

俺はそれを横つ飛びに飛ぶように回避する

尚も俺を叩き潰そうと大猿は拳を連続で降り下ろしてくる

俺はそれを紙一重のタイミングで避け攻撃の隙を伺う

そんな攻防が5分程続いただろうか：

「グオオオオオ！」

相変わらず俺を叩き潰そうと拳を叩きつける大猿だが

少し殴るペースが落ちてきている

攻めるなら今しかない！

俺は大猿の攻撃を回避しそのまま大猿の顔まで飛び上がり  
眉間に渾身の一発を打ち込んだ

「おらあつ！喰らいやがれ！」

ドゴンツ!

凄い音を立てて打ち込まれたそれに大猿は痛そうに片手で眉間を押さえる

しかし残りの腕が空中にいた俺を叩き落とした。

「どうだ!...!がつ...!」

思いきり地面へと叩きつけられる

軽く叩かれただけでもこの威力...やべえ

そう何度も受けられねえぞあれは...

「ぐっ...はあ...はあ...はあ...ちよつとばかり油断したな...」

なんとか立ち上がると大猿は

もうダメージから回復したようで止めをさそうと

口からエネルギー波を撃ち始めた。

ギリギリのところでなんとかそれを回避し俺は大猿の足に

乱打乱激を放つ

「いつまでもやられっぱなしじゃねえんだよ!」

相手の反撃を与えまいと連撃を打ち込んでいく

「グオオオオオ!」

連撃を繰返していると大猿がバランスを崩して盛大に転んだ

俺はそのチャンスを逃さず手にエネルギーを集束した

「喰らえ!俺の最強の一発!ウエルシュかめはめ波!」

叫びと共に放たれた極太のそれは大猿を呑み込み

その肉体を消し飛ばした。

「はあっ...はあっ...はあっ...ざまあみやがれ!」

「よくやったわ、まさか本当にあれを倒してしまうなんてね...」

「俺も正直驚いているぞ…まさか神器なしであそこまで戦えるとはな…」

エルシャさんとドライブが話し掛けてくる

はは…もうほとんど満身創痍なんですけどね…

「これでも結構ギリギリでしたよ…あれで無傷だったらもう打つ手がありませんでしたし…」

「それでもよ、貴方はよくやったわ、さて…それじゃあ私も役目を果たしましょうか」

そう言うのとエルシャさんは先ほどまで大猿がいた場所に行くとそこに手をつけなにかを呟き始めた。

「この場に眠るサイヤの力よ、今こそこの少年の力を解き放て…」  
すると、大猿がいたところから光が溢れ俺の体を包み込んだ

「な、なんだ!？」

しばらくすると俺を覆っていた光は消え何事もなかったかのよう  
に元に戻っていた。

「い、いったいなんだったんだ?」

どこも変化したようには思えないんだけど…」

「ええ、今はなにも変わってないわその力は貴方の力が次の段階には  
いったらおのずと発現するでしょう」

「そうなのか?分かりました、色々ありがとうございますエルシャ  
さん」

すると不意に浮遊感が俺を襲った

「こ、今度はなんだ？」

「相棒の体が目覚めようとしているのだろう…」

「あら、もうお別れなのね少し名残惜しいけれどどこまでねまたお会いできる日を楽しみにしているわ」

「俺ですよエルシャさん今度会ったらそのおっぱい触らせてください」

なかなかどうして良い体つきしてるもんなあ…

「ふふっ、それは貴方次第ね」

その言葉を最後に俺の意識は現実へと戻るのだった。

ついに復活！孫悟誠 VS フリーザ！

side イッセー

ビー、ビー、ビー、ビー、プシュー！

治療完了のブザー音と共に俺を包んでいた液体が流れていく感覚に俺は目を覚ました。

「… 終わったのか」

扉が開くのを見て俺は外に出ていく

「すげえな…体が嘘みたいに軽い…さっきまであんなに重かったつてのにな

このマシン一家に一台あると便利な気がする」

手足を動かし身体の調子を確認する

よし、問題ないな、そう言えば父さんはどうかかな？

俺は隣の悟空が入っているマシンを見る

ピッピッピッピッピッ…

あー… これだとまだかかりそうだな、悟飯達は大丈夫だろうか

俺は気を探り悟飯達の位置を確認する… が更にとんでもない気を感じ取った

「なんでアイツが！悟飯！無事でいてくれ！」

俺は宇宙船の壁をぶち破りデカイ気を感じる方向に向けて飛んだ。

side out

side 悟飯

僕たちは動けないでいた。



目の前の圧倒的な強さと恐怖を醸し出すフリーザの存在に……  
ベジータも最初は自信満々にフリーザに挑んでいたけど  
最大の攻撃をあっけなく蹴り上げられてからは動けなくなってい  
る

「今度はごつちからやらせてもらうよ……軽くね」

ベジータはいまだに動かない……いや、動けないでいる

「いくよ？ 覚悟は良い？」

その言葉と共にフリーザの身体が浮き上がり

勢いよくベジータの方に飛んで行き頭突きをかました

「あぐっ！……あああああ……」

避けることをしなかったベジータは諸にそれを食らい吹っ飛んで  
いく

それを追撃するようにフリーザは追いかけて尾で思い切り叩きつけ  
る

「おぐあ！……ああああ……あああ……」

さらに勢いよく地上に飛ばされていくベジータに一つの影が飛び  
込んだ

「あ、あれは……！」

「この気は……まさか！」

「間違いないよ！ イッセーお兄ちゃんのだ！」

その影は飛んでいくベジータを受け止めた

「……何者だい？ 君は？ 見たところ人間のようだけど」

「…… お前… ようやく来やがったのか…」  
ベジータを下ろしてその人影がフリーザの方に向く

「俺か？俺はお前を倒す為に呼び出されたただの神器持ちの人間だ  
！」

そう声高らかにフリーザに宣言するのだった。

side out

sideイツセー

俺は目の前のフリーザに宣言した。

『Boost!』

「僕を倒すだって…？余程死にたいようだね、  
いいよ、君から先に殺してあげるよ…」  
その言葉を最後に俺達は激突した。

「うおおお!!」

「ふんっ！」

俺は勢いよくフリーザに向けて突っ込むが  
簡単に受け止められてしまう

「こんな物とはね… 正直がっかりだよ」

掴まれた腕を振り回され何度も地面に叩きつけられる

「ぐあっ！あぐっ！ぐあああああ！」

「少しはベジータよりマシなくらいか… つまらないね

こうなつたらそのガキどもを殺してその後には君だね」  
は？こいつは今なんて言った？… 悟飯達を殺すだと？

「… ていった…」

「お？なんだ？」

「お前今なんて言いやがったあ！！！！」

『Welsh Dragon over Booster!!』  
宝玉から赤い光が発され俺はその光に包まれる

「クッククク… 何のつもりかな？」

「これは禁手、赤龍帝の鎧だ！」

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!』

一瞬の倍加と倍加のふかしを利用して俺はフリーザに突っ込んで  
へへ

「うおおおおつ！！」

「ぬっ!?!…でも、遅いよ」

フリーザの姿が消えすぐ後ろから声が聞こえてくる  
ちっ!まだ倍加が足りねえのか!

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!』

『explosion!!』

更に倍加をしフリーザに突っ込む

「バカの二つ覚えみたいに突っ込んでくるなんて

サイヤ人みたいな奴だね君力はあるみたいだけど

そんなんじや僕には届かないよ、ふんっ！」

背後から背を蹴りあげられ俺は空へと投げ出される

「もう少し楽しめるかと思っただけどこの程度じゃ話にもならないね、殺してあげるよ」

くそっ！ここで終わりなのかよ！

こんなところで誰の役にもたてずに！

フリーザが指先をこちらに向け赤い光を溜め始めた

俺は空中で身動きがとれない…

悔しいけど…ここで終わりか…父さんすいません

俺が諦めかけた時だった。

「馬鹿野郎！避けろ！あつがああ!!」

衝撃を受け俺は我に返った。

するとそこにはフリーザの閃光に貫かれた

ベジータの姿があった

「べ、ジー…タ？なん…で…」

「…馬鹿野郎…お前は…俺の力を手にいれた男なんだぞ…！」

それが…こんな…ところで…おめおめとやられて…言い訳が…ない…！」

俺の力を…サイヤ人として戦うなら…その誇りを忘れるな…！」

それだけ言うべジータは気を失った。

「分かった…お前の心意気確かに受け取った」

この状態になって敵わないのは仕方ない…

だけどなにか手はある筈だ…

「仕方ねえ！あまり使いたくなかったがやるしかねえよな！いくぜ！  
界王拳十倍と禁手倍加のドラゴン波だ！」

ドンッ！

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!』

赤いオーラと禁手の倍加により俺の力は何百倍にもなっている

「喰らいやがれ！空孫悟直伝のドラゴン波!!!」

巨大な赤い龍の形をしたエネルギーがフリーザに向けて飛んでいく

「これは中々の攻撃だね…だけど！はあああああ!!」

バシンッ！

フリーザはドラゴン波に突っ込むとそのまま体を回転させて  
回し蹴りでドラゴン波を返してきやがった

「くっ！くそつたれえええ…!!」

返ってきたドラゴン波に呑み込まれる寸前

俺の視界が一瞬で切り替わった。

「大丈夫か？悟誠…」

その声は何処か懐かしく頼りになるあの人だった。

「父さん！」

「よく頑張ったな…おめえもオラ並みに力を感じんのに

その鎧を使っても勝てなかったんか…？」

見れば俺の鎧はボロボロになっていた。

『あれは異常だ…完全では無いとはいえ

まさかこの状態の相棒をここまでにするなどあり得ない…』

ドライブも絶句している

「おめえがそうだったんならオラでも厳しそうだな…

悟誠、協力してくれ」

「っ…はい!!」

父さんの言葉に俺は驚きつつも強く返事をするのだった。

これで最後だ！放て超元気玉！！

sideイツセー

父さんが復活して俺達は二人がかりでフリーザと戦っている

「だだだだだだだだだ！」

「うおおおおおおおお！！」

二対一でようやく互角… いや、少し押している

これならいけるか？

「だりやあー！」

「ぬおっ…?!」

父さんのアームハンマーがフリーザを叩き落とす

吹き飛ばされたフリーザに追撃をかけるように

俺が追いかけて蹴り上げる… が

「喰らえええ!!」

「遅いよ、ふん！」

「なっ！しまっ?!ぐああああ!!」

蹴りが当たる直前に一瞬にして背後を取られ超能力で俺は吹き飛ばされてしまう

かなり飛ばされてようやく体勢を立て直しフリーザの姿を探すが見当たらない

「ぐぐぐぐ… くっ！どこだ！」

「ここだよ！」

その声の直後背後から重たい衝撃が俺を襲った。

「なっ！があああー！」

俺は勢いよく吹き飛ばされていき岩盤に打ち付けられる

「かはあっ！！」

「イツセー！！」

「余所見なんて余裕じゃないか」

「くっ…！」

俺の方に気を取られた父さんにフリーザの猛攻が迫る

「ちよつと本気を出したらこれだ…：がっかりだよ君達には  
君達なんか僕の実力の半分も出せば簡単に捻りつぶすことが出来る」

あれでまだ半分も出してなかったって言うのかよ！  
どうすりやアイツを倒せるってんだよ！

「キイヤ！！」

「ぐあああああ！！」

「父さん！大丈夫ですか」

父さんがフリーザの攻撃でふっ飛ばされてきた。

俺は急いで父さんに駆け寄る

「はあ…：はあ…：めえったなあアイツとんでもなく強え…：」



「どうします？このままじゃみんな殺されちゃいます」

「…あの技に駆けるしかねえ！」

父さんが意を決したようにそう口にした。

あの技は恐らく元気玉のことだろう

「悟誠、すまねえがオラが元気玉を作り終えるまで時間を稼いでもらえっか？」

俺はその言葉に力強くうなづいて答える

「任せてください！でも、時間稼ぎはいいんすけど、

アイツ、倒してしまっても構いませんよね？」

うわあ…思いつき死亡フラグ建ててんなあ…俺

「は、ははは…そうしたら元気玉おめえにぶつけなきゃなんねえぞ」

「怖いと言わないでくれます!?!まあ、やるだけやってみますよ

行くぜドライブー！」

『応！異世界の龍の力宇宙の帝王とやらにみせてやろう！』

俺はフリーザの前に飛び出し立ちふさがった。

「また一人でやるのかい？やっぱりサイヤ人にはバカしかいないようだね

わざわざ勝てもしない戦いに挑んで死に来るんだからさ」

「そうかもな、だが俺は純粋なサイヤ人ってわけじゃないから知らねえ

頭が良くないのだけは認めるけどな」

「どっちだって構わないさ、どうせ君たちはここで死ぬ

この僕に殺されてね…」



「今度の奴はさっきの比にならねえぞ！喰らえ！

かあ、めえ、はあ、めえ、はあああああ！」

ドンツ！！！！

今までのものと比べ物にならないほど巨大なそれはフリーザのめがけて突き進んでいく

「ブンツッ！そんなもの！キィィィヤアアアアアア！！」

フリーザはそれを両手で受け止めると上空に向け投げやがった……。

「チツッ！あれでも喰らわねえなんて……どんな化けもんだよ……アイツ」

すると、俺の身体を包んでいた鎧が解除された。

時間が来ちまったか……さすがに無理して界王拳を二十倍にまで引き上げたからな……

ははは……俺はここで終わりかな……？

「今のは惜しかったよもう少しでさすがの僕も傷ついてしまうところだったよ」

あれだけ無理して傷つける程度って……悲しくなるな……

「テヤツ！！」

「んおっ？」

？……なんだ？

見るとピッコロさんがフリーザを蹴り飛ばしていた。

フリーザは勢いよく吹っ飛んでいき遠くの水面に叩きつけられた沈んでいった。

「悟誠！すぐにこの場を離れろ！悟空が元気玉を完成させた！」

は、ははは……ようやく完成させたのか……

「はあああああああ！」

見ると父さんが突き上げた両手を振り下ろしていた。すると、空に浮かんでいた元氣玉がこちらに向けて落ちてきた。

「んん!? なあ! しまった!」

ハッ! 今更気づいても遅えんだよ! ざまーみろ! 冷蔵野郎!

「伏せろ!!」

ピッコロの言葉で急いで地面に伏せる

その間にも元氣玉はフリーザに向けて落ちてくる

「こ、こんな...! こんなものお...! こんな...! ものお!!」

ぎやああああああああ!!!!!!」

その悲鳴の直後付近で大爆発が起き暴風が吹き荒れた。

『『うぐぐぐ... うわああああ!!』』

俺達はその暴風に吹き飛ばされた。

気が付くと俺は水の中にいた。

やべえ... 早く出ねえと溺れ死ぬ...

『泳げそうか? 相棒』

なんとかな...

やつとの思いで陸に泳ぎ着き陸に避難する

やがて暴風が収まると辺りは陸地がほとんどなく

「... 終わったんだな」

なんとか立ち上がると辺りを見回す、すると?

「イツセーだ! おーい! イツセー!!」

「悟誠お兄ちゃん!」

その声に振り返ると、ふらふらと飛んでくる二人の姿だった。  
はは！不格好な飛び方だな

『相棒も大して変わらないだろう、そんな状態ではな』  
うるせえ！そんなことわかってんだよ！

そんなことをドライグと言いつつ合つてると  
二人が近くに降り立った。

「よく無事だったなあ、お前元気玉の一番近くにいたのによ」

「ははは… さすがに今回は死ぬかと思いましたよ」

「ねえ、悟誠お兄ちゃんお父さんとピッコロさんは？」

父さんとピッコロさんか…

あの二人のことだから大丈夫だと思うけど…

すると籠手の宝玉が輝き周りにも聞こえるように  
音声が発された。

『どうやら孫悟空とピッコロはまだ水中のようだ』

「わかんのか!？」

俺が驚いていると、俺達が立っていた所と  
同じ陸地にピッコロ達が上がってきた…

「がはあ… はあ… はあ… でえあ… !」

なんとか二人とも無事みたいだな、よかった

『いや、残念ながらまだのようだ… 相棒』  
ん？なんでだよドライグ… まさか！

『ああ、そのまさかだ… 奴め… まだ生きていやがる』

「父さん、残念なお知らせです…」

俺がそれを言おうとした時だった…。

「イツセー!!」

ドンツ!!

何故かピッコロに体当たりをされ俺は驚いて  
ピッコロの方を見る  
するとその胸を貫かれたピッコロが倒れていた。

「え…ピ、ピッコロさん…?ピッコロさん!!」

悟飯が膝からくずおれる

だが悲劇はそれだけで終わらなかった。

次に飛んできた閃光はクリリンに当たり  
その体を宙に浮かせた。

「え…あ…ああああ…」

「やめろ!!フリーザあ!!!!」

「ふん!!」(グシャ)

「悟空—————!!!」

ドオオオオオン!!

ウソだろ…目の前でクリリンさんが  
粉微塵になっちまうなんて…

「クリリンさん!!」

「っ!!…許さん…よくも…よくもおお!!」

「ふっふっふっふっふ…」

「く…!!ぐぐぐつぐ…!はあああああああ!!!」

ドンツ!!!!!!

クリリツさんが殺されたことにより

父さんの風貌が金色に変わった。

俺は……俺は……!! 結局なんにもできねえのか!

「ふん! 姿が変わろうと僕のやるべきことは変わらない

サイヤ人は一匹残らず皆殺しだ!

そうだ、ついでに僕にたてついたお前たちの家族もその星も破壊してやるぞ!」

は? 今こいつなんて言った? 家族を殺す地球を壊す?

「……けんなよ……」

「ん!」

「ふざけてんじゃねえぞフリーザアアア!!!!!!」

『Welsh Saiyan! Transform Legend  
!!』

籠手から聞いたこともない音声が流れた瞬間

俺の姿は金色に包まれた。

「おめえもなれたんか悟誠……」

「ええ、そうみたいだ……親父……」

おい、悟飯……早くピッコロを連れて逃げろ……

まだ微かに息がある……そいつを連れてさっさと逃げな」

「え、でも……」

「だってもへチマもねえんだよ! フリーザじゃなくて俺に殺されてえのか!

嫌ならさっさと行けえ!!」

「…！はい！」

悟飯はピッコロを連れて飛んで行った。

そうだといい…

「良かったのか？あんな言い方しちゃってよ」

「あのくらい言わなきゃアイツ動こうとしないぜ？きつとな」

「ふっ…それもそうか…」

「残るはおめえだけでももうオメエだけは絶対に許さねえぞ！」



ついに覚醒！超サイヤ人を超えろ！孫悟誠！

side 悟空

オレ達が超サイヤ人スーパーサイヤ人に覚醒してからしばらく経ったところだ…

界王様がオレ達が戦っている間、

機転を利かせて地球のドラゴンボールを使い、

ナメツク星の神龍『ポルンガ』を復活させて

フリーザに殺された者たちを地球へ転送させてもらった…

これで心置きなく戦えるようになった。

だが、フリーザの奴この星を破壊しようとしやがった…

奴の無意識の手加減により即破壊は免れたがあと五分もすればこの星は崩壊する

その前に奴を倒し、悟誠と共に地球に帰らなければならねえ…

奴との差は二人で戦つてようやく押せる程度の差しかねえ…

どうにかしねえとオレも悟誠も二人して終わりだ…それだけは避けなきゃならねえ…

「クソツッ！何故だ！オレは宇宙の帝王なんだぞ！こんな猿野郎に負けるはずがないんだ!!」

「だが実際押されてんじゃねえかい加減認めろよ、お前はもう勝てねえよ…」

「おのれえ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！

俺は！フリーザだ！負けていいはずがないんだ!!!

はああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

するとフリーザの身体がどす黒い球体に包まれた。

な、なんだ!?!いったい何が起きてやがんだ!

すると球体にヒビが入りやがてヒビは球体の前進へと伝わっていきやがて球体が崩壊した。

そして中から出てきたフリーザにオレは息をのんだ。

そのフリーザの姿が異様なものだったからだ…。

「……………」

動きを確かめるように腕を動かしているソイツは此方に見向きもしない

「…親父、アイツは不味い…俺が止めておくからその間に親父は乗ってきた船で帰れ…」

悟誠がオレの所に飛んできてそう言った。

「何言ってやがる！おめえ一人で戦わせられるわけねえだろ！今までだってオレ達二人でようやく戦えてたんだ  
おめえ一人でやったって殺されるだけだ！」

「…分かった、んじゃ、やるだけやってみるか！親父！」

「ああ！…!!」

刹那、重い衝撃がオレを襲った

「な…ん…で…」

オラの意識はそこで暗転した、

side out

sideイツセー

不意打ちで親父を気絶させた俺は、  
親父を担ぎ、急いでフリーザの乗ってきた宇宙船の方に向かった。  
宇宙船に着くと近くにギニュー達が乗ってきただろう宇宙船があつた。

俺はそれに親父を押し込めるとシステムを起動させた。

そうして扉を閉めると、宇宙船は親父を乗せ飛び立っていった。

「……すまねえな、親父、後で恨み言ならいくらでも聞いてやるから  
今は我慢してくれよ……」

飛び立っていった宇宙船を見送ると、俺はフリーザのところに戻った。

「ふむ……ようやく戻ってきたか親子の別れは済んだのか？」

野郎……気づいてやがったのかよ……

「ああ、良かったのかよ……お前が邪魔しに来ないなんてよ……」

「ブン……我にはサイヤ人などどうでも良い……久方ぶりに目が覚めたと思ったら」

このような場所にいたのだからな」

久方ぶりの目覚め？それに自分のことを我と呼んだ……こいつはフリーザじゃねえのか？

「どういうことだ……？お前フリーザじゃねえのか？」

「ふむ……我がフリーザかどうか……か……正確には我はフリーザであつて」

フリーザではない……我の生前の名前はフロース……遙か昔に存在したフロスト一族の一人だ……」

フロースか……さしずめフリーザの祖先ってどこか……どうして祖先が出てきたのかは知らねえが

アイツから感じる気は尋常じゃねえ……おそらくこのまま超サイヤ人で戦っても瞬殺されちまうだろうな……

「そのフロースさんがなんでこんなところに出てきた！フリーザはど

うしたんだ!

それとその姿…フリーザの奴はまだ力を隠していやがったのか?」

「質問の多い小童だ… まず子孫の事だが子孫は今我の中で眠っている…」

次に我の事だが何故出てきたかは子孫の感情が影響だろう…

それと最後にこの姿だが…これは我が生前に切り札として使っていた形態だ…

名付けるなら、そうだな…エンペラーフォルム皇帝形態とでも名付けるとしよう…」

皇帝形態…フローズの切り札か…

アイツを倒すならもうあれを使うしかねえだろうな…ドライグ、いけるか?

『ああ、いつでも可能だ…お前がその姿に覚醒したことであの力を発動させる条件がそろった…』

それならいい…そんじやいっちよ付き合えよ相棒!

『応! 異世界の龍と伝説の戦士の力…見せてやろう!』

「いくぜ!アルティメットブースト究極倍化…」

『Welsh Super Saiyan! Ultimate Booster!!』

その音声と共に俺の身体がまばゆい光に包まれる。

やがてその光が晴れると俺の身体は金と赤のオーラに包まれていた。

『ブーステッド・ギア・ドラゴンニックフォーム赤龍帝の超龍形態…』

またの名を…スーパーサイヤ人龍超サイヤ人龍つてどこか…」

「ほう、面白い…我のこの形態とどちらが上か試してやろう…と、言いたいところだが

この星の寿命も持って後二分…なので、こういうのはどうだ? 小童

…  
我とお主で互い全力の一撃を放ちそれを耐えられた方が勝者だ…  
どうだ、受けるか？」

「… ああ、その勝負受けてやる…」

「フツ…そうこなくては面白くない、ではいくぞ！」

はあああああ!!!」

…  
全力の一撃か…俺が打てる全力はウエルシユかめはめ波しかない

…  
あの技で仕掛けてみるか？

『いや、相棒…それならもつといい物があるぞ』

そんなものがあるのか？だが俺はあの技より強い技は知らねえぞ

『なら、俺の言う通りにやれ…そうすればお前にもできるだろう…』

お前の言う通りにやればいいんだな？分かった！それじゃ教えてくれ！

『ああ、まずはなんでもいいから気を放ちやすい構えをとれ…』

気を放ちやすい構えか…ならー！これだな！

俺は腰を落とし、手前で手を合わせ腰のあたりまで持っていきかめはめ波の構えをとった。

『そうしたら次はそこに限界まで気を溜めるんだ』

気を限界まで溜めるんだな？分かった！

俺は構えたまま限界まで気を込める。

シユイイイイイン!!!!

い  
手の中に大きな気の塊が出来ているがまだこれだけじゃないらしい

『気を限界まで溜めたな？なら最後だ…その状態のまま倍化をしてその倍化した力をその気に譲渡させろ…』

倍化させてそれを気に譲渡だな？んじや行くぞ！

「十億倍化…」

『One Billion Booster!!』

ブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
!!!!!!

一瞬で俺の力が上がっていくのを感じる…

ブーステッド・ギア・ギフト  
「赤龍帝の贈り物!」

『Transfer!!』

気の塊に譲渡した途端、手の中の気が一瞬で膨れ上がった。

こいつは抑え込むのも大変だ…

『それで準備は整った…放つがいい!神滅具の真骨頂!ロンギヌス・スマツシヤーを!』

こいつが…ロンギヌス・スマツシヤー…こんなものを放てば惑星どころか、宇宙そのものが消え去るんじゃないだろうか…

「ほう…そちらも出来たようだな…ならば、いくぞ…『エンペラーノヴァ』」

大惑星ほどもある超巨大なエネルギーの塊がオレに向けて放たれる

俺は迎え撃つように手の中のそれを撃ち放った。

「喰らいやがれ!!ロンギヌス・スマツシヤーアアア!!」

ズツゴオオオオオオオオオオオ!!!

撃ち放たれたロンギヌス・スマツシヤーはいとも容易くエンペラーノヴァを?み降りしフローズのもとに向かっている

「我のエンペラーノヴァを降すか異世界の龍よ…我の負けだ…

また会い交みえぬことを願っている…」

その言葉を最後にフローズは極太の光線に呑み込まれその姿を消した。

「はあ… はあ… はあ… 終わった… のか?」

フリーザの奴は消え去った。

だがもう乗ってきた宇宙船に戻るまでの時間はない…

「へへっ… どうやらここまでみてえだ…」

親父の奴は無事に地球にたどり着けるかな？

着いてくれなきや俺がここまでした意味がねえ…

「親父、悟飯…後のことは頼んだぜ…」

その言葉を最後にナメツク星は崩壊するのだった。

蘇れ孫悟誠！英雄の義息子の帰還！【番外編】

○月○日：：

不思議なことが起きた。

俺はナメック星の爆発と共に死んだはずだった。

でも、気が付いたらそこは俺のよく知る空間：そう、俺の部屋だった。

あれは夢だったのか？それにしてはリアルに思い出せる：

少なくともあれを夢で終わらせたくはない・・・

とりあえず今日はもう寝てしまおう・・・

○月△日：：

今日試して分かったことがあった。

どうやら気はちゃんと使えるみたいだった。

尻尾もちゃんと生えていたし、あれは夢ではなかったといえる・・・

でも何故・・・それがいまだに不自然だ・・・

.....

.....

(間、2年間の手記が抜けている)

×月○日：：

久しぶりにこの日記を見つけた。

とりあえず、今までは何事もなく過ぎた。(平穩にだったわけではない)

今は高校に上がって今は高校2年になった。

あれから可能な限り修行を続けながら悪友達と猛勉強をして



なんとか、入学することには成功した。

なんでもそこにしたのかって聞いてみたらハーレムを作るためだっけって言った。

ハーレムなんて何がいいんだらうな？

俺にはよくわからない……

×月×日……

今日、初めて女子から告白された。

学校帰りに歩いてたらいきなり話しかけられて告白された……

なんでも一目惚れだったらしい……

二つ返事でOKしちゃったけど、あの子……人間じゃなかったよな……

まあ、俺の学校にも人間じゃない奴もいるみたいだしあまり気にしなくてもいいか

とりあえず大事にしよう、初めての彼女だしな……。

……

……

……

【二週間の手記が抜けている……】

×月□日……

最悪の気分だ……

今日、彼女を殺した……

本人に頼まれてのことにせよ、いい思い出にはなりそうにない……

あの時の夕麻ちゃんの顔が頭から焼き付いて離れない……

父さん……悪い……元氣玉自分のために使っちゃったよ……

折角使えたつてのに……気分悪い……  
夕麻ちゃん……いや、レイナーレの言っていたこと守らなきや  
な……

×月\$日

今日、同学年のイケメン、木場が話しかけてきた。

どうやら、リアス先輩が俺を呼んでいるらしい、

ついていったら、旧校舎のオカルト研究部まで連れてこられた。

中にいたのはリアス先輩と姫島先輩、小猫ちゃんだった。

俺はリアス先輩達が悪魔であることを教えられ、

あの時の事を聞かれた……

どうやらどこかで見られていたらしい……

オカルト研究部も質が悪いとしか思えなかった。

その日はその日の事を簡単に説明してさっさと帰った。

帰り際に先輩が何か言っていたけどよく聞こえなかった。

あまり人の私生活を覗かないでほしいものだ……

×月%日

学校の帰り道、数人の堕天使に囲まれた。

なんでも、レイナーレの仇を討って計画を引き継ぐつもりらしい

ムカついたからその場で全員かめはめ波で跡形もなく消し飛ばし

てやった。

レイナーレの事、なにも知らないくせに分かったような口を利くん  
じゃねえ！

×月#日

レイナーレの言っていたシスターを見つけた。

なんとか片言の日本語が話せたみたいで助かった。

事情を説明して家へと連れて行った。

両親に話したら、快く受け入れてくれた。

名前はアーシア・アルジエントというらしい

兵藤家に家族が増えた…。

☆月△日

また木場が声をかけてきた。

どうやらまた先輩が呼んでいるらしい。

今度はアーシアもということだったから一緒に連れて行った。

因みにアーシアは両親の計らいで駒王学園に入学することになった。

今度の要件は俺達に悪魔にならないかということだった。

悪魔という種族に興味があったのでOKした。

アーシアは俺がなるならと一緒になって合意していた。

とりあえずはアーシアから転生させてもらった。

アーシアは『僧侶』の特性がある駒で転生した。

俺は兵士の駒で試してみたが転生できなかった。

どうも駒を持つ側と転生する側の実力差がありすぎると転生できないらしい

俺と先輩では実力差がありすぎたってことだ。

それもそうだ、俺は孫悟空の義息子なんだからな

父さんたち、元気にしてっかな？

悪魔にはなれなかったけど、部活には入ってくれて言われたから

俺達はオカ研に入部した。

☆月○日

部長が夜這いに来た…。

なんか切羽詰まった様子だったから落ち着くように説得してたら

銀髪のメイドさんが来て部長を諭してくれた。

どうやら、このメイドさんグレモリー家のメイドさんらしい…

かなりデカい気を感じたから相当強いんだろうな

その後部長とメイド…グレイフィアさんは部室へ転移していった。  
まった。

…なんだったんだ？ いったい

☆月@日

部室にホスト崩れの青年、ライザーが来た。  
部長の婚約者らしい、肝心の部長はかなり嫌がってるけど…：  
そしたらいきなり眷属を出したと思つたら  
いきなり目の前でデイーブなことを始めやがったから止めたら  
眷属の一人が襲い掛かってきたからライザー含めた眷属全員を  
連帯責任で血祭りにあげてやった。【殺してはいない】  
グレイフィアさん含めた全員が青い顔をしていた。  
ちよつとやりすぎたか？

☆月①日

部長の婚約が破談になつたらしい  
俺がライザーを血祭りにあげたことでライザーが引きこもつてし  
まつたようだ。

何とも締まりのない解決の仕方だな…：  
それとあの時から部長たちの様子が変わだ、脅えられてんのかな？

△月○日

今日は俺の家で部活をやった。  
部室は使い魔に大掃除をさせてるんだそうだ。  
でも、部活のほがいつの間にか俺のアルバム鑑賞会になつちまっ  
てたんだよな…。

それにしても途中から木場の様子がおかしかったな…：何かあつ  
たのか？

△月☆日

部室に聖剣使いの二人組が来ていた。  
なんでも展開の聖剣が数本盗まれたらしい…：  
犯人は墮天使幹部のコカビエルって話だった。  
二人は俺達に手を出すなって言っていたけどどうするかな？

その後、聖劍使いの一人がアーシアを切ろうとしたからぶっ飛ばしてやった。

アーシアに手を出そうとするやつは誰であろうと容赦しねえ！

△月□日

コカビエルの奴が直接攻めてきやがった。

戦争を始めるきっかけを作りたいらしい…

早速乗り込んで学園ごと消し飛ばしてやった。

サーゼクス様達に修理はお願いするでしょう

超サイヤ人になるまでもなかったな…

そういえばあの白龍皇俺に興味深げだったな

アイツならもう少し楽しませてくれるんだろうか…

△月\$日

部長の眷属の封印が解かれた、

眷属の中で一番の稼ぎ頭って話だったけど

中身はただの女装野郎だった。

顔立ちが整ってたからいいようなものの

あれで不細工なら許されねえだろうな…

まあ、人の趣味にとやかく言うつもりはないけど…

△月△日

新僧侶：ギヤスパーがまた引きこもっちゃった。

小猫ちゃんと一緒に契約を取りにいかせたら酷い目にあつたらしい

い

試しに俺があの時（フリーザ戦）の話をしたら興味を持ってくれた

ようだ

今度、超サイヤ人龍を見せると約束した。

△月&日

三勢力の会談があつた。

特に滞りなく話し合いが進み和平が結ばれた。  
でもそれと同時にテロリストが活動を活発化させやがった  
おまけに寝返る奴までいやがってメンドクサカッタ。  
因みにヴァーリ（白龍皇）は龍を出さないで勝ってしまった。

.....

日記風手記終了.....

会談後、俺は自身の部屋で眠りについてた。  
すると、不思議な空間に出てきてしまった。  
辺りを見回していると、どこからか声が聞こえてきた。

『遠くの地で…お前の帰りを待つ者たちがいる…』

異世界の龍よ…さあ、姿を見せるのだ…』

その直後俺の視界が光に包まれた。

光が収まり目を開けると、そこには見知った人達が俺を出迎えてく  
れていた

『『『『おかえりなさい！悟誠！』』』』』

「ああ！ただいま！みんな！」

俺の物語はここからまた始まるんだ！

## 人造人間編

英雄の帰還!?! 待ち受けるは地獄か再会か!

sideイツセー

俺が帰って来てから一年の月日が経った。

父さんはまだ帰ってきてないみたいだ…

父さん、いったいどこで修行してるんだ?

「悟誠お兄ちゃん? どうしたの?」

その言葉に俺は我に返る

「ああ、いや、なんでもねえ、つてか悟飯、俺が出したテスト

終わったのか?」

「うん、終わったよ」

「お? じゃあ見せてもらうかな… どれどれ」

なんで俺がこんなことをしているか… それは少しだけ前の事…

母さんが以前、悟飯に家庭教師をつけると言い出したんだ。

それを聞いた俺は母さんに言ったのさ、

『家庭教師つけるなくらいなら俺が悟飯の勉強を見ますよ』

つてな…

そしたら母さんの奴あつさり納得しちゃってさ

今、こんなことになってるって訳だ…

「お! 全問正解じゃないか! やるなあ悟飯!」

「良かったあ、当たってたあ…」

つてな感じでこいつはかなり理解が早い、

俺なんかすぐに追い抜かれちまいそうだな…。

「さて、じゃあ今日の勉強は終わりだ。俺は飯の準備してくるから  
悟飯は母さんに終わったことを伝えて来いよ」

「うん！わかった！」

その返事を聞いてから俺は家を出る。

「さて、またいつちよやりますか！はあああ！」

ドンツ!!シユインシユインシユイン…

俺は超サイヤ人になってパオズ山を飛び回る。

前に母さんの前でやったら…

『そんな不良みてえな格好でいたら悟飯ちゃんに悪影響だべ！』

もうやるでねえぞ』

って言われちまったからこうして隠れてやってんだ。

なんでこんなことやってるかっていうとな？

それは超サイヤ人龍の状態を維持するためなんだ。

あの形態はエネルギーの消耗が激しく身体にもかかる負担がデカ  
い…。

だからどうしたらいいかドライブに聞いたんだ。

そしたら、『相棒の超サイヤ人の維持できる時間が増えれば自然と  
長くなる』

って言われたから、こうして超化を身体に慣れさせるために

一人の時は必ず変身するようにしてる。

だけど一年もやるとかなり慣れるみたいだ、

以前なら興奮で理性が飛びかけてたのに、

今じゃ興奮状態を理性で抑えられるようになってきているもんな

「うん…なににすつか…ん？」

獲物を探してたら、なんだか物凄い気を感じた…



俺はこの気を感じたことがある…

この気はフリーザだ、間違いない…

アイツ… 死んでなかったのか…!

それにもう一つバカでかい気を感じる…

フリーザの他にもう一人いやがるってのか?!

「考えていても仕方ねえ…とにかく行くしかねえよな! いくぜ!  
ブーステッド・ギア  
赤龍帝の籠手」

『Boost!!』

俺は神器を発動させて獲物探しを中断し、急いで気が感じられる方へ向かった。

.....

「どこか…」

気を感じるところに到着するとそこには先客がいた。

フリーザたちと対峙していたのは紫いろの髪をした青年だった。

フリーザが俺を見つけ不敵に笑う

ってかアイツ機械化してないか? サイボーグって奴になったのか

?

サイボーグ・フリーザ…

一瞬想像してはいけないものを浮かべかけた… あぶねえ…

「来たか、ソングセイ… パパ、あれがもう一人の超サイヤ人だよ」

「ほう…あれが…なるほど、確かに鋭い目つきをしている…」

俺の評価は別にいいんだよ…

フリーザたちを無視し、俺は青年の方に向かう。

「貴方が孫悟誠さんですね、いえ、兵藤一誠さんと呼んだ方がいいので  
しょうか」

なっ?! こいつ! なんで俺の元の名前を知ってやがる?

「お前……いったい何者だ？なんで俺の元の名前を知ってる？」

「それは後でお話しします……それより今はあいつらをどうにかしない  
と」

確かに、今はそれどころじゃねえな…… どうする？

超サイヤ人龍ならいけるか？でも……

「悟誠さん、ここは俺に任せてくれませんか？」

その言葉に耳を疑う、

「お前正気か?!フリーザは超化した俺と父さんの二人がかりで  
ようやく攻撃が通ったんだぞ!」

「ええ、知っています……なので念のためにあなたはその力を僕に譲渡  
してください」

こいつ、あくまで一人でやる気らしい…… 仕方ないな

「……分かった、だが無理はしないでくれ、危ないと思っただらすぐに加  
勢に入るからな」

「はい、ありがとうございます」

「よし、んじやいくぞ! ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝の贈り物!」

『Transfer!!』

俺の溜まっていた倍化が青年へと譲渡される。

瞬間、青年の気が馬鹿みたいに跳ね上がった。

「!…… 凄い……これが赤龍帝の譲渡の力……ありがとうございます悟誠  
さん

あなたはそこで見ていてください」

青年の言う通り俺は少し下がり様子を見ることにした。

.....  
side???(台詞のみ)

「次は、お前たちの番だ…」

「ほほう…こいつは驚いた、聞いたかフリーザ  
今度は我々を殺すつもりらしい」

「フツ…身の程知らずが…」

「良いことを教えてあげようか？中途半端な力を身につけた奴はか  
えって早死にするんだよ？」

「ふっ…お前のようにか？」

「なっ！なに…！」

「そんな姿にまで成り果てて、よくおめおめと地球まで来られたもん  
だ…」

「態々殺されるために…」

「口のへらん小僧だ…」

「パパ…やはりお仕置きが必要だね」

「お前をここまで侮辱するとは…それだけで死刑に値する…」

「もつたいないけど、ボクが死刑執行人になってあげるよ」

「お前たちは一瞬で僕に殺される…分かっているんだ」

「分かっている？フツ…こいつはユニークな表現だね…」

「初めから全力でかかってくるんだな…僕は孫悟空さんのように甘くはない」

「…！」

「ソングクウ？」

「あの超サイヤ人の名前だよ…パパ」

「ほほう…」

「そうか、貴様もアイツの仲間か」

「会ったことはない、知っているだけだ…」

「ホウ…知っているだけ…」

「お前たちはさつきこう言ってたな…」

『ん？』

「あの超サイヤ人がやって来るまでに、地球人を皆殺しにして悔しからせてやろうと…」

「確かにそう言った…貴様もその一人だ…もつとも貴様が部下を殺してくれたおかげで

このフリーザ自らが手を降さなければいけなくなったけどね」

「フツ…誤算だったな」

「なあに、地球のゴミ共を大掃除するくらい…ボクならあつという間にやって見せるさ」「そうじゃない…」「ぐっ…!」

「僕が言った、お前の誤算とは…」

「っ!…?」

「超サイヤ人は孫悟空さんや孫悟誠さんだけじゃない…ここにもいたということだ」

「…なに!?!?!?」

「ふふふっ…!」

「…フツ!フツフツフツフツ…こいつは驚いた、ハーハツハツハツハッ!」

「這つたりもそこまでいくと感心するねえ」

「フツフツ…!」

「ふっふっふ…!」(青年に異変が起き始める)  
(なんだ?あいつの変化…どこかで…)

「っ…!!!!」

「ん?」

「なっ…まさか…っ!」

「これが…」

「はあああああああ！」

(まさか…ホントになれるってのか？超サイヤ人に…)

「ア…ア…ア…ア…！」

「……………」(これが超サイヤ人か…)

「…あの目…あの目だ…ぐううう…!!」

「何を脅えているんだ？」

「ぐうううつ！くたばれえ！」(青年に気功波を放つフリーザ)

「フリーザ…この星を壊してしまつては元も子もないぞ？」

ソングクウとかいう奴が帰つてこれなくなる」

「分かつてるよパパ…本気は出して…!？」

「俺を侮つて力を出し惜しみしてる余裕は貴様には無いんだぞ…俺に殺されるんだからな」

「口の減らない小僧め!!!!くらええ！」(気功波を放つ)

「はあああああああ!!」(気功波を受け止め破壊する)

「ふっ…愚かなりフリーザ、やはり貴様の驕り昂ぶりが貴様の敗因だったな」

勝負というのは一気にケリをつけるものだ」

「フツ…では、望み通り一気にカタをつけてやろう…」

はあああああああ!!」(スーパーノヴァを作り出す)

「フリーザ！この星ごと消す気か！」

「ソングクウは！宇宙で始末すればいい!!」（スーパーノヴァを放つ）

「……………」（呑み込まれる）

「星が爆発する！フリーザ！いくぞ！」

「つ…!? な…なんだ！」

「……………」

「クツ…このくたばりぞこないめ！」

「どうした？これで終わりか？」

「クツ…！キヤツ！」（スーパーノヴァを破壊する）

「フッフッフ…！」

「やったな、フリーザ超サイヤ人にもしよせん我々の敵ではなかったな

ハッハッハッハ！」

「……………」（近くの高台で気攻弾の構えを取る）

「フリーザアア!!」

「ん?!」

気功弾が放たれるがなんとか躲すフリーザ

「チツ…この程度でこのオレを…!? わあああ!?」

「はあああああああ!」(振り上げた剣を振り下ろす)

「ア…ア…ア…ア…アアアア…」(真つ二つに切り落とされる)

「……………」(さらに切り刻みバラバラにし、気功波で消し飛ばす)

「なっ! あいつ本当に一人でやりやがった!」

side out

……………

side in

アイツ、マジでフリーザを一人でやりやがった!

しかも、次はフリーザの父親まで簡単に消し飛ばしやがった!

何て野郎だよ! いくら俺の譲渡があつたからって

あそこまで急激にパワーアップするものか?

そんなこと言ってる間にバトル終わっちまったし…

これ俺必要あつたんだろうか…



お帰り孫悟空！本当の英雄の帰還だ！

sideイッセー

俺は目の前で起きていることがにわかには信じられなかった。

あの少年がたった一人でフリーザ達を倒してしまったのだから…

その少年は変身を解き、ふう、と息をついている、

「おい、これはいったいどういうことなんだ？」

声をかけられたので振り向くと、そこにいたのはピッコロさんだった。

「ああ、ピッコロさん、それに皆さんも来ていたんですね…

見ての通りですよ、フリーザを追い返そうと思ってきてみたらアイツが先について

一人で終わらせちゃったんですから」

まさか譲渡しただけで終わるなんて思わなかったよなあ…

「そうか、ならお前はあいつを知らないのか？超サイヤ人になってみたみたいだが」

その問いに俺は首を横に振ってこたえる。

「いえ、会ったこともありませんし見たことすらありません、

でも向こうは俺のこと知ってたんですよね…元の名前すらも」

「なに？お前の元の名前を知っていただど？むう、奴はいったい何者なんだ…」

俺が聞きたいよそんなこと…

すると、少年がこちらに向き話し出した。

「これから孫悟空さんを出迎えに行きます！一緒に行きませんか？」

え？父さんが帰ってくるのか？でもどこに…

「こちらです！もうじきこの近くの孫悟空さんは着くはずです！」  
この近くに来てんのか？父さん

あ、やべ：： あん時の事怒られんのかな：：  
そう考えたら会いたくなくなってきた：：。もう帰ろうかな？

「孫悟空さんが着くのは、後三時間後です！僕についてきてください！」

あ、言うだけ言っただけだったよあいつ：：

「はあ、とりあえず行きますか：：皆さんはどうしますか？」

その言葉に悩む一同：：

「俺はいきますね、来るなら早くしてくださいね」  
そう言っただけ俺は少年の後を追って飛んでいった。

．．．．．

しばらく後を追って飛んでいると急に少年が高度を落とした。  
後を追って俺も降り立つ

「やはりあなたは来てくれましたね、悟誠さん」  
そう言いつつ胸のポケットから一つの小さなカプセルを取り出す  
と

少年はそれを地面に向け投げた。  
するとカプセルが爆発し、小さな冷蔵庫が出てきた。

「良かったらどうぞ、飲み物はまだたくさんありますから」

「あ、ああ、頂くよ」

見たことない柄のジュースだな  
すると続々と他の人達が降りてきた。  
お？来たみたいだな、なんだかんだ全員いるじゃん  
それからなんだかんだあり三時間が過ぎた。

「三時間が過ぎました。そろそろ孫悟空さんが到着するはずですよ？もうそんな時間経ったのか、気を探ってみるか  
すると、確かに父さんの気が感じられる  
直後、すぐ近くに一つの宇宙船が落ちた。」

「あそこか」

俺は急いで宇宙船が落ちた場所に向かった。  
宇宙船が落ちた場所に着くと宇宙船のドアが開いていた。  
そして中から出てきたのは間違いなく父さんだった。  
騒ぎ出す他の皆を見てきよんとしている父さん

「あれ？なんでおめえたちがここにいるんだ？」  
そう言ってクレーターから跳び上がってこちらに飛んでくる父さん

「どうしてオラがここに着くことが分かったんだ？おめえ達」

「それはこの人のおかげさ、父さん」

「お父さんこの人と知り合いなんですよ？」  
俺と悟飯に言われて少年を見る父さん、しばらく少年を見て考え込むと…

「ん？誰だ？オラ知らねえぞ」

え？、と、一斉に黙り込む一同

「それにしても、フリーザたちを倒したんは誰だ？ すごい気だったなあ、

ピッコロか？ それともベジータか？」

「いや、なんで俺が入ってないんですか!!」

俺だってアンタと同じ超サイヤ人でしょように…

「はははッ!! 悪りい悪りい、ちよつと仕返ししたくなってよ」

うっ… やっぱあの時の事ねの持つてらっしやるよこの人…

「フリーザをやったのはそいつだ… あっという間だったぞ

そして、貴様と同じように超サイヤ人になれるんだ」

「超サイヤ人に？ へえ！ そいつはすごいや若えのによ

それにしてもオラ達の他にもサイヤ人がいたとは知らなかったなあ」

「違う、サイヤ人は絶対俺たち以外には居ない！」

断言するベジータさん、少年を見る父さん

「ま、そんなことはどっちでもいいさー！」

ズコッ！ 相変わらず適当だよな、父さんは…

「孫さん、それに兵藤さんも少しいいですか？」

『ん？』

ゲッ！ ハモっちゃまった…

「実は… お話があります… お二人だけに」

俺達に話？ いったいなんだ？

「…分かった」

「ああ、いいぜ」

「ありがとうございます、ではこちらに」

俺達はみんなを置いて少し場所を離れた。

「そーいやお礼がまだだったよな、フリーザを倒してくれてありがとう  
な

確実に消し飛ばしたと思ったんだけどな」

「そっか、フリーザを倒したんは悟誠だもんな、あの後どうなったんだ  
？」

「父さん、それは後で説明しますから…」

「ははは… 仕方ありませんよ、あの後すぐに星が爆発してしまっ  
たんですから

確認できなくても不思議じゃありません」

そうなのか？星が爆発するまで結構余裕があったと思っただけど…

「話をする前に一つだけ確認したいことがあります。」

「ん？なんだ？」

「貴方達は自分の意志で超サイヤ人になれますか？」

その言葉に俺はこくりと頷いて答える

「まあ、見ての通りだな父さんは？」

「ああ！最初は駄目だったが苦労して今はコントロール出来るように

なった

それにしても悟誠おめえなんですつと超サイヤ人のままなんだ？」

「それもあとで説明しますから…今は話を聞きましょう」

「今ここで、なっていたただけませんか？一誠さんは超サイヤ人龍に」

『え？』

「お願いします…。」

俺達は軽く顔を見合わせると

『ああ、わかった』

そう言つて超化する父さん、俺も習つて変身の呪文を口にする。

「行くぜドライブ！究極倍化!!」

『Welsh supersaiyan! Ultimate Boost  
ter!!』

その音声と共に俺の身体が赤と金のオーラに包まれる

『これでいいのか？』

「ありがとうございます。お二人とも、凄い！悟空さんは超化した僕にそつくりだ。」

それに…それが超サイヤ人龍…凄まじいパワーを感じますね」

『それでどうするんだ…』

「あなた達の実力を試させてもらいます…ハアアア！」

超化したと思いきやいきなり父さんに切りかかったトランクス  
父さんはそれを指で受け止めた。

その後何度も打ち合っていたが父さんは全て指で剣を止めていく、

「流石です、噂は本当でした。いや、それ以上です！」

次は一誠さんの番ですね、では、失礼します！デヤツ！」

「……」

超化を解いた父さんを横目に俺は一步も動かない  
だが剣は俺の身体に届くことはなかった。

「なっ！け、剣が… 動かない!？」

『動かなくて当然だ…お前が今相手しているのは異世界で名を馳せた  
二天龍の片割れ…』

赤龍帝だぞ?』

すると、俺を纏っていたオーラの一部が俺を離れ、一つの形を成し  
ていく

「ん!?今の声は!」

父さんが驚いているなかオーラはドンドン具現化し、やがて龍の形  
となった。

「やっと出てきたな? 相棒、父さん、トランス、紹介するよ、俺の神  
器に宿る龍

赤龍帝・ドライブだ」

「で、でかい…これが一誠さんの中に宿る龍…凄い」

「おめえがドライブか? でっけえ龍だなあ」

父さんも少年もその大きさに驚いている

『初めましてだな孫悟空…お前には感謝しているぞ相棒をここまで強

くしてくれたんだからな』

「ああ、オラもここまで強くなるなんて思ってもみなかったぞ」

「ちよつと二人とも！とにかく話を聞きましようつて！」

その後なんとか二人を落ち着けさせておれは少年の話を聞くことにした。

少年はトランクスというらしく、二十年後の未来から来たんだそうだ。

三年後の五月十二日の午前十時ごろに恐ろしい二人組が現れるらしい

そいつらはすさまじいパワーを持った人造人間だという

二十年後には戦士はその人造人間にやられトランクス一人になってしまっており、

他の戦士は皆殺されてしまったらしい…。

「待てよ、オラは？オラはどうなったんだ？オラもやられちゃったんか？！」

「…あなたは戦っていない」

その後には告げられた言葉は信じられないものだった。

なんと未来では父さんは病気で死んでしまっているという。

「そう言えば俺の名前が出てないけど俺は？」

「あなたは殺されこそしていませんが…亡くなっています…」

俺も死んでいるのか… いったい何が原因なんだ？

「なんで俺は死んだんだ？」

「あなたは悟飯さんと共に生き延びた一人でした。悟飯さんと同じく



僕に戦い方を教えてくれたんです。でも…。」

「でも？なにがあつたんだ？聞かせてくれ」

「あなたは悟飯さんがやられたのを知って…力が暴走してしまつたんです…。」

暴走…。気は暴走するとは思えない…。と言うことは

「俺のこの神器がか？」

「はい、一誠さんの暴走はすさまじいものだったそうです…弟を…悟飯さんを殺された怒り憎しみで我を忘れて暴れまわっていたそうです。」

そして、人造人間の一体を破壊、もう一体を損傷に追い込んだそうです。」

「暴走しても敵は逃さなかつたのか、ドライブ、これなんでかわかるか？」

『おそらくその暴走と言うのはジャガーノート・ドライブ 覇 龍の事だろう…』

あれは所有者に絶大な力を与えるが、代わりに所有者の生命力を根こそぎ持っていく

恐ろしいものだ』

ジャガーノート・ドライブ…か、確かに悟飯が殺されたら俺、怒り狂いそうだもんな

「そうです、それで一体を破壊した一誠さんはそこで力尽きてしまつたのです。」

最後の力を僕に託して…。」

「…そうか」

父さんは死んじまって俺は暴走で力尽きる…か、クソ！  
父さんも悔しそうにしている…

流石はサイヤ人だな、その二人と戦いたくてうずうずしてるらしい  
その様子を見たトランクスは未来の特効薬を父さんに渡した。

お？これで父さんは死亡フラグを回避できたのか、じゃあ後は俺か

…

俺の場合は気を付けておけばいいのか…

その後、トランクスがその母親がブルマさんであることを告白して  
二人してずっこけたのだった。

そしてトランクスは一度未来に帰っていった。

俺達は他の皆にどう説明するか悩んでいたら

ピッコロさんがうまく説明してくれた。

盗み聞きとか質悪いぜピッコロさん…

そうして俺達は各々で修行を始めるのだった。

三年後、殺されないために

各々の修行！三年後に備えろ！

side 悟誠

よっ！俺、悟誠だ！

今は父さんとピッコロさんを引き連れて  
家に向かっている最中なんだ。

その道中、俺はナメツク星で起こった出来事を、  
父さん達に話していた。

「と、言う訳なんですよ…」

俺が一通り話し終わると父さん達は驚いていた。

「アイツフリーザじゃなかったんか!?それに超サイヤ人じゃ勝てな  
かったんだろ?」

父さんの言葉に俺は頷いて答える

「ああ、あの時、あのまま戦っていたら俺達は生き残ることなく皆殺し  
にされてたと思う…」

「そうか…」

その言葉に皆は暗い顔をする…そのとき、悟飯が口を開いた

「で、でも！悟誠お兄ちゃんがあの【超サイヤ人龍】になれたから倒せ  
たんでしょ？凄いよ！悟誠お兄ちゃん」

「ははっ…正直、こいつが無かったら俺、ここにはいないと思うよ」

「超サイヤ人を超える変身か…ベジータの奴がまた怒りそうだな」

確かに…さつきも凄い顔で睨まれてたもんな…

そんなことを話している間に家に到着した。

さて、問題は母さんなんだよな…どう説得するべきか

俺はそんなことを考えつつ中に入っていた。

.....

説得の結果、母さんはなんとか納得してくれた。

最初は首を横に振っていた母さんだったけど

俺が悟飯の勉強を修行の後に一気に進めると言ったら

渋々ながら納得してくれた。

だが、それが終わったら俺を高校に通わせると言い出したので全力でお断りしておいた。

俺、別になりたいものがある訳じゃないからな…

そんなことがあり、俺達はやつとことで修行に取り込むのだった。

悟飯との修行…

「だああああ!!」

悟飯が勢いよく俺に突っ込んでくる

俺はそれを受け止め、時には捌いていく

「ほら、隙ありだ」

悟飯が隙を見せたところに攻撃を叩き込む

「ぐっ…！まだまだあ！」

「そうだ、来い！悟飯！」

そうして俺と悟飯はまたぶつかり合うのだった…。

ピッコロとの修行…

「来い！悟誠、お前の實力を見せてみる！」

「はい！それじゃ、いきます！」

俺は勢いをつけてピッコロに突っ込み蹴りを放つ

「…っ！デヤアツ！」

「うわっ！」

ピッコロが伸ばした腕に足を掴まれ俺の蹴りは中断させられる、そのまま思いきり地面に叩きつけられる

「ガツ…！かはっ…！」

「どうした？お前の実力はこんなものじゃないだろう」

当たり前だ…こんなものでやられるほど俺はヤワじゃねえ！  
俺は即座に立ち上がりピッコロを睨み付ける

「まだまだこれからです！オラアア!!」

そう叫び、俺はピッコロに突っ込んでいった。

悟空との修行…

「待ちわびたぜ、この時をよ…」

俺の目の前には超サイヤ人になった父さんがいる

「ああ、俺も楽しみだったよ…『父さん』」

俺の言葉に父さんは少し驚いた反応をする

「父さん、か…前はオレのこと親父って呼んでたのによ…」

「これが俺が常に超サイヤ人になってた訳さ…」

その言葉に父さんは納得した顔をして言う

「そういうことだったのか…さて、んじゃ、やつか！」

そう言つて構える父さん、俺もそれに合わせて構えをとる

『いくぞ!!』

その掛け声と共に二人はぶつかり合う

【ドンドンドンドンドンドンドンドン!!】

俺達がぶつかり合うごとに衝撃波が生まれ空気が荒ぶっていく

「だりやああああ!!!」

「うおおおおお!!!」

父さんの攻撃を捌いていき、時には攻撃を撃ち込む

父さんも負けじと俺の攻撃を捌き、攻撃を仕掛けてくる

そんな攻防かしばらく続いた後、その戦いは唐突に終わった

「だりやああああ!!!」

「ウオラアアアア!!!」

【バキィッ!】

二人のパンチがそれぞれの顔面にヒットしたのだ

二人は互いに吹っ飛んでいき戦いは終わった。

「強くなったなあ!悟誠、オラビックリしたぞ」

元に戻った父さんがそう声をかけてくる

「そういう父さんもじゃないですか、俺なんかついていくのでやっ  
てしたよ…」

「そんなこと言っておめえまだ本気見せてねえじゃねえか」

たしかに俺は超サイヤ人龍にはなっていない

でも、あれだけ苦戦するなんて思つてもみなかつた…。

まあ、父さんが相手なんだから当然といえば当然か…

そんなことがありながらも三年間の修行は着々と進んでいった。  
.....  
ある夜、俺は真っ赤な空間で目覚めた。

「……は……」

俺は飛び起き辺りを見回す……  
辺りは燃えるような赤色一色で他にはなにもない  
ただ赤い空間があるだけだ……。

「俺はなんでこんなところに……」

「よう、目が覚めたみてえだな……」

いきなり声がかげられ俺は急いでそちらを見る  
そこにいたのは右頬に×印の傷跡をつけた父さんそっくりの男  
だった。

「……お前は！」

俺の言葉に男はニヤリと笑って答える

「どうやらオレのことは知っているみてえだな、つつても、おめえと会うのはこれが初めてになるわけだが……」

一人でなにかを話している男……そう、この男はフリーザーに一人で勇敢にも向かっていつて殺されてしまった、父さんの実の父……

「俺の爺ちゃん……」

ふと、口が動いてしまっていた。  
それを聞いた男は若干眉を寄せて

「やめろ、ジジイなんて呼ばれる歳じゃねえよ……」

呼ぶならバーダックにしろ、生まれ変わり」

バーダック……爺さんの名前か、ん？





「ん？そろそろ起きる頃か…それじゃあな生まれ変わり…いや、孫悟  
誠！カカロットと上手くやれよ」

その言葉を最後にバーダックさんの姿がブレ俺の意識は浮上する  
のだった。

ついに出現！非道な人造人間を追え！

side 悟誠

よっ！俺、悟誠だ！

俺達が修業をはじめてから三年が経った。

今は南の都の南西九キロ地点に向けて飛んでいる  
しばらくすると前方に見覚えのある人影が見えた。

クリリンさんだ。

悟飯がクリリンに気づきとなりに飛んでいく…

「クリリンさん！」

「ん？おお、悟飯か…大きくなったな」

「よっ！」

「お久しぶりです。クリリンさん」

「あ、ああ…久しぶりだな二人とも…」

「どうした？久しぶりだったのに元気ねえじゃねえか」

「…これからバケモンと一戦やろうつてのに浮かれてなんかられつ  
よ…俺は超サイヤ人じゃないんだぞ…」

ああ、言われてみれば確かに…でもなんとかなるでしょ！  
そんな風にして俺達は目的地に到着した。

俺達が着いた時にはすでに

ヤムチャさんと天津飯さん、それに何故かブルマさんが到着して  
いた。

…は？なんでブルマさんが？

「ようやく来たか、おまえら遅いぞ！ちよつと遅刻だ」

「ははは…すみません」

そんなことは気にしていないかのようには、

父さんはブルマさんの方に行くよ

「バツカだなあ！おめえなにしに来たんだよ」

「見学に決まってるでしょ、大丈夫よ、人造人間を一目見たら大人しく帰るから」

「いや、そういう問題じゃないと思いますけど…」

この人は…父さんに負けず劣らずお転婆だよなあ…

「…そんなことより、オレはブルマさんが抱いている物体の方が気になるな…」

ん？クリリンさんが目を見開いて恐る恐る聞いている

それもそうだよな、俺も聞いてなかったら驚きまくってたと思うし

…

「結婚したんですね、ヤムチャさんと」

悟飯がそうヤムチャさんに訪ねると、ヤムチャさんは

不機嫌そうになりながら言った。

「…俺の子じゃねーの」

『…え？』

ま、だろうと思った…

「とつくに別れたんだよ、俺達は…誰の子か聞いたら驚くぞ…おまえら」

「…へ？」

クリリンさんが不思議そうに首をかしげている。  
すると、父さんがブルマさんの方に歩いていき…

「はははっ！父ちゃんはベジータだよな？トランクス」

『ええっ!?!』

ズバリ言い当てた事でブルマさんも不思議そうにしている

「なんでそんなこと知ってんのよ…私、驚かそうと思って誰にも連絡してないのに」

「へ？うわあっ!!そんな気がただけさ！ほ、ほら！

顔とかベジータに似てんなって思ってたよ！」

父さん…慌てすぎだろ…分かりやすいな…

「名前までズバリ当てたわよ？」

「ほ、ホントか！オラ超能力でもあんのかなあ？」

父さんが超能力者…駄目だ、全く想像できねえ…

「それで、そのベジータはどうした…」

「知らない、一緒にすんでた訳じゃないし…でもそのうち来るんじゃない？この日のためになんか凄い修業してたみたいだし」

「来るさ、絶対アイツは来る」

「来ないはずがありませんからね」

超サイヤ人龍が気に入らないみたいだったし…

どうせ俺を越えるだとか、父さんを越えるだとかどつかでいつてるんだらうな

「餃子は俺が置いてきた、はっきり言って、餃子はこの戦いについていけない…」

こくりと頷く父さん。

「今、何時ですか？ブルマさん」

「えっと…今は9時半ね、後30分で現れるはずよ」

後三十分か…

『待機中のところ悪いが相棒、少しいいか？』

ん？なんだ？ドライグ

『どうやら奴等はもう動き出しているようだ…』

は？なんだって？でも気は感じられないぞ？

『恐らくだが…奴等は気を感じさせないのだろう…だが、気配を感じるんだ、歪な気配がな…俺にしかわからんようだ…』

奴等はもう町に入っているのか？

『ああ、まだ悪さはしていないようだ…』

そうか、それじゃ一刻も早く見つけねえと！

俺は不意に立ち上がり父さん達に向けて言った。

「俺、少しみてきます、少し嫌な予感がするので…」

「おいおい、まだ時間はあるんだぞ？大丈夫だろ」

「いえ、ドライグも言っていたのでちよつと俺見てきます！もし見つけたら気を高めます。何かあれば空に向けてドラゴン波を放ちますから」

それだけ伝えると俺は町の方に飛んでいった。

町に着くと俺は辺りを探し回った。

何処だ？いるか？ドライブグ

『もう少し奥のようだ…二つ気配を感じる』

二つか、ちよつとキツいけど…

いざとなりや龍になって一気に蹴散らせばいいが…

『この辺りだ…』

しばらく進むとドライブグが声を掛けてきた。

俺は辺りを見回す。

だが辺りには不振な人物は見当たらない…

「あの、すみません、この辺りで怪しい二人組見ていませんか？」

「怪しい二人組？ああ、さっきまでここにいたけど、

何故か消えちまった。」

消えた？

『相棒、上だ…見てみる』

ドライブグに促され空をみる…するとそこには、  
みるからに怪しい格好の老人と太った男が浮いていた。

「っ!!…お前達が人造人間か！」

「…そうだ」

「…やはりそうか、なぜここに来やがった！」

「我々の目的は孫悟空、及び孫悟誠の抹殺…」

!?:父さんに俺だと?

とにかく、父さん達に知らさなければ!

俺が気を高め始めたその時だった!

【ガッ!】

老人の手がいきなり俺の顔を鷲掴みにしてきやがった!

な、なんだ!?!力が…抜けていく?

『相棒!お前の気が著しく消耗している…恐らくコイツに気が吸収されてる…』

な、なんだって!?!クソツ!こうなったら…!

「ドラゴン波…!」

動かない体を無理矢理動かし空に向けてドラゴン波を放った。

気づいてくれ皆さん!

だが、俺の意識はそこで暗転するのだった。

side out

sideバードック

おいおい、まさかこんな事で倒れちゃうのか?

オレは生まれ変わりの様子を見守っていた。

だが、奴等に動きを封じられた生まれ変わりは最後の抵抗で

ドラゴン波を撃って気を失っちゃった。

オレの近くには生まれ変わりの精神が倒れている

「…仕方ねえ、お前の身体、使わせてもらおうぞ」

それだけ呟くとオレの意識は暗転した。

次に目が覚めるとそこには見知らぬ奴等がいた。

「！目を覚ましたぞ」

どうやら、カカロット達のような…

仙豆つてやつで助かったらしい…

オレは身体を起こし調子をみる

「大丈夫か？悟誠…ドラゴン波か撃たれたから来てみたらおめえが捕まってるからビックリしたぞ」

「ああ、なんとか大丈夫そうだ…助かった」

その返答にカカロットの表情が引き締まる

「おめえ、悟誠じゃねえな？…いったい誰だ！」

へえ、勘づいたか、勘のいいやつめ

「オレか？オレは孫悟誠であつて孫悟誠じゃない…

コイツの中に住む龍みたいなもんだ…」

そんなことより、とオレは続ける

「あいつら、放っておいていいのか？」

クイツと人造人間達をの方を指差す

「そうだな、今はおめえに構ってる暇はねえんだつた、おめえ達！場所を変えるぞ！」

「…いいだろう」

ふわりと浮き上がるカカロットと人造人間達

やつと始まるか…おい、ドライグ

『なんだ？猿野郎…』

久しぶりにあつたんだ、お前も力貸せよ



『フンツ仕方ないな…今回だけだぞ』

上等だ！

オレはカカロット達について飛んでいった。

迫りくる病魔！絶体絶命！孫悟空！

sideバーダック

オレ達が街を飛び立ってからしばらくの事だった。

もうかなり離れているはずなんだが、カカロットの奴は一向に降りる気配がない…

いったい何処まで行くつもりなんだ？アイツ…

すると人造人間達も痺れを切らしたのか、カカロットに問い始める。

「いい加減にしろ孫悟空、どこまで行く気だ…」

カカロットはそれでも飛び続けようとするが…

「ここがいい、この場所にしろ…！」

そう言う人と人造人間達は飛ぶのをやめ立ち止まる

「貴様らに選ぶ権利などないのだぞ…」

それだけ言うとなんらは降りて行ってしまった。

オレ達もそれに続いて地面へと降り立つ。

「はあ…はあ…」

地面に降りるとオレはカカロットに変に気がついた。

おかしい…何故カカロットの奴、飛んでいたただけだったのに息なんか切らしてやがる…

その様子にどうやら、他の奴らも気づき始めているようだ…。

「お前、まさか…心臓病が…」

その言葉に他の奴らが一斉にオレの方を見る

「なんだって!?それなら未来から来たアイツが薬をくれたから大丈夫なんじゃなかったのか?」

三ツ目の奴：確か天津飯って言ってやがったな、奴が言う

「いや、今まで悟誠の中から見てたが、カカロットの奴に症状は表れていやがらなかった…それが今来たってとこなんだろうぜ」

「そ、そんな…それじゃあお父さんは…」

近くにいたチビ：確か孫悟飯だったな、悟飯が泣きそうになりながら言う。

「カカロット、悪いことは言わねえ…お前は早く家に帰れ」

だがカカロットは首を横に振って返答する。

「ハア…ハア…オラがここで帰っちまったら…ハア…おめえ達がやべえじゃねえか…」

コイツ…本気で言ってやがんのか？

「今のお前がいても足手まといなだけだ、オレ達の足を引っ張らねえうちにさっさと帰って治療に専念してやがれ」

だが、奴はそれでも首を横に振る。

「いや、帰らねえ…」

その瞬間、オレの中の何かが切れた。

「さっさと帰れって言ってるんだろ！馬鹿野郎が！」

俺は怒鳴り、カカロットの後ろに回り込むと首元に軽く手刀を振り下ろした。

「?!ガッ…!!」

一瞬の叫びと共に、崩れ落ちるカカロット

オレはカカロットを支えるとヤムチャとかいう奴に声をかける

「おい、コイツを家まで運んでやれ…それと、お前も着いたら少し薬をもらっておけよ？ウイルス性だつて話だからな」

そう言つてカカロットの奴を投げ渡す。ヤムチャは慌てて受け止めると

「あ、ああ、分かった…お前たちも気をつけてな」

それだけ言つて飛び立っていった。

さーて、邪魔者もいなくなったことだし始めるとするか！

ポキポキと腕を鳴らしながら、オレは人造人間たちの方を見る。

「孫悟空を逃がしてよかったですか？20号」

「フンツ…あの様子なら放つておいてもくたばる…コイツだけを倒すことに集中しろ…19号」

「…はい」

へえ、どうやらアイツらはオレを倒せる気にいるらしい…

面白れえじゃねえか、たかが鉄くず風情がオレに勝てると思うとはなあ…

「お前らは下がつてろよ？居られると邪魔だ…」

俺はハゲたちに下がるように言う。

「なんだとお！お前一人でアイツらをやれるつてのかよ！」

激昂するハゲ、うるせえ奴だな…

「出来るから言つてんだろうが…分かつたらチャツチャとしやがれ」

「クツ…悟誠の姿で言われるとなんか腹立つぜ…」

そう言いながらも下がっていくハゲ達。

「さあて、どっちが相手してくれるんだ？オレは二人相手でも構わねえぜ？」

「19号…お前一人でも倒せるレベルだ、行つて来い」

「はい、20号…」

そう言う人と人造人間の片方が前に出てきた。

「お前が相手してくれんのか？デブの鉄くず」

「孫悟誠、お前を抹殺する…」

オレは構えを取り、応える

「やってみやがれ！その前にお前をスクラップにしてやらあ！」

「ドライブ、アレの準備は出来てんだろうな？」

『ああ、もう完了しているぞ、いつでも発動可能だ』

「ソイツはありがてえ…いくぞ！アルティメットブーストオ!!」

『Welsh Super Saiyan! Ultimate Booster!!』

その瞬間！オレの身体を赤と金のオーラが包み込み、その姿を変えた。

「ナアニツ!?!」

驚いている20号オレは不敵に笑う

「この姿になったオレをさつきまでのオレと思ってたら死ぬぜ！ウオラアツ！」

「ツ…！」

オレは一瞬で19号との距離を詰めると思い切り蹴り上げる。

そのまま追い打ちをかけるように奴の後を追い、上へ上へと蹴り上げていく。

「ツツ…!!」

「喰らいやがれえ!!」

奴が飛んで行った先に現れオレは全力でアームハンマーを叩き込む。

それを喰らった奴は勢いよく地面に墜落した。

「これで最後だああ!!!」

オレは『ライオット・ジャベリン』を展開し、奴に向け放った。

「!!」

すると奴はソレに向かって手を突き出した。

その直後！オレが放った攻撃は奴の手に吸い込まれてしまった。

「なにっ!!」

奴はニヤリとするとこちらに向けて突っ込んできた。

「速い！がふぁッ!!」

すると、奴はオレの腕を掴んできやがった。

マズイツ！気が吸い取られていく！

「五万…倍化あ！」

『Fifty thousand Booster!!』

その瞬間！オレの力と気が膨れ上がった。

みなぎってきた力を利用し、オレは奴の腕を逆に掴み引っ張る。

すると、奴の腕はまるで毛糸でも引きちぎるかのようにあっさりと  
腕げる

「?!?!?」

あまりの事に動揺している19号  
俺は引きちぎった腕を放り投げる。

「さて、これでもう吸収は出来ねえなあ? 鉄くず」

「ヒ…ヒイイイイ!!」

白い顔を真っ青にして後ろへ下がる19号

そのまま背を向け、一目散に逃げだしやがった。

「逃がすわけねえだろ?」

オレが手を構え止めを放とうとした時だった。

それより早く青い光弾が真っ直ぐに19号に向けて飛んで行き、奴の身体ごと爆散させた。

「フンツやはり人造人間なんぞ恐るるに足らんな…:ガラクタメ」  
そう言って降りてきたのは他でもないベジータ王子だった。

20号を追え！探せドクター・ゲロの研究所！

sideバーダック

「フンツ：ガラクタが、こんなやつに未来のオレは殺されたってのか？馬鹿馬鹿しい…」

そう言いながら降りてくるベジータ王子。

「おい、なんで止めを邪魔しやがった？ベジータ王子さんよ」

オレの突っかかりにベジータは『フンツ』と鼻をならして答える。

「貴様がいつまでもグズグスしてて鬱陶しいから止めを刺してやったんだ、超サイヤ人龍になっても…つて、待て、貴様、今オレの事をなんて呼んだ？」

「あ？ベジータ王子だが？なにか問題あるか？」

「それは惑星ベジータにいたサイヤ人しか使っていなかった呼び名だ、貴様！何故その名を知っている！答えろ！」

「アンタに答える道理はねえな…」

オレの答えにあからさまに顔をしかめるベジータ王子。

「貴様！オレに逆らうとどうなるのか、忘れたわけではないだろう、このオレの！サイヤ人の王子であるこのオレの恐ろしさが」

「ああ、昔はそうだったかもな…だが、今のアンタは違うだろ？王子でもなんでもねえ、ただのサイヤ人だ」

「くっ…！チッ！食べない野郎だ…」

そんなベジータ王子を無視してオレは20号の方を見る。



「さて、1体は消し飛んだ…残るはお前だけだな鉄くず…」  
20号はこちらを睨みながらも後ずさりする。  
すると、ベジータ王子が不意に声をかけてきやがった。

「退いてろ、アイツはオレが倒す。お前はそこで見ている  
はああああ…!!だあああつ!!」

その瞬間!ベジータの身体を金色のオーラが包み込み、顔や頭が鋭  
くなると金髪へと変わっていく。

「へえ?アンタも超サイヤ人になれるとはね」

「フンツ…それでもお前のソレには通じないのだろうか?  
チツ!良い気になりやがって…いいか、オレはすぐにお前のソレも  
越えて見せるからな!」

「はいはい…期待しねえで待っててやるさ…(悟誠がな)  
それよりアイツ待たせちまつてるみてえだぜ?」

「フンツ…そんなこと分かっている!」  
そう言つて、改めて20号へ向き直るベジータ王子  
オレも20号を見て問いかける。

「さて、明らかに戦力に差が付いちまったな?鉄くず  
これでもまだ余裕ぶつていられるか?」  
すると、20号は突如として笑いだした。

「…クックククク…さあ、どうかな?」  
おかしい、どう考えても、アイツとオレ達の戦力の差はこちらの方  
が上のはず…なのになんだ?アイツの余裕は?

すると、後方から別の奴の気を感じ、オレはそちらをみる。  
そこにいたのは、三年前に未来から来たあの少年…トランクスだつ

た。

トランクスは驚いた顔で言う。

「な…なんですか？アイツは…」

その問いにクリリンとか言うハゲが答える。

「何って、アイツはお前が言ってた人造人間じゃないか」

しかし、トランクスは首を横に振り言う

「いえ、あんな奴は未来では見たことがありません」

その言葉にその場にいる全員が驚愕する。

それが仇となった…。

「フハハハハッ！貴様らに勝ち目がないのは本当だ！すぐに17号と18号が貴様らを殺しにくるぞ！」

その直後、辺りにデカイ気の爆発が巻き起こった。

オレはその爆風に顔を覆う

「チッ…あの野郎！」

爆発が収まるとそこには奴の姿はなかった。

「チッ…逃げられたか、追うぞ！」

ピッコロとか言うやつ言葉でオレ達はすぐに探し始めるのだった。

動き出した脅威…17号と18号機動！

sideバーダック

よう、バーダックだ。

今現在、オレ達は人造人間二十号とかいうヨボヨボのガラクタの後を追いかけてる最中だ。

「おい、ドライグ… あいつは何処にいる？」

『ここから北西に進んだ三百メートル地点だな。』

「そうか、おい！ 奴は北西の方角いやがるらしい、距離はそれほど空いてないらしい

急ぐぞ！」

それだけ後ろの奴らに伝えるとオレは急激に速度を上げた。

ドライグの案内でオレはすぐに奴に追いついた。

今奴はある洞穴の目の前にいる

奴はオレを気づいているみてえだが、何食わぬ顔をしてその洞穴の中に入っていた。

「こんな洞穴に逃げ込んで何しようってんだ？」

後に続くように俺も洞穴の中へと入っていく。するとそこで目にしたものは意外なものだった。

「なっ!? こんな場所に鉄の扉だど？」

オレが驚愕していると、急にオレの中から

『おい、猿野郎、相棒が目を覚まして身体を返せと言っている。

そろそろお前の時間も終わりだ…』

チツ！もう目覚めちまったか…：：：しょうがねえ、今回はここまでにするか

「わーった、わあった、ホラよ…：：」

その直後、オレの視界は暗転して暗い意識の海に沈んでいった。

side out

side 悟誠

目覚めると、俺は洞穴の中にいた。

「悟誠、起きたのか！何があったんだよ？こんな所で寝てるなんて」

声をかけられてそちらを見るとクリリンさんを筆頭に天津飯さん、ピッコロさん、

ベジータさん、悟飯、それに未来から来たトランクスという少年だった。

「え？ああ、大丈夫つすよ…：： なんにもないですから」

そう言って起き上がると、みんなが目を丸くしている。

「?…：： あの、どうかしました?」

「お前、ホントの悟誠なのか?」

「?何言ってるんすか?どこから見たって俺じゃないっすか!」

試しにくるりとその場を回ってみる。

「確かにさっきまでの気は感じられん…：： いったい何だったんだ」

「貴様、今はあの小僧なんだろうな？」

「だからそうだって言ってるじゃないっすか、どうしたんすか？みん  
なして…。」

「あ、ああ、実はな、さつきまでお前の身体で違う奴が動いてたんだよ。  
口調が荒くて凄く強い…。まあ悟誠の身体を使ってたからかもし  
れねえけど、

とにかく滅茶苦茶強かったんだ！ソイツじゃないかって皆疑って  
るのさ」

ああ、と俺は納得がいった。

「それはオレの中にもう一つの存在ですね」

詳しいことは話さない方がいいんだよな？

爺ちや…。バーダックさんが何も言っていないみたいだし…。

「もう一つの存在だと？どういうことだ！」

「簡単なことつすよ、ベジータさん。今の俺が表の悟誠だとしたら

さつきまでいた奴は俺の裏の存在、分かりにくければ俺を悟誠、裏  
の方を一誠とおぼえてくれればいいです。」

「う、ウラ？お前、二重人格だったのかよ？」

「なるほど、それなら先程までの口の悪さも納得がいきます。」

「表と裏の人格か、面倒だな…」

あはは…。面目ない…。

すると、扉の向こうから声が聞こえてきた。

『十七号！悪い冗談はやめて、早く扉の向こうの敵共を倒して来い！』

その言葉に俺以外の全員が固まった。

「ああ…?! 人造人間はもう動き出している…!」

十七号? 確かバーダックさんが身体を使っていた時に聞いたな。

あのジジイの人造人間が言ってた… 確か、十七号と十八号だったか?

そいつらがもう起動してるってことか。

「退け! 馬鹿野郎!」

声がしたので見て見ると、ベジータさんが扉に向けて手を向けていた。

扉を破壊するつもりのようにだ。

それを見て慌てて止めるトランクス

「いけません! ここはとりあえず逃げるんです! 孫悟空さんが回復するまで待つて… それから「必要ない!」…!?!」

トランクスの制止も聞かずにベジータさんは扉にエネルギー波を放ち破壊する。

『っ!?!』

【ドガアアアアン!!】

勢いよく扉が開け放たれる

そこにいたのは、ヨボヨボのジジイと首にスカーフをした黒髪の少年、

その隣には可愛い感じの少女が立っていた。

ムムツ! あの少女のおっぱい!

中々の大ききさだ! それにハリもありそうだ… 良いおっぱいしてるなあ…

「お兄ちゃん、顔がすごく気持ち悪いことになってるよ…?」

悟飯が若干引いたような顔で声をかけてくる。  
おおっと！いかんいかん！今はそんな時じゃなかったな。  
その横ではベジータさんがトランクスに人造人間の特徴を確認していた。

「あ、あの二人が十七号と十八号…」

「見た目に惑わされてはいけません。  
本っ当に恐ろしい奴らなんです！」

『フン…』

その言葉に二人はただ鼻で笑うだけ。

「アイツらが以前話した孫悟空の仲間どもだ！悔るなよ？」

十九号を破壊し私も殺されかけたんだ！」

その言葉に十七号が反応する。

「十九号？そんな奴も作ったのか」

「あ、ああ…」

「なるほど、そいつで博士自身を人造人間に改造させたわけだな。

タイプは… エネルギー吸収式か」

「そ、そうだ」

そこで、十八号が口を開く。

「どうして新型なのに古いエネルギー吸収式に戻したの？  
永久式はパワーが強すぎて手に負えないからかしら？」

「そうだ…」

「だから負けちゃったのよ」

「なんだと！そんな事はどうでもいい！さっさと奴らを片付けてしまわんか！」

「ごちやごちや抜かすな、俺達はやりたいたいときにやる」

「な、なんだとお!?!」

怒りにワナワナと震える二十号、否、ドクター・ゲロ

「ハントツ！」

まるで、ドクター・ゲロの考えをあざ笑うかのように十八号はコントローラを踏みつけながら歩いていく。

「十六号か、これも永久式タイプなんだよね？私達とはちよつと作りが違うんでしょ？作りも大きいし、どこが違うのかな？」

十六と書かれたカプセルを触ろうとする十八号。

それを慌てて止めるドクター・ゲロ

おもしろそうだと行って開けるのを促す十七号

全く言うこと聞いてないよな？あの二人……

すると、この隙に逃げた方がいいんじゃないかと提案するクリリンさん。

それを自分を除いて賛成するベジータさん。

どうあっても一人でカタをつけるつもりらしい……

それを慌てて止めるトランクス。

「十六号は試作型で失敗作なんだ！絶対に動かすんじゃない！」

未だ内輪もめをしている人造人間ども。

すると、十七号がドクター・ゲロの首を蹴り落としたのだ。



「なんて奴だ… てめえを作った親を…」

クリリンさんがそう口にする。

俺達も唾然として言葉が出てこない。

俺達を無視して十六号のスイッチを押すように指示する十七号

その時だった！

「そうはさせんぞ！これ以上人造人間を増やしてたまるか！ハアアア  
!!」

トランクスが突如、超サイヤ人になり二人に向けてエネルギー波を放ったのだ。

ってマジかよ！こんな狭いところでぶっばなすなよ！

「バカ野郎！」

慌ててその場を離れる俺達。

だが、爆煙が晴れると、そこには傷一つない人造人間たちがいた。

「おいおい、マジかよ…」

俺はあまりの事に目を疑った。

そうこうしているうちに、二人は十六号を起動してしまった。

カプセルが開き中から大柄な緑色の機械じみた男が現れる。

二人は十六号が動くのを確認するとどこかへと飛び去ってしまったのだった。

遂に激突！超サイヤ人VS18号！

side 悟誠

よう！悟誠だ。

今俺は18号という人造人間と対峙している。

どうしていきなり困難事になっているのかって？

それは時間を少し遡るんだけど…

十数分前まで俺達はドクター・ゲロの研究所後にいたんだ。

だけどその時にベジータさんが。

「あの野郎共…！ここにオレがいるというのに無視していきやがった！

舐めやがって！」

と、一人で勝手にぶち切れてしまいやがりました…

单身、人造人間に挑もうとしていたんです。

それを慌てたトランクスが引き留めたんだけど、実力行使で無理やりトランクスを押し退けていつちまったんだ。

その後すぐに人造人間たちがどこに向かったかひらめいたクリリンさんの言葉で俺達はすぐに家に向かったんだ。

でもすぐにベジータさんの大きな気を感じてその場に向かったんだ。

だけど、すぐにベジータさんはやられちまったんだ。

ベジータさんを助けに行こうとしてトランクスも一撃で伸ばされてしまった。

「くそっ！こうなったら！」

『止めておけ… お前達では歯が立たんだろう』

ヤケクソぎみにピッコロさん達が飛び出そうとしたのをドライブグ

が止める。

「へえ、面白い左腕だな喋るのか…。」

17号が感心したように俺を見る。

「さて、目的の一人はここにいるわけだが、どうする？お前もこいつらと同じように挑んでみるか？」

「へっ！いいぜ？それでも、だが、俺がその二人の様にいくと思うなよ？」

その言葉に18号が反応する。

「そんなこと言っちゃうんだ、いいわ、続けて私がやる」

18号が相手か、これは都合がいいな。

ちようど試してみたい技があったんだ。技の実験台になってもらうぜ！

「後悔させてやるよ、造られてきてしまったことを！行くぜ！  
ハアアアアアツ！乳語翻訳！バイリンガル」

俺は超サイヤ人に変身して、新たな技、乳語翻訳を発動させる。

「？何してんの？？」

「さあ！18号のおっぱいさん！これから18号は何をしようとして  
いるの？？」

すると18号の胸から声が聞こえてきた。

『それはねえ〜高速で近づいて腹に膝蹴りをぶち込もうとしてるの  
よお〜』

ほうほう、なるほどなるほど

そんじゃ俺はこうすればいいな！

18号が一瞬で距離を詰めてきた瞬間を狙って俺はしやがみ込み足払いを放つ。

「なっ!?!」

驚いてそのまま倒れる18号。

それを他所に俺は再度問いかける。

「おっばいさん、次は何をしようとしているのかな?」

「さつきから何をぶつぶつ言ってる訳?」

『転んだ反動を利用して飛び蹴りしようとしてるのよねえ』

ふむふむ、そんならこうだな!

直後、蹴りが飛んでくるが俺はそれをバックステップで距離を空け、蹴りを躲す。

「… さつきから攻撃が当たらない」

「どうした?俺に一発も当たっていないじゃないか」

「!… 舐めてくれるじゃない」

その後も18号は攻撃を繰り返してくるのだが俺には全くと言っていいほど当たらない。

段々と苛立ち始めてきた18号に突然声がかかる。

「18号、もういい、それ以上ソイツと戦っても時間の無駄だ。」

「いいの?コイツもターゲットの一人なんでしょ?」

18号が攻撃をやめ、17号に問いかける。

「ああ、別に孫悟空の奴をやってからでもいい訳だしな。楽しみは最

後を取っておいた方が面白いだろう？」

「はあ、やっぱりアンタまだ子供だよ…。」

やれやれといった感じで歩き始める18号。

「そうか？まあいいじゃないか、人生面白くしてなんぼなんだ。楽しまなきやな」

あ、そうだ。と、不意に17号が俺達の方を向いて答える。

「あいつらに仙豆って奴を食わせてやれよ？もし強くなってまた挑んで来たら相手してやるって言っておいてくれ。じゃあな」

それだけ言うと三人はどこかに飛んで行ってしまった。

遂にひとつへ！ピッコロと神様融合の時！

sideイッセー

「ほら、二人とも仙豆です。」

俺は倒れた二人に仙豆を食べさせる。

「…… フンッ」

「ありがとうございます……」

途端に元気に立ちあがった二人を見て、俺はホッと息を吐く。

「それにしても悟誠、お前、先程の戦い、手を抜いていたな。何故超サイヤ人にしかならなかった！お前が本気を出せば、アイツら等簡単に消し飛ばせたはずだ！」

不意にピッコロさんがそう話しかけてくる。

「確かにあの超龍形態……超サイヤ人龍ならそれなりに戦うことはできたかもしれませんが……でも今俺はあの姿になれないんです。」

俺がそう言った瞬間皆が一斉に此方を向く。

「それはいったいどういうことだ！」

「簡単なことですよ、あの姿は超サイヤ人の時より身体にかかる負担が大きい。」

それに通常ではありえない倍化によって中にいるドラゴンにも相当負担が掛かってしまうんです。なので、一度この形態になったらその後、約一カ月は神器がえないんです。」

「とんでもないパワーアップをする代わりにかかる代償も高いという事ですね？」

トランクス of 言葉に俺はコクリと頷く。

「結局、俺達の事は気にするに値しないという事か… 相手にもされないとは…。」

天津飯さんが不意にそう呟く。それにピッコロさんが応じる。

「当然だ、奴らはとてつもなく強い… 強すぎる！まさかあれほどまでとは…。」

それをきいたていたベジータさんはいきなり何処かへと飛んで行ってしまった。

慌てて後を追おうとするトランクスをピッコロさんが止める。

「放っておけ、アイツは超サイヤ人となり、絶対の自信とプライドを手に入れた。だが人造人間とはいえ女にコテンパンにやられたんだ。奴のシヨックは大きいだろう…。」

沈黙が辺り一帯を包む。

「それにしても、悟誠ですら躲するのが精いっぱいだった奴らに俺達が敵うのか？」

『おそらく無理だろうな、相棒がああ姿になっただとしても戦えはするだろうが勝つのは厳しいだろう…』

沈黙を破った天津飯の問いにドライグが話し出す。

「その声は悟誠の中にいるドラゴンか、どういうことだ？」

『簡単なことだ… 奴らのパワーが相棒を上回っていた。ただそれだけの事』

「そんな…」

圧倒的な絶望…。どうすることもできない未来。

「とにかく、お先真つ暗だな。どうする？これから」

「お前たちは、孫悟空の家に行って、奴を別の場所に移すんだ。あれこれ考えるのはどっちにしる孫悟空の病気が治ってからだ…」

「そうだなーで、ピッコロ、お前は どうするつもりなんだ？」

クリリンさんの言葉にそっぽを向きながらピッコロさんは答える。

「さあな…」

ピッコロさんがとった態度に違和感を感じたのか、クリリンさんは更に問いただそうとする。

しかし、いきなりキレたピッコロさんは俺達に気弾を放つとどこかに飛んで行ってしまったのだった。

ピッコロさんを見送った俺達は、すぐに父さんのもとに向かうのだった。

side out

sideピッコロ

オレは今神の神殿に来ている。

目的は俺の半身である神だ。

神殿に着くと神の奴はまるで分っていたかの世に待ち構えていなかった。

「オレが何のためにここに来たか、分かっているだろう」

「ああ、分かっている…元々私とお前、いや正確にはお前の親とは一人の存在だった。考えていることぐらい分かっているつもりだ…」



「フン、ならば話は早い」  
だが、と神は続ける。

「今下界はとんでもない化け物が暴れまわっている。奴を止めねば地球は取り返しのつかないことになるだろう…。」

「どういう意味だ、詳しく話せ！」

「いや、わざわざ話す必要はない… 私とお前が融合して一人になればそれで見たことが分かる。」

その言葉にオレは一瞬驚く。

「フツヤつとその気になりやがったか。」

「急ごう… これ以上犠牲者を増やしてはならん…。」

「よーし！」

オレと神は向かい合う。

「基本ベースはこのオレのままだ！いいな！」

「それでいい、お前はまだ若いし、パワーも今や私よりはるかに上だ。私はパワーアップのきっかけにすぎん、後は広い知識を与えるだけだ…。」

フンツ！よく分かってるようで安心安心したぜ。

「では、基本となるお前が私に触れるのだ…。」

「よし、分かった。」

俺は神の身体に手を置く。

「あ、ああ…：神様…：」

「よいのだ、ミスターポポ、今の地球に必要なのは神ではない。  
この星を危機から守れる…：強者だ。」

「色々世話になったな…：ミスターポポ、お別れだ…：」

ウオアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

刹那、神の身体から光が発せられ辺り一面を白く照らした。

光が収まるころには神の姿はなく、オレとミスターポポがいるだけ  
だった。

「…：…：…：…：」

オレは自身の調子を確認してみる。

問題はないみたいだ…：。

オレは下界へと歩き出す。

「さ、サヨナラ神さま…：死なないで…：」

ミスターポポか、コイツともこれでお別れだな。

「もう神でもピッコロでもない。本当の名すらも忘れてしまったナ  
メック星人だ…：」

神殿の端に立ち振り返るとオレはポポに告げる。

「じゃあ、行ってくる。」

こうしてオレは下界へと降りて行ったのだった。

## 急げ悟誠！悟空に迫る命の危機

side 悟誠

ピッコロさんと別れてから俺達は家へと向かっていた。  
その道中、クリリンさんが口を開く。

「なあ、トランクス、悟空にやった心臓病の薬ってどのくらいで良くなるんだ？」

「そういえばそうだ。長い闘病になったりしたら父さんの前に俺達  
が殺されちまうかもしれない…。」

「悟空さんなら十日位で治ると思いますが…。」

「へえー、意外と早く治るんだな。もつとかかるかと思ってたけど  
…。」

「十日か…。それくらいなら十分隠れていられそうだな」

「ああ、なんとかかな…。」

「だといいつすけどね…。」

「もつとも、悟空が元気になって戦えりや勝てるって言うのも怪しく  
なってきたけどな…。」

悟誠でも勝てるか怪しいくらいだもんな…。と続けるクリリンさ  
ん。

確かに…：父さんが良くなっても勝てなければ意味がないんだも  
んな…。

「とにかく、あの三人がパワーをキャッチするレーダーを持っていな  
いらしいってのはラッキーだったよな」

「はい…」

「ですね…。」

そう言うのと、俺達は速度を上げ家にむかうのだった。

しばらく飛んでいると、不意に天津飯さんが声をかけてきた。

「おい、悟誠、クリリン」

「え？」

「はい？」

「俺は一旦、餃子を拾って特訓に出ようと思う…。」  
「特訓か…。もうそれしかなさそうだもんな…。」

「あ、そうか…。」

「気をつけてくださいいね、」

「ああ、再び雲行きが怪しくなったらまた駆けつける…。」

もつとも役に立つとは思えんが一応な…」  
確か…に少しでもやっておいて損はないはずだ。

「悟空の奴にも言つといってくれ、無茶だけはするなと…」

「了解つす」

それだけ伝えると天津飯さんは方向を変え、何処かへと飛び去ってしまった。

「…無茶するな、か…そうだよな、今度ばかりはいくら悟空でも…  
そつとクリリンさんが口を開く…。

「どうして彼処まで歴史が違ってしまったんでしよう？」

俺のいた未来ではあそこまで桁違いのパワーじゃなかった…。しかも二体だけだったのに…」

「そんなこと知るかよ…とにかく、この時代じゃそれが現実になつちまったんだ。もう、やるしかねえんだ…。」

「……………」

そう言ううと俺達は更に速度を上げるのだった。

しばらく飛ぶと家が見えてきた。

「見えました！あそこが俺達の家です！」

「ああ、早く行って悟空を武天老師様の所へ運ばないと…。」

俺達は速度を落とし、家の方へと降下していった。

.....

家の前に降り立った俺達は家に入ろうと扉へとむかう。  
その途中、俺はふと思ったことを口にする。

「あの人造人間達って、ホントに無茶苦茶悪いやつらなのかな……」

「え？どうしたんですか？急に……」

「そうだ、何を言い出すんだよ、悟誠」

何を言ってるんだと言った顔で俺を見てくる二人……。

「いや、戦ってて思ったんですよ。あいつら、そこまで悪い奴等じゃないんじゃないかって……」

「……少なくとも、俺達のいた時代でもなく冷酷な奴等でしたから……あまりそういう希望は持たれない方がいいと思いますよ？」

「そうだぜ！実の親すら簡単に殺すような奴等だ！

止めてくれるなんて思わない方がいい」

やっぱそうなるよな……。でも、なんか引つ掛かるんだよな……。

「だよな、悪い変なこと言っちゃまって……。」

そうして俺が扉に近づいた時の事だった。

「悟飯ちゃん！帰ってきたただか!？」

その声と共に勢いよく扉が開けられ、俺は思いっきり頭をぶつけて  
しまう…。

「痛ってええええええ!!!」

その日、パオズ山に俺の絶叫が響き渡るのだった。

恐るべき真実！もう一つのタイムマシン

side 悟誠

「大丈夫？悟誠お兄ちゃん」

「あ、ああなんとかな…。」

おつす、俺悟誠！

父さんを運ぼうと家へと帰ってきたらいきなり顔面を強打されちまったよ…。

「すまねえだ、悟誠、それと二人ともよく無事に帰ってきたな！おつかあうれしいべー！」

「へ？（え？）」

いきなり二人揃って抱き締められ困惑する俺と悟飯。

「チチさん、オレ達もいるんすけど…。」

クリリンさんの言葉に母さんがそちらをみる。

「ああ、クリリンさんも来てたのけ」

「どうも…。『悟空の奥さんだ…』」

クリリンさんがトランク스에耳打ちする。

「あ！は、初めまして！」

すると、部屋の奥からヤムチャさんが出てきた。

「あ！クリリン、悟誠に悟飯も！無事だったか！心配したぞ！」

「父さんの様子は…？」



「今、薬を飲んで今眠っているよ…。」

「ん？お前は未来からきた…。」

「ヤムチャさんがトランク스에 気がついて声をかける。」

「そうか！お前が人造人間を倒してくれたんだな！」

『え…？いや…。』

「口ごもる二人に俺は代わりに答える。」

「ヤムチャさん、すみません。人造人間はまだ倒せていないんです…。」

「詳しいことは後で話すけど…。急いで武天老師さまの所へ移動しなければいけないんです！みんな揃って！」

「なに…？」

「新手のもっと恐ろしい人造人間がその内ここへやって来るんです。」

「え？」

「そ、そりゃ、大変だ！急いで準備しよう！」

「俺達は急いで移動の準備を整えた。」

「俺は父さんの上半身を持ち上げてヤムチャさんに言う。」

「ヤムチャさん、足をお願いします。」

「あ、ああ…。」

「そーつとだぞ？そーつと…。」

「母さんに言われながら極力揺らさないように寢室から飛行艇に乗

り込む。

横ではクリリンさんとヤムチャさんが話している…。

「新手の人造人間ってのはそんなに強いのか？」

「ええ、もう強いなんてもんじゃありませんよ。悟誠ですら避けるので手一杯だったんですから…。」

「なにっ!? それじゃ打つ手無しじゃないか、どうするんだこれから」

「とにかく、悟空が治るまでどうにか逃げ延びるしかないでしょう…。」

「それしかないか…。それじゃ、出発するぞ」

ヤムチャさんが飛行艇をの舵をとり、俺達は亀の爺さんの所に向かった。

飛行艇の中でクリリンさんが事の顛末を母さん達に話してくれた。それを聞いていた母さんが不意に悟飯に勉強をさせだした…。母さん、こんなときまで勉強かよ…。

その後もこれからどうするかを話し合った結果…。

ブルマさんに連絡をとることになった。

「ええ…。オレが連絡するんすか？嫌だな…。」

「ブルマさんと付き合い長いでしょ？お願いしますー！」  
「やれやれ…。と言いつつもクリリンさんは渋々引き受けてくれた。」

「お前のおつかさんキツいんだよな…言うことが…。」

「あははは…。未来でも変わってませんよ…？？」  
「いつの時代でもあの性格は変わってないってことか…。」

ピツピツピツ！プルル…。ガチャ！

『はい、もしもし』

「以外とすぐ出たな、ブルマさん。」

「あ、ブルマさん、クリリンですけど…。」

『ああ、クリリンくん丁度よかった…。そつちに大きくなった方の私の息子のトランクス、いない？』

「え？ああ、丁度いますよ？。」

『良かった、ちよつと変わってくれない？』

「？…そのまま喋っていいすよスピーカーから聞こえますから」

『そう、じゃあさ、トランクスあんたタイムマシン忘れてきたりしてない？』

「えっ？」

慌てて確認を始めるトランクス。

無くしたのか…。アレ無いと未来に帰れないんだろ？

「いえ、ありますよ？ちゃんとカプセルにしまってあります」

「あるらしいですよ？」

『そっか、じゃあ違うのかな？実はねトランクスのタイムマシンと似たような形の機械が捨ててあつたつて一般の方から連絡があつたのよ、それで画像を送ってもらったらビックリよトランクスのタイムマシンそっくりなんだもの！』

画像を送るから見てちょうだい』

そう言うのと印刷口から一枚の写真が送られてきた。

『なっ!?これは…！』

それは紛れもなくトランクスが乗ってきたタイムマシンだったのだ…。

# タイムマシンの真実！もう一人のタイムトラベラー

side 悟誠

『ね？アンタの乗ってきたタイムマシンにそっくりでしょ？』  
スピーカーからブルマさんの声が聞こえてくる。

「はい、瓜二つです。」

「なあ、未来のブルマさんっていったい幾つタイムマシンを作ったんだ？」

俺は気になってトランクスに聞いてみる。

「幾つって、一機作るのだけでもやっとでしたから…。」

「お前が知らないだけじゃなくてか…？」

「ええ…。」

その言葉にコクリと頷くトランクス。

うくん…。じゃあいったいこれはなんなんだ？

しばらく船内を沈黙が包み込む…。すると不意に

「この写真の詳しい位置、分かりますか？」

トランクスの言葉をクリリンさんが伝える。

「その写真の詳しい場所分かりますか？って言ってます」

『うくん…。詳しくはないけど西の1050地区の何処かだと思うわ、行くの？』

「はい、この目で見てみたいんです」

『そう、じゃあ私も行くわ、そんなに遠くないから』

「え…？わ、分かりました。」

『じゃあ、後でね』

そう言うとお話は切れた。

俺はトランク스에話しかける。

「……行くのか？」

「はい、これがなんなのか確かめてみたいので」

「そっか、なら俺も一緒に行くぜ」

「え？悟誠さんもですか？分かりました。」

すると、悟飯が口を開いた。

「あの、僕も探しますよ、行っていいですか？」

「悟飯ちゃん、それに悟誠まで…。」

母さんが心配そうな声をあげる…。

「大丈夫ですよ、お母さん。危険な所へ行く訳じゃありませんから」

「そうそう、この写真の物がなんなのか見に行くだけなんすから、そう心配しないで大丈夫ですよ」

しかし、いまだ心配そうな母さんは小さくため息をつくと言ったよ  
うに口を開いた…。

「……本当は行かせたくねえが仕方ねえ、二人とも、気を付けて行ってくるだぞ?」

『はい!』

二人して元気よく返事をする。俺はトランクスに目配せし飛行艇から飛び立つのだった。

.....

しばらく飛んでいると、不意にトランクスが腕時計のような物を確認して声をかけてきた。

「西の1050地区はこの辺りの筈です……。」

「探しましょう!」

「これだけ広いんだ手分けした方が早いと思う、俺はこっちを探してみるからトランクスと悟飯は向こうを頼む」

『分かりました!』

そこで俺達は三手に別れて写真の物を探し出した。

――

探し始めて十数分……。

いまだ目的の物は見つからない……。

「なあ、ドライブ、前みたいに探せないのか?」

あまりにも見つからない

『無茶を言うな…。気配をたどるのは出来ても物探しは専門外だ…。』

「人造人間は見つけられたくせにか？」

『彼奴らからは人の気配が微かにだが残っているから探せたんだ…。あれが完全な器械となるともうお手上げだ…。』

なるほど、それじゃあ駄目だわ…。

「にしても、全っター！見つかんねえ！どこにあんだよ！タイムマシンモドキは！」

すると、遠くから悟飯の声が聞こえてきた。

「悟誠お兄ちゃん！トランクスさん！ありましたよ！」

お？悟飯が見つけたみたいだ。

俺は直ぐ様悟飯の元に向かった。

――

悟飯の元に着くとトランクスも丁度来ていた。

「よく見つかりましたね、悟飯さん」

「ああ！お手柄じゃないか！悟飯！」

「えへへ♪」

すると、遠くの方に飛行機の影が見えた。

「きつと、ブルマさんですよ。僕が案内してきます！」

「おう！頼んだぜ悟飯」



「はいー」

そう言うのと悟飯は飛行機の方へ飛んでいった。

「……これは……。」

ボロボロの機体を見上げるトランクス……。

「ん？どうした？何か分かったのか？」

「はい、これは……。いえ、やはり母さん達が来てから話します……。」  
その言葉に俺は頷く。

「わかった、それじゃあ待つか」

俺達はブルマさん達が来るのを待った。

――

しばらくすると飛行機が俺達の近くに降りてきた。

『はあいー！トランクス！』

スピーカーから言わなくても聞こえてるって……。

にしても、相変わらずいいおっぱいしてるよなあ……。

「む……。悟誠くん、今いやらしいこと考えてなかった？」

ジロリと俺をにらむブルマさん……。

アンタはエスパーかよ……。

「いえーそんな滅相もない！そんなことしたらどうなるか分かったもんじゃないからね」

「ふうん…。まあいいけど、それにしてもこれが例の物な訳だ…。」  
ふう、危なかった…。下手なこと考えてたら殺されちまうなこりや  
…。

「あの、それより見てください」

トランクスが自身の持つカプセルを投げてタイムマシンを展開する。

「これが、俺の乗ってきたタイムマシンです。」

それを見てブルマさんは納得したように頷いた。

「あら、それじゃあこの古びた方のこれはアンタのじゃないわけだ」  
その言葉にトランクスは首を横に振る。

「いえ、あなたは未来でタイムマシンをたった一機しか作らなかつた。  
コイツも俺の乗ってきたタイムマシンそのものなんです。」

『え？』

「そんな…。」

いったいどういうことなんだ？

「これを見てください」

そう言つてトランクスはボロボロのタイムマシンのボディの苔を  
落とした。

すると、そこから出てきたのは『hope』と書かれた文字だった。

「ホープ、希望？」

その言葉にトランクスは頷く

「ええ、俺が出発の時に書いた文字です。無論、あつちのタイムマシン

にもこれがあります…。」

俺はトランクスが出したタイムマシンを見ると？

確かにhopeと書かれていた。

「でも、どういうことかな？こつちのはここに来て随分時間が経っているみたいけど…。」

確かにそうだ、それに上の部分の大きな穴も気になる…。

俺達は飛び上がり穴をよく見てみる。

「あれ？この穴、変ですよ？高熱で溶けたような…。しかも中から開けた穴ですよ？」

確かに変だ…。普通なら上の部分の窓が開いて外に出られるはずなのに、どうしてこんな出方をしたんだ？

「な、なによ…。何者が乗ってきたっていうの？」

「…とにかく、開けてみましょう」

トランクスが窓を開け、中に入ると操縦席に何やらトゲトゲした殻のような物が落ちていた。

「これは…こつちにも」

「なんですか？それは、ヤシの実じゃあ、ありませんよね？」

「いや、見た感じなんかの殻じゃねえかな？」

「何？ねえ、ちよつと見せてよ！」

ブルマさんの言葉に悟飯が殻を持っていく。

それをブルマさんは受けとると閉じたり開けたりを繰り返す…。

そして、こう話し出した。

「間違いないわ、何かの卵の殻だわ、これ…。」

「た、卵ってそんな見たことも…!」

「おいおい、まさか…。」

俺達はタイムマシンの大穴を見る。

「もしかして、その穴を開けたのは卵から産まれた…。な、何か…」  
トランクスが席に座りパネルを弄りだす…。

「エネルギー残量はほとんどゼロ、やって来たのは…。」

【ピピピピピッ!!】

「age788!?!お、俺がやって来た未来より三年後…。」

三年後の未来から!?!」

『え…?』

俺達は息を飲んで見守るしかない。

「この時代にやって来たのは…今から約四年前…。」

この前俺がやって来た時より一年も早くコイツは来ていた!?!  
い、いったい何が何のためにやってきたんだ…。」

歴史が随分変わってしまったのは、まさかコイツの仕業では…!」  
まさか、トランクス以外にも未来からキテた奴がいるとは…。」

この卵の生物はいったい何が目的でこの俺達の時代にやって来たんだ…?」

謎は深まるばかりだ…。」

出撃！超ナメツク星人&超サイヤ人！

時は元に戻り神と融合したピッコロが下界に降りたところから始まる…。

side 神コロ

俺は記憶にある化物を探すため、ある町にきていた。  
そこで謎の怪生物と対峙していた。

「何者だ貴様！何故ピッコロの名を知っている!？」  
すると怪生物は拙い口調で話し出す。

「へえ…。俺はお前の兄弟だ…。」

「なにっ!？」

ピッコロの兄弟だと!?!馬鹿な！そんなはずはない！

「馬鹿なことを言うな！貴様の正体はなんだ？話すんだ！詳しくな  
！」

「ブルウウ…その必要はない、お前はすぐ私の食事になるからだ  
…。」

話すつもりはないらしい…。

「なるほど、そういうことなら何も聞かずに貴様の息の根を止めてや  
ろう」

その言葉に怪生物は笑いだす。

「フェツヘツヘ…！ピッコロ大魔王がこの私を殺すつもりか…。」  
コイツはいまだに俺をピッコロと勘違いしているようだな。

「フンツ、貴様はどういうわけかピッコロを知っているようだな。だが…。はあああああツ…!!」

「……!？」

俺は抑えていた気を解放させてから奴に答える。

「だが残念だったな。人違いだ」

「なにいつ!？」

「フフフフツ…!」

「貴様はピッコロ大魔王ではないと言うのか!？」

「フフツ…そう言うことだ…。」

驚いてやがるな？フンツいい様だ…。

「貴様がこの町の人間を全て消してしまったのは俺にとっては好都合だった」

「なんだとおツ!？それはどういうことだ!」

「思いつきりやれるからさ!」

俺は気を手に集めエネルギー波をやつに向けて放つのがだった。

side out

side 悟誠

タイムマシンの一件から俺達は無事、亀ハウスへと戻ってきていた。  
た。

亀ハウスに戻るとクリリンさんからとんでもない事を聞かされた

トランクスがジンジャータウンへと向かっていったんだ…。

「っ…!?この気は―!」

おかしい…。どうしてフリーザ親子や父さん、ベジータさん、ピッコロさんの気が一ヶ所に…。

しかも今、もう1つデカイ気が現れてぶつかり始めた…。

「俺、少し様子を見てきます…。」

「行くのか?なら、オレも行くよ。」

俺は頷いて外に出る。

「僕も!」

「駄目だ!悟誠も行かせねえぞ!おめえ達はオラの大事な息子だ!みすみす危険な所に行かせる訳にはいかねえ!」

母さんが俺の前に立ちほだかる…。

「母さん、退いてくれ…。もうあなたに構ってられる状況じゃないんだ」

「駄目だ!絶対に行かせねえぞ!」

はあ…。仕方ない、少し強引な手だけど…。

「母さん、許してくれ…。」

俺は母さんに近づいて抱き締めると手刀を首の後ろに叩き込んだ。

「へ…?悟誠?…?!?」

ガクリと倒れる母さん…。

俺はその体を支えようとヤムチャさんに渡す。

「すみません、母さんと父さんのこと、よろしく頼みます…。行きましょう、クリリンさん」

「あ、ああ…。」

「き、気をつけてな!」

俺達はジンジャータウンへと飛び立つたのだった。

――

ジンジャータウンに到着する前にトランクスと合流した俺達はその直ぐ後にジンジャータウンに到着した。

そこには以前のピッコロさんの気とはまるで別物の気を持ったナメック星人と全身緑色の怪生物がいた。

それを見てクリリンさんが口を開く。

「間違いない、神様と合体したんだ。あっちのやつは…。」

「…多分アイツですよ、例の卵から出た怪物は」

「うえ…。スツゲエ気持ち悪い見た目してるなあ…。アレ」

俺達はピッコロ?さんの近くに降り立つ。

にしてもアイツ、なんで俺や父さん、ベジータさん達の気まで感じるんだ?

俺はピッコロ?さんに問いかける

「コイツですか?ジンジャータウンの人達を殺したのは」



「そうだ、尾に気を付ける…。こここの人間はアレで消されたんだ」  
なるほどな、あの針みたいな尻尾でやりやがったのか…。

「な、なんでこんな奴から悟空や悟誠、それに天津飯達の気を感じるんだ!?」

「詳しくは後で話す、今はアイツを片付けるのが先だ」

「片付けるだとお…?そう簡単にいくと思うか？」

「しゃ、喋った!?」

「うげ…。あの見た目で喋んのかよ…。あまり相手したくねえけどやるしかねえか、ハアアツ!!」

俺は超サイヤ人に返信する。

「フンツ…。この状況ではお前にとっても勝ち目があるとは思えんがな」

「…：確かに、この場は退散するしかないだろう…。」

「くっ！逃がしはせん！もうさつき程度のかめはめ波では逃げることも出来ない！」

なっ!?今、かめはめ波って言ったか!?

「かめはめ波!?コイツ悟空のかめはめ波がなんで使えるんだ！」  
クリリンさんも同じことを思ってたらしい…。

「かめはめ波だけではないぞクリリン…。その気になれば元気玉でも多分出きるだろロロロウ…。」

おいおい、クリリンさんまで知ってるなんてよ…。

「俺のことはしってるのか？怪物さんよ」

「知っているに決まっているだろう兵藤一誠…。」

なんだ、間違ってるじゃねえかよ。

俺はニヤリと笑って返す。

「違うぜ？俺は兵藤一誠なんて名前じゃねえよ、俺の名は孫悟誠だ！」

「なあにツ!?孫悟誠だとおツ!?なんだそれはあ…。」

驚いてやがるな？教えてやるか

「驚いたか？兵藤一誠は俺が人間だった時の名だ。

今は孫悟空の息子の孫悟誠、サイヤ人だ！」

「そうか、孫悟空の息子かあ…。ということは孫悟空はまだ生きているのか…。」

「当たり前だ！勝手にうちの父親殺すんじゃないやねえ！」

「そうか、まだ生きていたか…。やはり私の知っている歴史とは些か違ってきているようだな…。」

だが、17号と18号は必ず手に入れてみせるルルウ…。」

そう言うとき怪物は空高く飛び上がる。

『……！』

「私が完全体になるのを邪魔しようとしても！」

お前達にはどうにもなるまい！17号達と少しはまとも戦えるのはピッコロと孫悟誠だけではな！」

そう言うとは怪物は太陽を背にある構えをとった…。

まさか……！

「太陽拳!!」

一瞬で辺りが目映く照らされる

『んなっ!?クソツ!!』

俺達は目潰しを喰らってしまい動けない。

「チツ…:気配を消してやがる!アイツそんなことまで出来るのか…。」  
ありや?これはまたドライグの出番か?

『どうやらそのようだ…。』

不意に左腕から声が聞こえてくる。

「なっ!この声は!?!」

『こうして話すのは初めてだな、ナメック星人、俺がコイツの中に宿る  
ドラゴン、赤龍帝ドライグだ…。』

「こ、これが悟誠の言ってたドライグ…。」

『俺は奴等の気配を感じ取れる…。案内しよう』

「!…:本当か!?!」

俺は力強く頷く。

「これは確かです。以前もこれと同じ方法で人造人間をみつけました  
から」

『そう言うことだ…。分かったか?ナメック星人』

「お前がそういうなら確かなんだろう…。分かった！直ぐにやつを追うぞー！」

『はい！』

俺達は奴を追い始めるのだった。

## 英雄の復活！探せ怪生物セル！

side 悟誠

俺達はピッコロ？さんに先程の奴が何者かを聞いていた。

途中、ベジータさんや天津飯さんも合流していた。

奴はセルと言う名でドクター・ゲロのコンピュータが造り出した人造人間だとピッコロ？さんは話した。

しかも、奴は17号と18号を吸収して完全体になろうとしているらしい…。

「俺としてはまだそれほどでもないうちに、セルを倒すしかないと思うが…。」

それには賛成だ、でも、確かドラグ・ソボールだとこの後の戦いで空孫悟の息子が覚醒するはずなんだよな…。

それはすなわち、悟飯が俺や父さんの超サイヤ人を超えて更に上の段階に上るということだ…。どうするべきだろうか…。

すると、ベジータさんが口を開いた

「セコい作戦ばかり立てやがって！合体したいんならさせてやればいだらう！倒す相手が減って手間が省けるってもんだ！俺は敵がどうなるうと構わん！相手がどんな奴だろうとぶっ殺すだけだ！」

「甘く見るなベジータ！奴は合体すれば、あの全く手に負えなかった17号達を遥かに超えるというんだぞ」

「この俺に偉そうな口を聞くんじゃない！人造人間より先に消されたいか！」

ベジータさん、気が立ってんなあ…。青筋なんか立てちゃって…。

「くっ……！」

「フンツ…俺は必ず超えてやるぞ、超サイヤ人を更にな！」

『なっ!?』

俺以外の全員が驚いてる…。

まあ、そうなるよな…。俺も知識？がなかったらこれより上があるだなんて思わないだろうし…。

「超サイヤ人を…更に超える…?」

「カカロットもそうだろうとするはずだ、必ず…。お前もそうなんだろう?・孫悟誠」

いや、急に俺に聞くなよ…。まあ、上があるのは似たような現象があるのは知ってるけどさ…。

「え?まあ、そうっすね」

「フンツ…丁度いい、少し俺の特訓に付き合え、

お前も超サイヤ人になれるんだ少しは役に立つだろうぜ」

え?これって俺も行かなきゃ駄目なの?

「え…俺もっすか?」

「そうだ、同じサイヤ人なら分かっているはずだ、俺に逆らうとどうなるかはな…。」

いや知らねえよ!って言うか、俺、本気でしたらあんたより強いんだけど…。

「はあ…分かりましたよ…。すいません皆さん、そういうわけなので後はお願ひします」

「フンツ…そういうことだ、貴様等は貴様等で勝手にやるんだな、いく

ぞ！」

「はいはい、分かりましたよ…。」

俺はベジータさんについて飛んでいくのだった。

side out

side 悟空

「オラは真つ黒な空間にいた。」

「でりやりやりやあつ!!」

オラの目の前には歪な何かが立ち塞がっている…。

「はあっ…はあっ…だりやあつ!!」

しかし攻撃しても攻撃しても奴は倒れるどころか効いている素振りもねえ…。

すると、奴の手が伸びてオラの首を締め上げてきた。

「グアアアアツ!!」

…!  
なんなんだ！強え…。こんな奴は初めてだ…っ！こんな変な奴は…!

奴は不敵に笑いながらオラの首を更に強く締め上げる…。

「グアアアアアツ!!ア…アアアアア…。」

駄目だ…。意識が持つてかれちまいそうだ…。

すると、オラを締め上げる手が離れ、オラは地面に落ちる。

不意に後ろから声がかげられた。

『親父、そんな奴に負けんじゃねえ！俺の父親ならそんな奴に負けてねえで勝ってみせろ！いくぜ！ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝の贈り物！』

『transfer!!』

すると、オラの体に今までに感じたことのないような力かみなぎってきた。

「この力…。悪いいな悟誠、おめえの力借りつぞー!」

オラは気を溜める…。

「喰らえ! オラと悟誠の合体技! ドラゴン! かめはめ波ああ!!」  
刹那、オラの手から蒼い巨大な龍が飛び出し奴を呑み込んだ。

「ツツツツツ!!」

奴は龍に呑み込まれて消えていった。

「…ふう、なんとかなつたみてえだな、サンキュー! 悟誠、つて、あり?」

振り返ると悟誠はおらず黒い空間だけが残っていた。

「いったいどういうことだ?…ん!」

不意にオラの体が浮き上がり始めた。

「なつ、なんだ!」

オラはグングンと上へと引っ張られやがて光に包まれた…。

「うわぁー!!」

—————

目が覚めるとそこは亀ハウスの一室だった。

「…そっか、オラ、寝てたんか…。」



ふと、横を見るとチチが眠っていた。

「心配かけちゃったみてえだな…。さてつと…。」

オラは外に出て少し考える。

さて、夢の中で聞いてはいたが、またとんでもねえのが現れたみてえだな…。

ベジータや悟誠でも勝てねえんじやオラにも勝てねえ…。

やっぱやってみるしかねえみてえだな。

超サイヤ人を更に越える修行を…。

超サイヤ人を越えろ！いざ精神と時の部屋へ！

side 悟空

「さて、いっちょやってみつか！」

オラは海に向かいかめはめ波の構えをとり気を高める。

「か…め…は…め…波あぁあっつ!!!」

打ち出されたかめはめ波は海を割り飛んでいった。

「…ふう、どうやら体は大丈夫みてえだな」

オラが一息ついていると声がかけられる。

「悟空さーっっ!!」

振り返るとチチがオラに向かって駆けてきていた。

「チチ！」

「悟空さ!!」

チチはオラの名前を叫びながら飛び付いてきたのをオラは受け止める。

「しんぺえかけて悪かったな…。もうすっかり病気は治っちまったみてえだ」

オラの言葉を聞いてチチは抱きつくのをやめ聞いてくる。

「ホントに大丈夫だか？」

オラはその言葉にチチの体を持ち上げながら言う。

「おおーほら、この通りー！」

「あ、ちよっ！悟空さ！こら！やめてけれ！」

そうだな、そろそろ止めつか。  
オラが振り回しを止めようとしたところ、誤って手が滑ってしま  
い。チチを空高くに投げ飛ばしてしまった。

「うわあああつ……!!」  
飛んでいったチチを見上げるオラ…。

「あちゃー…。つい力がへえり過ぎちまったな…。」  
そういつている間にチチは落下してくる。

「ああああああ…!!」

「おつとお！」

「おわあ！悟空さー！」

「ははっ悪い悪い！はっはっはっはっはっはっは！！」  
ふう、なんとかキャッチ成功だぞ…。  
すると、亀仙人のじっちゃんが話しかけてきた。

「悟空」

「あれ？じっちゃん」  
オラはチチを降ろしてじっちゃんの方を見る。

「病気は治ったのか？」

「ああ！もうでえじよぶだ！

夢の中でみんなの話を聞いていたからだいてえの事は分かってる。  
またえれえことになっちまったみてえだな…。」

オラの言葉にじっちゃんが顔を引き吊らせて言う。

「悟空!…まさかもう!」

「冗談じゃねえだ!もう戦う気なんか!?死んじまうだよ!」

「はははっ!二人とも心配性だなあ…。」

「しんぺえすんな、まだ戦わねえ、悟誠に勝てねえんならオラにだって勝てねえ。だからオラも上を目指そうと思うんだ…。」

「…え?」

「上じゃと…?」

オラは海の方を見ながら答える。

「ああ、超サイヤ人の上を目指そうと思う…。」

「っ!」

「す、超サイヤ人の上を目指すじゃと!そんなことが可能なのか!」

まあ、じつちゃんの言うことも最もだ…。」

「…わかんねえ、だが今度のはそれぐれえじゃねえととても勝てる相手じゃなさそうだ。1年ほど修行して駄目だったら諦めるさ」

「い、一年じゃと!?そんなにかかっては…。」

普通はそうなるよな…。だけどオラにはまだ秘策があんだ!

「でえじよぶ!一年だけど一日で済むところがあんだ」

「……へ?」

じつちゃんが不思議そうな顔をしてるのを横にオラはチチに問い

かける。

「チチ、悟誠と悟飯の奴も連れてってやりてえんだが…いいか？」

「じよ…！じよ…っ!!」

「ん？」

あちやあ…この様子じゃ連れてくんは無理かな？

「冗談じゃねえ!!…っって言いてえところだが、止めたって無駄だべ…。」

流石チチ、分かってんじやねえか。

「しょうがねえ…。どうせならうーんと強くしてやってけれ！」

「…チチ」

「ただし！人造人間との戦いが終わったら、今度こそ二人の勉強の邪魔はさせねえぞ…？はあ…悟誠、どうしてあんなつまっただ？」  
どうしたんだ？チチの奴、なんか急に落ち込み始めたぞ？

「なあ、チチの奴どうしたんだ？悟誠がなんかしたんか？」

オラはこそつとじっちゃんに聞いてみる。

「多分、前に悟誠に気絶させられた事を思い出しとるんじやろ…。あんな時のチチ、必死じゃったからのう…。」

そっか、悟誠にそんなことをな…。

「ま、まあ元気だせよ？チチ…。んじや、行ってくる」

オラはその場から瞬間移動するのだった。

「…ベジータさん、どうするんすか？」

「黙っている、捻り潰されたくなければな」

もうかれこれ三日はこんな感じだ…。

修行に付き合えてつれてこられたかと思えば今度は掌を返したような放置っぷり…。

後から来たトランクスも同んなじようにあしらわれてるし…。  
いったいベジータさんは何をしたいんだか…。

『恐らく超サイヤ人のその先が見えかけているんだろう…。その片鱗がな…。』

そうは言ってもな…。これじゃ連れてこられた意味が全くない  
じゃねえか…。

『いいんじゃないか？その代わりそのベジータの息子と修行出来るんだからな…。』

まあ、それはそうかもしれないけどさ…。

『そんなに気になるならこっちから攻撃を仕掛けてみればどうだ？相  
手してくれるかもしれないぞ？』

なんで好き好んで野郎に襲いかなきゃならねえんだよ！俺に  
そんな趣味はねえ！

『なら、諦めるんだな…。』

そうですね、そうしますよ…ったく、なんだかなあ…。

俺がドライブグと言い争いをしていると背後に気を感じて振り返った。

「よっー！」

「悟誠さん、悟空さんです。」

「ああ、分かってるって」

トランクスにそう返し俺は父さんの方を見る。

「やっと治ったんだな、父さん」

「ああ、しんぺえかけて悪かったな……。どうだ？ベジータと修行してたんだろ？」

父さんの問いに俺は肩を竦めて首を横に降る……。

俺の代わりにトランクスが答える。

「駄目です、父さんは俺をただの厄介者としか……。悟誠さんにすら黙っているの一点張りで修行どころかその父さんも、ただ、ああしてじつと立っているだけで……。」

それを聞いて父さんはベジータさんの方を見る。

「…流石はベジータだ。ぼんやりと超サイヤ人の先が見えて来てるらしいな……。」

『え？』

トランクスの声とハモってしまった……。

『俺の言った通りだったな……。相棒』

うるせえ！もう言わなくて言いつての！

ドライグに反論している間に父さんはベジータさんの方へと飛んでいってしまった。

そして何やら話し始めた…。

しばらく話すとこちらにベジータさんを連れだって戻ってきた。

「よしーそんなじゃ行くぞー！おめえ達」

また何かする気だな？

俺はそう思いながらも父さんに着いて飛び上がるのだった。



オラ達の番だ！修行に入るぞ二人とも！

side 悟誠

オツス！俺悟誠！

神様の神殿に来てから約一日が経つ頃だ。

今はベジータさんとトランクスが部屋に入ってる…。

だけど、地上では大変なことが起きてるみたいだ…。

神と融合したピッコロさんが恐らくは人造人間と戦っていたんだ。

けど、そこにあの怪物、セルの気が乱入してきた…。

気の感じからしてピッコロさんはセルと戦ったんだと思う…。

だが、その抵抗もパワーアップしたセルには意味を為さなかった

…。ドンドン小さくなっていくピッコロさんの気はやがて消えた…。

それに怒った悟飯が飛び出そうとするのを俺と父さんでなんとか

押し止めながら俺達は様子を見守っていた。

すると、今度は天津飯さんの気がセルの気とぶつかり合っていた。

だが、大きかった天津飯の気があるみる小さくなっていく…。

それを見かねた父さんは咄嗟に瞬間移動で助けに行った。

俺も行きかけたけど神器の使えない今の俺じゃやられにくいよ

うなものだ…。だから悟飯とともに待つことを選んだ…。

戻ってきた父さんは虫の息のピッコロさんと天津飯さんを連れて

いた。急いで仙豆を食べさせ二人はなんとか一命はとりとめた。

そんな中、父さんが口を開く。

「それにしても天津飯、おめえも無茶すんなあ！」

「本当に僕も心配しましたよ、でも、天津飯さんのお陰で18号がセルに吸収されずに済んで良かったですね。」

「まったくその通りっすよ…。でもあれは時間稼ぎにしかありません

ん、早くなんとかしないと…。」

俺の言葉にピッコロさんが口を開いた。

「しかしあのセルとか言う怪物、異常なまでの強さだ。

はつきり言って誰も勝つことはできん…。ベジータでも、悟空でも

…。俺はそう思う」

『……………』

現状、返す言葉が見つからず俺達は黙り混む。

すると、声をかけてくる者がいた。ミスターポポさんだ。

「おーい！ベジータとトランクス、もうじき部屋から出てくるぞ！」

「ホントか！」

やっと出てきたのか、やけに長く感じたな…。

俺達は様子を見るべく部屋の前へと足を運んだ。

俺達の見つめる中ゆっくりと開かれる扉…。

その中からゆっくりとトランクスが出てきて一言言った。

「……………どうもすみません、お待たせしました…。」

「……………」

後から出てきたベジータさんはなにとも言わずただじっとしていた。

「よっ！お疲れ！どうだった？」

「トランクスさん！」

「ホントに待ったぞ！」

上から俺、悟飯、父さんが話す。

「父さんは中に入って二ヶ月ほどで超サイヤ人の限界を越えたようでしたが、それでも納得がいかないらしくて…。」

それで今まで時間が…。」

「トランクス、余計な事は言うな…。」

トランクスの言葉を遮るようにベジータさんは話す。

いいじゃねえか何があつたか聞くくらい…。」

「…なにか言つたか？小僧」

「いーえ、なにも」

ベジータさん…アンタエスパークだよ…。」

「フツ…まあいい」

ふう、危ない危ない…。危うくセルより先に殺されるとこだった。

「フツ…上手くいったんだな？ベジータ」

「…さあな、だが、貴様がこれから中に入って特訓しても無駄になる…。この俺が全て片付けてしまうからな、セルも人造人間も」

「なにっ!？」

何となく言うと思つたよ…。この人なら…。」

「ベジータ、お前がどんなに強くなったかは知らん、だが、お前はアイツ等を甘く見すぎている。」

「お前がああの部屋に入っている間にセルは人造人間の17号を吸収し、さらに強くなった。驚くべき強さにな」

その言葉を聞いてもベジータさんは不適に笑うだけ…。

「ベジータ、オラもちらつとだけ進化したセルを見てきた。飛んでもねえバケモンだったぞ?」

「フツ…」

相変わらず不適に笑うだけベジータさん…。余程自信があるんだろうな…。

と、そんなことを考えていると外から声が聞こえてきた。

「ちよつとお!みんなあ!何処にいるの?いるなら出てきてよ!」

この声って…。

「ブルマさんの声だ!」

「行ってみるか」

俺達は声のする方へと向かった。

ブルマさんは俺達を見つけると早速声をかけてきた。

「あ!いたいた!」

「ブルマ!」

「一体どうしたんすか?こんなところまで」

「クリリンに聞いてきたのよ、みんなここだつてつてあら!?!ねえねえ、

ちよつと！アンタなんで髪型変わってんの？カツラ？あれ？背も伸びてない？」

トランクスを見つけるなり質問攻めを始めるブルマさん…。

「あ、えつと…。この神様の神殿には不思議な部屋があつてそこでの一年は外のたったの一日なんです。その部屋で俺は父さんも修行して…。」

「あれえ？」

ブルマさんはトランクスの言葉を遮るように話し出す。

「ねえ、でもベジータの髪の毛は伸びてないじゃん！」

「…純粋なサイヤ人の髪の毛は産まれた時から不気味に変化したりしない」

マジか！俺つてどういう区分になるんだ？純粋なサイヤ人かな？それともやつぱ悟飯みたいなハーフになんのか？

「そうなんか！道理でオラも…。」

「アンタ気づいてなかったの？」

「はははっ！おかしいとは思ってたんだけどさ！」

いや、髪型が変わらないのはどう考えても不自然だろ…。なにしてんだよ父さん…。

その後はブルマさんが持ってきたベジータさんが着ていた戦闘服に着替えた後ベジータさんとトランクスはセルと人造人間を倒すため飛んでいってしまった。

「よし！悟誠、悟飯！今度はオラ達親子の番だ！」

「はい！」

「ああ！」

強く頷いて俺達は部屋の中に入って行くのだった。

悟誠退場？・18号のもとへ急げ！

side 悟誠

精神と時の部屋に入って早4ヶ月…。  
今日も俺達は修行に明け暮れていた。

「いくぜ！ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手」

『……………』

しかし神器はピクリともしない…。

「…あれ？」

「おかしいですね、いつもなら『Boost!!』って音がするのに」

「なんだ？悟誠の神器壊れたんか？」

「お父さん、機械じゃないんだからそれはないよ…。」

「そっか？はははっ悪りい悪りい」

父さん…相変わらず何処かすつとぼけてんだよな…。

そんなことを考えつつ俺はドライグに問いかける。

おい！ドライグ、

どういうことだよ！

『それはな相棒、今神器は分岐点に差し掛かっているのさ…。新たな  
るパワーアップかバランス・プレイヤー禁手に至るかのな…。』

禁手？それってあの鎧の奴か？でもあれになるだけだともうあの

セルって奴には通用しないんじゃないのか？

『そうだ、あれは本来の完全な禁手ではなかったから本来の力が出せていないだけさ……。しっかりと禁手に至ったあの姿はあんなものじゃない……。』

へえ、それは知らなかったな。ならドライグ、その禁じ手はどうしたらなれんだよ？

『禁手は宿主が世界の流れに逆らうほどの激的な変化をすれば神器は禁手に至る』

世界の流れに逆らうほどの激的な変化……

その直後、俺の脳内に記憶にない人物と言葉が浮かんできた。

『知っているか？ イッセー女の乳は押すとなるんだぜ？ ブザーのようにな』

その瞬間、俺の体に電撃が走ったかのような衝撃が走った。

なんてことだ……。おっぱいにそんな使い方があったなんて……

『おーい、相棒？ 駄目だなこりや聞こえてなさそうだ……。』

そうと決まれば早速行動開始だ！

俺は父さん達の方を向き話す。

「父さん、俺、一足先に出ようと思う」

「へ？ 修行はもういいんか？」

父さんが不思議そうに聞いてくる。

「ああ、これは外じゃなきや試せそうにないからさ」

「そうか、頑張れよ！ 悟誠」



「悟誠兄ちゃん地上にはセルが暴れてますから気を付けてください  
ね」

「ああ！父さんと悟飯も修行頑張っつてな！」

父さんと悟飯の激励に返すと俺は部屋を出ていくのだった。

—————

部屋を出ると天津飯さんとピッコロさんが俺に気づいて声をかけてきた。

「もう出てきたのか？悟空達はどうした？」

「修行もまだ終わってないのだろうか？どうしたんだ？」

「父さん達はまだ中で修行しています。俺は別に試したいことがあったので先に出てきたんですよ」

俺の言葉にピッコロさんが訝しげにする。

「試したいこと？中では出来んことなのか」

その言葉に俺は頷く。

「そう言うわけなんです。と言うわけで急いでるので俺はこれで」

それだけ告げると俺は神様の神殿を後にした。

「……………なんなんだ、試したいことというのは…。」

「分からん…。だが、強くなれるなにかなのだろう」

残された二人は神殿でそう話しながら悟誠が飛んでいった方を眺めていたのだった。

—————

俺は今、人造人間18号を探して飛んでいる。

ドライブはアイツらの気配を辿ることが出来るからそれを使ってな。

「ドライブ、どの辺りだ？」

『もう直きだ…しかし相棒、なぜあの女人造人間を探すんだ？』

「それは見つけてからのお楽しみみて奴さ」

『なんだろうな…なんだかとしてつもなく嫌な予感がするんだが…』

なんだよ嫌な予感って…。ん？あれは…。

俺は遠くに見えた先頭を飛ぶ人影に近づいた。

「やっぱりクリリンさんでしたか」

「お、悟誠！修行はどうしたんだよ？」

「途中で抜けてきました。試したいことがあったのでそれにしてもクリリンさんが手に持っているそれは？」

俺はクリリンの手の中にある機械を見て言った。

「ああ、これか？これはあの人造人間達を緊急停止させることが出来るコントローラーさ」

緊急停止!? そんなことされたら俺の試したいことが出来なくなるじゃないか！

いや、待てよ…そのコントローラーを持っていると言うことはクリリンさんも人造人間達を探していると言うことだよな。

「と言うことはクリリンさんも人造人間を？」

「ああ、そうだけど…。もって事は悟誠もなのか？」

「ええ、少し試したいことがあります…。それでなんですけどそのコントローラー俺が持つていきましようか？クリリンさんだとしても危険でしょう？」

コントローラーを渡して貰えればもし試したいことが失敗した時に使えばすぐに破壊できるしな

「それもそうだな。悟誠ならやつらの気配を追えるしそっちの方が早いか、それじゃ、頼めるか？」

「はい！任せてくださいー！」

こうして俺は難なくクリリンさんからコントローラーを受け取った。

「それじゃ行きますね、コントローラーありがとうございました！」

「ああ、気を付けてな」

そうやって俺はクリリンさんと別れた。

しばらく飛んでいると激しい気のぶつかり合いを感じた

ベジータさん、もう始めてるみたいだな。

ここまで気のぶつかり合いが感じられるぞ…。

『それだけパワーアップしていると言うことだろう…。』

っと、相棒、そろそろだ…。』

ドライブの言葉に俺は近くの島に降りて行くのだった。

side out

side 18号

私は負傷した16号と共に身を隠していた。

セルから逃れるためだ…。

しばらく身を隠していると不意に16号が口を開いた。

「孫悟誠が来る…。」

そう言っつて空を見上げる16号。

私も連られて空を見る。

すると確かにこの島に降りてくる人影があった。

人影は私達を見つけたのか地上に降り立つと私達の前に歩いてきた。

その人物は確かに孫悟誠だった。

「何しに来たんだい？孫悟誠…：…っ!？」

私は孫悟誠に問いかけて手の中にあるソレを見て息を呑んだ。

なるほどね、それで私達を停止させて破壊してしまおうって魂胆だね？

たしかにそれなら私はセルって化け物に吸収されずに済む。

「18号、お前に話があつてきたんだ」

話？私を破壊しようとしてことじゃないのか？

「話だつて？何を話すつて言うのさ」

「セルを倒すためにお前の力を借して欲しい」

セルを倒す？ピッコロでも17号でも手に追えなかつた相手なの

に…。

「あの化け物を倒すだって？出来るわけないじゃないか、仮に倒せるとしてどうするつもりさ？」

「その為にこうして話をしに来たんだ」

………どうやらそれなりに勝算があつての事らしいね…。

「分かった、その話つての聞いてやるよ」

私の言葉に16号が驚いた顔をする。

「助かる、それじゃあ早速用件を話そう」

その言葉に私達は身構える。

が、次に奴の口から出てきた言葉はとんでもないものだった。

「18号、お前のおっぱいをつつかせて欲しい」

………は？

混乱して一瞬思考が停止した。

「へ？あ、え？」

思考が戻ってきてても言葉がうまく出てこない。

すると16号が代わりに口を開いた。

「ふざけているのか！孫悟誠！お前は今この状況が分かっているのか  
！」

しかし孫悟誠は真面目な顔をして言い放った。

「ああ、分かってる。分かった上でこの話をしてるんだ」

その言葉に私は悟った。コイツは本気だと…。

私はようやくやく冷静に戻り溜め息を吐くと口を開いた。

「分かった、その提案、受けてやる」  
もうコイツに託してみよう、それで上手く行ったらコイツと添い遂げるのもありかしれない…。

side out

side 悟誠

18号から許可を得た俺は考えていた。

つつくのはいいがどっちのおっぱいをつつくのがいいのか…。

なあ、ドライグ、どうしたらいい？

『そんなことを俺に聞くな…。右も左も同じだろう』

ふざけるな！同じな訳あるか！俺のファーストブザーなんだぞ！

『うおおおおん！誰か今代の相棒をどうにかしてくれええ!!』

なんだよ失礼な奴だな…。

『おいおい、赤龍帝サマを泣かせんなよ』

バーダックさん…。

『コイツ泣かれるとおれもアイツも困るんだよ…。』

す、すいません…。

『とりあえずおまえはさっさと用件を済ませてこい』

そう言われて俺は我に帰る。

するとそこには不審げに眉をひそめる18号とただ様子を見守る16号がいたのだった。

新たななる力！セルを倒せ孫悟誠！

side 悟誠

「どうしたのさ、急に黙り込んだりして」

18号が不審げに聞いてくる。

「いや、それが話すと長くなっちゃうんだけど……」

「おい！そんなことはどうでもいい！早くやるなら済ませろ！時間が  
ない！」

俺が事情を説明しようとしたところで16号の静止が入る。

その言葉に俺はそれもそうだと気を取り直す。

そしてまた考える……。

でも、どっちのおっぱいをつつくのがいいんだ？

『おいおい……まだそんなこと考えてんのか？生まれ変わり』

バーダックさん……。やっぱり気になるじゃないですか！

『いや、そんなことオレが知るかよ……そんなに気になるんなら両方一  
気につつきやいいだけの話じゃねえのか』

……ツ!?なんて革新的なご意見なんだ！バーダックさん、あなた  
天才か！

『いや、こんなので天才ってねえだろ……』

そうと決まればやるぜ！

『もう勝手にしやがれ……オレはしばらくドライブの代わりにここに  
いるからよ』

分かりました。

「よしーんじや早速ー！」

俺は両腕を構えつつく予備動作に入り18号に近づく。

「と、そうだ。俺がおっぱいをつついたらすぐに16号を連れて離れてくれ」

「……分かった」

それを聞いた俺は腕を伸ばす。

「……………」

頬を少し染め、顔を背ける18号のおっぱいに俺は指を添え少し力を入れる。

【ムニユ…ムニユムニユウ…】

弾力性、クリアー！柔らかさ、クリアー！肌の質感、服越しからでもクリアー！

強すぎず弱すぎない力で、あくまでやさしくおっぱいに指を埋没させていく。

【タラ…】

鼻血が…耐えろ！俺の理性！今は禁手に至ることに集中しろ！

「……………んっ……………やっ……………」

鳴った!!

18号が僅かに声を漏らす……………ッ！

その言葉を聞いた俺は自身の中で何かが革命的に弾ける……………。広がる。広大なものが……………俺の脳裏を支配していく。

止まらない涙のなか、俺は見た。



——宇宙の始まりが。

『至ったッ本当に至りやがったぞー！おい……！』

バーダックさんが俺の中で信じられないような声をあげた。

『Welsh Dragon Balance Breaker

!!!!』

そして——全身を覆うオーラは鎧と化し、俺を包み込んでいた。

バランス・ブレイカー 『バランス・ブレイカー・ブラステッドギア・スケイルメイル

』禁 手 『赤龍帝の鎧』ツ！18号のおっぱいつついてここに

爆誕ツツ!!』

【ドゥウウウンツ!!】

俺の放つオーラで周囲が吹き飛ぶ！

俺を中心に小さなクレーターが出来上がっていた。

最初に言っていたのを聞いてたようで二人は少し離れたところから様子を見守っていた。

……体中に力が溢れてる！これが——バランス・ブレイカー 禁 手！

『良くやったな、生まれ変わり……。しっかし酷つてえな……。こりやドライグのやつ本格的に泣き崩れんじゃねえか?』

そう話すバーダックさんの声は完全に呆れていた。

「はい！ありがとうございます！……そういうえば首尾はどうつすか?」

『時間にして3ヶ月の間、バランス・ブレイカー 禁 手 状態を維持できる。激闘の成果が実を結んだな。やるじゃねえか』

MAXの倍増出しで何回いけます?」



何処からか飛んできた赤い気功波がセルの半身を吹き飛ばしていったのだから……。

僕は間一髪でなんとか躲わしたのだが、セルは後ろを向いていただけに諸に喰らってしまった。

それに、先程感じたとんでもなく大きな気はいつたい……。

俺とセルはしばらく思考が停止したままだった。

side out

side 悟誠

「な、なんなんだよ!? これ! 無茶苦茶じゃねえか!」

俺はしばらく自分のパワーアップについていけなかった。

そこに声が掛けられる。

「あ、あんた…本当にあの孫悟誠なのかい?」

声を掛けてきたのは18号だった。

その顔は困惑が浮かんでいる。

「ああ!俺は孫悟誠だ!」

「……その話し方は確かに孫悟誠みたいだね。いったいどんな手品を使ったのさ?」

手品って……。これ一応神器の力なんだけど……。

どう説明しようか迷っていると上から声がかけられた。

「おーい!セルに見つかったぞおーツ!!」

……は?この声ってトランクスじゃないか!

上を見上げるとさつき気功波を放った場所にセルとトランクスの姿が……。

「とうかセルの奴、前よりキモくなつてないか？  
つて言うか！」

「見つかった!? ヤバイ!!」

セルは直ぐ様俺達の方にまっすぐ飛んでくる。

「完全体にはさせない！」

トランクスも直ぐ様後をセルの後を追って追いかける。

そして、セルを通り越すと勢い良く蹴りを放つ。

「んぐっ！」

空中で体勢を崩すセルにトランクスはすかさず気功波で追撃する。

「うぐおおおッ!!」

なんとかそれを防ぐセルに更に強力な気功波を放つトランクス。

しかしセルはそれを上に飛んで躲わしてしまう。

それを追ってトランクスは一気に距離を積みセルに怒涛の追撃を入れていく。

「はあっっ!!」

【ドゴッ！ヒュウウウウ……ドガアアアンツツ!!】

セルは地面に叩きつけられ岩雪崩に吞まれる。

「すげえ！アイツ、あんなに腕をあげてたのか。圧倒的じゃないか！」

俺が興奮しているとトランクスがこちらに叫ぶ。

「逃げろ！セルは気配を消して地面に潜っている！」

なんだと!? やべえじゃん！

「ヤバイぞ！早く逃げるんだ！」

俺の言葉に18号も即座に頷く。

「あ、ああ……16号！16号!!」  
立ち上がるうとしない16号に18号が声を荒げる。

「俺はいい……お前達で逃げろ」

「ッ!？」

「もうお前を守ってやることは出来ん……さっさと行け!」  
そう話す16号の右頭部はパリパリと電気が走っていた。

「ッ!!死ぬんじゃないよ!」

そう言って駆け出した18号の後を追って俺も駆け出す。  
するとそこに、気功波の爆発が巻き起こり18号と俺を吹っ飛ばした。  
た。

「ハッハッハッハッ!」

地中から現れたセルが俺達を見て笑う。

俺は18号を隠すようにしてセルの前に立ちはだかる。

「ん?お前は先程私の半身を吹き飛ばした奴だな?しかもこの気……貴様、孫悟誠か?」

「ああ、そうだ!18号を吸収したかったら俺を倒してからにしようがれ!」

「フハハハッ!ならば貴様からいただくでしょう……」

「いくぞ!!」

俺達はぶつかり合うのだった。

—————

俺とセルの實力はほぼ互角だった。

殴り、殴られ、防ぎ、防がれる……。

ちくしょう！バランスブレイカー 禁 手でも互角なのかよ！でも！

「俺はやられるわけにはいかねんだああああアアツ！」

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!』

『explosion!!』

更に俺の力が跳ね上がる。

「ナニイツ!？」

「おおおおオオオツ!!」

思いつきりセルを殴り飛ばす。

「ナイスです！悟誠さん！後は俺が！」

吹っ飛んでいったセルを更にトランクスが追撃をかける。

今のうちに！

「今が絶好のチャンスだ！逃げるぞ！」

「ああ、行くよ！16号！」

16号に近寄りその巨体を支える18号。

俺も近付いてその巨体を支える。

「お、オマエ……」

「16号は俺が運ぶ。だからあんたは先に行け！すぐ後から追う」

「……頼んだよー！」

渋々飛び上がろうとする18号。そこに……。

「どこにも逃しはせんぞー！18号！太陽拳!!」

直後、俺達を眩い光が襲った。

「しまっ！……！」

「ツ!?!目がっ……！」

不味い！このままじゃ本格的に不味い！

俺は人造人間の気配を探って18号達の前に立ちはだかり仁王立ちする。

【ダウンツ!!】

俺にセルの気弾が命中する。

まだだ！絶対に終わらせない!!

「ほう、ならいつまで持つか試してやろう」

【ダウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツ!!】

立て続けに気弾が命中する。

不味い！だけど……！まだ！

【ダウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツドウンツ!!】

く……そ……もう……駄目……だ……。

俺はその場に膝をついてしまった。

「ちくしようオオオ…！だああああッツ！！」

「待て！止めろ！18号！！」

俺は叫ぶが時すでに遅し……。

「きゃあああッ！！」

響き渡る18号の悲鳴！

「止めやがれエエツ！！」

俺も気配だけを頼りにセルに攻撃を仕掛ける。

気功波は駄目だ…！18号まで巻き込んでしまう！

「うおおおおオオオオオツツツ！！」

しかし当たらない……。

『んんッ！んッ！んんんーッ！！』

徐々に小さくなっていく18号の声……。

それが俺の心を焦らせる。

【キュポンッ！】

その音を最後に18号の声は完全に聞こえなくなる。

徐々に視力が回復し、目を開くとそこには……。

【バジツバジバジツ！！】

スパークを放ちながらエネルギーの塊に身を包んだセルの姿があった。

「完全体にさせてたまるかアアツ！！」

いつのまにか降りてきていたトランクスがセルに必死に攻撃を仕掛けるがまったく効いていない。

セルの体に変化していくにつれ、地球全体が揺れ始める。



「……………」

俺はあまりの出来事に動けない。

「未来を！未来をお前なんかの自由にさせない！はああアアアツツ！！」

トランクスが必死に攻撃を仕掛けるが効いていないどころか弾き飛ばされている。

そしてセルが一層輝きを増しながら光を弾けさせた。

俺達はその眩しさに目を瞑る。

光が収まり目を開けるとそこには……………。

「……………」

体が小さくなり、研ぎ澄まされた雰囲気醸し出すセルの姿があるのだった……………。

遂に降臨！完全体龍帝セル爆誕！

sideセル

私は完全体となった喜びにうち震えていた。パワー、スピード、技、頭脳、精神力。全てにおいて完全な存在となつたのだから……。

これが完全体か。これが全てにおいてパーフェクトなボディか……すばらしい！遂に手に入れた……。

しかし、一つ気になることもある。

それは、わたしの左腕に装着されている赤い籠手だ……。

第二形態にまではこんな物はなかつたはずだ。

少し腕を動かしてみる。…動かす分には問題無さそうだ……。

そこでわたしは昔、コンピューターに言われたことを思い出した。

「17号と18号……二体の人造人間を吸収し、完全体になり、尚且つ兵藤一誠の力を使いこなすことができればお前は完全体を超越した究極生命体へと進化するだろう」と……。

「こんの野郎ッ！よくも18号を！うおおおおオオオッ!!」

【ガツガガガガガガガガガガガガッ！】

……ということとは、これは完全体になって初めて使うことが出来る兵藤一誠の力というわけか……。

フフフ……面白い、折角ここまで来たのだ。その究極生命体とやらになつてみようじゃないか。その前に……。

「斬気龍!!」

【ドツゴオオオンッ!!】

邪魔な羽虫を排除するでしょう……。

わたしは、先程から周りを飛び回っていた羽虫悟誠の方を向く。

「あ……ああ……！」

さて、完全体となったわたしのファーストアタックの生け贄となつてもらおう……。

一瞬にして羽虫悟誠に近づき軽く蹴りを放つ。

「ぐあッ?!?!」

吹っ飛んでいく羽虫。

「悟誠さん！」

【ズザザザザ…ッ!!】

ほう、耐えたか、中々耐久力はあるらしいな……。

「くっ……！はあ……はあ……クソッ！」

「フツ……幸運な男だ。このパーフェクトなパワーを最初に味わえるなんて……」

わたしはジャブを素振りしながらそう話す。

その間にトランクスは羽虫悟誠の所へ行き、何かを食べさせていた。それを見ているとベジータがわたしの近くに降りてきた。

「あんな弱い奴を痛ぶって楽しいか？」

わたしは無視して体の調子確かめる。

「どうやら、思った通り。完全体になつてもたいしたことななさそうだな」

言ってくれるじゃないか……。

「こいつは失礼した。では、キミがわたしのウオーミングアップ新たな力の実験台を手

伝ってくれるかな？」

「フツ…いいとも、ウォーミングアップでお終いにしてやる」

「よろしく……」

わたしはベジータの方を向き構えをとる。

「……………」(シュインシュインシュインツ!!)

「……………」『Boost!!』

ん？なんだ？今の音は…………。

じりじりと間合いをとる。

しばしの膠着の後…………。

「ハアツ!!」

掛け声と共にベジータが攻撃を仕掛けてきた。

しかし、わたしはそれを難なく防ぎきる。

直ぐ様距離をとったベジータは苛立ったように口を開く。

「チツ…完全体とやらのパワーアップも満更だボラではなかったようだな」

何も言わずベジータへと振り向く。

「いえりやああああああアアアツツ！ダアアツツ!!」

わたしとの距離を詰め連撃を放ってくるベジータ。

だが、わたしはそのすべてを完璧に防ぎきる。

「デヤアアアアツツ！」

気弾を放ち。追撃をかけてくるが、わたしには一発も当たらない空に逃げ。気弾上手く躲わしていく。

『Boost!!』

「またこの音声か……ん？」

気がつくとも上からも気弾が迫ってきていた。

「逃げられんぞー！」

【ドドドドドドドドッゴーンツッー！】

わたしを気の爆発が包み込む……。

かに見えた……。

「フッフ…流石はベジータ。今の攻撃はなかなか良かった」

「……ふざけやがってエエツツ！喰らえエエツ！」

怒りに身を任せ気弾を放ってくる。

哀れだな…。そんなものがわたしに通じると思っているとは……。

爆煙が晴れ。わたしが無傷なのを確認するとベジータはさいど突っ込んでくる。

「……クツソオオオツ!!イエリヤツ!!ダリヤツ!!」

乱撃を繰り出してくるがわたしには当たらない。

急所を狙った蹴りを受け止め放してやる。

『Boost!!』

「ツ!!クツソオオオツ!!」

自身のオーラを爆発させ爆煙を振り払ったか……。

わたしはそこにはもういないが……。

「フッフッフ……それにしても」

『Boost!!』

これはいつたいたんだ？先程より力が沸き上がるようだ……。

つと、考え事をしてい場合ではなかったな。  
ベジータがこちらに気がついたようだ……。

「デヤアアアアア……ッ!!」  
攻撃を防ぎ両腕を掴む。

「チッ……いな、舐めるなアアアッ!!」  
ほう、掴まれたことを逆に利用してサマーソルトをしてきたか。  
空に跳んで躲わすでしょう。

【シユタツ】  
ふう、危ない危ない……。  
おっと、また来るな。

「イエリヤアアアッ!!ダーララララッ!!」  
当たらんよ、そんな攻撃程度ではな……。  
攻撃を防ぎ、また距離を置く。

『Boost!!』  
ほう、また力が沸き上がってくる。どうやら、この籠手は装着者の  
力を一定時間ごとに上げていってくれるようだな  
便利な力だ……。

「……ッ！クソツタレめエツ！貴様！本気でやってないな!!」  
何を言っているんだらうな……。

「だあからウオ<sup>新たな力の実験台</sup>ーミングアップだと言ったではないか……」  
『Boost!!』  
また上がったか……。そろそろ止まってほしいのだが……。

『explosion!!』  
おや？止まったようだな。さて……。

「本気でやりやがれ！オレにさんざんやられて頭にきてんだろう？セル！貴様は完全体になっても少しも変わってはいない！あのやられっぱなしの時と全く同じだ！悔しかったらこのオレに！完全体とやらのパワーを見せてみろ！」

ふむ…。言ってくれるじゃないか……。

「じゃあ、すこおしだけ……」

一瞬でベジータの背後に回り込んでみたがどうかね？

「チツ…超ベジータとなったこのオレを舐めるなアアツ！」

ベジータの急所を狙った蹴りがわたしの急所に直撃する。

「……なっ！なにつ!？」

まあ、ベジータなどこんなものか……。

「……ばあ」

すかさず距離をとるベジータ。

フフフ…流石に驚いているようだな……。

「フフフ…超ベジータか……」

「あ……ああ……ああ……」

この程度で動けなくなってしまうとは、哀れだな……。

「どおしたのだ？さっきまでの勢いは……アアン？」

「……お、俺の渾身の力を込めた蹴りを…何故だ……」

聞こえてないのか？仕方がない奴だ……。

「どおした？笑えよベジータ」

「あ……あぁ……」

【バキイツ!!】

「うがあアアツ!!」

【ヒューーンツ!!ドゴーンツ!!】

凄いで、先程よりも数十倍もパワーが上がっている。

フフフ…これは良いものを入れた……。

吹っ飛んでいき海に落ちるベジータ。

こんなもので死にはしないはずだがな……。

見ていると、ベジータはなんとか上がってきた。

「おやおや、差が大きすぎて戦いがつまらないとお前が言った言葉をお返ししなければいかなかなあ?」

確かにここまで差が大きいとつまらんなあ……。

「フツ…クズが…ベジータ。残念だがウォーミングアップはお終いのようだ……」

わたしもそろそろ飽きてきたのでね。

「……クソツタレめエエ……!」

「別れる前に…礼を言わなきゃあな…。

わたしが完全体になるのを手伝ってくれた。

お前の馬鹿さ加減にな……」

ベジータがもう少し賢ければわたしは死んでいたかもしれんからな……。ん?

「……結果が分かっているくせに無駄な努力は止すんだ。16号」



「ッ!？」

「お前はもうどうしようもないただのガラクタにすぎんのだ」  
ガラクタなど壊しても面白くないのでな……。

ん? どうやらベジータの奴が何かをするらしいな……。  
ベジータの輝きを増し、スパークが放たれ始める。

「いくら貴様が完全体になつたといつてもコイツをまともに受け止める勇気があるか!」

ほう、なかなか凄いエネルギーだ……。

「無理だろうな! お前はただの臆病者だ!」

「フツ……」

安い挑発だな……わたしを避けさせないためか、面白い、その挑発、受けてやろうではないか!

「止めてくださーいッッ! 地球が! 地球そのものがあッ!」

「ファイナル! フラアアアアッシユッッ!」

極太のエネルギーの奔流がわたしに向け放ってくる。

「し、しまつ……なんちやって」

【パアアアンッ!】

片腕だけでわたしはエネルギーを宇宙の遥か彼方へと弾き飛ばす。  
なかなかのパウワーだ……。元のままなら半身が吹き飛んでいたかもしれない……。

まあ、吹き飛ばされても痛くも痒くもないのだが……。

「な、なにッ!? ば、バカなッ!」

「さてと、そろそろ殺してしまうか……」  
ベジータに歩み寄る。

「クツソオオオ！ハアアアツ!!」  
奴が気弾を放ってくるがそんなもの痛くも痒くもない。

「デリヤリヤリヤリヤリヤツツ!!」  
次々に飛んでくる気弾に爆煙と土煙があがるがわたしは気にせず  
ベジータへと近づき殴り飛ばす。

【バキイツ!!】

「うわああああ……!!」  
吹っ飛んでいくベジータ。更に追いかけて空高く蹴りあげる。

「うぐああああ……!!」  
すかさず空中でベジータの背後に回り込み、背中に思いつきり肘打ちを打ち込む。

「うぐあああ……!!」

【ドゴオオンツ!!】  
奴は地面に叩きつけられ意識を失ったようだ。  
その証拠に金髪が黒髪に戻っている。

「ハハハ！しぶとい奴だ。すぐ楽にしてやるぞベジータ」  
ベジータに止めの一撃を放とうとした時。ふと、大きな気を感じわ  
たしはそちらを見る。

すると、そこには気を大きくあげたトランクスの姿があった。  
その姿に雲の流れが早くなる。  
変化したトランクスがわたしのもとに降りてくる。

「お前を殺すぞ…。セル」

殺すか…。大きく出たな……。

「フツ…強気な台詞だな。トランクス」

ベジータへの止めを止め、わたしはトランクスと向かい合う。

その間に気を失ったベジータは孫悟誠に運ばれていくのだった。

アイツ、まだ生きていたのか……。

まあいい、今はコイツのほうが興味がある……。

わたしはトランクスの底力に胸を高鳴らせるのだった。

龍帝セルの本気！猛攻に耐えろトランクス！

sideセル

「……これでやつと心置きなく戦えるか」

「なに？」

「ベジータも連れていけたし」

「……知っていたのか」

「もおちろん。お前がわざとわたしをベジータから遠ざけようとしていたこともな」

「意外だな。分かっついて見逃すとは」

「当然だ……。わたしの興味は既にアイツにはないお前の真の力にある」

「……」

少しの間の沈黙が訪れる……。

「そこまで知っていたとはな……」

「楽しみだ、わたしの完全体の強さを知るときが来た」

「ツツ!!」

力を溜め始めるトランクス……。

わたしは奴の準備が整うのを待つ。

「ツ!!……はああああああアアアアアア……ツツ！」  
トランクスの周りにスパークが走る。

「見事なパワーだ……お前の親父のベジータとは比べ物にならない」

「お前達人造人間にこれ以上勝手な真似はさせないぞ！二度とあの悲惨な未来を、あの地獄を繰り返させはしない！」

地獄の未来か……。確かコイツはわたしより少し前の未来から来たんだったな。

奴の気が更に高まっていく。

「いいぞ、いいぞ……。ますます良い……すばらしいパワーだ……お前はわたしを越えたかもしれん……わたしは嬉しい」

「……ツ！」

「草葉の陰のドクター・ゲロ様もさぞかし喜んでいることだろう……なにしろやっつと究極のパワーを試す相手に巡り会えのだからな……」

「……」

さて、ではわたしも本気を出すとするか……。

「フウ……フンツ……この完全体の恐るべきパワーを早く試してみたいぞ……フハハハ……」

「望むところだセル。これからサイヤ人の本当の力を見せてやろう。はああああアアアア……ツツ！」

トランクスの体が肥大化していく。

「ハアッ！」

高速で攻撃を繰り返してくるがそれをすんでのところで躲わす。

「ダアツダダダダダダダッ！」  
空に逃げたわたしを追いかけ奴が気弾を連続で放ってくる。  
しかしわたしはもうそこにはいないのだぞ？

「……なにッ!？」

爆煙が晴れ、そこにわたしがいないことに驚くトランクス。  
わたしはその一瞬の隙を狙って背後から蹴りをお見舞いする。  
しかし、すぐさま体勢を建て直しわたしの背後をとると蹴りを入れ  
てくる。

だが、わたしは吹き飛ばない……。

「フフフ……どうした？そんなものか？」

「くっ……！」

わたしは奴の足を掴むとそのまま勢い良く投げ飛ばした。

【ドゴオオオンッ！】

勢い良く地面に叩きつけられる奴に一気に距離を詰め怒濤の追い  
討ちを駆けていく。

「ぐっ……！だあッ！」

「フンッ当たらんよそんな攻撃は」

【ドスッ!!】

カウンター気味に腹部に膝蹴りを叩き込む。

「うぐあああ……ッ！」

腹部を押さえて蹲るトランクスに更に両腕でアームハンマーを叩  
き込む。

「うがああああ…ッ！」

地面に叩き伏せられるトランクスを足蹴にする。

「ほらほら、さっきまでの威勢はどうした？」

「ぐっ…うう…！」

「まさかもう終わりか？期待はずれだな…。」

まあ、そんな肥大化してスピードが落ちてはどうやってわたしは倒せんよ」

そう言っつて足を話してやる。

「なにっ？」

「確かにおまえは強くなった。気だけなら…だが、そんな肥大化した筋肉ではスピードは無いに等しいと言うことだ」

「…ッ!？」

「さて、止めを刺してやろう」

わたしは奴に止めを刺すために手を構えるのだった。

side out

side 悟誠？

オレは今、奴等からかなり離れた場所を飛んでいる。  
ベジータ王子を亀のジジイの家に運ぶためにな…。  
しかし、そのどうちゆう

「うっ…ぐぐ…っ！」

こりや運ぶ前にあの仙豆とかいう豆を食わした方がいいかもな……。

オレは近くにあった島に上陸すると、ベジータ王子を日陰に寝かせ仙豆を口に押し込んで近くの岩に腰かけた。

「ぐうっ…ツ！はっ！」

仙豆が効いたのかガバッと起き上がるベジータ王子。

「よお、ベジータ王子…。どうだ？舐めたこととして格下だった相手ボコボコにされた気分は」

「…：貴様、あの小僧小僧じゃないな！何者だ！」  
いきなり噛みついてくるか…。

「負け犬に名乗る名前なんざ持ち合わせちやいねえよ」

「なんだと！オレが負け犬だと!!」

「違うのか？倒せる相手だったセルをお前の馬鹿なプライドで完全体にさせたあげく勝つならまだしも無様に負けやがった…。しかも息子に助けられる始末…。これを負け犬じゃなくて何て言えばいい？」

「ッ…!!」

返す言葉もねえか…。そらそうだ、あんだけ無様にやられたんだ。言い返せるはずもねえ…。

『そこまでにしておけ、猿野郎』

ドライグか、分かったよ…。

「オレは奴等の戦いを見てくるお前はさっさと妻とガキの所にでも帰るんだな」

そうやってオレは先ほどの場所に戻っていった。



side out

sideベジータ

奴が飛び去っていったのを見て、オレは悔しさに顔を歪めた。

以前はオレの方が上のはずだった……。

しかしナメツク星でカカロットに先を越され、挙げ句その息子にまで先を越されてしまった。

しかも奴は超サイヤ人をあつさり越えやがった……。

だからオレは悔しかった。オレは超エリートだ！そのオレが下級戦士のしかも息子に元々サイヤ人でもないただのガキに抜かれた……。

だからオレは強くなった。だが、セルはその更に上を行った……。

「チクショウ……ッ！クソツタレめエエエエツツ!!」

オレは一際吠えると奴が飛んでいった方向に飛んでいくのだった。

十日後に備えろ！セルを越えろ！孫一家

side バーダック

ベジータ王子と別れてから数分。

オレはセルのところへと戻っていた。

オレも根っからのサイヤ人だ。王子の考えることも分からねえでもねえ……。

だが、生まれ変わりの奴は違う、あいつは元々人間だった。

だからアイツの思っていることをオレが王子に話した。

アイツがあのままいけば覇龍を発動させかねなかったからな。

18号：いや、恩人を売られてアイツの精神状態はギリギリだった。

いつ神器を暴走させてもおかしくない状態だった。

なんとか理性があるうちに交代出来たから良かったものの、

もしあのまま生まれ変わりが神器を暴走させてたらセルはおろか、

この星は宇宙の塵になっちまってただろうな……。

と、そんなことを考えてるうちに近づいてきたな。

『バーダックさん…変わってもらえますか？』

なんだ、生まれ変わり。もう平気なのか？

『はい、なんとか落ち着きました。ご迷惑をお掛けしてすみません……』

別に構わねえよ……。そんじや近くに降りてから変わるぞ。

『お願いします……』

オレは近くの陸地に降り立ち体をアイツに返すのだった。

side out

バーダックさんに体を返してもらった俺はトランクスのところへと向かって飛んでいた。

トランクスの気が極端に小さくなってる…。

対してセルの気はデカイまま…無事だと良いんだが…。

しばらく飛んでいるとセルの気が遠ざかっていくのを感じた。

トランクスの気はまだ感じる…。急がねえと！

俺は急いで先ほどの場所に向かうのだった。

—————

目的地に辿り着くと、そこには地面に手をついているトランクスの姿があった。

「よかった、無事だったか…。」

俺はトランクスの近くに降りていった。

「……悟誠さん…ですか？」

「トランクス、無事でよかった…ああ、俺だよ」

そう言っているとベジータが俺達の近くに降りてきた。

俺は気にせず続ける。

「いったいここで何があったんだよ？」

「……………」

悔しそうにするトランクスを見てベジータが業を煮やしたのか俺

達に背を向けながら声をかける。

「セルはどうした？」

俺も気になってその返答に耳を傾ける。

「すみません…オレではどうすることもできなかつた…」

「フンツ…当然だ…貴様ごときにあの完全体となつたセルを倒せるわけないだろう！」

お前がさせたんだろうが…。

俺の中で黒い感情が沸き上がる。

しかしすんでのところでそれを押し込める。

すると、左手の宝玉が緑色に点滅しドライグの声が聞こえてきた。

『いや、ベジータ。それだけではないアイツは俺達の神器を使つていた』

「なんだって!？」

それに反応したのはトランクスだつた。

ドライグは続ける。

『ただの完全体とやらならお前達があそこまで圧倒的にやられはしなかつただろう…だが、奴は確かに神器をしようしていた。あれは所有者の能力を十秒ごとに倍にしていくものだ…だからベジータ。お前のおつておきもあつさりと防がれた…』

「…認めたくないが、もしそれを使つていながつたとしてもオレは負けていただろうぜ…ソイツもな」

「…ッ!!」

それほどまでの相手なのか…?セルは…。

どうすればいい、アイツはどうやったら倒せるんだ…。

「……アイツは武道大会を開くと言っていました。」

「ぶ、武道大会?! そんなこと言ってたのか!」

これってあれだよな? たしかドラグ・ソボールにもあった……。

「けど、誰が参加するんだよ! 俺達でもなんともなかった相手によ」

しばし、沈黙が俺達を包む……。

最初に口火を切ったのはトランクスだった。

「……オレ、オレ……悟空さん達が出てきたらもう一度精神と時の部屋に入るつもりです」

「……え?」

しかしそれを否定する声があったベジータだ。

「貴様もカカロットも小僧も必要ない!」

「え……?」

「このオレが後一日あの部屋を使えば……それで済むことだ」

コイツ……まだそんなこと言ってるのか? あれだけコテンパンにやられておいて……。

すると、もう一人声をかけてくる者がいた。

「お、オレも……オレも大会に出る」

「!!」

「16号……けど……」

そんなボロボロじゃ……。

「頼む…オレをカプセルコーポレーションまで連れていってくれ…  
くっ……」

そうか！ブルマさんのところなら！

「母さんの所へだつて！」

「トランクス落ち着け、分かった。俺が連れてつてやるよ」

「悟誠さん！」

トランクスが信じられないといった声をあげる。

「大丈夫だ、トランクス。コイツはそんな悪い奴じゃないから俺はコ  
イツのターゲットの一人だけどこんな状態なら俺が圧倒的に上だ」  
それを聞いてトランクスは黙り混んでしまった。

「感謝する…孫悟誠」

「いいさ、じゃあさっさと行こう」

「………すまない」

こうして俺は16号を抱えてカプセルコーポレーションに飛ん  
でいくのだった。

オマケ二人を連れて……。

—————

カプセルコーポレーションに着くとブルマさんの母さんが庭に

出ていた。

ブルマさんの母さんはベジータが降りてきたことに気づくと声をかけていた。

俺はブルマさんがいるか訪ねようと口を開いた。

「あの、すみません…ブルマさんいますか？」

「はい？」

はい？つて呑気な人だな……。

「あ、あの…ブルマさ」「よお、悟誠！」「ん？」

声のした方を見るとブルマさんのお父さん…ブリーフ博士がこっちに来ていた。

「ブルマならさっき連絡が入ってな？今こっちに向かっっておるそうだよ」

「そうっすか…まだ帰ってきてないんすか」

落胆しているところに聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『おーい!!』

この声は！亀のじいさん！

見上げると小型の飛行機が俺達の近くに降りてきていた。

飛行機が着陸すると亀のじいさん達が降りてきた。母さんやクリリンさんも一緒だ。

「亀のじいさん！」

俺はじいさんのもとに駆け寄る。

「亀仙人か武天老師様と呼ばんか…まあよい、ブルマからみんながカプセルコーポレーションに戻ると言う連絡が入ったのう」

「亀ハウスにいても状況がさっぱりわからなくてな……」  
そう話すのはヤムチャさん。

「いてもたってもいられなかったから俺達も来たんだ」  
そう説明してくれるのはクリリンさん。

「悟誠！悟飯ちゃんはどこだ！」  
響めっ面でそう聞いてくる母さん。  
そんな心配しなくても……。

「悟飯と父さんだったらまだ天界です。俺だけ先に出てきましたか  
ら」

「はあ……まだかあ」  
落ち込み方が半端じゃないな……。  
俺は母さんを必死に慰めながらカプセルコーポレーションの中  
に入っていくのだった。



## 修行終了！大会まであと九日

side 悟誠

16号を送り届けてから数時間……。

俺はベジータ達と天界に戻ってきていた。

ここに来るまでに起こったことを説明すると……

亀のじいさんがブルマの母さんの天下一武道会というものについて話していたり、セルがテレビに出てきたりと大変だった……。

そのお陰で世界は大混乱だ……人々は都会から一刻も早く離れようと大渋滞が起きている。

「悟空さんと悟飯さんはあとどれくらいで出てくるんでしょうか」

トランクスが不意にそう呟く。

「丸一日まで、後三時間近くある」

「フンツ……丸一日で出てくるとは限らんど、欲張ってかなり時間オーバーをするを見た」

まあベジータの言うことも分かる。今回の敵はとんでもない強さだもんな……。

「焦ることはない、また勝負の日まで九日もあるんだ。お前達は部屋から出て丸一日も経っていないではないか、少し休むがいい。まずは俺が入る。悟誠、お前は どうする？まだ三時間近くしか入っていないのだろうか？」

「そうっすね……それは父さん達が出てきてから考えます」

「そうか、なら、そうするがいい。まだ時間はあるだろうからな」  
ぶつちやけちまうと俺、多分父さん達を越えてるんだよな……。

中で父さん達がやっているだろうことはずっと前からやっていたし……

「それこそ時間の無駄だ。ここから先はサイヤ人にしか踏み込めん領域だぞ。まあ、好きにさせてやるが、残りの八日間は全てこの俺がもろうことにする」

ベジータの奴……バーダックさんに言われたことが相当ショックなんだろうな……。

ま、だからといって同情してやる気にはならねえけど。

「フツ……ソイツ残念だったな、あの精神と時の部屋は生涯で二日間四十八時間しか入っていられないのだ」

ええ!?! そうなのか？

「なツ!?! なんだと!?! どうなるんだ? 四十八時間を越えてしまったら」

その問いにMr.ポポが答えてくれる。

「部屋の出口が消え、二度と出られなくなる」

あ、ベジータの奴舌打ちしてる。

っていうか、やっべええええツツ! なんだそれ! そんな危ないところに俺は入ってたのか……怖ッ!

「でも父さん。俺達はまだ二十三時間ぐらいは使えますよ」

「フンツ……」

トランクスもまだ入る気にいるのか、まあ時間さえ間違えなければいい話だもんな。

ツツ! この気は!

俺は気を察知し扉の方を向く。他の皆さんも気がついたようで同じく扉の方をみていた。

「悟空達の気だ。あいつらもう部屋から出てきたのか？」

「なんだと！なんでこんなに早く」

「そんなのこつちが聞きてえよ！父さん達そんな修行が上手くいったのか？」

じつと見ていると悟飯と父さんが姿を現した。

「あり？やっぱベジータもトランクス、それに悟誠もいっぞ、セルの気も感じから生きてる。どうなってるんだ？いってえ」

「おお！やっぱり父さん達俺の予想道理のことをしてたみたいだな！

自然体の超サイヤ人、もつと早く教えとくべきだったかな？

「あれが悟飯か…見違えた……」

ピッコロさんが悟飯をみて啞然としている。  
弟子の成長をみて驚いてるんだろうな……。

「なにがあつたか教えてくれ」

父さん達がそう問いかけてくる。

「え？ああ、はい。実は……」

俺が事情を説明しようと口を開くと……。

「つとと、そのめえにMr.ポポ飯にしてくれないかな？オラすげえ腹ペッコペコでさー」

「あ、ああ……」

出てきていきなり飯とは…さすがは父さんだ……。

「は、ははは…お前らしいな、悟空」

天津飯さんも苦笑してるよ……。

「ガツガツガツ…ングング…んん！うめえ！」

「ホント！美味しいですー！」

……現在、俺達の目の前で父さん達が食事をしてる。  
大量に並べられた料理を二人は凄い勢いで平らげていく。  
にしても本当によく食うようなこの二人は……  
見ているこっちが腹一杯になっちまうよ。

「悟空、ちょっと聞きたいんだが……」

天津飯さんの問いに掻きこんでいたラーメンから顔をあげる父さん。  
ん。

「……ん？」

「お前達ちゃんと飯は食ってたはずじゃなかったのか？」

父さん達は顔を見合わせてから口をもぐもぐさせながら喋る。

「んん…ほひほんふってほほ！」

汚ったねえなあ！もう……

「おい！口の中のモンちゃんと飲み込んでから喋れ」

ピッコロさんにも怒られてんじやん……しっかりしてくれ父さん  
……。

しかもラーメン噛まずにそのまま飲み込んでるし……

「ちゃんと噛めよ……！」

ピッコロさんの鋭いツツコミが冴え渡る！

父さんは全く聞いてないみたいだけど……

「なんか……家の父と弟がすみません……」

変わりに俺が謝っておく……。

「お前も大変だな……」

ピッコロさんから憐れみの視線をもらっちゃいました！

クソオ！父さん達の所為で俺が恥かいてるじゃねえか！

「もちろん食ってたぞ！食ってたけどオラも悟飯もろくな料理できねえかな！こんなうめえモン久しぶりだ！」

そういえばそうだった。この二人料理出来ないんだつたよ……。

俺がいた時は簡単な料理は作ってあげてたもんな……。

いったい中でなに食ってたんだよ父さん達……

「そ、そうか……」

天津飯さん……なんか本当にすみません！

その後も二人は黙々と食べ続け、料理を全て空にした。

「いやあ！食った！食ったあ！待たせたなトランクス、悟誠。話してくれ」

「え……あ、はい、実は……」

トランクスが今まで起きたことを簡単に説明してくれた

「なるほどな、そういうや悟誠の方の修行は上手くいったんか？外で試してえことがあったんだろ？」

あ、そういえばそうだった。

「あ、はい、上手くいきました。完全な禁手に至ることが出来ました」

「ば、バランス・ブレイク？つてなんだ？」

「この場にいる人なら天津飯さん以外は皆見たことがあるはずですよ。そこまで言つて、悟飯が閃いたように口を開く。」

「それつてもしかして悟誠兄ちゃんを着てたあの赤い鎧のこと？」

「お、悟飯鋭いな。当たりだ」

「フンツ…あのフリーザに手も足もでなかったあの鎧がなんだというんだ？」

「あれは不完全な禁バランス・ブレイカー 手だったからで完全な禁バランス・ブレイカー 手は違う、今のあんたくらいだったら余裕で倒せるさ」

「ほう…面白い、セルの前にお前から消し飛ばしてやろうか？」  
ベジータと俺が睨み合い火花を散らす。

「ちよ、ちよつと待ってくれよ！こんなところでやりあつてもしようがねえだろ？」

「そうですよ！セルを倒さなきゃいけないってときに仲間割れなんてしてたら駄目ですよ！」

「……………そうだな、悪い」

「フンツ…………貴様らなんぞが仲間だと？笑わせるな」

「なんだと!!」

「だから喧嘩すんなつて…………ベジータも悟誠も落ち着いてくれよ」

父さんが必死にとめに入ってくる。

「分かりましたよ……」

俺はそれに折れて怒りを沈める。

「ふう、そういやMr. ポポオラの道着捨ててねえか？」

「あ、ああ…捨ててない」

そう言うとMr. ポポは父さんの道着を持ってきてくれる。  
それに早速着替えだす父さん。

「選択しておいた」

「サンキューMr. ポポ」

「それ着なくても母さんに言えば新しいのをくれますよ」

「いや、オラやっぱこれでいい、地球人として戦けえてえし」

悟飯もピッコロさんに近づいてなにかをお願いしている。

見ていると、悟飯はピッコロと同じ服装になっていた。

アイツ本当にピッコロのこと好きだよな……。

俺はやっぱりこの道着がいいや。なんかしつくり来る！

「で？どうなんだ、セルを倒す自信はあるのか」

「わかんねえさ、完全体つてのになったアイツに会っててねえかな。

これからちよつと見てくつか！」

そう言うとう父さんは瞬間移動でその場から消えるのだった

三日休んで三日特訓！んでまた三日休む！

side 悟誠

よお！俺悟誠！

今はカリン様の所に来てるんだ。

「こんにちは、カリン様」

「うむ……」

「こんにちは、お久しぶりです」

「おお、大きゆうなったのお」

「お久しぶりですカリン様、サイヤ人の時以来ですね」

「おお、そうじやの…お主、またとんでもないパワーアップを果たしたようじやな」

あちや、やっぱり見られてたか……

「そりやそうじや、しかもあんなパワーアップ方法だなんて思いもしなかったわい……」

「あ、あはは……あれしか浮かばなかったもので……」

俺、仙人様に呆れられちゃってるよ……。

「なんだ悟誠、おめえいったいどんなやりかたでパワーアップしたんだ？」

「父さんそれは聞かないでくれ……」



「??」

悟飯もそんな純粋な目でみないでくれ！胸があつ!!

「ま、いつか！それよりも、よお！ヤジロベー戻ってたんか」

「何しに来とりヤーす孫！言つとくがオリはどんなことがあつてもあんな武道大会出てやりやにやあでね！」

「凄いなこの人…凶々しくも言い切ったよ……。」

「はははっでえじようぶだよ。出てくれなんて言つてねえじゃねえか！」

「んく…なら、いいけどよ、なんつってもオリはいぎというときに便りになるでしょう！謂わばとっておきの秘密兵器っちゅうやつだわに！」

「よく言うわい……」

『「ははははははっ!!」』

ホントこの人面白いよなあ……

自分で秘密兵器っていつちやうし…しかもすかさずカリン様からツツコミもらってるし

「しかし、この地球も大変なことになってしまつたもんじゃなあ…下界は大騒ぎじゃ」

「ああ、セルは本当にすげえ奴だ。完全体になつてさらに完璧な強さを手に入れちまつた」

「そう言う割にはやけに落ち着いておるの…なんじゃ？ 精神と時の部屋で素晴らしい発見でもしたのか？」

「はははっ！まあな！」

あ、悟飯がキョトンとしてる…。父さんがなんでそこまで余裕なのか分かんねえんだな。

俺？もちろん俺も分からねえよ？ドラグ・ソボールの展開は知ってても、この世界の展開なんて知らないから

「なあ、カリン様こっから見えてセルの強さは大体分かつだろ？」

「う、うむ…真の力を見せてはおらんので何とも言えんが大体の予想はつく」

「ちよつと比べてみてくれオラがこれから気を入れてみつから」

あ、これヤバイ奴だ……。

「ちよつと失礼しますよ？バランス・ブレイク！」

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!!』

俺は急いで禁手して、ヤジロベーとカリン様を担ぎ上げる。

「ほっ？」

「な、なにすりやあす悟誠」

「こうでもしないと危ないですからね…っていうかヤジロベーさんもうちよつと痩せてくださいよ…この姿でも重いつて相当ですよっ！」

「う、うるしやあわ！オリの勝手にしょおが！」

と、そんなことを言い争っている……。

「はああああああああっ!!」

父さんが気を込め始めた。

予想はしてたけどやっぱ凄い気だ。  
通常の禁手でも吹き飛ばされそうだ……

【ビシッビシビシッ!!】

周りの壁にヒビが入り出した。

「も、もう止せ!ここが壊れる!!」

カリン様が必死に叫んで止めさせる。

「でやあああああ……(シユン)ふう……」

ようやく収まった……。

俺は二人を側に降ろす。

「今のででえてえ半分ぐれえだ、どう思う?」

「い、今ので半分じゃと?なんとまあ恐ろしい奴じゃ……お前はどこまで強くなりや気が済むんじや……」

父さんも呆れられてる……なんというかごめんなさい!

「で、カリン様。セルと比べてどうかかな?」

「ん…… 厄介なことを聞くのお……うくん……さっきも言ったように推測でしか答えられんが……はつきり言ってそれでもセルの方が上じやと思う」

やっぱしそうだな……。俺でもまだ勝てる気がしないし……。

「とんでもねえ野郎だわ!そのセルってやつは」

「ははっ!やっぱそうか、オラの予想は間違ってた。サンキュー!カリン様!」

「え……」

「……………」

「いこう、悟誠、悟飯」

あ、もう行くのか

「あ、はい」

「分かった」

俺は二人に近づき父さんの体に触れる。

「お、お邪魔しました……」

「ご迷惑をお掛けしてすみません……」

それだけを告げて俺たちは瞬間移動していくのだった。

戦士の休日！セルゲームに備えろ！

side 悟誠

よお！俺悟誠！

俺達は今パオズ山にきてんだ。

カリン様と別れてから俺達は母さんを連れて家に帰ってきた。

母さんが悟飯の髪型を見て嘆いてたけどそれはまた別の機会にて……。

今は悟空と悟飯そしてクリリンさんと一緒に釣りに来てるんだ。

こんなにのんびりしてていいのかとも思ってしまうけど……

まあ、父さんがやることだから気にしなくてもいいよな。

「静かだね、こー……」

「ああ……」

「そうだな」

俺達は湖の側に寝転んで呑気に空を眺めていた。

ちなみに今は俺も超サイヤ人状態になっている。

父さん曰く『同じことでもやらねえよりやってた方がさらに強くなれっさ』とのことだった。

不意に悟飯が口を開く。

「ねえ、お父さん、それに悟誠兄ちゃん」

「ん？」

「どうした？」

「僕、嬉しいんです」

「??」

「どうしたんだ？急に悟飯の奴……。」

「なんでだ？」

「お父さんと悟誠兄ちゃんと約束したんだよ。昔、僕と釣りしようって」

「そんな約束したっけなあ？悟誠、おめえ覚えてつか？」

「いえ、さっぱり……。」

「今までいろんなことがありすぎて、昔のこと思い出せねえよ……。」

「ほら！ベジータさんと初めて戦った時だよ！」

「ん？いつだ？」

「もう大分前の事だしな……。」

「それに俺は元の世界に帰ってたときに数年建ってるから特に思い出せねえ……。」

「するとクリリンさんが近くに降りてきて話す。」

「ほら、あの時さー！思い出さないか二人共」

「そう言っつてクリリンさんが手を差し出してくる。」

「それを見て俺の記憶がよみがえってきた。」

---

### 回想

『悟空よ、いつもお前に一人に運命を任せて悪いな…絶対に死ぬなよ？親友』

『ああ、悟飯！父ちゃんが生きてけえたらまた魚釣りにでも一緒に行こうな』

『！はい！その時はイツセーお兄ちゃんも！』

『そうだぞイツセー。お前も死ぬことは許さないからな！絶対、生きて帰ってくるんだ』

『はい！クリリンさん、それに悟飯くんも！絶対に勝って帰ってきます！な、ドライグー！』

《ああ…猿野郎如きに俺と相棒が負けたとあつては白い奴に笑われてしまうからな……》

『そうか、ならお前達を信じてるからな！』

---

回想終了

「んな？思い出したろ？」

「ああつ！」

「そーいやそんな約束してたっけか…すっかり忘れてた。

ドライグ覚えてるか？」

『いや、俺も忘れていた…今思い出したところだ』

「だよな、俺達からしたら一年ばかりじゃねえんだもんな……」

「そっか！あん時か!!」

父さんも思い出したらしい。

「あれからイツセーお兄ちゃんが本当のお兄ちゃんになったりして色々なことがあって一度も釣りに来られなかったんだよ?」

「悪かったな悟飯」

「俺なんかすっかり忘れちゃってたよ」

「あはは、仕方ないよ。それまでに色々なことがありすぎたんだからくうっ! やっぱ優しいな悟飯は!」

「良い子だな! 悟飯はよしよしい!!」

俺は悟飯の頭をわしゃわしゃと撫で回す。

「わっ! えへへ……」

悟飯も驚きつつも嬉しそうに撫で回されていた。

その横では何故か父さんとクリリンさんが湖に落ちて水を掛け合って遊んでいた。

『いったいなんなんだこの家族は……』

まあ、ドライグ。気にするなって!

『お前もずいぶん孫悟空に染められてきたな……』



動き出す防衛軍！セル打倒なるか！

side 悟誠

釣りの一件から翌日。

俺達は孫家と十クリリンさんでピクニックに来ていた。

【ポチャーン！】

池で魚が跳ねる。

「お！いたいた！ 見ろよホラ！でっけえ魚がいつぞこの湖」

「確かに今のはでかかったつすねえ釣ったら捕れるかな？」

いざとなりや焚き火くらいは自力でなんとかなるもんな。

「ねえ、お父さん」

「ん？」

「ホントにこんなのにのんびりしてて良いの？」

「まったくなんでそんなに落ち着いてんだ？悟誠も何も言わないしよ」

「しんぺえすんなって、なんとかなっさ！多分」

「多分って……ま、まあ俺は父さんのすることに従うだけっすから」

「でえじょうぶだ勝てるって！言ったじゃねえか、一気にこれ以上修行了らって意味ねえって限界までやったんだ」

まあ、信じるといった手前ごちやごちや言うのもなんだし、黙っと

くか。

「まあ、悟空がそう言うんだから、信じるしかないか悟誠も信じてるみたいだしな」

クリリンさんも何も言わないことに決めたようだ。

「みんな！お弁当の用意ができたぞ！」

お？母さんの方の準備も済んだらしい！

「お、サンキュー！ほれ、そんなこと気にしねえでのんびり楽しくやろうぜ」

「よっしゃ！飯だ飯イ！」

「あつ！悟誠！おめえズリイぞ！」

「ほれ、喧嘩せずに仲良く喰うだ！」

「あ、あはは……」

「相変わらすだよな、悟空も悟誠もさ……」

そうして俺達は弁当を食べ始めるのだった。

弁当も食べ終え、のんびりと空を見上げていた時だった。

「そうだ！みんなで帰りに武天老師さまのところに寄っていくべ」

「ああ……」

「良いですね…ん？」

【シユヒユウウウン!!】

空に無数の戦闘機が飛んでいくのが見えた。

『どうやらセルのところに向かっているようだな……』

なにツ?! ドライグ! それは本当か!!

『ああ、感じる気配と戦闘機の向かっている先を推測するに間違っ  
てはいないだろうな……』

こうしちゃいらねえ! まだ大会まで時間あるけど!

俺は急いで起き上がる。

「ん? どうしたんだ? 悟誠」

「……? 悟誠兄ちゃん?」

父さん達が不思議そうに俺を見てくる。

父さん達には言わない方がいいよな… 適当に誤魔化すか。

「すみません父さん、俺ちよつとトランク스에用事があるんで先に帰  
りますね」

「え? おお…… 氣いつけるよ?」

「はい、それじゃー!」

【ドビュンツ!!】

俺はその場から飛び立ち天界に行くように見せ掛けてあの戦闘機達の後を追った。

人間達がセルに攻撃したらずまず間違いなく殺される。それだけは防がなきゃならない！

まだセルとは戦りあえるとは思ってねえけど、やるしかねえ！

まずはこの軍のリーダーに攻撃をやめるように話を持ちかけるしかないか……。

そうと決まれば急ぐしかない。

ドライグ！禁化はどのくらい維持できる？

『ただ使うだけなら半年は余裕だろう。力を使えば一日分消費すると考えていい』

それなら多少は使っても大丈夫そうだな。

「行くぞ！バランス・ブレイク！」

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!!』

俺は禁手化して赤い鎧に身を包むと背中のブーストを吹かせ一気に急加速していった。

しばらく飛ぶと戦車の軍団を見つけた。

「あれだな？」

俺は吹かすのをやめると武空術に切り換え、その軍団に近づいていった。

そこでリーダーっぽい感じの老人に声をかける。

「なあ、アンタ。この軍のリーダーさん？」

「ツ！な、なんだ貴様は！セルという奴の仲間か！」

空から話しかけた事もあって驚かれてしまった。

他の奴等も驚いた顔をしている。

「いや、俺はアイツに敵対するものだけど…これ、どこに向かっているか教えてもらえます？」

「…分かった、我々は今セルという怪物のいる28KSの5地点に向かっているのだ」

ツ！やっぱしか…。

「それはやめておいた方がいい！そんな武装じゃアイツは倒せねえ！今すぐ引き返すんだ！」

「なんだと！そんな暇はない！殺されると分かっているとおめおめと引き下がるわけが無いだろう！」

そう言っただけの言葉を無視して老人は行ってしまった。

ちくしょう！人間達の説得は無理か…！

こうなりや一か八かセルに直接挑んでみるしかなさそうだな…殺されなきゃいいけど…。

俺は武空術を用いてセルのところに飛んでいくのだった。

気配を限界まで殺し様子を見守る。

しばらくすると軍の人間がセルを取り囲むように包囲した。

「攻撃用意！」

老人の掛け声で、一斉砲撃が開始される。

「始まった……！」

あんな攻撃じゃ、アイツに傷ひとつつけることはできないはずだ……。

俺はその弾幕が止むまで、気配を殺して見守っていた。

side out

side 悟空

悟誠が天界に向かってからオラ達は亀仙人のじつちゃんの家に向かっていたんだ。

「どの店もやってねえなあ……。みんな休みだ……。」

「そりゃ後七日間で死んじゃうかもしれないねえって時だ。誰も働かねえべ……。あーあ……。買い物なんてとても無理だべ……。」

「亀仙人のじつちゃんにお土産買ってこうと思ったのになあ……。」と、ここでラジオが切り替わりニュースが聞こえてきた。

『番組の途中ですが、ここでニュースをお伝えします』

「お！働いてる奴がいたぞ！」

ラジオは淡々と続けていく。

『セルという怪物を倒すべく28KSの5地点王立防衛軍ですが、

「まもなく攻撃が始まる模様です」

「なにッ!？」

「オラ達はその放送を聞いて驚きを隠せない。」

『皆さん、ご覧下さい、王立防衛軍の総力を結集した大群です！これではいかなる怪物でも成す術はないでしょう!』

これにはクリリンも驚きの声をあげる。

「ぐ、軍隊だって!？」

「馬鹿！何考げえてんだ！無駄に殺されるだけだつて分かんねえんか!!」

『物凄い一斉攻撃が始まりました！この轟音をお聞きください！す、凄まじい攻撃です！まだ！まだ続いています！これほどまでの攻撃を受けては！とつくに肉片すら残っていないでしょう!』

「に、逃げろ！早く!」

オラの声が届くわけでもないのにオラは眩く。

暫く轟音が響いていたが不意に轟音が止んだ。

どうしたのかと氣いていると……。

『信じられません！生きています！せ、セルは！まるで何事もなかったように!』

「や、止めろ！セル！殺すな……!」

「やめろおおっ!!」

オラは叫ぶ。

だが、その後に、悲鳴も爆発音も聞こえては来ない。

『だ、誰だあれは！』

そんなアナウンサーの声が聞こえてきてオラは耳を傾ける。

『と、突如現れた赤い鎧の人物がセルの動きを止めました！あ、あれは  
いったい何者なんだ……』

なっ!?なんだって!?

「お、お父さん！赤い鎧の人物って……」

「これって悟誠のことじゃないのか！」

「なんだと！なんで悟誠がそんなところにいるんだ!!？」

「分からねえ……なんでそんなところにいんだ！悟誠……！」

頼む！早く戻ってくんだ！殺されちまうっぞ！

『し、信じられません！鎧の人物はせ、セルとともに殴りあっています！』

くそっ……どうすりやいいんだ！

『ああ！鎧の人物がセルを殴り飛ばしました！軍の人たちに何かを呼びかけています！<今のうちに早くにげろ!!俺が奴の気を引いておく!>軍隊が逃げていきます！これ以上は危険と判断して我々もこれにて引き上げようと思います!』

と、そこでニュースは終わり音楽が流れ始めた。

悟誠！やめろ！無茶すんな！

「お父さん！僕！悟誠兄ちゃんを助けにいきます！」

悟飯が車から飛びだそうするのをオラは叫んで呼び止める。



「やめろ！悟飯！おめえが行って敵う相手じゃねえ！今は耐えるんだ！」

「でも、でも……このままじゃ悟誠兄ちゃんが殺されちゃうんだよ！！」  
くっ……！！どうすりやいいんだ！！頼む悟誠、無事でいてくれ！

オラは悔しさで体に力を込めるのだった。

神を探せ！悟空新ナメック星探索！

side 悟誠

「オオオオオッ!!」

渾身の力を込めた拳打がセルめがけて突き出される。しかし…

【パシッ!】

俺の渾身の突きはいとも簡単に受け止められ防がれてしまった。

「チイッ!」

左手で気弾を放ち奴との距離を空ける。

しかし、セルは追撃しては来ず、静かに口を開いた。

「何故だ?」

セルから出てきた言葉は疑問だった。

俺は言葉の意味がよく分からず首を傾げる。

「孫悟誠、何故お前は実力を見せない? お前の実力はこんなものではないはずだ」

そこまで言われて俺はようやく言葉の意味を理解する。

「当たり前だろ本番がある前に手の内を見せちまったら本番での楽しみがなくなっちまうだろ?」

そう返すと、セルは納得したようにうなずいた。

「確かに今争っているのは本番の楽しみが一つなくなってしまうな…  
いいだろう、今回は大目に見てやる。ゲーム当日を楽しみにしているぞ」

そうやって俺に背を向けるセルに俺は驚き、声をかける。

「俺を見逃すつてののか？」

「見逃す？違うな、私はただ楽しめる戦いがしたいだけだ… お前をここで殺してしまえばその楽しみが一つ無くなってしまふ… それには私にとつてもお前たちにとつても得策とはいえないからな」

要は大会前に俺を殺すのはもったいないからその時まで生かしておいてやるつてことか？

「分かったのならさつきと行くがいい、私は壊れたリングを作り直しに行かなくてはならなのでこれで失礼させてもらおう」

そう言うセルはどこかへ飛び去ってしまった。

『相棒、戻るぞ… 孫悟空達が心配している』

ああ、そうだな…。

俺はセルが飛び去った方を少し眺めると背を向け、父さんの感じる方向に向かうのだった。

s i d e o u t

s i d e 悟空

時は少し遡り、悟誠がセルと戦り合っている時…。

ラジオのチャンネルが再び切り替わったところでオラはラジオを切つて車を降りる。

「悪いけど、みんなは先に<sup>帰っ</sup>ていてくれ、ちっとピッコロに用事があるんだ…」

それだけ伝えるとオラはピッコロの気を探り瞬間移動していった。

神殿に着くとピッコロの他にMr.ポポとトランクスがいた。

「悟空さん！大変です！悟誠さんが！」

オラを見つけるなりトランクスが慌てたように話しかけてくる。

「ああ、ラジオで全部聞いた…」

「その割には随分と余裕そうにしているじゃないか、息子が心配じゃないのか？」

ピッコロが軽くオラを睨みつけながらそう言うてくる。

「心配してねえわけじゃねえさ、けど、アイツなら心配ねえさ！」

「ほう？随分な自信だな… アイツがセルを倒せるとでも思っているのか？」

尚も続くピッコロの問いにオラは首を横に振って答える。

「いや、いくらアイツでもセルを倒せるとは思えねえ」

「ならばなぜそんなことを言う！お前は今息子を見殺しにしようとしているんだぞ！」

「別に見殺しにしようとしてる訳じゃねえよ… 今のアイツはオラやベジータより強え、そんな奴がそう簡単に奴に殺される訳がねえってことさ」

その言葉にピッコロは押し黙るが、すぐに口を開く。

「それは分かったが、お前は何しにここへ来た？」

と、そうだった！忘れるところだったぞ！

オラはピツコロに神殿ここに来た要件を話し出した。

「おめえってまた神様と合体するめえ前みてえに二人に戻れねえんか？」

「なに？」

「ほれ、神様とピツコロが融合しちまったからドラゴンボールが消えちまっただろ？なんとか復活させて、セルに殺された沢山の人間たちを生き返らせていきけえらせと、多分…これからも必要になって来ると思うし」

「なるほど、だが残念ながらそいつは無理だ。一度合体してしまうと、二度と二人にはなれんのだ…。そうでなければ神との合体をあれほど躊躇いはしなかった」

「そっか、やっぱだめか… そうだよな…」

ある程度予想していた言葉が返って来てオラは少し肩を落とす。

だが、オラにはもう一つ考えてきた作戦がある！

「なあ、悟飯から聞いたんだけど、生き残ったナメツク星の人達ってどっかの星に行ったんだろ？オラが探してもいつかな？」

「なに…？」

その言葉にピツコロが眉を顰める。

「出来ればそのうちの誰かがずーつと地球にいてくれてもいいって事になればさー神様もドラゴンボールも復活だ！」

『!?!』

その言葉にばの全員が驚いた表情を浮かべる。

「オラこれからちよつと行ってくる！ナメック星人を探しによ！」  
それに一番食いついたのはMr.ポポだった。

「神様見つかったら、ポポも嬉しい！」

「しかし悟空、どうやってこの星まで来てもらうつもりだ？どこにいるかも分からのだぞ？時間がかかりすぎてしまう」

「何言ってるんだ！オラには瞬間移動があんじやねえか！ピッコロとよく似た気を探せば、そこがナメック星人のいる星だ！」

「そんな遠くの気まで探せるのか？」

「多分な、相当遠くじやなきやあでえじようぶだと思う！早速やってみる、ちつと静かにしてくれ……」

そう言うとおらは額に指を添えるとピツコロとよく似た気を探し始めた……が

「悪い、ダメだった……どうしよう？」

【ズコッ！】

全員がタイミングよくズッコケていた。

「そ、そうだ！界王様のところならさ探せつかもしんねえぞ！」  
そう言うとおらは再度気を探り始める。

「ええつと……界王さま界王さまあ……見つけた！」

今度はすぐに見つけることが出来、オラは言うや否や瞬間移動していくのだった。

「えつと…どこかな〜界王さま、界王さま〜つと、ん？」

「〜ZZZZ」

界王星に着くと、そこでは界王様がリクライニングチェアに寝転んでのんきに昼寝をしているところだった。

「はははー！いたいたー！ははははー！」

界王さまを見つけるとオラは早速近づいていく。

その途中ペットのバブルスに軽く挨拶をしてから寝ている界王さまに声をかけて起こしてみる。

「界王さま、なあちつと起きてくれねえか？オラだ、孫悟空だよ」

と、そこで界王さまの鼻提灯が割れて界王さまが目を覚ました。

「はえ？んん？悟空？おーおーおー悟空！なんだ？それは超サイヤ人か？なんだ、暇つぶしにでも来たのか？」

起きたなり酷っでえこと言うなあ…。

「チエツ、なんだよのんきだなあ…今地球じゃ大変なことが起こってるの知らねえんか？」

「へ…？」

ポカンとしてる界王さま。

仕方ねえから何もわかっていなさそうな界王さまにこれまでの経緯と目的を説明して新ナメック星を探してもらおうことになったんだ！

(その途中騒ぎすぎて怒られたり仕返しとばかりに騒がれちまってグダグダしたんはまた別のお話)

界王さまにナメック星の方角を教えてもらいその方角に気を探る。

「!やった!この気だ!まちげえなくナメック星人の気だ!サンキュー!界王さま!」

そうお礼を言うとオラは早速新ナメック星へと瞬間移動していくのだった。

そしてその最長老のおっちゃんに紹介されたデンデっちゆうナメック星人連れてオラは地球へと帰っていったのだった。



## 悟誠強化転移編

新神様着任！復活のドラゴンボールと修行のイツ  
セー！

side 悟誠

俺が父さんの気を探って飛んできたのは神殿だった。

そこからは父さん以外の気も感じられた。

飛びそうになる意識をなんとか保ちながら神殿に着くと、そこに父さんの姿はなかった。

代わりにピッコロさんが俺に気づいて驚きの声を上げる。

「悟誠?!無事だったのか!」

「… 悟誠さん!」

ピッコロのさん声でトランクスも気づいたのかこちらへ駆け寄ってくる。

「ピッコロさん… それにトランクスも… それと、誰…?」

朦朧とする意識の中、知らない人影が目に写る。

その疑問に答えるようにピッコロさんが話してくれる。

「アイツはデンデだ。以前、悟飯達が助けた奴でな、ついさつき悟空が連れてきた」

「よ、よろしくお願いします!… ってそれどころじゃないですよ!すぐ治療しないと!」

挨拶をした直後に慌てだすデンデと呼ばれた子ナメツク星人…。

ああ、そういえば悟飯がなんか話してたような気がする…。

生き残ったナメツク星人のなかで仲良くなった子がいるって…。

「ははは… こんなの寝とけば治るさ…」

「ダメです！座ってください、動かないでくださいね？」

有無を言わせぬ口調で俺を座らせると子ナメック星人は両手を俺の身体に添えなにやら怪しいことをしはじめた。

【キュインキュインキュインキュイン…】

すると、その両手が光だし、光が当たっていたところの傷が見る見るうちに塞がっていったのだ。

次第に重かった体も軽くなっていき、やがて意識もはっきりとしてくる。

「なっ!?!これは…」

「デンドエは俺のように支援タイプのナメック星人でな、そうやって傷の治療ができるんだ。俺やベジータもそれに何度か助けられた」

「そんなことが…」

ピッコロさんの説明で俺は納得する。

まさかそんな能力を持つてるとは… 宇宙人… 侮れないぜ！

と、そんなことを考えていると治療が終わったのかデンドエと呼ばれた子ナメック星人から光が消える。

「ふう、はい、終わりましたよ。気分はどうですか？」

俺は軽く身体を動かしてみる。

「凄い… 前より体が軽くなったみたいだ…」

「どうやら、サイヤ人の特性が出たようだな…」

と、そこである人達が現れる。

悟飯達だ、どうやら父さんが連れてきたらしい……。

「わぁー！悟飯さん！クリリンさん！」

「ホントだ！デンドェだ！それに、悟誠!!」

「悟誠お兄ちゃん無事だったんだね！」

「ははは…… なんとかな、それより、その子と久しぶりに会うんだろ？ ゆっくり話して来いよ」

「う、うん！」

「いこう！悟飯！デンドェ！」

『はい！』

そうして向こうで楽しそうにはしゃぎ回る三人を見ると父さんが話しかけてきた。

「悟誠、よく無事だったなあ…… でも、なんであんな無茶したんだ？」  
ウソは言うわけにはいかず、俺は仕方なしに理由を説明する。

「あの時、ドライグがああ軍隊の行き先を教えてくれたんだ。それで黙っていたら当然大勢の人が殺されちゃう…… そう思ったら俺、いてもたってもいられなくてさ…… そしたら体が勝手に動いてたんだ」

俺の言葉に父さんは何を言うでもなくただ黙って聞いていた。  
そして不意にこう語った。

「そっか、よくやったな悟誠。けど、もうあんな無茶すんじゃないやねえぞ？  
チチも悟飯、それにクリリン、オラだっておめえの事を心配してたんだ。あんま家族に心配かけんじゃないやねえぞ」

それを聞いておれはとても申し訳なく気持ちになる…。それと同時  
時に悟空の父としての優しさを感じていた。

「…………… 分かったよ、悪かった」

「ニッ！分かりやあいさー！」

父さんはそう言うといたずら小僧のように笑んで肩を組んでくる。  
こう言うところははまだ子供だなど思うが、きっと父さんはこれがあ  
るからこそ強いんだと思う。

と、そこで悟飯が声をかけてくる。

「お父さーん！悟誠お兄ちゃーん！デンデがドラゴンボールの復活さ  
せるよー！」

「おう！今行く！んじや悟誠行くか！」

「はいー！」

そうして俺達はデンデの所に向かった。

デンデのもとに着くとデンデは石で作られた龍の模型の目の前で  
両手を翳している所だった。

真剣な面持ちで何かの言語を唱えだすデンデ……。

「トットラット…ポツポルンガ…プーラルポンポ…ピツテンパロ…  
プーパポーポ…トツテンペツポ…プツピパーロ…ポツポンパツパ…  
パラプルペイポ!!」

瞬間デンデの手から黄金色の光が溢れ出し、龍の模型へと注がれて

いった。

光り輝く龍の模型は次の瞬間黄金の輝きした光を放ち天高く昇ると、途中で七つに割れどこかへと飛び去って行った。

「…ふう、これで散らばって石になっていたドラゴンボールは復活したと思います」

「い？もう」

『さっすがあ！』

「ナメック星人…やはり侮れん…」

上からデンデ、父さん、悟飯&クリリンさん、俺の順に呟く。

にしても、もう復活したのか…なんというか、もう少し時間がかかるものだと思ってただけだな…。

「よし！じゃあオラがブルマにドラゴンレーダー貸してもらって集めてくる！」

「頼んだぞ、悟空」

「ああ、悟飯、おめえもう特訓はいいからセルゲームまでここでデンデと遊んでてくれ、悟誠はどうする？オラと来るか？」

言われて少し考え込む…。

「いや、俺はもう少し修行しようと思う…もう一度、精神と時の部屋に入って限界いっぱいまで修行してみる」

「いいっ!?またあの部屋に入るんか!?おめえもう相当強えじゃねえか！」

父さんの問いに俺は首を横に振る。

「今日セルと戦ってみて気づいたんだ、今のままじゃアイツには勝てない…。だからもつともつと強くなってアイツを越えなければいけないって…。」

そこまで言うとう父さんは真面目な顔になり言った。

「分かった、じゃあ頑張れよ！悟誠！オラおめえがもつと強くなること願ってんかん！」

そう言うと、父さんは飛んで行ってしまった。

それを見送り、俺は精神と時の部屋へとむけて歩き出す。

「あ、待ってください！悟誠さん！今は父さんが中に入ってるんです。もうじき出てくると思いますからそれまでよければ俺の組手の相手をお願いできませんか？」

「なんだ、まだ誰かいたのかよ…。分かった！相手してやるよトランクス！」

「ありがとうございます！では、いきます！」

そうして俺はベジータが出てくるまでトランクスの相手をしてから部屋の中に入っていくのだった。

飛ばされた悟誠！向かう先はもう一つの時空！

sideピッコロ

悟誠が精神と時の部屋に入ってからそろそろ二日が過ぎようとしている…。

しかし、悟誠は一向に出てくる気配はない。

アイツめ：分かっているのか？あの部屋は人生で二日以上入っていれば二度と出てこれんのだぞ！

「ねえ、ピッコロさん…」

気がつくど、悟飯が不安そうに話しかけてきていた。

「悟飯か、なんだ？」

「悟誠兄ちゃん…大丈夫でしょうか…」

「…それは俺にはなんとも言えん…奴が自力で出てくるのを待つほかあるまい」

「……そうですね」

悟誠、悟飯が心配しているぞ！さっさと出てきて安心してやれ…。

俺はそんなことを考えながら部屋の方を見やるのだった。

side out

side 悟誠

俺が精神と時の部屋に入ってから半年が経たった。

それまで俺は寝ても覚めても修行に明け暮れていた。

起きている時は肉体的に…寝ている時はドライグに精神内で鍛え

てもらいそれなりに強くなった。

だがまだセルを倒すには足りないこんなものではアイツは倒せない…。

そう自分を追い込んで修行していたある日のこと…。

俺の前に不思議の色に輝く光があった。好奇心から俺はその光を触ってみた、それが失敗だった…。

「あつ…」

【シュインツ！】

大した抵抗もできぬまま俺は光に飲み込まれてしまった。

徐々に光が弱まる中、俺はうつすらと目を開けた。

そこは何処かの建物の中の様だった…。

訳が分からず辺りをキョロキョロと見回していると不意に俺を呼ぶ声があった。

「……………イツセー…さん？」

「おや？君は赤龍帝かい？おかしいな、彼ならまだ向こうで戦っているはずなんだけど…」

その言葉に振り返ると見覚えのある金髪の少女アールシアと見知らぬ男がいた。

アールシアは十字架のようなものに貼り付けられ、目元を泣き張らしたように真っ赤にしていた。

どうしてそんな顔をしてるんだ？折角の綺麗な顔が台無しじゃね



えか…。

恐らく、というか間違いなくこいつが原因で泣いていたのだろう、俺は男に向かって男に睨みを利かせながら問いかける。

「…お前がアーシアを泣かせたのか？」

すると男はさも楽しげに笑いながら話し出した

「クッククク！そうだよ！僕がやった、アーシアに全てを話してあげたのさ！」

「…そうか、こいつがアーシアを泣かしたのか…。それなら話は簡単だ…。」

「アーシアを…女を泣かせる奴は男じゃねえ！お前をぶっ飛ばす！アーシア、もう少しだけ待ってろよ？すぐに終わらせるからな」  
そう言っただけ俺は一気に気を解放させた。

side out

side 三人称

「はああああああああ!!」

悟誠が気を高め一気に解放させる。

【ドンッ!!】

その音と共に、辺りに衝撃と光が溢れだす…。  
光が収まるとそこには……

【パリッパリッ!!】

「……………」

周りに黄金色のオーラと青白いスパークを走らせ、男…ディオドラ

を睨む悟誠の姿があった。

悟誠が放つ気迫にアーシアは身を震わせ怯えている…。

しかし、ディオドラはそれを気にした様子はなく楽しげに高笑いをしている。

「アハハハハ！すごいね！これが君のチカラか！でも、僕もパワーアップしているんだ！オーフィスから貰った『蛇』でね！キミ程度瞬きさ…ッ！」

【ドツゴオツ!!】

ディオドラが何かを言い切る前に瞬時にディオドラに肉薄した悟誠の拳がディオドラの腹部に突き刺さった。

「……かつー！」

体をくの字に折り曲げ、壁際まで吹っ飛んで行き壁に思い切り叩きつけられるディオドラ。

悟誠は拳を構えて言う。

「おい、俺なんて瞬殺なんじゃなかったのか？」

なんとか立ち上がったディオドラは腹部を押さえながら、後ずさりしていく。その表情は先ほどのような余裕のある笑みは消えていた。

「くっ…こんなことで！僕は上級悪魔だ！現魔王ベルゼブブの血筋だぞ！お前みたいな卑しいドラゴンに負けるはずないんだ！」

その言葉に今度は悟誠の方が余裕のある笑みを浮かべ籠手に向かって話しかけ始めた。

「おい、聞いたか？ドライブ、魔王の家族が俺達を卑しいドラゴンだつてよ」

『ああ、聞いたぞ相棒、俺達を卑しいなどと呼ぶとは…これは少し』

『キツイお灸でも据えてやらんといかんよなあ』

そうハモリながらふぎけた事を抜かす悟誠とドライブ…。

「卑しいドラゴン風情が調子に乗るな!!」

そう叫んだディオドラが無限にも等しい魔力弾の弾幕を悟誠に向けて撃ち放つ。

しかし悟誠は避けようともせずそれらを喰らう。辺りに爆炎が巻き起こる。

「イツセーさん!!」

アーシアがそれを見て叫ぶ…。

「ハハハハ!! やっぱこの僕には敵う訳が… ツ?!?!」

高笑いをしていたディオドラがもうもうと立ち上る爆炎を見て言葉を失う…。

少しして爆炎が晴れると、そこには…。

「こんなものか?」

無傷で不敵に笑う孫悟誠の姿があった。

s i d e o u t

s i d e イツセー

ディオドラの下僕達との戦いに勝利した俺たちは最深部にある神殿まで辿り着いたところで言葉を失っていた…。

そう、そこには ディオドラ が待ち構えているのではなく 金髪のを逆立てた少年にディオドラが フルボツコにされている光景だった。

「あがあっ…!…こ、こんなはずじゃあ…!」

「オラ、俺なんか瞬殺シユンコロ出来るんだろ？殺ってみろよ？上級悪魔（笑）さん？ダラア!!」

そう言いながら勢い良く空中へとディオドラを蹴りあげる少年はどうやったのか先回りして今度はその背中に振り上げた両手を叩きつけ落としていた。

「・・・いったい何が起こっているの？どうしてディオドラがあそこま  
でボロボロに…？」

部長も訳がわからないと困惑している。

「部長！あの人がディオドラをやってくれてる間にアーシアさん  
！」

「そうね！」

木場の言葉に部長は頷き俺も後に続く。

本当は俺もディオドラを一発殴り飛ばしてえんだけど、あれじゃあ  
逆に憐れにも見えてくる…。

だが、アイツの自業自得だからしようがないと割りきって俺もアー  
シアの所に向かうのだった。

その後、アーシアの拘束具を洋服破壊ドレス・ブレイクで破壊しディオドラをボコつ  
ていた奴がアーシアを助けてシャルバとか言うやつを一瞬で消し飛  
ばした事によって俺達は何事もなしに帰還するのだった…。

俺そつくりのソイツを連れて…。

異世界での会合！赤龍帝と赤龍帝！

side 悟誠

よっ！俺悟誠！

アースアを泣かした奴をぶっ飛ばした後、何故か近くにいたりアス先輩？や俺そっくりな奴に連れられてそいつらの拠点へと連れてこられたんだ！

その時に簡単に俺の事情を説明して帰り方が分かるまでこの家にお世話になることになった。

それから俺はアース先輩の協力者として数々の事件を解決していったんだ！

自称悪神とかいうロキとか名乗るおっさん（超サイヤ人にならなくても余裕で倒せた）

リアス先輩やアースアの子供化の解除薬の素材集め（素材集め時のイツセーに奴は半泣きになりながらも龍とかと戦ってたっけか…）

そんなこんなでイツセーの成長を見守ってたんだ！なんとって俺と同じ赤龍帝だからな…。

そんなある日、イツセー達が学園の修学旅行で京都に行ったんだ。え？俺はいかなかったのかって？モチロン行ったさ！飛んでな…。

着いていけばよかっただろうとか聞こえてきそうだから先に行っておくけど…。

俺、もう駒王学園の生徒じゃねえからこうやって向かうしかなかったんだよな…。

で、時は進み今俺（+グレモリー眷属）は英雄派？とかいう奴らの頭領である曹操達英雄派幹部と激闘を繰り広げてんだ。

イツセーは曹操、木場&ゼノヴィアコンビはジークフリート、イリナがジャンヌ・ダルク、ロスヴァイセさんがヘラクレス…。

そして俺と匙は暴走した九尾の狐、八坂さんを相手にしていた。

「ジャアアアアアアアアアッ!!」

「オオオオオオオオオオオッ!!」

「グオオオオオオオオオッ!!」

黒と赤の炎が飛び交い、金色の巨大なエネルギー波飛んでいく。  
曹操達が作り出した疑似空間の京都には幸いなことに満月が登っていた。

俺はそれを利用して大猿へと姿を変え、八坂さんを迎え撃つ。

「オオオオオオオオオオオッ!!」

【ゴオオオッ!!】

八坂さんが激しい炎を俺に向けて吐きつけてくる。  
俺も応戦するように口からエネルギー波を飛ばす。

『喰らうかよ!!』

【ゴッ!!】

炎とエネルギー波がぶつかり辺りに爆発を起こす。  
だが俺はそれを突っ切り高速で八坂さんへと距離を詰めるとその首元に重い一撃を落す。

「ギャウツツ!？」

その行動に驚いた八坂さんは何も反応できずに気絶する。

『ふう、こっちはとりあえず完了か』

そう言う空にある疑似の満月に向かいエネルギー波を放って月を破壊すると俺の身体は元に戻った。

「・・・なあ、俺全く活躍出来てねえんだけど・・・」  
同じく元に戻った匙が何とも言えない顔で話しかけてくる。

「悪い、どうも匙だと分が悪そうだったからさ・・・さて、他の皆は・・・」  
そう話題を強引に切り替え、俺は戦況を確認する。

戦況は最悪、イツセーとアーシア以外のみんなは倒れ傷だらけになっただけだ。

「まさか九尾を無力化してしまうとはね、やはり警戒すべきは赤龍帝ではなく君だったようだね孫悟誠・・・次はキミが俺の相手をしてくれるのかな？」

仲間たちと話していた曹操が俺に声をかけてくる。

「いいぜ？全員纏めてかかって来い・・・と言いたいところだが、お前の相手は俺じゃないみたいだ・・・」

俺は曹操の方には向かずにイツセーの方を見る。

そこにはイツセーの籠手が放つ宝玉の光から現れた被害者たちの残留思念変質者が一つの陣を形成している所だったのだ。

その紋様の文字には『おっぱい』と描かれており、紋章に至ってはおっぱいをかたどったと思われる画が描かれている・・・。

そしてついにおかしくなったのかイツセーがおかしなことを口走った。

「サモン召喚ッ！おっぱいいいいいッ！」

おいおい・・・元は同じ人物だけど、これはないんじゃないか？

『『『いつは酷い・・・』』』

ドライク...バードック...エルシャ  
俺の中の人達達も呆れてるし・・・。

そんな風に見守っていると、魔方阵からは半裸のリアス先輩が現れて乳を曝け出すとイツセーがそれをつつき消えていくという謎の絵

面が展開されていた…。

「孫悟誠… あれ、俺達はどうしたらいいのか分かるかい？」

「敵にそんなこと聞くんじゃないよ…」

どうすればいいのかなんて俺のが聞きたいところなんだけど……。

複雑な心境の中、イツセーの変化を見守っているとイツセーの肩と背中に赤いオーラが集まり出しバツクパツクと大口径のキャノン砲が装備されていた。

あれは！ バランス・ブレイカー 禁 手の進化なのか!?

『ああ、そのようだ…。だが、小僧のあれはあの魔王が手を加えたことや悪魔の駒で転生しているからこそ出来た芸当だろう…。あとは相棒も好きな『アレ』だろうな』

『間違いなくアレだろうな…』

『ええ、十中八九アレでしょうね』

アレって何すか？

『お前が昔よく言ってただろおが…』

俺が昔よく言ってた？

バーダックさんの言葉で頭を悩ませる…。

うーん… はっ！もしかして『おっぱい』ですか？

『ええ、多分… というか確実にそうよ？今までの様子を見るに…』  
そう言われてみればそうっすね…。

と、そんなことを話している間にもイツセーは次々に形態を変化させていき曹操を追い詰めていった。



しかし、駒の特性を禁バランス・プレイヤー手に『プロモーション』の効果を付与させてさらなる進化か・・・あれは俺自身も強くなるヒントになりえそうだ・・・。

俺は興味深げにその戦いを眺めているのだった。

禁手の限界を超えろ！悟誠次のステージへ！

side 悟誠

オツス、俺悟誠だ！今俺はある理由で冥界にいる。

理由は簡単で、リアス先輩たちのレーティングゲームを観戦するた  
めだ。

俺はグレモリー眷属じゃないし、ましてや悪魔ですらないから参加  
は出来なかったんだよな……。

その代わりとばかりにリアス先輩の兄であり、現四代魔王の一人と  
されるサーゼクス様にお呼ばれしたのでこうしてレーティングゲー  
ムを観戦しているというわけだ。

映像には獅子のような鎧を着込んだサイラオーグさんと、  
バランス・トレイカー 禁手の戦車形態になった乳龍帝イッセルが殴り合い倒れるさまが流れて  
いる。

「凄い戦いだ、この戦い、赤龍帝である君はどう見る？」

不意にサーゼクス様が俺に声をかけてくる。

「そうですね、この程度ならまだまだ子供のチャンバラに見えますね」  
そう俺が冷静に答えるとサーゼクス様は少し驚いたような顔をす  
る。

「そうか……君からすればこれはまだ遊びに「でも！」ん？」

サーゼクス様の言葉を遮るように俺は更に口を開く。

「これでいいんだと思います。これ以上の戦いはもう遊びやゲームな  
んかじゃ済まされない……。ただの殺し合いになってしまえますか  
ら」

そう言いながら俺は視線を映像に戻す。

映像にはリアス先輩のおっぱいが紅い輝きを放ち、その光を浴びて

立ち上がるイツセーの姿だった。

その姿は深紅の鎧に包まれていて、とてつもない力を感じる……

『ドライグさんよお、いったいなんだありや?』

『どうやらあの小僧はジャガーノート・ドライブ覇龍を別の力へと進化させたようだ……』

『あのジャガーノート・ドライブ覇龍を……とんでもない子ね』

俺の中でバーダックさん、ドライグ、エルシャさんが話しているのを聞いておれはジツとその映像を眺める。

あれが……ジャガーノート・ドライブ覇龍の新たな可能性……

映像には深紅の鎧に身を包んだ乳龍帝と獅子の鎧に身を包んだサイラオーグさんが殴り合いをしていた。

とてもじゃないが綺麗な戦い方とは言えない、型もなく、ただただ相手を殴り続ける。

だが、その戦いの凄まじさはそんなことは関係ないとばかりに俺をワクワクさせていく。

けど、俺はこれ以上みている訳にはいかないよな……

俺は席から立つとサーゼクス様に一言伝えた。

「すみません、サーゼクス様。俺はそろそろ帰らせてもらいますね」

「もう帰るのかい?リアス達を待つてあげないのかな?」

不思議そうに聞いてくるサーゼクス様。

けど、これ以上あんな戦いを見てたら俺、辛抱できねえよ……

そんな内心をひた隠して俺は笑顔を作り言う。

「もう結果は見えてますから、それに、やることも出来たので……」

そこまで言うのとサーゼクス様は納得したような顔で頷いた。

「分かった、それじゃあグレイファイア……」

後ろで待機していたグレイファイアさんに声をかけるサーゼクス様。  
グレイファイアさんもすぐさま反応して動き出す。

「はい」

「悟誠くんを送ってあげてくれ」

「畏まりました…。行先は兵藤家でよろしかったですか？」

グレイファイアさんの問いに俺は首を横に振る。

「いえ、あのトレーニングループでお願いします」

こうして俺はサーゼクス様に別れを告げ、グレイファイアさんと共に  
トレーニングループへと向かったのだった。

魔方陣の光が収まり俺とグレイファイアさんはトレーニングループ  
の前へとやって来ていた。

「到着いたしました、こちらでよろしかったですか？」

「はい、すみませんわざわざ送ってもらっちゃって…。」

流石に迷惑かけちゃったかな？それだったらすごい申し訳ないん  
だけど…。

しかしグレイファイアさんは小さく首を振ると。

「これもサーゼクス様のご命令ですので…。では、失礼します」

ペコリと一礼してグレイファイアさんはまた魔方陣の中へと消えて  
いった。

きつとサーゼクス様の所へ戻ったんだろうな。

「さーて、そんじゃま、いっちょ修行しますか」

『いったい何をするつもりだ？相棒』

「ちよつとな、お三方、あんた達にも付き合ってもらいますよ、とりあえずドライグ、ちよつと精神世界に入れてくれ」

『精神世界にか？別に構わんが何をする気だ？相棒』

「さつきも言っただろ？修行だよ、少し試してみたいことがあるんだ」

『そうか、分かった……。では少し待て……。』

「ああ！……っ……」

【バタツ!!】

返事をした直後、俺の意識は不意に途切れその場に倒れ込むのだった。

数時間後……。

「出来た… やったぜ！」

お三方の修行で精神世界から戻ってきた俺は開口一番にガッツポーズを取りながら叫んだ。

『おめでどう相棒、まさかアイツの戦い方を見て神器をあかも変化させるとは俺も驚いたぞ…』

ドライグが賛辞を送ってくれる。

「サンキュードライグ、これもお前やバーダックさん達が手伝ってくれたおかげだよ」

『そう言われれば協力した甲斐があると言うものだ』

これならセルにも通じるかもしれねえ！

『そうだと良いがな…。アイツは俺達と同じ神器を付けている、その力で太刀打ちできるかは分からんぞ？』

そんなのはやってみなくちゃ分かんねえだろ？

でも、もうそろそろ俺も戻らねえとな…。

父さんや母さんたちが心配してるだろうし…。

つつうか、母さんにどやされそうだな。

「よし、んじやそろそろ帰りますか、アザゼルのおっちゃんにも話しておかねえといけねえし…ん？」

俺がトレーニングルームから出ようとすると、そこに以前何度か見たことのある不思議な物体？が出来ていた。

「これは… 確か紫さんの…」

『ああ、あのスキマ妖怪のものようだ』

確かスキマ… だっけか？中に気持ち悪い目のようなもんが見え

てるし、正直入りたくねえんだけど……。

『どうせあのスキマ妖怪が連れ戻しにでも来たのだろう、こここの奴らには悪いが入っておけ、いつ戻れるかもわからないのだからな……』

「うーん…… そうだな！んじや、書置きでもしておくか」

紙などは生憎持っていなかったので、入り口近くの壁に気功波で後を作りメツセージを残す。

「帰ります、お世話になりました……。つと、こんなもんかな？よし！んじや帰るか！」

俺はそのままそのスキマの中へと飛び込んでいくのだった。

## セルゲーム編

帰ってきた孫悟誠！そして始まるセルゲーム開催！

side 悟誠

「…ふう」

歪なスキマの中を潜り抜け、元の世界へと帰ってきた俺は安堵から一息ついていた。

「にしても… ハア…」

辺りを見回してさらにため息…。

「紫さんどこに落としてくれてんだよおおお!!」

そう、今俺がいる場所、それは空だ。

しかも雲が真横に見えるほどの高さというおまけ付きである…。

真つ逆さまに急降下していく俺の身体…。

このまま地面に激突すれば大惨事待ったなしは確定的だ。

「ま、地面が見えてきたら武空術使えばいいか！」

今使うと気の無駄使いだし…

そう言う訳で俺の身体はグングン勢いを上げ地上にむっけて落下していく。

それにしても…。

「この真下に感じる気って父さん達のものだよな？」

近くにセルの奴の気も感じるし… どうなってるんだ？

というか、俺が向<sup>原作世界</sup>こうに行ってる間の数か月間、こっちの世界の時間はどのくらい進んでんだろうな…。

感じられる気から察するに今はセルの開催するセルゲーム当日とみていいだろう…。



父さんと悟飯の他にクリリンさんやベジータの気も感じるし…  
ん？よくよく感じてみたら小つさい気も複数感じる…。

一般人まで来てやがるのか!?自殺志願者かよ!

…とりあえず、地面がもう視界に映ってるから武空術の準備  
しとかないな、よつと!

「ブンツ…」

…え？あれ？おかしいな…？勢いが止まらないぞ…？

なんで…まさか、勢いつけ過ぎてブレーキが利かなくなってる!?  
ちよつ待て待て待て待てくれ!止まってってくれ!!ふんぬうつ!!

駄目だ、止まらない…もう地面見えてきてるし…俺帰ってきた  
途端に死亡確定?

ははは…泣けてくる…って、ん?

「だあああああつ!でやああああつ!とああああつ!(ドカバキゴ  
スツ)」

おいおい、あのアフロにおっさん何やってんだよ…セルに一人で  
挑んでるし…

って言うかセルの奴、何一つ気にしてないな、あんだだけ殴られてる  
のに…少しは反応してやれよ、アフロの人が可哀想だろ?

「はあ…はあ…はあ…」

ほら、やり過ぎたせいでバテてるし…。

「……………死ね」

…ッ!アイツあのアフロのおっさん殺す気じゃねえか!

やべえ!すぐに止めねえと!

頼む!動いてくれ!武空術!!

【ドンッ】

出来た！待ってろおっさん！今助けてやる！

「やらせるかよおおおっつ!!」

【ゲシッ】

「おびやっ!?!」

「あ………」

やべ、間違つてアフロのおっさん蹴っ飛ばしちまった……。

おっさんは勢いよく吹っ飛んでいき、リングの柱に激突する。

【ズルズル……】

あちやあ、勢いつけ過ぎちまった悪い！アフロのおっさん！  
内心で蹴飛ばしたことを謝りつつ俺はセルを睨みつける……。

「孫悟誠…… 孫悟空達とは一緒ではなかったのだな……。」

「ああ、ちよつと野暮用があつてな……。」

そんなことを言い合いながら互いににらみ合う……。

「コラーッ!!俺より目立つなあーっ!!」

煩いなアフロのおっさん……。

side out

side 悟飯

「はあ…… はあ…… はあ……」

先程まで果敢にセルに攻撃を仕掛けていた世界チャンピオンの人は攻撃の手を止め、バテたように息切れをしていた。

「……死ね」

セルが腕に気を纏い今にもその首を落とそうとしていることにも気が付かずに……。

危ない！僕がそう思っただけで飛び出しかけた時だった。

「やらせるかよおおおっつ!!」

【ゲシッ】

「おびやつ!?!」

唐突に現れた人の登場によって世界チャンピオンの人が蹴り飛ばされ吹っ飛んでいく……。

「おい、アイツは!」

「ああ、どうやら間に合ったみてえだな……心配かけやがって」

「いったいどうやってここに……見たところ空から落ちてきたようにも見えましたが……」

「フンッようやく戻ってきやがったか赤龍帝の小僧め」

上から、ピッコロさん、父さん、トランクスさん、ベジータさんが話す。

そう、その人物は何を隠そう、僕の兄であり行方不明とされていた孫悟誠その人だったのだから……。

side out

side 悟誠

「コラーツ!!俺より目立つなあーっ!!」

リングの端で叫ぶおっさんの叫びを聞きながら俺はセルと対峙する。

「先程の奴では何も面白みがなかったところだ……。今度はお前が相手をしてくれるのかな?」

「ああ、と言いたいところだけど、俺の番はまだみたいだ」

「なに…?」

セルの疑問に答えるべく俺は背後で叫ぶおっさんの方を見る。

「くそーっ!まだ私は負けていないぞおーっ!」

「ほら、あのおっさんはまだやる気みたいだからな、だから俺の番はまだって訳だ」

しかしセルはうんざりとした表情を言う。

「私はあんなザコよりも貴様と戦いたいのだがな…。」

「まあ、ああ言ってるんだし、もうちょっと相手してやれよ、少しは楽しめるように手を貸してやるから、三十秒だけ待ってろ」

「……いいだろう」

セルの了承を得て俺はリングを降り、おっさんの所に向かった。

「ブーステッド・ギア!」

『Boost!!』

俺は神セイクリッド・ギア器を呼び出し効果を発動させる。

「よっ!おっさん、アンタこの大会に出るとか勇氣あるな」

「なんだ貴様、私の事を知らないのか？世界チャンピオンのミスター！サタンだぞ？」

世界チャンピオン？ああ、そーいや前に亀のじいさんとここでチラツと見たような……。

「そのチャンピオンさまがどうしてこんなところにいるんだ？」

その問いに金髪に黒サングラスのおっさんがミスターサタンの代わりに答えてくれた。

「ミスターサタンは地球の危機と聞いてセルを倒すべくこの大会に参加を決めてくださったんだ！」

なるほど、つまりは実力差が分かっていないお馬鹿さんってことだな？

『Boost!!』

おっと、そろそろ三段階目の倍化が溜まったな。じゃあこのくらいでストップと！

『Explosion!!』

よし、これなら！

「おっさん……じゃなかったミスターサタン、俺、アンタのファンなんだ！握手してくれよ！」

そう言っつて俺は籠手の着いた左腕を差し出す。

「ほおお、そうかそうか！いいぞー！」

とても嬉しそうに右手を差し出し俺の腕を掴むサタン。

いまだ！

ブーステッド・ギア・ギフト

「赤龍帝の贈り物！」

『Transfer!!』

籠手からそんな機械音声がなり俺の倍化した力がサタンへと譲渡される。

「うおっ！な、なんだ!?!力が流れ込んでくるぞ！」

「俺の熱い思いです！どうかそれでセルを倒してください！」

コイツ単純そうだし、こうでも言っておけばすぐ勘違いするだろ。

「お、おおそうか！では君の思いしっかり受け取ったぞ！覚悟しろセルめえええ!!」

勢いよくセルめがけて突っ込んでいくサタン。だが…。

「うるさい…。」

【バチンツ】

「うぼっ！」

一撃で場外… ってか遠くの岩肌まで飛んでったぞ？あれは痛そう…。

まあ、なんだ… サタンのおっさん… 強く生きてくれ！

## セルゲーム開始！起き上がる謎の挑戦者

side 悟誠

あっちゃあ…折角譲渡してやったのに一撃で負けてるよサタンのおっさん。

大丈夫かな？

俺は目に力を譲渡してサタンの様子を見てみる。

あ、鼻抑えてゴロゴロしてる…。以外に頑丈なんだなおっさん。

とうかさつきからセルが『奴は倒した、早く私の相手をしろ』とでも言わんばかりにずっとこっちを見てくるんだけど…。

いや、俺なんかより父さん達の相手しとけよセルさんよ…。

【ゾクツ】

と、そこで俺は悪寒を感じて再びサタンのおっさんに見やる。  
するとそこにいたのは…。

「なんなんだ貴様らは…。オレの邪魔ばかりしやがって…

オレの邪魔をするなああああ!!」

そう叫んだおっさんは禍々しい気を放ちながら浮き上がり、セルゲームリングへと降り立った。

『おおーつとミスターサタンがここで再びリングに舞い戻ったあー!!  
だが少し様子がおかしいぞ？どうした我らのチャンピオン!』

実況アナウンサーが盛大に実況しているがそれどころじゃない!

『相棒! あいつは不味い! 早くどうにかしなければ大変なことになるぞ!』

そんなこと言われなくても分かっている! 俺自身さつきから悪寒が凄いんだ。今のおっさんを放置しといたら不味いことぐらい百も承知だ!

とりあえず今はあのおっさんをなんとかしねえと！

俺はおっさんを止めるためにリングへと降り立つ。

すると、それと時を同じくして父さんがリングへと降り立ち、セルの前に立ちはだかった。

「父さん！このおっさんの相手は俺がするから父さんはセルを頼む！」

「ッ！… ああ、任せとけ悟誠」

どうやらわかってくれたみたいだ、あとはこのおっさんをどうにかするだけなんだが…。

『みたところ力が覚醒したというよりは何者かに操られていると見た方がよさそうだぞ相棒』

そうなのか？でもいったい誰が…。

『どうやらセルと俺達の他に三人程見物人がいるようだ…。その内の一人が犯人なのは確かだろう』

三人の見物人？どういうことだよ？ドライブ

『気配を察知したのさ、三人のうち二人は一緒にいるようだが、後の一人は何かを探しているようだ。恐らくその二人を探っているんだろう』

その三人は乱入してきそうな気配はあるか？

『いや、どうやら俺達が来たことよって動きを止めざるを得ない状況になっているようだ、今のうちにそのアフロを正気に戻してやれ』

正気に戻すったってどうすりゃいいんだ？

『そんなもん目が覚めるまで力いっぱい殴ってやればいいだろう』

そ、そんなんでいいのか？

『俺も詳しいことは知らんから確実とはいえんがな』

おい！まあいいや、他に方法もなさそうだし、その方法で行くか！行くぜドライブ！

『応！赤龍帝の力世界チャンピオンとやらに見せてやろう！』



『バランスブレイク禁手!!』』

『Welsh Dora gn Balance Breaker!!!!』  
機械音声と共に俺の身体を紅い鎧が包み込む。

「更にこいつだ！トリプルブーストオオオ!!」

『Dra gonic Triple Booster Chang  
e Multi Dark!!』

さらなる機械音声の流れ、俺を包んでいた無機質な赤い鎧が変化していき、やがて赤黒い色のオーラの鎧を纏った。

『ブーステッド・ギア・オーラメイ赤龍帝の気鎧タイプマルチダーク！ここに見・参！』

「少し姿が変わった程度でオレが止まるかああああ!!」

俺の変化に父さん含める全員が驚いているのだが、当のサタンのおっさんは気にした様子もなく俺に突っ込んでくる。

『な、なんとミスターサタン！セルではなくファンだと言っていた少年に突っ込んでいく!?これはいったいどうしたことなんでしょう!?!』

そんなこと俺が聞きてえよ！

腕をクロスさせてサタンのおっさんの攻撃をガードする。

「のおおおおおりやあああ!!」

「くっー!」

【ドゴンッ!!】

腕に伝わる物凄い衝撃と痛み……。

なんて力だよ！これは普通の人間の力じゃねえぞ！

『相棒、このフォルムでは不利だ、あのフォルムに切り替えて戦え』

そうか！あのフォームなら！よし！

「フォームチェンジ！パワードトルネード!!」

『Change Power Tornado!!』

そんな機械音声が流れたかと思うと俺を覆っていたオーラの鎧の色が血のように赤い色に変わり、先程の三倍ほどに肥大化した重鎧のような見た目へと変化する。

「タイプ『パワードトルネード』！コイツの攻撃耐えられる物なら耐えてみな！」

俺は勢いよくサタンのおっさんへと突っ込んでいくのだった。

side out

sideクリリン

オレは悟誠の姿の呆然としていた。

あの世界チャンピオンとかいう奴がとんでもない気を出したかと思いきや、それに対抗するように悟誠も変化したのだ。

あの赤い龍みみたいな鎧は前にも何度か見たことがあったが、今の悟誠のそれは以前のものとは全くの別物になっていた。

着ている鎧は血のように赤く、以前攻めてきたナツパとかサイヤ人の様な分厚い筋肉のような鎧だ。

それを見てトランクスが慌てたように話す。

「いけない！あの変身では悟誠さんが危ない！」

「な、なにが危ないんだよトランクス」

「俺達のあの変身は攻撃力を底上げする代わりにスピードが激減してしまうんです」

なっ!?それじゃアイツ!

「いや待て、どうやらそう言う訳でもないらしい」  
今まで黙って様子を見ていたピッコロが口を開く。

「え?でもよ...」

「よく見てみる、あの野郎、あのアフロ相手に全く後れを取っていやがらないんだ!チツ...!カカロットといい、赤龍帝の小僧といい、俺をあつかりと抜かしていきやがる...頭にくるぜ!」

ベジータが二人の戦いを見て悪態をついている。

それに苦笑しつつも俺は悟空と悟誠の戦いに目を向ける。

確かに悟誠はあの世界チャンピオンとかいうアフロ相手に互角以上で戦っている。

スピードがいつもより若干落ちている気もするけど、それでも十分すぎるほど相手についていつてる...。

悟空の方も負けず劣らずで、互角に互角にぶつかり合っている。

これなら二人ともいけるんじゃないか?でも、とてもじゃないが俺にはついていけねえや...。

俺はジツとその戦いを見つめるのだった。

side out

side 悟誠

俺がサタンのおっさんと戦い始めてから十五分ほどが経過したころ...。

「はあ... はあ... 舐めやがってえオレは世界ナンバーワンチャンピオンだぞ!俺が世界で一番強いんだ!貴様なんかオレに敵うはずがないんだ!」

肩で息をしながらアホみたいに叫ぶサタンのおっさん。

その姿がどこかやられる寸前のフリーザと重なって見えてしま  
う。。。

いや、フリーザがあんなアフロ付けて叫んでたら盛大に吹き出しち  
まって戦いどころじゃねえだろうけど。。。

「あー。。。もう良いからさっさと終わりにしてやるよ！喰らえ！ウエ  
ルシュトルネード！」

手の中に圧縮された気を竜巻のように高速回転させそれをサタン  
のおっさん目掛けて撃ち放つ。

「うぎやあああああああつ!!!」

サタンのおっさんはエネルギー波に巻き込まれ超回転をしながら  
近くの岩肌に激突する。

あ、やべ。。。ちよつとやり過ぎたか？

そう思っていると、上から父さんの叫びが聞こえてきた。

「みんなあ!!リングから離れろおおお!!」

それをつきとれは直感的にヤバいことを感じ取り、すぐさま伸びて  
いるサタンのおっさんを抱えるとその場から退避した。

刹那、俺が元いた場所に巨大な爆発が巻き起こるのだった。

## 父から子へ！第二ラウンド突入！

side 三人称

セルが放ったエネルギー波により、リングがあつた場所はぽっかりと大穴が出来ていた。

「な、なんとという事でしょう！セル、自身で作つたであろうリングを自らの手で破壊してしまいました！これでは場外負けというルールは無くなつてしまいます！これはいったいどういうことなんでしょう？解説の赤龍帝さん」

実況アナウンサーが現場の実況をしながらいつの間にか横に立っていた悟誠に質問する。

「そうですね、恐らくセルはと…失礼、孫さんとの戦いで場外負けで終わらせてしまうとおつまらないと考えたんでしょう、それで自らリングを破壊したのだと考えますね」

「ははあ… という事は今後セルゲームには場外というルールは…」  
「無くなつたと見て言いでしょう。謂わばこの地球全体がリングその物なんですから」

悟誠の言葉に実況アナウンサーだけでなくカメラマンたちも固まる。

場外負けがなくなつたという事はすなわち、相手が参つたというか死んでしまうまで戦いが続くという事なのだ。

そんなことを聞かされて固まらない人間はいない。

しかし、その間にも悟空とセルの戦いは進んでいく。

実況アナウンサーにもカメラマンにも早すぎてその姿は捉えられないが…。

因みにミスターサタンは先程の悟誠の一撃で伸びてしまっている悟誠はしっかりとその戦いを観察しているのだった。

リングが無くなった後も二人の激しい攻防は続いている。  
いや、むしろリングが広がったことで激化してきている。

「二人は何処にいるのでしょうか！私には全く見当たりません！」  
実況アナウンサーには見えてないのか？教えといてやるか、見ても分からないだろうけど…。」

「上空です。衝撃波がさつきから出来ているでしょう？」

「へ？そ、空？な、なんとという事でしょう！孫選手とセルは上空でやり合っていたようです！」

アナウンサーの実況でカメラマンがすぐさま空を撮り始める。

まあ映しても分からないだろうけどな、見えても二人がぶつかる際に起きる衝撃波くらいなものだろう。

再び二人の方に視線を戻すと、父さんが至近距離からかめはめ波をセルに撃ち放っているところだった。

凄い！あれなら流石のセルも堪えるんじゃないか！

『いや、よく見てみる相棒、奴の気は殆ど減っていない、それに奴はまだ神器すら一使っていない…』

なっ… という事はセルは…。」

『ああ、まだ実力の一端も出しちゃいないってことさ』

父さんの方は全力でやってるってのに！なんて奴だよ！

その間にもセルはまたも再生し、再び父さんとやり合っていた。  
しばらく激しい攻防が続き、父さんが地上に降りたところで事は起

こった。

「参った！降参だ！」

なんと、あの父さんが… 孫悟空が負けを認めたのだ。

これには俺以外の他の面子も驚きを隠せないでいるようだ…。

さしものセルも驚きを隠せないでいる。

その後、父さんは二言三言セルとやり取りをした後、悟飯の方を向き言った。

「おめえの出番だぞ！悟飯！」

なっ!? 悟飯だって!? 何考えてんだよ父さん!

セルも予想外だったようで驚きの声を発している。

「孫悟飯だど? ふざけるなよ孫悟空、アイツが私より強いだど?」

「ああ、悟誠はどうか知らねえけどあいつは少なくともオラやおめえよりずっと強え！」

いや待て、父さんは一つ思い違いをしてる…。アイツはまだ神器すら展開していないんだ。もしアイツが神器を展開してしまったらそれこそ手が付けられなくなる…。

「うん? どこだここは?」

あ、サタンのおっさんが起きたみたいだ。なら俺はもう解説にいらなくてもいいよな。

俺はそつと皆さんの所に戻るのだった。

side out

side 悟飯

父さんに言われてから僕は代わりにセルと戦っていた。

でも、僕にはこの戦いに意味があるとは思えないのだ……。それでもお構いなしに攻撃を仕掛けてくるセルに僕は回避に専念する……。

だが、すぐさま見切られ次第に攻撃が命中し始めていく……。それでも僕は攻撃をする気にはなれなかった……。セルに強力な気弾をぶつけられ岩肌に叩きつけられる。どうして、どうしてこんなことをしなくちゃならないんだ……。

なんとか瓦礫から抜け出しセルの前に姿を見せる。

「こいつは驚いた、殊の外タフじゃないか」

「もう止めようよ……。こんな戦い、意味がないよ……。」

それを聞いたセルは何故か笑いだす。

「フ、フッフッフ、フツハツハツハツハ！怖気づいたか小僧！何を言うかと思えばこのセルゲームは意味がないからやめろだど？」

僕は黙ったまま頷く。

「意味はある、私にとってこれは趣味だ、お前を倒し、その後、全人類を時間をかけて殺していく。お前にとっては、地球を救う為だ」

「僕は、本当は戦いたくないんだ……。殺したくないんだよ……。例えば、お前みたいな悪い奴でも……。僕はお父さんや悟誠兄ちゃんみたいに戦ったりするのは好きじゃないんだ……。」

思わず本音が出ていた。

言わずにはいられなかった、もしかしたらこれでセルも心変わりしてくれるかもしれない……。そう心のどこかで考えていたんだ……。

「……。貴様が戦いを好きじゃないのはよく分かった……。だが、私を殺



したくないという意味がよく分からないだがね、貴様には百年たとうが私を殺すことは出来ん。どうだ、違うか？」

やろうと思えば殺せる…。だけど…。僕は…！

「僕にはだんだんわかって来たんだ。お父さんがセルを倒せるのは僕だけだって言ったことが…」

「貴様が？私を倒すだと？」

まるで信じていないかのように不敵に笑うセル。

「僕は小さい頃から怒りでカッとなると自分でもよくわからなくなる時があったんだ…。初めてそれが分かったのはサイヤ人のラディッツが宇宙から攻めてきた時だった…」

話しているうちにその時の光景が脳裏によみがえってくる。

お父さんがラディッツにやられている時、僕は怒りの余り、閉じ込められていたポッドを破壊してラディッツめがけて突っ込んでいった。

それはあっさり躲されちゃって悟誠兄ちゃんが助けにくれたけど…。

「ピッコロさんに修行を付けてもらった時も…」

その時の光景が脳裏に蘇る…。

「ナメック星へ行つて、あのフリーザと戦った時だって…」

クリリンさんがやられた時の光景が脳裏によぎる…。

「僕はカッとなると自分の意思を越え、とんでもない力で滅茶苦茶な戦いを始めてしまうらしいんだ…。そして、精神と時の部屋で修行し、僕はパワーアップした…。お父さんはそいつを計算して、だけどそうなったら僕はきつとお前も殺してしまう…！」

それを黙って聞いていたセルはまたもや笑い出した。

「ん？フフフッフハハハハハハッ！面白い話だ……。だが……………」  
失敗だったな」

「え!？」

まさか！

「そんな話を聞いてこの私が怖気づくとも思ったのか？やはりガキだ、それどころか私はどうしても貴様を怒らせたくなった！貴様の秘めた力とやらを……見てみたい!!」

【ドゴンツ!!】

「うがあっ!!」

突如、セルが勢いよく僕に拳を振りぬいてきた。

咄嗟の事で僕は反応すらままならず吹っ飛ばされていく。

なんとか体勢を立て直そうとするが、それより早くセルが追撃をかけてきた。

肘打ちを喰らわされ地面に叩きつけられる。直後にセルの大きな足で踏みつけられぐりぐりと地面に押しさえつけられる。

「がああああ……っ!!」

痛い！やめてくれよ！

そんなことは関係ないとセルはお構いなしに踏みつけてくる。

「怒れ！怒って真の力を見せてみろお！」

嫌だ！僕は戦いたくないんだ！

頑なに怒る意思を見せないセルは苛立ちからか執拗に僕を攻め始める。

「怒れ！怒れ！怒れ怒れ怒れ！」

しかしどれだけやられようとも僕の意味は変わらない。  
そんな時、ふと、悟誠兄ちゃん目が合った。  
その目をみて僕はある記憶を思い出す。

『悟飯、お前どうして俺にもつと本気で打つてこないんだ？』

『だって… 本気でやったら悟誠兄ちゃんが痛いでしょ？僕、痛いの  
も痛くさせるのも嫌なんだ…』

『そうか、悟飯は優しいんだな、確かに痛いのは誰だって嫌だ、けどな  
？それでもやらなきゃならない時だってあるんだ』

『やらなきゃいけないとき？』

『そう、例えば俺がこの神器を扱いきれなくなつて暴走してしまつた  
とする。悟飯の後ろには母さんや亀のじいさん、動けない父さん達が  
いる、

そうなつたら悟飯はどうする？』

『そんなの決まつてるよ！みんなを守つて悟誠兄ちゃんも助ける！』

『もしそれが俺を殺すことでしか助けられないと分かつていてもそれ  
が出来るか？』

『それは…』

『ははっちよつと虐め過ぎちまつたな、大丈夫、俺は死なないし悟飯  
だつて死なせない、俺も強くなるから悟飯も一緒に強くなるう！一緒に  
優しくして強い男になろうぜ！』

ああ、思い出した… きっと今が僕のやらなきゃいけない時なん  
だ…。

でも、どうしたら… どうしたらそんな怒りが出せるんだ… 分からない、分からないんだ…。

その間にもセルは僕を攻め立ててくる。動きを拘束されとてつもない力で僕の身体を締め上げてくる。

「うわああああ!!あがあああつ!!」

しばらくもがいていると僕を絞めつけている腕の力が緩んだ。

僕は受け身も取れず、地面に倒れ伏してしまう…。

「強情な奴だ、どうやら自分の痛みだけでは怒りが沸いてこないらしい、では、お前の仲間たちに相談してみることにするか」

「ツ!!」

な、なんだって!?セルは今なんて言った?

仲間に相談?まずい!このままじゃ皆が!

怒れ!怒るんだ僕!駄目だ… どうすればいいのか分からない… 途方に暮れる僕を他所にセルは皆の所へ向かって仙豆を奪って戻ってくるのだった…。

side out

side 悟誠

散々悟飯を痛めつけていたセルが急に父さん達の方に向けて動き出した。

ピッコロさんが慌ててと飛び出すが、セルは裕に躲す。

そしてクリリンさんから仙豆を奪うと悟飯のもとに戻っていった。

その時にチラと目が合った気がしたが、何を企んでいやがるセルの奴…。

戻ったところで何かをやろうとするセルだったが、不意に現れた16号により拘束されてしまう。

何する気だアイツ!

「俺はセルと共に自爆する！お前たちは来るな！」

なっ!?自爆だと!?

俺以外の全員にも緊張が走る。

「オレの身体には強力な自爆装置が付いている！これが秘められた奥の手だ！お前たちまで巻き込み、犠牲にしてしまうことを許してくれ！」

「待て！早まるんじやねえ16号！」

俺は咄嗟に叫ぶ。

「すまない、孫悟誠。恩を仇で返す様なことは俺にもしたくなかった...だがこうなった以上手段など選んではいられん！」

違う！そうじゃないんだ！お前には！お前の身体にはもう...！

「セル！いくら貴様でもこれだけ密着していれば粉々になる！」

必死にもがくセルだが、高速は頑丈なのか振りほどけないでいる。

「これで終わりだセル！貴様も！粉々に吹っ飛ぶ！」

オレ達人造人間を作って世界征服を目論んだドクター・ゲロの野望は！

これですべて潰える!!」

「やめろ！やめるんだ16号！」

「いくぞ！デヤアアアアアッ!!」

「やめろおおおお!!」

俺の制止も空しく16号の身体が光り輝く...

俺は悔しさから目を閉じた。

爆発は来ない、当たり前だ、なんてったって16号の身体にあった爆弾はブルマさんの父親、ブリーフ博士のよって取り除かれているのだから……。

すぐに16号の不可解な声が聞こえてくる。

「な、何故だ……何故爆発しない!？」

俺は耐えきれず口を開く。

「16号、お前は……いや、お前の中にある爆弾は……もう無いんだ……!」

「ッ!？」

「俺、聞いちまったんだよ……ブリーフ博士がお前の中にあつた爆弾を取り除いちまったって……」

『『『ツツ!?!』』』』

全員に驚愕が走る……。

「フフフツ残念だったな16号、寧ろ爆弾程度で私が死ぬとも思えんがね」

そう言いながらセルは拘束を解き、16号のに向けてエネルギー波を放った。

バラバラになり吹っ飛んでいく16号の身体……。

セルの足元に転がった首を足蹴にしてセルは言う。

「16号、所詮貴様はドクター・ゲロの失敗作だったようだな」

そう言って思い切りその首を蹴り飛ばした。

飛ばされた首は近くの山にぶつかりゴンゴンという重い音を響か

せながらどこかに落ちていった。

くっツツ!!もう・・・！我慢できねえ！

『待つんだ相棒！今飛び出していったら駄目だ！下手に動けばあの三人がどう出てくるか分からない！』

くっ・・・ よりにもよってこんな時に！

その間にもセルは背中の針のようなところから複数のナニカを出し始めた。

それはセルによく似た小柄な生き物だった。

違うところといえば、肌の色が緑ではなく青だという事くらいだ。そんなのが八匹も出てきたのだ。

『相棒、あれは相当不味いぞ、恐らくヤムチャや天津飯、ピッコロでは相手にならない』

だろうな、あいつらから感じる気はセル程じゃないにしてもかなりのデカさだ・・・。

しかもサタンのおっさんの時と同じような禍々しい気まで感じる・・・。

「氣い付けろ！恐ろしく強ええぞ！コイツら！」

父さんがその内の一匹とたたかいながら叫ぶ・・・。

「いくぞドライブ！チェンジ！スカイブラストオオ！」

『Change Sky Blast!!』

一気に禁<sup>バランスブレイク</sup>手し、フォルムチェンジをしながらヤムチャたちの方に飛ぶ。

気の鎧が衣服程の薄さになり赤みがかった紫色の身軽そうな姿へと変わっていく。

「キキイツ!!ころしちゃうぞー！」

「邪魔だ退けええ！」

行く先を妨害するように立ち塞がった子セルをスピードにものを言わせてぶん殴って吹っ飛ばす。

このフォームはパワーこそそこまでないがマルチダークの時の二倍、パワードトルネードの時の三倍のスピードが出せるのだ。

「おおおおおおっつ!!」

【ドゴンツ!!】

「ギギヤツ!?!」

「キキツ!!」

一日を殴り飛ばし、一匹が距離を置く、その隙に二人のもとに近寄る。

「大丈夫ですか! ヤムチャさんに天津飯さん!」

「ああ、なんとかな、助かったぞ悟誠」

「こつちもだ、正直ダメかと思つてたから助かった」

「どうやらなんとか無事そうだ、後はこいつらをなんとかしねえと...。」

「「キキキツころしちやうぞー!」」

俺を狙つてきたやつも合流してきて三匹が揃つちまった。

「ヤムチャさんと天津飯さんはクリリンさんの所に、ここは俺がなんとかします!」

「しかし!」



「いや、ここは任せよう、俺達じゃ足手まといになる」

「… そうだな、そいつらの相手は任せたぞ悟誠」

ふう、なんとか行ってくれたか、ピッコロさんや父さんの方も気になる、早めに終わらせないとな…。

「お前らに構っている余裕はねえんだ！ 一気に片あ付けてやるドラゴニックストオオオム!!」

紫色のオーラを全身から放ちながら自身の身体を乱回転させそのまま三匹に突っ込む。

「「ギツギヤアアアア!!」」

避けることも出来ずに気の乱斬撃を喰らった三匹は跡形もなく切り刻まれていくのであった…。

俺はそれを見届けて別の場所の援護に向かうのであった…。

俺の援護もあり、子セル達を倒し終わった頃、

セルと対峙していた悟飯は16号が最後に残した言葉で怒りを爆発させ超サイヤ人をさらに超える力でセルを押ししていた。

だが、追い詰められたセルが神器を発動してしまったことで形勢は逆転した…。

神器を発動してしまったセルは時間が経つごとに強くなっていき、あっさりと悟飯を越えてしまったのだ…。

ボロボロにされていく悟飯に耐えきれなかった俺はスカイフォームのまま飛び出しセルを殴り飛ばした。

「悟飯大丈夫か！ しっかりしろ！」

「うう… 悟誠兄ちゃん…」

「お前を死なせはしねえ！俺の力をお前に託す！ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝の贈り物!!」

『Transfer!!』

何重にも倍化された力が悟飯へと譲渡される。

力が完全に譲渡された途端、悟飯の身体が赤く輝きだしたのだつた…！

side out

side 悟飯

16号さんが破壊され、僕は怒りを本能のままに開放した。

解放した力は物凄いものだった。セルを圧倒出来ていた。

そのせいで僕は油断してしまっていたんだ…。

追い詰められたセルは悟誠兄ちゃんが左腕によく付けている物に

似たようなものを付けた途端に戦況は一変した…。

最初はまだ僕の方が上だった、でも時間が経つうちにセルはどんどん強くなって行って、ついには僕を超える強さになってしまったんだ…。

僕の攻撃は全く通らないのに向こうの攻撃は重いものばかりだった…。

しかも時間が経つごとに更に重いものになっていく。

もう駄目だと思った時だった。

「悟飯から離れやがれこの蝉野郎がああああ!!」

【ドツゴオオオンツツ!!】

「ぬおわっ!!」

物凄い轟音の後、驚いたように吹っ飛ばされていくセルの声が聞こえた……。

「悟飯大丈夫か！しっかりしろ！」

その声は悟誠兄ちゃんだった。いつもの見覚えのある赤い鎧ではない、紫色の薄い気のような鎧を纏った姿だった。

「お前を死なせはしねえ！俺の力をお前に託す！ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝の贈り物!!」  
すると僕の中に温かい力が流れ込んできた。

それは以前ベジータとの戦いの時にも感じた温かくも熱いもの……。

まるで悟誠兄ちゃんそのものようだった……。

『孫悟飯』

温かさを感じていると不意に誰かに声をかけられた。

僕が声のした方を振り向くとそこには赤い真つ赤で巨大な龍が佇んでいた。

その龍は雄々しく気高い姿をしていた。

そう、神龍とはまた違った雰囲気を感じていた。

『孫悟飯、アイツを、セルを倒したいか？』

龍は僕に問うた。

倒したい、今度は油断なんかしないで速攻で確実に……！

僕は大きく頷く……。

『よかろう、ならばオレを受け入れろ、そうすればお前は更なる強さを手に入れることが出来るだろう』

龍がそう言って直後、物凄い熱さの力が僕に流れ込んできた。

驚いた僕は抜けだしそうになるも、先程の龍の言葉を思い出し、その力を真正面から受け止める。

受け止めた力はマグマのように熱く気を抜けば意識が飛んでしまふいそうなほどの熱量だった……。

それをがむしやりにその身に受け続けた。しばらく耐えていると

不意にその力は止んだ。

『よく耐えたな、これでお前は新たな力を使えるだろう』

そういうと赤い龍は消えてしまった。

まだお礼も言えたないのに… そう思った時には僕の意識は再浮上していた。

そして目が覚めるとそこには驚きの表情をする悟誠兄ちゃんがいた。

どうしたのかと思っていると、自身の中に流れている力が変化していることに気が付いた。

それはどこか暖かく、そして熱いあの力とよく似ていた。

どうやら僕は超サイヤ人を越えたものを更に超えてしまったらしい…。

もう負ける気がしない！

僕は悟誠兄ちゃんを下がらせて戻ってきたセルとの戦いに臨むであつた。

悟誠暴走!?! 暴れ狂う赤き龍!

side 三人称

とある荒野で二人の戦士が相まみえていた。

一人は今世間を騒がせている人造人間セル……。

もう一人はかつて地球を救った英雄の息子、孫悟飯……。

悟誠を下がらせた悟飯は再びセルと対峙していた。

「ほお、また姿を変えたか……。だがどれだけパワーを上げたところで今の私に勝てはせんぞ」

「…… 勝てるさ」

「ッ! 調子に乗るなよ小僧、お前など私にかかれば殺すことなど造作もないのだからな」

「…… やれるものならやってみろよ」

「ッ!!」

『Boost!!』

その言葉に先に動いたのはセルの方だった。

何度目か分からない機械音声が響き渡り、セルの力がさらに倍化したことを知らせる。

不意打ちに近い動きで悟飯に一撃を叩き込む。

避けることもせず、諸にその攻撃を喰らう悟飯に観戦していた者たちは息をのむ……。

しかし当の悟飯は全く聞いている様子を見せない。ダメージが通っていないかのような反応ぶりだった。

それに驚いたのは攻撃したセルの方であつた……。しかし再度セルが攻撃しようと腕を振りかぶつた直後……。

(ドゴンツ!!)

そんな音と共に悟飯のパンチがセルの腹部にめり込んでいた。あまりの攻撃の重さと痛みに悶えるセル……。

「ツ……ハアアアアアツツ」

なんとか痛みを堪え、再度攻撃をしようと腕を振り上げるも……。

【バゴンツツ】

それより早く振りぬかれた悟飯のアップー気味の攻撃がセルを射抜く。

空中に吹き飛ばされながらもなんとか一回転して体勢を立て直すセル。

だが、あまりのダメージの大きさに膝を付き、血反吐をぶちまけてしまう。

「ば……バカな……な、何故…… たった二発のパンチで…… うぐっ！」  
なんとか立ち上がるも、そのダメージから上手く立つことが出来ないセル……。

「……………」

悟飯はただジツとそれを睨みつけるのみ……。  
しばらく睨みつけた後、ゆっくりとセルへと近づいていく。

「ウガアアアアツツナメるなあ!!」

苛立ちからか、それとも恐怖からかセルは近づいてきた悟飯に蹴りを放つが、片腕で防がれてしまう……。

二度、三度、同じことを繰り返していると、悟飯が不意にその足を掴み取った。

そして掴んだ足をそのままに……

「はああああッ！いりやああああッ！」

【ドツゴオツ!!】

勢いよく振り合抜かれた飛び蹴りがセルの頬を捉え、蹴り飛ばした。

「ぬうおわッ!!」

勢いよく吹き飛ばされ、地面を抉りながら滑っていくセル……。  
なんとか立ち上がったセルは恐怖していた……。

(し、信じられん……。この私のパワーが完全に負けている……。こ、こんな奴がこの世に四在するとは……)

しかしそんなセルなど知ったことではないというように悟飯は再度ゆつくりと近づいてくる。

「ぐうおおおおッッ！」

不意に空高く飛び上がったセル……。

ある程度悟飯との距離が空いたところである構えを取り出す。

「かあ……。ッ」

「めえ……。ッ」

「はあ……。ッ」

「めえ……。ッ！」

するとセルの手の中に気の球が浮かび上がる……。

「喰らええッ！全力のかめはめ波だ！避ければ地球が吹っ飛ぶ！受け

ざるを得んぞおお!!」

「よしやがれ!冗談じゃねえぞ!!」  
戦いを観戦していたクリリンが叫ぶ。

「……………」

悟飯は尚も黙ったままその光景を見つめる……。

「波ああアアアアツツ!!」

その叫びと共に巨大なエネルギー波が地球に、悟飯に向けて放たれる。

と、そこで今まで黙っていた悟飯が不意に口を開いた……。

「かあ…… めえ…… はあ…… めえ……」

「波ああああああああつつ!!」

上から落ちてくるエネルギー波に向かって真正面から迎え撃つようにかめはめ波を撃ち放つ悟飯……。

悟飯の放った赤いオーラの混じったかめはめ波は一瞬でセルのかめはめ波を呑み込むと、そのままセルの方へと向かって行き、遂にはセルをも呑み込んだ。

セルを呑み込んだ赤いかめはめ波はそのまま宇宙空間へと飛んでいき、消え去った……。

しかし、セルはまだ生きており、遙か上空に飛ばされ、両手両足、そして角が消し飛んではいるものの、奴はまだ生きていた……。

「…………… ツツ!!」

血走った眼で悟飯を睨みつけるセル。

「な…… なぜだ!何故あれほどのパワーがあんな奴に…… ツツ!!」  
と、ふとそこでセルは思い当たる記憶を思い出した……。



それは最初の変化が起きた時の事…。

怒りで覚醒した奴に追い詰められこの神器とやらが出てきてからの事だ

あの時、もう少しで奴を倒せていた。あの小僧の… 孫悟誠の邪魔さえ入らなければッ!!

(そうだ、アイツが!あの時アイツが何かをしたんだ!その後から奴に急激な変化が起きたんだ!!)

そこまで考えついてセルはこちらを見上げる悟誠を睨みつける。それに気が付いた悟誠は不敵な笑みでそれに答えるのみ…。それがまたセルをイラつかせた…。

「があああああッッ」

ピッコロの細胞でなんとか壊れた部位の再生をするが、その分の体力の消耗は激しい…。

と、そこで不意に悟飯に声をかけるものがいた。孫悟空だ。

「悟飯!とどめだ!早く止めをさせえ!!」

「…?もうとどめを?ダメだよお父さん、あんな奴はもつと懲らしめてやらなきゃ!」

「な、なんだと…!?」

「何言ってるんだ!?アイツは…」

ピッコロも普段の悟飯らしからぬ言動に戸惑いを隠せないでいる…。

「悟飯!!父さんの言う通りだ!セルにとどめをさせるのはお前しかないんだ!早くやれええ!!アイツをこれ以上追い詰めたら何をしてくるかかわからねえんだぞ!!」

悟誠も同じように叫ぶ、だが悟飯は効く耳を持つとうとしない……………

「大丈夫だよ悟誠兄ちゃん、アイツが何してきたところでもう僕に勝てつこないんだからさ」

「なっ…!?」

絶句する悟誠達…。

「チクシヨウ！チクシヨオ…チクシヨオ…チクシヨオチクシヨオオオツツ!!」

その叫びと共に一気に気を解放し、巨体になったセルが悟飯の前に降り立つ…。

「き、貴様なんかにつ貴様なんかはこの完全体の私が負けるはずないんだああツツ！」

『Boost!!』

そう叫ぶと大振りな倍化されたパンチを繰り出してくる。

しかし、筋肉が肥大化しすぎてスピードが無いため、その攻撃はいつも容易く躲かれてしまう。

「いえりやあああつ!!」

隙が大きくなったセルの腹部に悟飯の鋭い跳び蹴りが突き刺さる。

「がふううううツツ…!!」

ボタボタと唾液を垂らしながら膝を付くセル…。

と、そこでセルに異変が起き始めた。

「うぐっ?!うぐぐぐぐぐ… ツ!」

まるで嘔吐する寸前のように口を閉じ腹部を抑えるセル。

やがて、セルの胸が膨張を始める…。



はその後も悟飯にやられ続けていた。

このままいけば勝てる！あいつはもう終わりだ！

俺がそう確信した時だった…。

『相棒、不味いことになった…。奴め、自爆しようとしているぞ』

なっ!?それ本当かドライグ!

『ああ、奴の樹が急激に高まっている…。その証拠に奴の身体が膨張を始めているだろう』

あ、ああ…。

『それが始まった場合、もう時間はほとんど残っていない、奴がこれ以上気を高める前にどうにかしなければ手遅れになる』

なんでそれを早く言わねえんだよ!!

「父さん！皆！セルの奴は自爆するつもりです！」

『な、なんだと!?!』

「理解したところでもう遅い…。お前達はもう終わりだあ!!」

そう話すセルは膨張を続けている。

くそっ!どうしたらいいんだよ!このまま爆発するのは指をくわえてみてろつてのかわ!

俺が焦っていると、不意に父さんが声をかけてくる。

「悟誠、奴はオラがなんとかする、だから、悟飯と母ちゃんの事、頼んだぞ」

「……………え?」

父さんはそれだけ言って肩を軽く叩くと、父さんは額に手を添えセルの前へと瞬間移動する。

なっ…ま、まさか父さん!!

「父さん!やめろ!やめてくれええ!!」

俺は父さんの意図に気づいて叫ぶが父さんは笑ってセルに手を添えるとどこかへ瞬間移動してしまった…。

「あ…ああ…ああ…」

フラフラと歩いてセルと父さんが居たところまでいく…。

「くっ…こんなことになるなんて…お父さんや悟誠兄ちゃんの言ったとおりだった…」

隣では悟飯が両手を地面に付け、項垂れている…。

だが、俺にはそれを気にしたやれるような余裕はなかった…。二人が立っていた場所に立ち、虚空を見渡す…。

「どう…さん…いるんだろ?…出てきてくれよ…」

「…悟誠兄ちゃん」

悟飯が悲しそうに声をかけてくるが、今の俺にはその声は届いてはいなかった…。

side out

side 悟飯

「なあ…実は近くにいるんだろ?でてきてくれよ…」

そう言いながらフラフラと歩き続ける悟誠兄ちゃん。

その瞳は生気を宿してはいない…。

まるで死人のようにフラフラとおぼつかない足取りで周辺を歩き回る悟誠兄ちゃん。

「…終わったな、悟飯…帰ろう、いつまでも泣いてたら悟空に笑われちゃうよ」

「……クリリンさん」

「お前はよくやったよ、セルをあれだけ追い詰めたんだから、お前がいなきゃ今頃地球は無くなってたよ」

「でも、僕の所為でお父さんは……」

「悟飯、あまり自分を責めるな……。悟空は満足そうな顔で死んでいった、きつと、お前の成長した姿が嬉しかったんだ。な、悟誠も…悟誠？大丈夫か？」

クリリンさんが悟誠兄ちゃんの様子がおかしいことに気が付いて声をかける。

でも、悟誠兄ちゃんはクリリンさんの言葉に反応を示さない……。

「父さん…出てきてくれよ…近くにいますんだろ？」

とうわ言のように呟いてフラフラとおぼつかない足取りで歩き回っている。

「おい、悟誠！悟飯が大丈夫なのにお前は…ってうわっ!？」

悟誠兄ちゃんに近づいたクリリンさんが驚いたように声を上げる。その声に悟誠兄ちゃんの方を見ると、そこにはいつもの悟誠兄ちゃんの姿はなかった……。

「とうさん…でてきてきてくれよ…」

そう呟きながら歩き回る姿はさながら死人のようだった…

どう声をかけたらいいか迷っている時、異変は起きた……。

セルの自爆動作の時に起きていた砂煙と共に突風が吹き荒れ始め

た。

その直後、砂煙の中から一筋の閃光が飛び出したのだ。  
その閃光は僕たちの横を通り過ぎて……

「っ！がはああああっ……」

その声に振り向くとトランクスさんが胸に大きな穴をあけて倒れていた……。

「当たったのは……トランクスカ」

そんな声が聞こえ、再度そちらを振り向く……。

「……フン」

そこには自爆して死んだはずのセルが不敵に笑っていた……。

side out

side 三人称

「フッフ……驚いているようだな、良いだろう、話してやる」

「この事は私にとっても嬉しい誤算だった……。

私の頭の中に小さな塊がある、それがこの私の核を成すのだ  
それが破壊されない限り、この身体は再生し続けることが出来るの  
だ」

「自爆した時、幸運なことに私の核は傷つかず残った……。

正直言つて再生できることを計算したわけじゃない、運が良かった  
のだ」

「更に嬉しいことに身体は18号抜きでも完全体として再生していた。  
た。」

それもただの完全体ではない、孫悟飯のように遥かにパワーアップ

していたのだ」

「これは恐らく生死の狭間から救われた時、大きく力を上げると言うサイヤ人の細胞がそうさせたのだろう」

「それに私は、孫悟空の瞬間移動も学習出来た」

「更に、復活したことで私の中で眠っていた神器の更なる力を解放することが出来た...」

「つまり、より完璧なつてここに帰ってこれたんだ、孫悟空は私を倒すどころか、色々プレゼントをってしまったようだな...。まあ要するに無駄死になつた」

と、ここまで余裕綽々と話していたセルであつたが、ここで状況が一変する。

「..... 無駄死に」

そこで口を開いたのはなんと孫悟誠だつた。

「なんだ、孫悟誠、貴様聞いていたのか...。そうだ、孫悟空は無駄死にだ」

「.....」

悟誠は生気の失せた目で静かにセルを見つめたまま何も言わない...。

『孫悟飯、今すぐこの場を離れる。死にたくなければな』

ブーステッド・ギア  
不意に赤龍帝からドライグが声を発する。

「え?でもセルが...」

しかしドライグは悟飯の言葉には耳を貸さず、今度はセルに声をかけた。

『その人造人間よ、セルといつたか?』





までもが生えてきた。

両手両足からは爪のようなものが伸び、兜からは角のようなものが幾つも形作られていく。

その姿は赤いドラゴンそのものであった…………。

そして、宝玉各部から、絶叫に近い声が老若男女入り乱れて発生される。

「「「「「汝を紅蓮の煉獄へと沈めよう——」」」」」

『Juggernaut Drive  
!!!!!!!』

【ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオツ…………。】

悟性を中心に周囲が弾け飛ぶ。

地面が、山が、雲が、悟誠の鎧から放たれる赤いオーラによって…………。

「グギユアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

獣の叫びにも似た咆哮を悟誠が発し、その場で四つん這いになり、翼を羽ばたかせる。

【ビュッ!】

風を切る音と共に小型のドラゴンと化した悟誠が超高速でセルに飛びかかる。

「ぬうおっ!?何をやる!!ぐああああああつ!!」

セルに絡みついた悟誠は肩に噛みつき、更に腕でセルの両腕を挽ぎ取ったのだ。

【ブチブチブチツ】

肉を引きちぎる音と共に、セルの肩を喰い千切る悟誠…………。

「このっ!調子に乗るな!たかがサイヤ人風情が!!」

セルが右腕を再生させ、エネルギー波を放とうとするが、それよりも早く宝玉の一つから、赤い鱗に覆われた龍の手が出現し、セルの右腕を掴んだ。

「なにっ!？」

驚くセルを尻目に、更に宝玉のもう一つから気の刃が生まれその右腕を切断する。

「ぐあっ!!ぬうううううっ!!」

苦悶の声を上げるセル。

悟誠は切断したのを見届けると、ようやくセルから離れ、地面へと降り立った。

地面に降りた悟誠は「ベツ!」と、啞えていたセルの肩の肉を思い切り吐き捨てる。

赤い鎧はセルの紫の血を浴びたことによつて不気味な光沢を放っていた。

「チクシヨオ!チクシヨオ!チクシヨ!何故こんな奴にこの私があ!!!」

肩の肉を食いちぎられ、両腕を斬られ、腕がれたセルはただ絶叫を上げるしかなかった。

再生すれば済む話ではあるのだが、それをするにも気は消耗してしまふ……。

それに、部位の再生は出来ても体力までは戻らない、寧ろ再生すればするほどにセルの体力は失われていくのだ。

叫ぶセルに悟誠、いや赤龍帝は体制を変え、両翼を大きく横に広げ、顔をセルに向けてまっすぐと向けた。

【ガシヤツ】

そんな音がしたかと思えば、赤龍帝の鎧の胸元と腹部が大きく開き、何かの発射口が姿を現していた。



「ぐぐぐぐつ!!!お、押され…っ!!

ぐあああああつ!!

な、なぜこの私が…お前ごときに…」

赤いエネルギーの奔流に呑み込まれたセルは跡形もなく光と共に消えていくのだった…。

悟誠よ元に戻れ！悟飯と18号の共闘！

side 悟飯

「おおおおおおおんっ！」

更地となった荒野で赤い龍が吠える……。

赤き龍となった悟誠兄ちゃんが空を見上げて哀しそうに叫ぶ……。

倒すべき敵はもういない、セルは悟誠兄ちゃんが跡形もなく消し飛ばしてしまったから……。

……  
だけど、それだけでお父さんを失った哀しみが消える訳じゃない

その相手がいなくなったところでお父さんはもう戻ってこないのだから……

（おーい！聞こえつか？悟飯！オラの声届いてつか？）

不意に頭の中に声が聞こえてくる。

それは紛れもなく死んだお父さんのものだった。

「お、お父さん!?!どこ！」

（あの世さ、界王さまに手伝ってもらって喋ってたんだ！そうだ、それよりよ、界王さまから聞いたんだけど、今悟誠の奴すげえんだって？）  
そっか、界王さまがああの戦いを見てたんだ……。

「う、うん、悟誠兄ちゃんじゃないみたいになってるよ……」

（元には戻らねえんか？）

「それが……戻る気配がないんだ……セルは倒したのに……」

（そうか……悟飯、良く聞けよ？悟誠が今なってるのは覇龍つちゆう

神器の暴走かもしれないねえんだ、あの状態を放って置いたらアイツはいいづれ死んじまう)

「え!?そ、そんな…僕はどうしたら…」

悟誠兄ちゃんが死ぬ?お父さんだけじゃなくて悟誠兄ちゃんまで…??

(それはオラにもわかんねえ、けど悟飯、アイツを戻せんのはおめえしかいねえとオラ思う)

「え?ぼ、僕が…?」

(ああ、ホントはオラが止めに行つてやりてえとこなんだが、オラもう死んじまつてるからな…)

だから悟飯!おめえがやるんだ!おめえの大好きな兄ちゃんを元に戻してやれ!)

「わ、分かりました!どうやるかわからないけど、やってみます!」

(それでいい、頼んだぞ、悟飯!)

そうして声は聞こえなくなっていった。

「はい!見ていてください、お父さん!僕が必ず悟誠兄ちゃんを戻してみせるから」

僕は赤龍帝となった悟誠兄ちゃんを見る。

「おおおおおおおおんっ!」

悟誠兄ちゃんは相変わらず空に向けて咆哮を続けていた。

まずはどうしたら戻せるかだ、悟誠兄ちゃんはお父さんが死んだこ

とによって ジャガーノート・ドライブ 覇 龍 を発動させてしまった。

ということは、その哀しみを塗りつぶすほどの大きな衝撃を与えれ

ば、もしかしたら……

「けど、感情の上塗りなんてどうしたら……」

悟誠兄ちゃんの好きなものなんだったかな……？

僕がそんな風に考えていると不意に後ろから声が掛けられる。

「困っているみたいじゃないか、孫悟飯……。手を貸そうか？」

その言葉に振り替えると、そこに立っていたのはセルから吐き出され、気を失っていた人造人間18号だった。

「じ、18号……どうして……」

僕が驚きを隠せないまま問うと、彼女は小さく苦笑して話す。

「私もアイツにはちよつと思うところがあってね、あのまま放って置いたらアイツ、死ぬんだろ？」

「っ!? な……なんでそれを……」

どうして知ってるんだ？これは僕とお父さんしか知らないはずなのに……。

「なんでって、あの様子を見てりやなんとなく察しはつくからね……。それはこっちとしても後味が悪いからね、今回だけ協力してやるよ」  
そう言つて顔を背ける18号、良く見ると、顔が貸すかに赤くなっていた……。

悟誠兄ちゃん、いったいあの後何してたんだろ？

と、余計な思考は一旦捨て置き、僕は意識を悟誠兄ちゃんの方に向けてる。

悟誠兄ちゃんの好きなもの……確か……む、胸……だったよね？

良くブルマさんの胸を変な顔して眺めてたし……。

よくよく思い出してみれば18号との初戦闘時も胸をガン見してたし……。



それを考えると悟誠兄ちゃんにお…おっぱいを見せるか、触れさせれば戻せるかもしれない!

「18号、僕に協力してください! 確かには分からないけど、悟誠兄ちゃんを戻せるかもしれない作戦があるんです」

「へえ、なんだい? その作戦ってのは」

「それはですね……」

僕は作戦の内容を18号に説明する。

「な、なんだって! 私がアイツに胸を触らせる!?! なんだってそんなことをしなくちゃいけないのさ! 冗談じゃないよ!」

「お願いします! これしか方法がないんです!」

僕は精一杯頭を下げる。

この作戦には18号の協力が必要不可欠だ、他の人でもいいかもしれないけど、今この場にいるのは18号しかない……。

「っ! ……分かった、けど、もし戻らなかつたらアンタをハツ倒すからね!」

「ッ! ありがとうございます!」

作戦は決まった、後は実行に移すのみ!  
必ず助けるからね! 悟誠兄ちゃん!

side out

side 18号

作戦を聞いた私達は空に向けて吠える赤い龍の近くへとやって来ていた。

「じゃあ、作戦通りをお願いします！」

「ああ、アンタもハマすんじゃないよ」

「はいー」

そう言うとき孫悟飯は赤い龍に近付いていった。

作戦の内容はこうだ……。

まず、孫悟飯がアイツの気を引いて暴れないように弱らせる。

アイツが動けなくなつたところで、私が近づいて胸を触らせる。

といった単純なものだ……。

正直そんな作戦で大丈夫なのかって不安な気持ちで仕方ないんだけど、あの時の事もあつて全否定は出来なかつた……。

そう、アイツが赤い鎧に包まれた時も……。

『18号、お前のおっぱいをつつかせて欲しい』

セルから逃げていた私達の前に現れて言つた第一声がそれだつたんだからね……。

あの時は驚いたよ、私を壊しに来たのかと思つたらそんなことを言い出したんだから……。

けど、それで思つたんだ、コイツに人生預けてみるのも悪くないかもしれない……。

だから孫悟誠、勝手に死ぬんじゃないよ？

私の胸を触つた責任はアンタの一生を掛けて償つてもらうんだから……。

そうしている間にも状況は変わっていつてるね。

どうやら赤い龍は孫悟飯相手には本気が出せないらしい……

孫悟飯に多少の傷は見えるけど、致命傷になるほどの傷はひとつも付いていないのが何よりの証拠だね。

そうこうしている間に、孫悟飯がアイツの体力を削っていき、やがてアイツが膝を着き動かなくなった。

そろそろかもね……。

私は赤い龍の前に飛んでいき、目の前に降り立つ。

「……ッ！」

へえ、驚いてるみたいだね、これは少しは理性が戻ってきているってことか？

なら、後一押しだね！

私はペロンと胸元をはだけさせ胸を露わにさせる。

「ほら、アンタの好きなものだ、好き sadece 触るといい」

「……う、うう……お……おっばい……」

反応があったね、まさか本当にこれでイケてしまうんじゃないか……。

「ほらほら、どうした？触らないのかい？」

試しに煽ってみる。

「うう……おっばい……じ……じゆうはちごう……」

ッ！私の名前が出てきた、後少しか？

「触りたいんだろ？そら♪」

「う……うう……おっばい……ずむすむ……いやーん……」

なんだいそれは……何かの呪文か？

そんな言葉と共に伸びてきた龍の腕が私の胸をつつく……。

【ムニユツ】

「んっ……」

声が出そうになるのを辛うじて抑える。すると……

【パアアアアツ】

赤い光が光が輝いた瞬間、奴の鎧が光の粒となって消え去り、アイツが出てきた。

「悟誠兄ちゃん！」

それを見て慌てて駆け寄る孫悟飯、私も衣服を正して近付く。

「スウ…スウ…おっばい…」

なんだい…その寝言は……。

「これでいいんだね？」

「はい、本当にありがとうございました18号さん」

おや？さつきまで呼び捨てだったのに、コイツが元に戻った途端にこれだなんて、現金な奴……。

まあいいか、コイツも元に戻ったんだ。今はその喜びに浸ろうじやないか……。

## 魔人ブウ編

クリリンに春!?!クリリンの花嫁は誰だ!

side 悟誠

よっ!俺、孫悟誠!

セルとの戦いから一年、俺は今17歳だ。

俺は覚えてねえんだけど、あの時の話を他の皆さんから聞いた。

父さんと共に死んだはずのセルがより強力になって戻ってきたこと……。

セルの言葉で俺が神器を暴走させてしまったこと……。

暴走させ、発動させてしまったジャガーノート・ドライブ覇龍により、セルを打ち負かしたこと……。

18号と悟飯の活躍でなんとか元に戻れたこと……。

俺はそれを聞いたとき驚きで声がでなかったよ……。

だって父さんが死んだからの記憶が全く残ってねえんだから……。

次に気がついたのは神殿だったんだ。

そこでは皆さんがシエンロン神龍を呼び出しているところだった。

シエンロン神龍に頼んだ願いは二つだった。

セルに今まで殺された人達を蘇らせてほしいということ……。

もうひとつは、俺の願いで17号と18号の体内にある起爆装置を取り除いてもらうことだった……。

本当は父さんを蘇らせたり、18号達を人間に戻してもらいたかったんだけど、それはシエンロン神龍の力を大きく上回る願いだったり、一度甦ったことがある為に諦めた。

途中、デンデの提案でポルンガに頼んで生き返らせてもらうという案も出たんだが、それはあの世から声をかけてきた父さんの拒否によつて取り下げられた。

その後はピッコロさんとデンデ、そして他の皆さんと別れを告げ、トランクスが未来に帰るときに見送りにいく約束をして、俺達は自分の家へと帰っていった。

帰ってからは大変だった…。

母さんに、父さんが死んだ事を説明して泣き崩れた母さんを宥めるのがとにかく大変だった……。  
じいさんバーダック…ではなく、じいちゃん牛魔王（このときに初めて挨拶したら大層驚かれた）や悟飯と必死になって宥めてその場はなんとか落ちついた……。

その翌日には、カプセルコーポレーションに向かい、トランクスが未来に発つ見送りに出向いたりもしたな……。

アイツ、ちゃんと人造人間を倒せたのかな？

と、そんなことがなんだかんだあつて一年後……。

俺はカメハウスへと遊びに来ていた。

悟飯は家で勉強中だ…。

「はあ……」

そのため息を吐いているのはクリリンさんだ。

「なーに湿気た面してため息なんか吐いてんすか？そんなこととしてたら幸せが逃げますよ？」

「はあ…お前は良いよなあ悟誠…あんな可愛い彼女がいてよ…それに比べて俺なんか…前の彼女には逃げられちゃうし…はあ…」

うわあ…物凄い落ち込みようだ……。

「ここ最近ずつとこうなんじゃ、しばらくは気に掛けてはおつたんじゃないが、今日は一段と酷いのお」

そう話すのは亀仙人こと亀のじいさん。

そっか、クリリンさんって良く…『一度でいいから結婚してえ』って言つてたもんな……。

ってか俺はそれ以前にクリリンさんに元カノがいたことが驚きなんだけど!?

『それは流石に失礼じゃないかしら？あんなに遅しくて格好いいのだから彼女の一人や二人居てもおかしくはないと思うのだけど』

不意にエルシャさんが声をかけてくる。

(そうは言ってもですよ？エルシャさん。あのクリリンさんがですよ？あ……)

と、そこまで言っただけで俺は察してしまった。

(エルシャさん、ひよつとしてクリリンさんに気があたりします？)

『……な、なんのことかしらね……』

明らかに上擦った声が返ってきた…。

これは黒だな、確定だ……。

だが、これならクリリンさんにも可能性があるかもしれない！

「クリリンさん、もしよければ俺がクリリンさんに相手を探してきますけど…どうすか？」

するとクリリンさんはガバツと顔をあげ、俺に飛びかかるように胸ぐらを掴んできた。

「ほ、ホホホ…ホントか!？」

ちよつ…首絞めながら聞いてこないでくれ…死ぬ……。

「ぐ、ぐりりんぎん…じぬ…」

「あ…悪い」

そこで自分が何をしているか理解したのか、ようやく手を離してくれた。

「ゲホツ…ゲホツ…！あー苦しかったあ…」

さっきの質問の答えですけど、イエスです。実はちよつと心当たり

があるんですよ」

「そ、そうなのか？でも、それだと悟誠にもその人にも迷惑かつちまうんじゃないか？」

「その辺りなら大丈夫ですよ、俺は暇でしたし、あの人も会うときは大體暇してる方なので、『それに、結構な美人ですよ？』」

「ツ!!」

最後の方をコソツと耳打ちしてやるとピクツと反応した。

「そ、そうか…じ、じゃあ頼んでもいいかな？」  
乗ってきた、これで決まりだな！

「任せてください、あの人は結構遠くに住んでるので連れてくるまでに時間が掛かると思いますが、ちゃんと連れてくるのでそれまで待っていてください」

「あ、ああ…わかった…。頼んだぞ、悟誠」

「はい！」

「じゃあついでにワシにもピチピチギャルを連れてきてくれんかのお…」

「それはじいさんが自分で行ってナンパした方が良くないじゃねえかな？」

それだけ言って俺はカメラハウスを後にした。

向かう先はカプセルコーポレーションだ……。



「お、見えてきたー！」

カプセルコーポレーションの建物が見えてきた。

俺は高度を落とし、その敷地内に降り立つと中に入っていく。

受付の人に用件を話し、ブルマさんのところまで案内してもらう。

「お久しぶりです。ブルマさん」

案内された部屋で俺はブルマさんに挨拶する。

「あら、悟誠くんじゃない！久しぶりね〜。元気にしてた？」

「だあぶう…」

「あはは、はい、それなりには…。

おお？トランクスも久しぶりだなあ！元気だったか？」

「キヤツキヤツ！」

指を差し出すとその小さな手で握り返して嬉しそうに笑っていた。

「もうあれから一年になるのよね〜それで、今日はどうしたの？」

「あ、えつとですね…ちよつとドラゴンレーダーを貸してもらいたくって」

「え？ドラゴンレーダー？ドラゴンボールを探すの？」

不思議そうな顔をして聞いてくるブルマさん。

「ええ、ちよつと叶えたい願いがありました…」

するとブルマさんの目がスツと細められる…。

「……まさかとは思うけど、世界中の若い女性にモテたい……だとか言うつもりじゃないでしょうね？」

……え？

「いやいやいや!!そんなアホなことじゃないっすよ!」

そもそもそんなことお願いしようものなら18号に半殺しにされちまうし……。

「ふーん……まあいいわ、ドラゴンレーダーならその引き出しに入ってるから持ってたっていいわよ」

そう言つてあるタンスを指すブルマさん。

「ありがとうございますー!じゃあちよつと借りてきますね」

俺はそのタンスからドラゴンレーダーを探し当てると、それを手にカプセルコーポレーションを後にするのだった。

ドラゴンボール集めはすぐに終わった。

まあ、海の中にあつたり野性動物満載の草原にあつたりと回収はそれなりに難航はしたが……まあ比較的楽に済んだ。

そして俺は人が誰もいない無人島で一人、集めたドラゴンボールを広げていた。

【トクンツトクンツトクンツトクンツ】

七つのドラゴンボールが脈打つように光を点滅させている。

そして俺はある呪文を口にした。

「出でよ神龍シエンロン！そして願いを叶えたまえ!!」  
するとドラゴンボールがいつそう強く輝きを放ち、空が黒く覆われる。

そして七つの玉から眩い光が天に向けて放たれ、やがて一体の龍となった。

龍は俺を見て重苦しい口を開いた。

『さあ、願いを言え、どんな願いも二つだけ叶えてやろう……』  
叶えてもらう願いはもう考えてある！

「俺の中に眠る先代の赤龍帝であるエルシャさんを甦らせてくれ！」

『……それは出来ない、何故ならその者の肉体は当の昔に滅びているからだ』

そんな……。っーならー！

「じゃあそのエルシャさんの肉体を創ることはできますか？」

『それならば可能だ』

良かった、これならなんとかかなりそうだ……。

「じゃあ一つ目の願いです！エルシャさんの肉体を構築してあげてくださいー！」

『承知した……（キューーンッ）』  
神龍シエンロンの瞳が赤く輝き、すぐに元に戻る。

すると、俺の目の前に横たわる女性が現れた。

エルシャさんの肉体だ。

『衣服はサービスだ……。願いは叶えてやった、さあ、次の願いを言え……』

「じゃあ二つ目です。俺の中に眠るエルシャさんの魂をこの身体に蘇らせてください！」

『容易いことだ……（キュイーンッ）』

再度、神龍シエンロンの瞳が赤く輝くと、俺の左腕から小さな光が一筋出ていくとその身体に入っていく。

「……………」

ムクリと起き上がり不思議そうに自信の身体を見つめる女性……。

『願いは叶えてやった……さらばだ！』

神龍シエンロンはそう言うのと光となって天高く昇っていき、やがて七つの光となって世界のあちこちに散らばっていった。

そして空模様は元の青いものに戻る。

俺はそれを見届け、目の前の女性に顔を向ける。

「どうですか？エルシャさん、久方ぶりに甦った感想は？」

「悟誠くん、なんだか不思議な感じ……。またこの身体で大地を歩けるだなんて思っても見なかったから……」

立ち上がり軽く延びをするエルシャさん。

「でも、どうして私を急に甦らせようだなんて思ったの？」

「それはすぐにわかりますよ、とりあえず俺に掴まってください」

「え、ええ……」

訝しげにしながらも背中に乗ってくるエルシャさん。

背中に当たる柔らかい感触とちよつと固い感触が当たる。

物凄く気持ちがいいが、後で18号にボコボコにされるんだろうな

……。  
と、少し憂鬱な気持ちになりながら俺はカメラハウスまで飛んでいくのだった。

「ぐ、ぐ、ぐ、悟誠…だだだ…誰だこの綺麗な女性は…!!」

「うっひょーっ！ピッチピチギャルじゃあ〜！」

カメラハウスに到着すると、顔を真っ赤にして慌てふためくクリリンさんと同じく顔は赤いが、別の意味で鼻息を荒くしている亀のじいさんがいた。

「悟誠くん、まさか私を蘇らせてくれた理由って…。」

エルシャさんが何かに気付いたように聞いてくるが俺は無視してクリリンさんに話しかける。

「クリリンさん、紹介しますね、こちらが俺の知り合いのエルシャさんです。クリリンさんに紹介したかった人ですよ」

「そ、そそそそうなのか？」

「はい！ほらほら、慌ててないで挨拶してあげてください」

トンツと軽くその背を押してやる。

クリリンさんはそれに押されるようにして数歩歩き、エルシャさんの前に立つ。

「え、えーっと…初めまして…ですよね？」

オレ、クリリンって言います…よろしく」

しどろもどろになりながらもなんとか自己紹介をするクリリンさん。

対するエルシャさんもあまり変わらない様子で……。

「は、はい……初めまして……私はエルシャと……も、申します……えつと……よろしくね」

「ウヒョー！初々しいのお!!」

「はいはい、亀のじいさんは少し俺とこっちに来ようなく」

蒸気機関車のようにヒュポーツヒュポーツ!と、鼻息を荒くしている亀のじいさんを俺は屋根裏部屋まで引き摺っていく。

「ま、待て!待つんじや悟誠!もう少しあと少しだけえ!!」

「駄目だぜ?じいさん、俺達は向こうで熱い語り合いでもしようじゃないか」

亀のじいさんを連行しながらそつと二人の様子をうかがう。

お互いに顔を真っ赤にして俯いてしまっはいるが、きつとあの二人なら大丈夫だろうと、心のどこかで納得してしている俺がいた。

(頑張れよ、クリリンさん!もう春はすぐそ目の前なんだから!)

そう心の中で応援して、俺は亀のじいさんと共に屋根裏部へと入っていくのだった。

数日後、カメハウスに様子を見に行くと、なんとも仲睦まじい様子の二人がいて俺は深く安心するのだった

頑張れ悟誠！18号とのハチャメチャデート！

side 悟誠

「ほら、悟誠、早く来なよ」

「ちよ、ちよっと待ってくれって…」

おつす、俺孫悟誠！

今は18号と南の都に買い物に来てんだ。

所謂デートって奴なのかもな、けど……

「悟誠、ほらこれ持ってたな」

そう言って渡されるのは18号の買ってきた商品袋。

何を隠そう、今、絶賛俺はデートとは名ばかりの荷物持ちをさせられているのだ。

「なあ、まだ買うのか？」

「ああ、なに、なんか文句あるの？」

「いや、そういう訳じゃねえけどさ…」

「ならグチグチ言っていないでさっさと着いて来なよ」

「まったく、分かりましたよ…」

俺が考えてたものとは明らかに違う！こんな絶対のデートじゃねえ！

デートってのはもっとキヤツキヤウフなものなはずだろ！

これじゃ俺は我儘なお嬢様に振り回される執事だよ……。

それからまたしばしの間、18号の荷物持ちに付き合わされた。

「ふう、とりあえずこのくらいにしとこうか」

「ああ… やつと終わった…」

荷物持ちをさせられ丸一日、ようやく解放されると思い、帰ろうとした時だった。

「もう帰るの？ちよつと待ちなよ」

まだ何かあるのかと多少うんざりしながら振り返ると…………。

【チュツ…】

頬に不思議な感触がしていたんだ。

横目で確認すると、18号の顔が真横にあった。

「今日はありがとね、楽しかった… その褒美よ、じゃあね」

18号はすぐに離れて後ろを向きながらそう言い、何処かへ飛んでいってしまった。

俺はそれをしばらく見送ってから一人呟いた。

「………… つたく、恥ずかしいならやるなよな」

耳が真っ赤になっていたのを見るに、相当恥ずかしかったんだろう。

だからすぐ飛んでつちまったんだろうな…………。

「さて、俺も早いとこ戻らねえと母さんにどやされそうだ…」

そんなことは勘弁なので、俺も帰路につくのだった。



「ほら、早く避けねえと死ぬぜ?」

「ちよっ… マジで… 殺す気… か!」

アレから数日…

俺は17号の相手をしていた。

どうやら18号と付き合っていることが気に入らないらしく、こうして相手をしてるんだ。

普通に考えりや確かにそうだよな、ちよつと前まで殺し合ってた相手と姉ちゃんがくっ付いたらそりやおとうととしては心中穏やかじゃないよな…

そんなことを考えるが、今は戦いの最中だという事を思いだして思考を振り払う。

飛んできた17号の蹴りを防ぎ、背後に回り込むとアームハンマーを叩き込み、地面に墜落させる。

「ぐあっ!」

勢いよく飛んでいき、地面に激突する17号。

俺はすぐ横に降り立ち声を掛ける。

「なあ、もういいだろ?」

「うるさい!俺に指図するな!まだやれる!」

「そんなボロボロな体でか?」

俺がそこまで言ったところで17号はようやく自分の状態に気が付いたららしい。

「フンツ決着はまた次に持ち越しだ！」

そう言うのと17号はどこかへと姿を消した。

『いいのか？後を追わなくて…』

「ドライブ、いいよ別に… もう暴れることもないだろうしな」

『… そうだといいがな』

それきり籠手からの反応はしなくなった。恐らく眠りについたんだろう。

一人残された俺は悟飯との修行の約束を思い出し、急いで家へと戻るのだった

## 七年の月日、悟飯を見守れ孫悟誠!

side 悟誠

おつす、俺悟誠!

セルとの戦いから七年、俺は二十三歳になった。

付き合っていた18号と結婚し、今ではサタンシティに家を建てて暮らしている。

悟飯も成長して、十六歳になった。今年でもう高校生だ。

母さんの話では、今日、ここ、サタンシティにある、オレンジスターハイスクールという高校に通うらしい。

実家から通うのは大変だろうし、家に住むかと誘ってみたが、『母さんや悟天だけだと心配だから』という理由で断られてしまった。

「今日だったかい? 悟飯があオレンジスターハイスクール。そこに通い始めるのって」

18号がそう声を掛けてくる。

「ああ、そうらしいけど、大丈夫なのかね...」

「アンタは心配し過ぎだよ、アイツはそんな軟弱な奴じゃないだろ」

「..... それはそうなんだが」

それでも心配なものは心配なのだ、アイツは優しすぎる節がある。俺みたいに学校に通ったことがあるならいざ知らず、アイツは住んでいた場所が場所だっただけに、ずっと自主勉しかしてこなかったんだ、高校生特有のノリについていけるとは思えない.....。

「はあ... そんなに心配なら様子を見に行けばいいじゃないか」

「え...?」

18号は今なんて言った...?

「アイツ、孫悟飯が心配なんだろう？なら様子を見てくれればいい、そんな調子でずつと家にいられたら溜まったもんじゃない」

「18号。。。分かった、ちよつと行つてくる！ありがとな」

そうだ、ウジウジ悩んでんのは俺らしくない！

気になるなら見に行けばいいじゃねえか！

やっぱ18号には敵わねえな。。。。。。。。

俺は心の中で18号に感謝しつつ、悟飯の様子を見るためにオレんジスターハイスクールへと向かうのだった。

side out

side 悟飯

こんにちは、僕、孫悟飯です。

突然ですが、僕は今とてつもなく緊張しています。

どうしてか分からないんですけど、いくつか視線を感じるんです。

最初はクラスメイト達が見ていると思っていたんですが、それとなく見渡してみたら一つだけ違うことに気が付いたんです。

けど、それが誰の物なのか分からないので探すに探せず、気を探ろうにも気を消しているのか位置が全く掴めないんです。

正直、入学初日からこんなな気を這っているのは疲れます。。。。。。

どうにかして視線の主を見つけたいけど、あまり大ぴらに目立つわけにもいかず、初日から僕は胃が痛い思いをしていました。。。。。。

side out

side 悟誠

さつきから悟飯の様子がおかしい、何かを探っているような。。。。。。

それよりも、悟飯が案外うまくやれているようで安心した。だが、悟飯を見守る最中、気になることを聞いた。

度々現れては悪党どもを懲らしめる、金色の戦士の噂……………。それに俺は覚えがあった。

凄まじいパワーとスピード、そして気合のようなもので車ごと吹き飛ばすなんてことが出来るのは超サイヤ人スーパーサイヤ人しか考えられない。

俺も、今はこの街で用心棒のようなことをしているが、超サイヤ人スーパーサイヤ人になったことは一度もない。

と言うことは、後考えられる線は、ベジータなわけだが……あの人  
がそんなことをするとは思えず、その考えは捨てた。

となると、考えられるのは悟飯のみ……………。

悟飯なら、編入手続きに来た時にやっている可能性が高い。

正体がバレるのはマズイと危惧してやったんだろうが、それが裏目に出たな……………。

現に、クラスメイトらしき黒髪のおさげの女子から疑惑の視線を向けられている。

……………これは、対策を考える必要があるかもな、俺からブルマさんに話をしておくか。

そう決めると、俺はカプセルコーポレーションへと飛んでいくのだった。

誕生！次代のニューヒーロー!?その名は悟菜帝！

side 悟飯

「ふうん、正体がバレないように、完全な変身がしたい…ね」  
学校が終わり、僕はブルマさんの家へと来ています。

「はい、ブルマさんならきつと、良いアイデアがあると思って学校帰りに寄ったんです。何か良い方法ありませんか？」

「あるわよ、あたし天才だもん。」

要するに、変身スーツをカプセルのように粒子に変えておいて、いつでも装着できるようにすればいいのよ」

「本当ですか！ぜひお願いしたいんですが！」

こんなことがすぐに考えつくなんて、流石はブルマさんだ！

「それにしても、悟誠くんの言ったとおりだったわね、まさか本当に来るとは思ってもみなかったわ」

「え？兄さんが来てたんですか？」

「ええ、『悟飯くんが何か大事な相談にやつてくると思うから相談に乗ってあげて欲しい』って言いに来たのよ」

「そうだったんですか…」

兄さん、どうして僕がここに来ることが分かったんだろう…。

「とりあえず、作ってみるわ。デザインに希望はある？」

「あ、じゃあ兄さんが付けているあの鎧みたいにするこつて出来ま

すか？」

あの鎧のフォームかつこいいんだよね！もし着るんだったら僕もあんな感じのカッコいいものを着たいよ！

「あの鎧みたいには？分かったわ、それじゃああれをモデルに作るわね、二時間ぐらい待ってて」

「二時間で出来るんですか!?!すみません、どうもありがとうございませー！」

「じゃ、ちよつと待っててね」

「あ、その、トランクスくんはどこですか？じつと待ってるのも退屈ですから」

「トランクスなら、多分重力室でベジータにしごかれてんじゃないかしら？」

「へ？ベジータさんに…？」

あのベジータさんが… 見てるのかな？

「そろそろ本格的の鍛え始めてもいいころだからって格闘技教えてんのよ。トランクスを悟飯くんや悟誠くんより強くしたいらしいわ」

「へえ、怖いですねそれは…」

僕はともかく、兄さんを抜くのは難しそうだなあ…。

なにしろ最近サボっちゃってる僕と違って、兄さんは未だに修行を続けてながら働いてるんだから。

そうしてブルマさんを見送った後、僕はトランクスくんを探しに外の重力室へと向かった。

重力室について顔をのぞかせると、ちょうどトランクスクンが汗をぬぐっているところだった。

「よお、トランクス」

「?ああ!悟飯さん!いつ来たの?」

相変わらず元気そうだなあ、この子は。

「さつき来たばかりさ、なあ、お父さんに修行してもらってるんだって?」

「うん!」

そう話していると、重力室の奥の扉が開いて、私服姿のベジータさんが出てくる。

「あ、ベジータさん、お邪魔してます」

「ああ...」

ベジータさんはそのまま僕目の前まで来ると、不意に足を止めて、再度口を開いた。

「..... 悟飯、体が鈍っているぞ...。いくら平和でも、鍛錬はしておけ、兄を越えたいんだろう」

そう言うときベジータさんは部屋を出て行ってしまった。

「は、はい...」

あちやあ... やっぱり直ぐに分かつちやったか... 兄さんの事を



出されるとちよつと痛いなあ……。

ポカンとしている僕にトランクスくんが声を掛けてくる。

「ねえ、今日は何して遊ぶ？」

「あ、ああ、そうだね……」

「悟飯くーん！出来たわよ！はい、これ」

そう言つてブルマさんが渡してきたのは腕時計の形をした何かだった。

僕はそれを左腕に付けてみる。

「この赤い方を押せばいいんですね」

「そうそう」

「いいなあ、おかあさんぼくにも作つてよ！」

トランクスくんの言葉を聞きながら僕は言われた通りに赤いボタンを押した。

【ブウウウウンツ】

そんな音と共に瞬く間に僕の姿が変わる。

「わああ！これですよこれ！カッコいいじゃないですか！」

その姿は兄さんが纏う鎧の瓜二つの色違いだった。

「でしよう？似せるのに苦労したんだから」

「ありがとうございますブルマさん！こんなに来てみたかったですよー！」

「いいなあ、おかあさんぼくにもあれ作ってよ！青いやつ！」

「はいはい、また今度ね」

「あはは… じゃあ僕はそろそろ帰ります」

「そう？気を付けて帰ってね、チチさんによろしく」

「はい、それじゃあ、またな、トランクス！」

「また来てね！悟飯さん！」

こうしてブルマさん達に別れを告げ、僕は内へと帰って行くのだった。

それにしても兄さんはどうして僕がここに来ることを知ってたんだろう…？

## 初実践!?: 頑張れ悟菜帝!

side 悟飯

こんにちは、孫悟飯です。

ブルマさんに変身スーツを作ってもらった僕は、金斗雲に乗って帰路に着いている最中です。

「頼むよ金斗雲、遅くなっちゃったから全速力でな!」

その言葉を聞いた金斗雲は速度をあげてくれます。

けど、しばらく飛んでいて、僕は良いことを閃いたんです。

「ん? そうか、変身した格好で学校まで行けば、僕だとバレずにもっと早く行けるんだ…!」

そうと決まれば早速やってみよう!

僕は金斗雲から立ち上がり話しかけます。

「そうと決まったら競争してみようか金斗雲!」

そうして僕は腕時計の赤いボタンを押します。

【ブウウウンッ】

たちまち全身が緑色のスーツに包まれます。

そのまま武空術を使い、金斗雲と並走するように飛び始めます。

「行くぞー! よーい! どん!」

僕の掛け声を合図に金斗雲との競争が始まりました。

最初は金斗雲に合わせるように横を並んで僕は飛んでいきます。

よーし、そろそろ少しだけ本気を出してみるか…。

そう考え、僕は速度を少し上げます。

みるみる間に金斗雲との距離が空いていきます。

「ほらほら金斗雲！もつともつとスピード上げるぞ！」

そのまま僕は更に速度を上げ金斗雲との距離を空けていきます。そうしてしばらく飛んで町の上空まで差し掛かったところで金斗雲を見てみると、かなりの距離が空いていました。

「へへっ…もうこんなに差がついちやっただぞ」

もう僕の方が金斗雲より早いんだなあ…へへっ誰も僕だと気がつかないんだろうな……。

と、少しだけ優越感に浸りながら街の上を飛んでいると、ある光景が目についたんです。

それは、街中を一台の暴走車が他の車を追い越しながら凄いスピードで走り回っているというものでした。

危ないな…止めに入らないと！

「暴走車発見！」

僕はそのまま暴走車目掛けて急降下していくのでした。

スピードを落とすことなく走り続ける暴走車に僕は近づきながら降りていきます。

「もう変身してるけど…）へんしーん！たあっ！」

そうして僕は暴走車の前に降り立ちます。

【キキキキキーツ!!】

慌てて急ブレーキを踏み込む暴走車。

そのまま僕の目の前まで来たところできっとか止まりました。

暴走車に乗っていた運転手と同乗者が怒鳴ります。

「こ、このクソツたれ野郎！死にてえのか！」

「コイツどこから来たんだ!？」

この人達、自分が何をしてるか分かってないな…？

「そんな無茶な運転をするんじゃない！人を引き殺すところだったぞ！」

そう言つて僕は運転手を指差しながら更に言います。

「これからは街の中では安全運転をすると私に誓え！」

これで納得してくれるといいんだけど……

そう思つてる僕の考えを他所に運転手と同乗者は車からおりてきます。

「なんだとお？ちよつとカツコいい格好しやがつて！なに抜かしやるこの変人野郎！」

「何者だてめえは！」

「え？な、何者…？そうだなあ…えつと…」

そういえば変身後の名前を考えてなかったな……。

何がいいんだろう…どうせなら悟誠兄さんやあの赤いドラゴンから取りたいし…よし！兄さん！あのポーズ、お借りします！

「そうだ！私は！正義を愛し悪を許さぬ者！またの名を悟菜帝！」

兄さんが変身した時のようなポーズを取りながら僕は高らかに宣言します。

その言葉に、今まで怒鳴っていた運転手達が呆けた顔をしていました。

「ぐ…ぐ…ぐい…」

「てい…う？」

二人して顔を見合わせる運転手達……。  
そのまま勢いよく大笑いを始めたんです。

「ダーハツハツハツ！ダツセエ！カツコはちよつと良いのに名前がダセエゼ！ダハハハハツアーハツハツハツ！」

「こ、こいつやっぱり変だぜ！やつちやえやつちやえ！アハハハハツ！！」

だ…ダサいだとお…！コイツらは！僕や兄さんを……ツ！

「…ツ！！バカにするなあ！！」

【ドゴンツツ】

ま、まだ、僕だけなら許せた…けど、兄さん達のことをバカにするのは許せない！

みるみる亀裂が入っていく道路を見て笑いが止まる運転手達……。  
もう一度僕は地面を思いきり蹴りつける。

【ビキビキビキイツツ】

やがて亀裂は暴走車の方まで延びていき、前輪のタイヤを落としました。

「一生懸命考えた名前だぞ！」

憧れの人をバカにされたも同然なんだ！いくら僕だって許さないぞ！

「……………ごめんなさい…良く考えたら、とても良いお名前でした…」

「こ、これからは、安全運転しますう……」

よかった、分かってくれたみたいだ。

それを聞いて機嫌が良くなった僕は、落輪した車を引つ張りだし走れるように綺麗なところに置いてあげます。

「さ、さようなら……悟菜帝さん……」

そう言うのと運転手達はそそくさと安全運転で走り去って行くのでした。

分かってくれたか、前途ある若者達よ……。

それを届けてから、僕は今度こそ家に帰るのでした。

あ、因みに競争は金斗雲の勝ちでした……。

side out

side 悟誠

「なにやってんだ？悟飯のやつ……」

なにやら街中が騒がしいと思って来てみたら、バランス・ブレイカー 禁 手 時の俺みたいなスーツを身につけた男が男二人と揉めていた。

しかも、何故か俺が変身時に良く使うポーズをしているじゃないか、何者だと思つて気を探してみると、義弟の悟飯だということがわかった。

何故か知らないけど『悟菜帝』だなんて名乗ってるし、終いには笑われて道路にビビ入れて怒ってるし……。

そんなんでいいのか正義のヒーロー……。

とりあえず悟飯、相手がビビつてそそくさと帰っていったのをドヤ顔で眺めてるのはやめような？

『悟菜帝』が何処かへと飛び去るのを見届けた俺は、後日悟飯を注意しようと思心しながら18号の待つ家へと帰っていくのだった。

ビーデル達を救え！赤龍帝と悟菜帝！

side 悟飯

「あああああつっ！なんだ悟飯その格好はあ!!」  
帰ってきた僕の格好を見て、母さんが絶叫します。

「お母さん気に入らないの？」

そんなに変かなあ…？カッコいいと思うんだけど…。

「まったくいくつになっただと思ってるだ、悟誠もそうだが、おめえ達そういうところは父さんにそっくりだな…」

そ、そうなのかなあ…。僕はただ悟誠兄さんに合わせて作ってもらっただけなんだけど…。

と、ここで別の声が聞こえてきました。

僕の弟、孫悟天です。

「母ちゃんただいまー！ん？うわあ！にいちちゃんかつこいいい！」

「そうか！悟天！」

孫悟天、父さんがセルとの戦いの後に残していった忘れ形見です。髪型は父さんそっくりです。父さんを小さくしたら悟天みたいになるんじゃないかと僕は考えてます。

翌日、僕はいつもより少し遅れて家を出ていました。

「じゃあ学校行ってきまーす！」



「にいちちゃんいつてらっしやい」

「悟飯、慌てずに行けよ？飛行機に気をつけるだぞ」  
そう言つて悟天と母さんが見送りに来てくれます。

「はいー」

僕は変身し、勢いよく空へと飛び上がるのでした。

side out

side 悟誠

悟飯転入二日目……。

俺は仕事で街を歩いていたんだ。

所謂パトロールつてやつだ。

けど、警官つて訳じゃねえから大つぴらには動けねえんだけど……。

そんな風でパトロールを続けていたところ、少し目を引く光景が写り込んできた。

「なんだ？事件か？」

騒ぎのある現場に近づくと警察が群れて何かをやっていた。  
事情を知るために周りの人に話を聞いてみる。

「すいません、この騒ぎはいつたい……」

「ああ、なんだかバスジャックらしい、老人達が乗るバスにハイジャック犯達が乗り込んできて身代金を要求してるんだと」

なるほど…バスジャックねえ…こりやまたあのじゃじゃ馬娘が

しやしやり出てくるかもな……。

とりあえず、依頼つて訳でもねえし、ここは様子を見とくか……。  
そうしてしばらく見守っていると、警官達が身代金をバスジャック  
犯達かに渡しているのが見えた。

『君達の要求どおり身代金は渡した！すぐに人質を解放したまえー  
!!』

「ハハハハツ馬鹿めえッ!!」

警官の言葉を嘲笑うように銃を乱射するハイジャック犯。

そのまま人質を解放することなくバスを走らせ始めてしまう。

やれやれ、この街は退屈しないな……。

そう思いつつも俺はその場から離れて飛び上がるとバスの後を  
追った。

「ドライブ！久々の出番だ！いくぞ！バランス・ブレイク 禁手！」

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!!』

『くあ…漸く俺を使う気になったか、相棒』

変身音の後にドライブから気だるそうな返事が帰ってくる。

「ああ、長いこと使つてなかったからな、身体慣らしといこうぜ！」

『そうだな…振るう相手に不満はあるが仕方あるまい…赤き龍帝の  
力、人間どもに見せてやろう！』

「ドライブ、それじゃあ悪役の親玉みたいだぞ？」

『なにっ!?!』

と、そんなやり取りをしていると一機の飛行機がバス経距離を積み  
ていくのが見えた。

「おーどうやらヒーローのお出ましようだぜ？」

『なんだ、また来たのかあの人間のじゃじゃ馬は……』

それに気づいてドライブも呆れた声を上げる……。

悟飯の姿はないか、仕方ない、アイツの邪魔にならない程度にない程度に援護してやるか。

はああ……まったく世話の焼ける……。

飛行機からバスの上に飛び乗ったある少女をみながら俺はどうするか考えるのだった。

side out

side 悟飯

学校を出てからしばらく飛んでいると一台の飛行機がバスに近づいているのが見えました。

お！あれだな？

ビーデルさんはどうするつもりなのかな？少し様子を見てみると、覚えのある気を感じたんです。

この気は…悟誠兄さん？

バスからもそう離れてない距離を付かず離れずの距離を保っているみたいだ……。

良く見るとバスに向けて光の線のようなものが時々飛んで行っていた。

僕は光の線が飛んできた方向に向かいました。すると……。

「よお、ニューヒーロー！遅かったな」

「やっぱり…」

そこには赤い鎧を着込んだ悟誠兄さんがいたんです。

「兄さん、こんなところで何してるんです？」

「何って、あのじゃじゃ馬の援護してんじゃねえか、あいつ一人じゃ見てて危なっかしくてよ…」

そう言っただけでまた気功弾のようなものを放つ兄さん。

それはバスの中で銃を構える者達の手から正確に銃を打ち緒とじていました。

「凄いや！あんなことが出来るなんて…」

僕がそう思っていると、不意に兄さんが呟きます。

「あ、やべ…」

「え？」

何が？と聞こうとしたところで僕は目を疑いました。

それはバスを運転していたハイジャック犯の一人がビードルさんにノックアウトされてしまい、人の手を離れて爆走を始めていたのです。

「まずい…このままじゃー」

すると不意に浮遊感を感じて下をみると、兄さんが僕を担いでいました。

「に、兄さん？なにを？」

すると兄さんは笑顔で…

「ほら、学友を助けてこい！」

「ブンツツ！」

そう言っつて僕を勢いよくぶん投げたのです！

「ちよっ!? あーもう! こうなったら!」

途中で武空術を発動させて直ぐ様バスとの距離を積めます。

そして、乗客達に衝撃が掛からないようにゆつくりとバスを受け止めるのでした。

「助けてくれてありがとう、あなたは?」

「私は! 悪を許さぬ正義の使者! 悟菜帝!」

決まった! かつこ良く決まったぞ!

「では、さらばビーデルさん」

そう言い残して僕はその場を飛び去るのだった。

兄さんに文句を言うために……。

「よっ! 上手くやったじゃないか悟菜帝」

「よっ! じゃないですよ! いきなり人をぶん投げて! 僕じゃなきや大惨事ですよ!」

まったく! さっきの兄さんには困ったものだよ……!

「ははは、悪い悪い! にしてもお前! ポージング下手くそだよなあ……」

「へ? ……そう?」

あれでも兄さんの真似してるだけなんだけど……。

「ああ、全くなってるない！あの蛙野郎以上になってない！」  
なので！と兄さんが続ける。

「俺が特訓をつけてやる！ついでに今まで鈍り切ったその身体も鍛えてやるから覚悟しとけよ」

「え…？」

「ええええええええええ!!」

広野に僕の絶叫が響き渡るのだった。



でした…………。

別の日…………。

「行つてきまーす!」

僕は学校に向かう為、いつものように家を出ます。

外に出てすぐ飛び上がり、正体がバレないように悟菜帝へと変身します。

「さて、出発だ!」

僕が速度を上げようとした時、声を掛けてくる物がいました。

「にいちやーん!!」

振り返ってみると、そこにいたのは筋斗雲に乗った悟天でした。

「おにいちやんいつてらっしやーい!」

「悟天、上手く筋斗雲に乗れるようになったなあ!」

「ははっおにいちやんもかっこいいよ!」

そうか、悟天も分かるか、このカツコよさが…………。

「へへっじゃあ行つてきまーす!」

「ばいばーい」

悟天に見送られて、僕はスピードを上げたのでした。



サタンシティの近くまで差し掛かった頃……。

「そういうえば、兄さんの内はこの辺りだったっけ、何処だったかな……」  
そうしてきよろきよろと見回す。すると……。

「頑張って来いよー!!」

兄さんが手を振っていました。

兄さん…… はい！頑張ってください！

心の中で返事をし、僕は手を振り返して学校の方へと飛んでいくの  
でした。

学校の近くに差し掛かった時でした。

「助かるなあ、この変身装置のおかげで遅刻の心配しなくていい  
し……。ん？あれは……」

ふと見ると近くを飛んでいく飛行機が目に残りました。

操縦席を見てみると、そこに乗っていたのは、ビーデルさんでした。

「ビーデルさんだ、このまま学校に行くのは不味いぞ。仕方ない  
や……」

正体がバレるわけにもいかないので、僕は一旦ビーデルさんを撒く  
ことにしました。

学校を通過し、そのまま飛び続けます。



「分かってくれりゃいい、じゃ！」

それだけ残して、僕は再び飛びあがり、学校へと向かったのです。

「……あれが、悟菜帝なのねって!?!いけない!学校！」

## 復活の戦士！用心棒赤龍帝！

side 悟誠

悟飯がオレンジスターハイスクールに通い出してから数日……。  
いつも通り俺は悟飯の様子を伺っていた。

『……なあ、相棒、まだ続けるのか？』

ドライグが不意に語りかけてくる。

恐らく、こうして見守り続けていることに関してだろう……。

「何言ってるんだよドライグ、悟飯だけじゃ心配だろ？いくらアイツが  
しつかりしていると言ってもアイツは普通の生活なんてのは送った  
ことがないんだ。本当なら近くまで言っ手助けしてやりたいくら  
いなんだからな？」

『うおおおおおおん!!誰かこのブラコンをどうにかしてくれえ  
!!』

誰がブラコンだ！俺は悟飯や悟天が可愛くて仕方がないだけだ！

《それを世間じゃブラコンツつうんだよ……生まれ変わり、後、龍帝サ  
マを泣かすんじゃないやねえ》

ツ！この声は！ジツじゃなくて、バーダックさん！

《おい、お前今またじいさんって呼びかけただろ？ぶちのめすぞ？》  
そんな訳ないじゃないっすか！気のせいですよ！気のせい！

《フン、どうだかな……ったく、オラ、泣くなよ赤龍帝さんよ》

『うおおおおおおん!!うおおおおおおおおん!!』

尚も泣き続けるドライグ、悪かったって！

《こりや駄目だ…しばらく離れるぞ》

え？あ、はい……………。

そう言つてドライグとバーダックさんの声が遠くなつていく。

恐らくドライグを宥めるために連れて行つてくれたのだらう……………。

じ、バーダックさん、申し訳ないです……………。

内心で今頃は渋りながらもドライグを慰めているだろうバーダックさんに申し訳なさを感じながら俺は悟飯の様子見に戻るのだった。

しばらく見守っていると、今日の授業も終わったのか、悟飯が校舎から出てきた。

今日もなんとか無事に終えたみたいだな。

途中、かなり危なっかしかつたけど…………と、その時の事を思い出して苦笑していると……………。

「ファンファンファンファンツ!!」

不意にサイレンの音が聞こえ、振り返ってみると、暴走車をパトカーが追いかけてまわっていた。

必死に並走するパトカーだったが、暴走車の体当たりを喰らい、大きくバランスを崩し、道路から外れて建物の方へと突っ込んでいく。

「あぶねえ!!」

俺は慌てて飛び出すと、パトカーの前に立つと、手を伸ばして、真正面から止めに入る。

【ギギギギギギギイツッ！】

そんな轟音がして、車体が大きく傾きながらも止まる。ふう、なんとか激突だけは避けられたか……。

乗り合わせていた警官たちは気絶しているようで、降りてこない。このままにしておいてもいけねえし、出しといてやるか。

助太刀するってことで、今回は警察に報酬を出してもらおうとすつか！

依頼書と報酬金を書いた紙をパトカーに張り付けておく。

さて、んじやそろそろ。「おじさん達、乱暴な運転はいけないよん？この声は……。

見ると、そこには暴走車に乗っていたであろう男達に物申す悟飯の姿があった。

その声に反応した二人は悟飯に絡んでいく。

辞めときやいいのに……と思いつつながら俺はため息を吐く。

男達の態度に一步も引かない悟飯。その態度がイラついたのか、男の一人が悟飯に殴り掛かった。

しかし、そこは悟飯、男のパンチを難なく躲しサツと距離を取る。

これ以上は俺の仕事が無くなっちゃうな……。

そう思い、俺はその場に出ていくのだった。

side out

side 悟飯

車を暴走させていたおじさん達を注意したところ、いきなり殴りかかってきた一人の男の人。

このくらいのパンチなら遅すぎて簡単に避けられる。

とりあえず、懲らしめてやろうと一旦距離を取る。

「しようがないな…」

さっさと終わらせようと構えた時、不意に割って入ってくる者がいた。

「おいおい、いい大人が二人して高校生相手に何やってんだよ」

そうして声の主は僕の前に立った。

誰かと思ってみてみると、それは悟誠兄さんその人であった。

「に、兄さん!？」

「おお、悟飯危ない所だったな、後は兄ちゃんに任せとけ」

「へ？あ、はい！」

サツと下がる悟飯。

それを確認し、俺は男達に向き直る。

「いい度胸じゃねえか兄ちゃん、弟の前でカツコつけるつもりか？」

「いや、元々これは仕事だからな、ほら、腕に自信があるんだろ？どつからでもかかってこいよ」

そこまで言って、ふと視線を感じた。

チラと見てみると、そこにはおさげの女子がこちらを見ていた。

アイツって確か、今朝、悟飯を追いかけまわしてたじゃじゃ馬だよな？

なんでここにいるんだ？

そんなことを思考していると、迫ってくる腕を捉えた。

俺は瞬時に飛びあがり、空中に避難する。

パンチを易ともあつさり躲かれた男は身体をよろめかせていた。

「ツ！ど、何処に消えやがった！」

男からすりや、相手がいきなり消えたように見えてることだろう。

「こつちだデカブツ！オラツ」

背後に降り立ち、鋭い月をお見舞いする。

「なっ…！?ぐはあっ…！」

殴り飛ばされ倒れる男。

「あ、アニキ… ツ!!」

慌てたように男に駆け寄るもう一人の男。

「文句があるなら俺の所にこい！いつでも相手してやるよ」

「ぐっ…！お、覚えてやがれ!!」

男はアニキとよばれた男を運びながら乗っていた車に乗り込見逃げていった。

ふう、何とか終わったな。さてと、帰るか…。

そうして帰ろうとした時…。

「待ちなさい！」

あのじやじや馬が声を掛けてきた。

「あ？なんか用か？」

「アンタ、いったい何者？」

何者、ねえ… まあ、適当でいいか。

「別に、ただのしがない用心棒だよ」

それだけ言って俺はその場を後にするのだった。



## 復讐のレッドシャーク！二人を救え孫兄弟！

side 悟誠

じやじや馬に絡まれた翌日、俺は依頼の報酬を払うと警察から電話を受け報酬を受け取りに警察署へと向かっていた。

「今回はたんまり貰えたなあ…ま、18号借らしたらまだまだ少ないんだろうけど…」

そんな事を一人呟きながら帰路についていると、不意にドライブが声を掛けてくる。

『相棒、どうやらあの娘がまた何かやっているようだぞ？』

あのじやじや馬が？今度は何が起きたってんだ？

『気になるなら見に行けばどうだ？』

いや、あんま遅くなると18号が怖いし……。

『赤龍帝ともあろうものが女房の一人に怖がるのか…』

そうは言うけどドライブ、18号の怖さはお前も良く知ってんだろ？

『いや、まあ…分からなくはないが…それでも複雑だぞ…』

そんなやり取りをしていると、その現場らしきものが目に入った。中ではあのじやじや馬が我体の良い男と殴りあっていた。

少し離れた所ではこの街の市長らしきおっさんが他のチンピラ達に拘束されている。

なるほどな、状況から察するに市長を人質に誰かを誘いだそうって寸法な訳だ。

しばらく見ていると、チンピラの一人が俺を見つけて叫んだ。

「あーっ！アイツだ！ボス！前に俺達をやりやがった奴です！」

その言葉に戦っていた二人も動きを止め俺の方に向く。

「へえ、お前か、俺のかわいい部下をやりやがったのは、丁度良い、ミスター・サタンの娘の次はお前をぶちのめしてやる」

「ああつ！アンター！あの時の！何しに来たのよ！」  
ビビッテ  
じやじや馬も俺に気がつき、即座に噛みついてくる。

「なにつて、ただの観戦だけど？つつか苦戦してるじゃねえか、手え貸してやろうか？」

「ふぎけないで！アンタの手助けなんかいらさないわ！私の仕事の邪魔しないでよね！」

仕事の邪魔…ね、それはどつちがなんだか……。

「そんなこと言っつてやられたらどうすんだ？お前がやられたらそこの市長だつて無事じゃ済まないぜ？」

「私がコイツなんかには負けると思っつてんの？馬鹿にしないでよ！」

仕方ない、しばらく好きにさせとくか… …

俺が内心で呆れていると学友の危機に駆けつけるようにもう一人現れた。

誰かと思ひ、見てみると、そこにいたのはあの緑色の鎧？スーツ？姿の悟飯であつた。

「何をしてるんだ！お前達！」

「「「つ…！」「」」」

他のやつらが驚くなか、俺はただ一人呆れていた。  
いや、お前の方がなにしてんだよ……。

『相棒も同じような格好をして戦っているじゃないか』

ドライブ、それを言ったらそれはお前が着せてるようなもんだぜ？

『なっ…俺の所為にする気か!?!』

そんなやり取りをドライブとしていると、悟飯が俺にしか聞こえないくらいの小さな声で話しかけてきた。

『どうして兄さんがここにいるんですか!?!』

『どうしてってただの成り行きとしか…』

『これじゃあ僕が来た意味ないじゃないですかっ』

『そんなこと言われてもな…あ、じゃあこうしようぜ、俺がお前に協力するフリをして奴等を倒す。んで市長を助けるってのは』

『あっ…いいですねそれ！それで行きましょう！』

父さんやベジータさんくらいじゃなきや気付かれないくらいの高速のやり取りで俺達は段取りを決め、動き出す。

「お前は！悟菜帝ツ！ハッ！丁度良い、悟菜帝、ちよつとそこの悪党どもを懲らしめるの手伝えよ」

「キミは…確かこの町で用心棒をしている…分かった！この悟菜帝！悪は絶対許せない！キミに協力しようじゃないか」

兄弟ならではの絶妙な演技（迫真）に周りは疑うことなく激昂した。

「悟菜帝だど？ふざけやがって！二人まとめてやつちまえ！」

一斉に襲いかかってくるチンピラどもに俺達は一撃のもとに沈めていく。

殺さないように気をつけつつ意識を刈り取っていくだけだ。

悟飯の方も、上手く加減をしながらチンピラを気絶させていた。

俺はその間に市長の元に掛けよる。

「大丈夫か？市長さん」

「あ、ああ…ありがとう…」

俺が拘束を解こうとしていると、不意に現れたチンピラの一人がバズーカ砲を構えてこっちに向けてぶっぱなして来やがった！

「ひいいい…っ！」

顔を真っ青に染める市長を他所に俺は対して気にもせず拘束を解く為、手を緩めない。

迫りくるバズーカ弾、だがそれは俺達に届くことはなかった。

「させるわけがないだろう！」

そう、悟飯こと、悟菜帝がその弾を気合いで受け止めていたのだから。

気合いで受け止めた弾はゆっくりと押し戻されていき、発射したやつのもとまで行って爆発した。

因みに発射したやつは直ぐ様逃げ出したが、爆風で吹き飛ばされていた。

「よし、これでいい」

俺は市長の拘束を解き終え、立ち上がる。  
すると、ある声が聞こえてくるのだった。

side out

side 悟菜帝（悟飯）

「このアマ…っ！」  
協力者<sup>兄さん</sup>と共に奴等を倒した僕が見たのは、ビーデルさんが大ピンチの場面でした。

ビーデルさんは男の巨体に捕まり、首を絞められていました。

「あぐっ…！」

不味い！あのままじゃビーデルさんが！

「ビーデルさッ…っつて、ええ…？」

急いで助けに向かおうとした時の事でした。

僕が駆け出したと思った次の瞬間には兄さんが男の後ろに現れて勢い良く肘打ちを咬ましていたんだ。

ビーデルさんを離して白目を向きながら倒れる大男…。

それを尻目に兄さんはやれやれと言った表情で軽く手を叩いているのでした。

s i d e o u t

s i d e 悟誠

あその後、男達は無事警察に逮捕されて連行されていった。

俺は市長から助けて貰ったお礼を依頼として報酬をだしてもらったことになった。

その様を見送って俺はうんうんと頷いていると、アイツ、ビーデルが声をかけてきた。

「ねえ、ちよつといい」

「ん？なんだよ？」

「……さつきは助けてくれてありがと、正直、ちよつと危なかったの」  
頬を軽く染めて礼を言ってくるビーデル。

なんだ、意外と可愛いところもあるんじゃないかねえかと感心する。

「別にいいって、大した怪我もなくて良かったよ、じゃー！」  
それだけ言っさつきと帰ろうとした。その時だった。

「へえ…帰りが遅いと思ったらこんなところでナンパ何てしてたのか  
い……」

そこには顔は笑っているのに目が据わっている何やら黒いオーラ  
のようなものが幻視できる18号が立っていた。

あ…これは俺死んだな……

その日街に阿修羅が降臨した。

---

side out

side 三人称

後にビーデルや街の人々は語る……。

男をしばき倒す18号の姿は、まさしく阿修羅そのものであった…  
と……。

## 密漁者に拐われた!? チビを救え悟菜帝!

side 悟誠

「え？チビがいなくなつた…？」

「うん、誠兄ちゃん何か知らない？」

そう話すのは弟の悟天だ。

現在俺達は、実家である孫家に夕飯をごちそうになり帰ってきている。

どうして急に帰ってきているのかというと、母さんに呼ばれたからだったりする。

母さん曰く、『家を出たつきり一度も顔を見せねえ息子はいねえだぞ！』とのことらしい

まあ、母さんの事だから、淋しいからたまには顔を見せろつてとこなんだろうけど……。

と、それよりも今は悟天の問いに答えてやらなくちゃな。

「うーん…いや、そんな話は初めて聞いたぞ？トトたちはどうしてるんだ？」

そう、今度は悟飯に聞いてみる。

「ええ、僕達も今朝、巢の様子を見に行ってきたんですが。チビどころか、トトたちの姿も見当たらなかつたんです。それどころか、巢の様子を見る限り、数日帰って来てないみたいで…。」

巢にも数日帰ってきていない？

となると、チビを探して回つて可能性が高そうだな……。

そんな風に考えていると、不意に18号が声をかけてくる。

「なあ、盛り上がっているとこ悪いけど、その話に出てくるそのチビつての、あの子の事じゃないのかい？」

「え？なっ…!?」

その言葉に俺は思考を止め、18号の見ている先を目で追い、それを見て絶句する。

そこには、ステージのような場所に立たされ、目の前の男に鞭で脅され脅えているちっこい怪獣の姿がテレビに映し出されていたのだから……。

「ッ… あーっ！チビだ！」

テレビを見てそう叫んだ悟天の声が、俺にはやたらと大きく聞こえていた。

『…クエエ…クエエ…』

『愛嬌たっぷりの姿に、観客も大喜びです』

映像の中でチビが怯えた声を上げながら芸をさせられているをナレーターが場違いなナレーションを読み上げている。

「何が愛嬌たっぷりだ…怯えているでねえか」

晩御飯の準備をしていた母さんが呆れたように呟く。

「きつと、トト達夫婦が居ない間に拐われたんだ。でなきやトト達が黙っているわけないよ、兄さんもそう思いませんか？」

そう、不意に悟飯が問いかけてくる。

「え…？ああ、まず間違いないだろうな…」

「酷い事するやついるもんだね、親の居ない間に子を拐うなんて…」



18号が心底気分が悪そうに話す。

「チビが可哀想だよ！誠兄ちゃん、助けてやってよ！」

悟天が泣きそうな顔でそう話しかけてくる。

「あ、いや、しかしな…」

こどもテレビで騒がれてたんじや下手に動けねえし……。

そこに悟飯が声をかけてくる。

「兄さん。僕からもお願いします。僕も手伝いますから、チビを助けてやりましょうよ」

「悟誠、何渋ってるだ。可愛い弟達の頼みだべ、聞いてやらないで何が兄ちゃんだ」

悟飯の言葉に畳み掛けるように母さんが話しかけてくる。

助けてやりたいのは俺も同じだ……。

けど、状況が状況だけに下手に動くのは不味い……。

「悟誠、家族がここまで言ってるんだ。やってやったらどうなんだい？」

18号までも…逃げ道を塞がれた感が半端ないな……。

「……分かったやる！やればいいんだろ？チビ一匹助けるくらい朝飯前だ！」

最早半ばヤケに近い感じでそう返す。

「…ッ！ありがとう！誠兄ちゃん！」

つたく…けど、受けちまった以上はやり遂げねえとな……。

俺はチビをどう助けるかの計画を考え始めるのだった。

side out

side 悟飯

翌日、僕は兄さんと共に、チビの現状を知るため、件のサーカス小屋に来ました。

「ここかチビがいるのは…」

「凄い人ですね。兄さん、とにかく中に入りましょう」

「あ、ああ、そうだな」

チビ、待つてろよ？すぐ助けてやるからな！

小屋に入って暫く、サーカスを見ていた時でした。

「さあ！本日のメインイベント！皆さんお待ちかね！あの怪獣の子供の登場です!!」

「ワアアアアアアアアアツツ!!」

たちまち上がる大歓声。

そんな中、チビがステージに連れてこられてきた。

「クエエ…」

チビ…やっぱり怯えてる…すぐに助けてやるからな！

とりあえず、あのテレビに出てたあの人をお願いしてみるか。

そうして、僕が席を立とうとしたその時だった。

「待て悟飯、何処に行くつもりだ？まだ途中だぞ？」

兄さんが腕を掴んでそれを止めてきました。

「決まっていますよ、あの人に頼んでチビを返してもらいます」

しかし兄さんは首を降り……。

「止めとけよ…アイツの顔見てみろ…説得したところでアイツが素直に頷くとは思えないぜ？」

「けどー！」

早く助けてやらなきやチビが可哀想じゃないですか！

「そんなに焦るなって…俺に考えがある」

そう言った兄さんは不適に笑んでいた。

side out

side 悟誠

ショーを見終わり、俺達小屋を出ていた。

けど、どうすっかな……。

悟飯にはああ言ったものの、実はなにも浮かんでいなかったりする。

『浮かんでいなかったのか、相棒……』

『んなもんサラっちまえば良いじゃねえか』

いやじ…バードックさん!?何言ってるんすか!!んなことするわけ無いでしょう!?

なるべく穏便に……。

『ええい!まだるっこしい!!変われ!』

へ…?あつ!ちよまつ…!!

そこで身体の支配権を奪われた俺は、深い眠りの中へと落ちていくのだった。

side out

---

sideバードック(悟誠)

「つたくよお…面倒臭えんだよ…生まれ変わりのやることあ…」

「兄さん?どうかしたんですか?」

おっと…息子がいたのを忘れてたぜ。

「なんでもねえよ、オラ!チビ助けんだろ?着いてこいよ」

「え…?あ、はい!」

よし…さあ、久々にサイヤ人らしく働いてみるか!

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!!  
ん?』

『それくらい付けておけ、それは元々相棒の身体なんだからな…』  
チツ…しゃあねえな…

「おい、悟飯、おめえも変装しとけ」

「変装じゃないですよ！変身です!!」

どっちでもいいだろ、ンなもん……。

「何でもいい…さっさとあのチビ拐うぞ…」

コイツの相手は疲れそうだ……。

side out

side 三人称

「どうやら、ここらしいな……」

変身した悟飯はサーカス小屋の裏手に来ていた。

「…ッ！チビ…」

サーカス小屋の従業員がその場を離れるのを待ち、悟菜帝がチビの入れられている檻に近づく。

「クエエ…」

突然の訪問者に怯えるチビ。

「チビ、安心おし。僕だよ、悟飯だよ」

「クエエ？」

悟飯の言葉がわかるのか、怯えなくなるチビ。

それを見て檻を抉じ開け中へと侵入する悟菜帝。

「もう大丈夫だ、さあ、お父さん達のところへ帰ろう」

そう言つてチビを背負うと檻を出…ようとしたところ……。

「誰だてめえは！」

そこで従業員の一人に見つかつてしまった！

「私は正義の皇帝だ！」

「なに？正義の皇も…がっ…!!」

最後まで言い切る前に事切れたように倒れる従業員の男。

「…てめえらとは、出来が違うんだよデキが…」

そう言つて、男の背後から現れたのは、赤龍帝となつたバーダック  
こと、悟誠だ。

悟菜帝が物言いたげに赤龍帝を見ていると……。

「気絶させたただけだ…。オラ、さつさと行くぞ…」

「あつ…待つてください！」

先に飛び立った赤龍帝を追つて慌てて悟菜帝も飛び立つのだった。

## 因縁の再開！ビーデルVS龍兄弟！

side 悟飯

チビを助け出した僕達は巢へと送り返してやるために町の空を飛んでいた……のだが。

「クエエ…クエエツ!!」

突然、僕が背負っていたチビが暴れだしてしまったんです。

「うわっ…！うわわあ…！」

落とさない用にバランスをとるが、チビが背中で暴れていて上手く飛べない。

「おい…何やってんだ、早くそのチビ連れてくぞ」

いつ頃からか裏返っていた兄さんがそれを見て呆れたように催促してくる。

「そ、それが…どうも飛ぶのが恐いらしくて…」

「はあ？ソイツは翼龍の子供だろ、なんで怖がってんだよ」

「分かりません…けど、これじゃあ危なくてまともに移動なんてできませんよ」

「チツ…めんどくせえな…ソイツぶん殴って気絶させてきやあいだろうが」

なにやら物騒な事を言い出した裏の兄さん。

「だ、ダメですよ！そんなことしたら人間嫌いになっちゃいますよ！」

「チツ…ジョーダンだったの。めんどくせえが、走って行くしかねえか」

「どうしてこう、裏の兄さんは物騒な考え方に走りたがるんだろう…。」

「あまり話したことなかったから忘れかけてたけど、兄さんの中にはもう一人の人格？があるらしい。」

「それが時折あして表に現れるんだとか…。」

「前に話したのは人造人間と戦ってた時だったっけ。」

「表はスケベで裏は物騒だなんて、同じく兄さんの中で中で相手をしてるドライグさんも大変だ…。」

『分かってくれるのはお前だけだ孫悟飯!!うおおおん!!』

「うるせえな…孫と会話できるからっていちいち泣いてんじやねえよドライグ!」

『お前達には分からないのだ!この俺の気持ちと苦労が!!』

「ドライグさん、強く生きてください…。」

「そうして僕達が地上に降りた直後、後方からパトカーが数台追いかけてきた。」

「どうやらサーカスの支配人に通報されたらしい。」

『いくら悟菜帝といえど、誘拐は許されん!その怪獣を渡しなさい!』

「スピーカー越しに警告してくる警察に裏の兄さんが鬱陶しそうに眉をしかめる。」

「めんどくせえな、もう蹴散らしちまうか?」

「その言葉に僕は慌てて止めに入る。」

「駄目ですよ!そんなことしたらこの街にいらなくなりますって!」



「チツ…何からなにまでめんどくせえな…おい、逃げんぞ！」

「…はいー！」

返事をして、僕達は勢いよく駆け出した。

しばらく警察との逃走劇を繰り返していると、不意に見覚えのある飛行機が僕達の横を通りすぎ、立ち塞がるように着陸した。

「その子供を返しなさい、悟菜帝に赤龍帝」

そこから降りてきたのはいつものごとくビーデルさんだ。

「どういうつもりか知らないけど、正義の味方が聞いて呆れるわね…」  
ビーデルさんが何かを喋っている最中だというのに、裏の兄さんは無視して僕に問いかけてくる。

「おい、なんだあのガキは？」

『ビーデルさんですよ、僕のクラスメイトでミスターサタンの娘さんなんです。結構強いらしいですよ』

僕は兄さんにだけ聞こえるように小声で話す。

「は？あんな雑魚がか？」

しかし裏の兄さんは気にした風もなく普通にそう話す。

ああ…言っちゃった…。

「…誰が雑魚ですって？」

すっかりビーデルさんにも聞こえていたようで顔をしかめている。

ああ、あれは完全に怒ってるよ……。

「お前以外に誰がいるってんだよ雑魚娘」

裏の兄さん：頼むからそれ以上怒らせないで！

「……良い度胸じゃない、雑魚かどうか確かめるといいわ！」

そう言っつてビーデルさんは何故か僕の方を狙ってきた。

なんで!?!僕何も言っつてないじゃないか！

しかし、そんなことを言っつている場合じゃない！

「赤龍帝…この子を頼むー！」

咄嗟に裏の兄さんにチビを投げ渡す。

「おっと、チツ…仕方ねえな…」

裏の兄さんはそう言っつてとてつもなく面倒臭そうにチビを抱き止めると、そのまま駆け出した。

「あつー待ちなさいー！」

ビーデルさんも咄嗟に攻撃を止めて兄さんを追っつて駆け出した。

ふう…。とりあえず良かった…。

一つため息をつくつと、僕も後を追っつて走り出した。

一息で兄さん達に追い付くと、並ぶように走る。

「待ちなさい!!逃がさないわよー！」

後ろからビーデルさんの声や警察官の叫びが聞こえてくるがそれは気にして余裕はない。

だが、兄さんは余裕のようで敢えてビーデルさん達が追い付けるように走っている。

「ごんのっ!!」

ビーデルさんの手が兄さんに届こうとした時だった。

「ほらよ、パスだ悟菜帝」

不意にチビを投げ渡してきた。

「おわっとなっとなっとなっ……」

慌ててチビを抱き止めると、直ぐ様駆け出す。

「あつまた！待ちなさい！」

今度は僕を追いかけて走り出したビーデルさん。

裏の兄さん……これはビーデルさん達で遊んでるな？

なんでそんなことをするんだ。それどころじゃないのに……

そんなことを考えながら走っていた時だった。

「クエエエエエエ……ッ!!クエエエエエエ……ッ!!」

何度も投げ飛ばされた所為か、チビが大声で鳴き始めてしまった。

するとその直後、黒い大きな影が二つ僕達の上を通りすぎた。

「しまった……」

恐れていた事が起きてしまった……

トト達夫婦がチビの鳴き声を聞き付けて待ちまでやって来てしまったのだ。

「おいおい…親まで来ちまったぞ…どうすんだコレ…」  
裏の兄さんが呟く。

「とにかく今は二匹を落ち着かせるしかないですよ」

「……アレがそう簡単に落ち着くと思うか？」

兄さんがトト達を見て言う。

僕も二匹を見てみる。

「グルオオオオオツツ!!」

「グルアアアアアツツ!!」

駄目だ、怒り狂っている。

子供を拐われたんだから当然と言えば当然だけど、ここは不味い!

「グルオオオオオツツ!!」

「グルアアアアアツツ!!」

とにかくチビを二匹に返さなくちゃ!

「兄さん、カカの足止めをお願いできませんか？」

「あ?構わねえが、何をするつもりだ?」

「トトにチビを返してきます。そうすれば二匹も大人しくなるはずで  
す」

その前にビーデルさんを説得しなくちゃ……。

「……分かった、あまり気は乗らねえがやってやる」

「！……ありがとうございます」

「チツ…早くしろよ?」

そういうと裏の兄さんはカカを足止めするために飛び上がった。

「ビーデルさん、分かってください!あの二匹は子供を取り返しに來ただけなんだ!チビを返せば二匹も大人しくなるはずだ、だから邪魔をしないでほしい、頼む!」

「え、ええ…」

良かった、なんとかわかってくれたみたいだ。

「一先ず、チビをお願いします」

そう言っつてビーデルさんにチビを渡すと、僕もトトを落ち着かせるために飛び上がった。

「え…ちよつと!」

下でビーデルさんが何か言っているがそんなことを気にしてる余裕はない。

トトの前に飛び上がると叫ぶ。

「落ち着くんだトト!さあ、チビは返すぞ!」

「グルオオオオオツツ!!」

駄目だ…怒り狂っていて僕の声が届いてない。

「アンタ達、あの怪獣と知り合いなの?」

「ああ、小さい頃から良く遊んでたんだ。変身していても僕だとわかるはずだ」

その直後、トトが僕の横を通りすぎてチビを抱えているビーデルさ

んめがけて急降下していった。

「危ない！ビーデルさん！」

瞬時にビーデルさん達の前に移動し、その場に伏せさせることでトの攻撃を回避する。

運悪くトトの爪が僕の頬を掠めて傷を作っていく。

「トト！止めるんだ！僕だよ僕は悟h…あ…」

不味い、この場にはビーデルさんもいたんだった……。

「あ…い、いや…」

ビーデルさんはその言葉を聞き逃すことなく訪ねてくる。

「ひよつとしてあなた、今悟飯って、言おうとしたんじゃ…」

僕の肩に手を置き、逃がすまいと力をいれるビーデルさん。

「ビ…ビーデルさん！退くんだ！」

抵抗してみるも、ビーデルさんは手を離してくれない！

「いやよ、やっぱりあなた孫悟飯くんなんですよ？どうなのよ！ハッ

キリするまで離れないわ！」

クソツこんなときに…！

「グルオオオオオツツ!!」

不味い！トトの追撃がくる！どうしたら……！

どうしようもなくなりかけた、その時…！

「グ…グルオオオオオ…」

「グルアアアア…」

「クエエ…」

三匹が突然空を見つめて怯えだした。

そこには赤く燃える炎のような龍がいた。

『雑魚共…こんなところで何をしている？』

その龍…いや、ドライグさんは僕達の言葉を話しているのにトト達も何を言っているのか分かったようだ。

怯えたようにドライグさんを見ている。

『用が済んだのならさっさと去れ。ここはお前達が居ていい場所じゃない。おい、悟菜帝とやら、そのガキを返してやれ』

「は、はい！ビーデルさん」

「う、うん…」

ドライグさんが上手く話を合わせてくれているのは正直助かるな…。

ビーデルさんからチビを預かり怯えるトト達のところまで連れていく。

「さあ、トト、カカ、もう大丈夫だ。僕も着いていくから一緒に帰ろう」

「クルオオオ…」

「クルアアア…」

「クエエ…」

トト達も納得したらしい。

「ビーデルさん、僕はこの子供達を送っていきますから、後の事は頼みます」

「え、ええ…」

ドライブさんはいつの間にか居なくなっていた。  
きつと兄さん共々何処かへ移動したのだろう。  
そんなことを考えながら未だ怯える三匹に寄り添いながら僕は巢  
へと送って行くのだった。

---

翌朝、僕が寝坊して急いで学校に向かっていた……。

「ヤバイヤバイ遅刻だ……！」

慌てて僕が走っていると、不意に声をかけられる。

「おはよう、孫悟飯くん」

その声に振り向けばそこにはビーデルさんが待ち構えていた。

「あ、おはようございますビーデルさん」

こんな時間なのにここにいてもいいのかな……。

そんなことを考えていると、ビーデルさんは空いていたロッカーを  
閉めてこう言った。

「昨日はありがとう」

ニコリと笑みを乗せて言われたその言葉に僕はなんの疑いもなく  
答えてしまった。

「いや、ビーデルさんも無事で良かった……あ」

そこまで言っ僕は自分の過ちに気が付いた。

気がついてしまった……。



不意に延びてくるビーデルさんの手が頬の絆創膏を剥がしとった。

「やっぱりアンタが悟菜帝だったのね、孫悟飯くん」

「し、しまった…：せっかくあんな完璧に変装してたのに…」

僕は結局自分で自分の秘密をバラしてしまい、絶句するのだった  
……。

参加者続々！天下一武道会再開！

side 悟飯

「なんでわざわざそんなおかしな格好してるのよ」  
ビーデルさんが不思議そうに問い掛けてくる。

「い…いえ…その…。仲間の皆が普通に暮らしたいなら強いってことバレちゃいけないって…。だから…」

「ふうん……」

興味無さそうにそう呟くビーデルさん。  
僕は何を聞かれるか気が気じゃありません……。

「ねえ、金色の戦士もあなたなんですよ？」

「い、いえ!!あ、あれは違いますよ!」

「……ほんとかしら……」

「ほっ…ほんとですよ……!」

そのことだけは絶対にバレちゃいけない……!!

「ふうん……まあいいけど…あっそういえば!」

そこでふと思いついたようにビーデルさんが話す。

「あの赤龍帝って何者なの?あなたの知り合い?」

えっ…?!?!?!こ、ここで兄さんの話が…?

と、とにかく上手く誤魔化すしかないよな……。

「い、いや、僕もよく知らなくて…サタンシティの用心棒ってことくら

いしか……」

「そのくらい私も知ってるわよ、神出鬼没で何処に現れるか分からないって事もね」

そ、そんなふうに言われてるのか、兄さん……。

「前にあなたと話してたから知り合いなのかと思ったんだけど……そこんどこどうなの？」

な、なんとかバレないようにしなくちゃ……。

「い……いや、あの時は目的が一緒だったから協力してただけだから僕もよく分からないんです……」

「……あつそ、それよりさ、一ヶ月後の天下一武道会。あんたも出るんでしょ？」

「えっ!?……天下一武道会……!!」

そんなの初耳だよ!?

「知らないの? 格闘技のチャンピオンを決める大会で久し振りに復活するのよ」

「私のパパが前大会チャンピオンで、その前が、顔は知らないけど孫悟空っていう謎の男……」

と、父さんが……!? そういえば母さんが言っていたような……。

「へ……へえ……」

「あなたと同じ名字よね? 今時珍しいわ、名字と名前と別れてるのは……。私、その孫悟空っていう男は多分、あんたのパパだと思うの……どうっ?」

「いつ…!?そ…その……」

い、色々と鋭いなあ〜この子……。

「やっぱりね……」

そんなことよりとばかりにビーデルさんは口を開く。

「…で、どうするの?もちろん出るんでしょ!?天下第一武道会」

「前チャンピオンの子供とその前のチャンピオンの子供が戦うことになつたら絶対に面白いと思うけど」

天下第一武道会かあ…個人的には遠慮しておきたいし……。

「い、いや…僕は遠慮しておくよ!!そういうの余り興味ないし…!!」

「出なきやバラすわよ?みんなに。孫悟飯くんが悟菜帝の正体だつて!」

「ええっ!!そっそんなの…!!」

その脅しは卑怯じゃないか……!?

「いいじゃないの、悟菜帝で出場すれば分かんないんだし」

「だ…だけど…」

「バラされたいの?」

うっ……それを出されると強く言えない……。

「わ……わかりました……出場しますよ…」

困ったことになったなあ……。

「やったあ、きまりね!!みんな弱そうだから張り合いのある相手が欲しかったのよ!!」

「は、はあ…」

参ったなあ…おかしなことになっちゃった……。

そう頭を悩ませながらも僕は学校へと戻っていくのだった。

学校が終わり、僕はカプセルコーポレーションでブルマさんにその事を相談しに向かったんです。

「へえ〜!!出場するんだ!!今度の天下一武道会、なんで？」

『悟飯くん戦うの好きじゃなかったんじゃなかったっけ?』とブルマさんが不思議そうに話す。

「いやあ…クラスメイトにあのミスター・サタンの娘さんがいまして…」

それを聞いたブルマさんが驚いたように話します。

「ミスター・サタン!?えっミスター・サタンってセルと戦ったときチロロチョコジャマしてたヤツでしょ?格闘技の世界チャンピオンの…その娘がクラスメイトなんだー!!」

ジャマしてたって…まあ、そう言われればそうかもしれないけど……。

「ええ、でも結構良い子なんですよ。僕と一緒に、悪いヤツは放っておけないタイプで…。でもその子に僕の変身がバレちゃったんです…声とかで…で、天下一武道会に出場しないと正体をバラすって言われちゃって…」

「ドジね〜…しっかりしてるように見えてもそういうところはお父さんの血を受け継いでんのね…」

それで?とブルマさんはタバコを啜えると続ける。

「…で、声も変えられるようにヘルメットを改造して欲しいわけ?」

「いえ、そうじゃなくて…。天下一武道会ではヘルメットとかプロテクターなどの装備をつけてちゃダメらしいんですよ…。だからこのヘルメットの代わりになるものが何かないかなと思ひまして…」  
ふんふんと、ブルマさんが首肯く。

「ようするに、ダメージをうんと減らしちゃうようなものをつけてちやダメってことね…。どってことないじゃない!悟飯くんだってバレなきやいいんでしょ?」

少し待ってなさいと言って、ブルマさんが奥の部屋に消えると、少して、タオルとサングラスを持って帰ってきました。

それを僕の頭に巻き付けてサングラスを着けてくれます。

「おおっ!なるほど!!!こんな簡単なことで良かったんだ!!!」

隣で呆然と見ているトランクスくんに聞いてみる。

「どお!?トランクスくん!カッコいいだろ——!」

「ノーコメント……」

あれ?なんだか思ってた反応と違うな……

「でもさあ、どんなに手を抜いてもぶつちぎりで優勝するのが分かってちやつまんないわよね…」

「ソイツはどうかな?」

ブルマさんの言葉に別の人の声が聞こえてきました。

そちらを見るとそこにはタンクトップ姿のベジータさんが……。

「…そのなんとかって大会、貴様が出るなら俺も出る」

「え!？」

べ、ベジータさんが天下一武道会に…？

「あの時は大きな力の差があったが、今はどうかかな？ 貴様が平和にうかれている間も、俺はトレーニングを続けていた」

「……………」

働かなくて良いのかな…この人……。

「そう！ ぜんっぜん働かないのよ！ このひと、あんたのお父さんと一緒！ サイヤ人って働かないのかしら」

『悟誠くんはちゃんと働いてんのにその親どもときたら…』と、ブルマさんの愚痴にもベジータさんはフンと鼻をならすだけでなにも言いません……。

「すごいや!! お父さんと悟飯さんが戦うの!？」

トランクスキュンの興奮した声とは別に、すごく懐かしい人の声が聞こえてきました。

《オラも出るぞ!!》

この声っ…もしかして…!!!

「お…お父さん…お父さんの声だ…!!」

聞き間違える筈のないその声は間違いなく僕の父親、孫悟空のものでした。

「お父さん!!! そうでしょ!？」

「なにっ!! カカロット…!？」

《そうだ! 久しぶりだな、みんな》

生きていた頃と変わらない元気そうな話し声に安堵しつつも僕は喜びを隠せません。

「お元気でしたか!? お父さんっ」

「……??」

隣では何がなんだか分からないトランクスくんが疑問符を頭に浮かべてキョトンとしています。

《うん… まあ元気といや元気だったかな… 死んでっけど…》

困惑したような声が返ってきます。

「ほんとに…ほんとに天下一武道会に来られるんですか!？」

《ああ! 占いババに頼んで、たった一日だけ戻れる日はその日にする! 悟飯もベジータも、多分だけど悟誠も出るんだろ!! オラも出るさ!!》

「やったあ!!! バンザーーイ!!!」

「……だれ?」

トランクスくんは小さかったから覚えてないよなあ……。

「楽しみにしているぞ…。 覚悟しておけ、俺は随分と腕をあげた…」

《オラもだベジータ……じゃあみな! 天下一武道会で会おうぜ



！

そういうとお父さんの声は聞こえなくなりました。

「良かったわね悟飯くん!!早くお母さんや悟天くん達に伝えてあげな  
きや、あ、悟誠くんはどうするの?」

「はいっ!!あ、兄さんには帰りに寄って伝えていきます。」  
あっそうだ!

「ベジータさんも正体がバレないようにこういうコスチュームを着な  
ければ」

「だっ誰が着るか!!!俺は別にバレても構わん!!!」  
面倒なことになる気がするんだけどな……

「じゃあ僕、皆さんに教えてきます!」

「バイバイ!!」

トランクスくん達に見送られながら僕はカプセルコーポレーションを後にしました。

さて、まずはどこから行こうか……。

---

結局最初に向かったのは一番近かった兄さんの家でした。

「へえ〜天下一武道会ねえ」

そーいやそんなのもあったけっなあ…と一人呟く兄さん。

「はい、その日には父さんも一日だけ帰ってくるらしいんです。僕やベジータさんも参加するんですけど、兄さんも参加しませんか!？」

「えっ…？父さんが…!!悟飯それ本当か?!?!？」

今まで興味なさそうに聞いていた兄さんが父さんの話を聞いた途端目の色を変えてきました。

「え、ええ…たしかにそう言っていました」

「そ、そっか…けど、一ヶ月後…空いてっかなあ…」

あ…。そうか、兄さんは仕事もあるんだった……。

「出場するべきですよ！5位まで賞金がもらえるらしいですよ！」  
しかしその問いに反応したのは兄さんではなく、奥さんの18号さんでした。

「どれぐらいの賞金が出るんだ？」

「え…と…優勝が1000万ゼニーで、2位が500万…3位300万…4位200万…5位で100万ゼニーかな」

それを聞いて今度は18号さんの目の色が変わりました。

「出場しろ悟誠!!私もある!!」

「お、おお…わ、分かった、なんとか空けてみる…」

18号さんの勢いに押し負けてたように兄さんが頷きます。

よし！後はピッコロさん達だな！

所かわって亀ハウスにきました。

「悟空も!?ほんとかよっ!!!」

こうして驚いているふさふさ頭の人、それはですね……。

「闘わなくなつて坊主頭もやめてしまったクリリンさんです」

「悟空とは久しぶりじゃのお〜」

そう話すのは亀仙人さん。七年経つても変わらず元気になっています。

「お…俺も出ようかな……で……でも悟空や悟飯に悟誠、それにベジータが出るんじゃ絶対優勝出来ないしな〜……」

「出場しましょうよ!・5位まで賞金がもらえるらしいですよ!」

未だに悩んでいるクリリンさんを他所に、エルシャさんが聞いてきました。

「その賞金っていくらくらい出るの?」

「え……と……優勝が1000万ゼニーで、2位が500万……3位300万……4位200万……5位で100万ゼニーですね」

「クリリン、出場しましょう、それだけ出るのなら私も出るから」

「エツエルシャさんが……!?わ、わかったよ……」

エルシャさんの静かだが勢いのある言葉にクリリンさんも頷くしかなかったようです。

隣では亀仙人さんが『わ、ワシはどうしようかな……』と悩んでいました。

「おい、ピッコロには教えるなよ? (たぶん無理だろうけど) 俺が5位まで入る可能性が少なくなるから」

「いや…そういうわけにはいきませんよ……」

それに、ピッコロさんなら、もう知ってるかもしれないし……

「にしたっておまえ、どっかで見覚えのある格好してると思ったら…悟誠の真似か?」

アイツの鎧って貸し出し出来るもんだっけ…?と首を捻るクリリンさん。

「格好いいでしょう? ブルマさんに頼んで作ってもらったんです!」  
そう言っつて僕はサングラスをかけ直します。

「それじゃー!」  
そうして僕はピッコロさん達のいる神殿へと向かうのでした。

---

「そうか…それはたしかに面白そうだな…よし、出てみるか」

神殿にてピッコロさんに話をしたところ出てくれることが決まりました!

そういえば……。

「デンドデはどうするっ?」

「いや、出ませんよ。ボクは戦闘タイプのナメック星人じゃありませんから」

あ、そうか…てつきり出るものとばかり思ってた…。

「ところで悟飯、そのおかしな格好はいつたいなんだ？」

「え？…これかっこいいと思いませんか？ねえ、デンドエ？」

「……ノーコメントで」

なんでだ？兄さんのみたいで格好いいじゃないか……。

そんな話をしつつ、僕は神殿を後にしました。

「天津飯さん達は何処にいるのかわからないからなあ……ヤムチャさんにはブルマさんから連絡いくと思うし……」  
神殿を後にした僕は帰路に着いています。

「でも、お父さんが一日だけでも帰ってきたらお母さん喜ぶだろうな

——悟天は初めてお父さんを見ることになるのか——！」  
けど、一つ引つ掛かることがある……。

「……しかしお母さん…僕の出場許してくれるかな…」

昔から僕に戦うことを避けさせようとしてきたお母さんのことだ…また反対されるかもしれないし……。

「でも、どうせ出るなら僕だって優勝狙いたいし…」

「そのためにカラダなまっちゃってるから学校休んでみっちり修行しないも危ないだろうし……」

！  
待てよ？鍛え直してもらおうなら打ってつけの人がいるじゃないか

「そうだ！大会までの間、兄さんに修行をつけてもらおう！」  
そうと決まれば善は急げだ！  
僕はスピードを上げて家へと帰って行くのでした。

あ、余談ですが、お母さんには優勝賞金の話をしたところあっさり  
と出場を許してくれました

おしまい

## 大会に備えろ！悟誠一家の帰省

side 悟誠

「え？修行？」

天下一武道会の話聞いた日の夜。悟飯から電話がかかってきた。

『ええ、しばらくサボっちゃってたんで大分体が鈍っちゃって…』  
そう言えば確かにそうだな。悟飯のやつ、勉強にばっか集中して、まるで修行なんかしてなかったもんな…。

「なるほど、それで俺に修行してほしいって訳か」

『はい、お願いできませんか？』

まあ、休みも取れてるし… ippka.

「分かった、久々に修行つけてやるよ」

『ホントですか！』

「ああ、けど、俺の修行は厳しいぜ？」

なんせ毎晩ドライグにしごかれてるからな。

『ええ、望むところですよ！』

電話越しからが班の威勢のいい声が聞こえてくる。  
そここなくつちやな！

「分かった、なら明日そっちに向かうよ。それまでになるべくカラダ慣らしとけよ？」

『分かりました』

「じゃな、母さんによろしくな」

そう言う俺は電話を切った。

それを見て18号が声をかけてくる。

「悟飯からかい？なんだって？」

「武道会に出るのに修行つけて欲しいんだってさ」

「ふうん… 大会で競い合う相手だったのに呑気なもんだね、で、それを受けたのか？」

は、はは… 手厳しいな18号は…。

「まあ、弟の頼みだし、久しぶりに見てやるのもいいかなってさ」

「あっそう」

なんか興味なさそうだな…。

「とりあえず明日から少し実家に帰ろうと思ってるけど、18号はどうする？」

「何言ってるんだ？私も行くに決まってるだろ？」

さも当然とでも言いたげに18号が首を傾げる。

「いや、まさかついてくるとは思わなかったからさ」

「アンタがそう言って浮気してこないとも限らないからね、監視も兼ねて着いてくよ」

それはさすがにひどくないか…？

まあ、アイツもたまには田舎の空気の澄んだところで遊ばせてやりたいもんな…。



「分かった、じゃあ明日の早朝に出発だ」  
そんなこともありつつ、俺達は翌日の朝、実家に向けて出発するの  
だった。

---

翌早朝…。俺達は実家に到着していた。

久しぶりの母さんに挨拶をして、荷物を降ろしていたときに気が付  
いた。

「あれ？母さん悟飯と悟天は？」

「悟飯達だか？そんなら少し前に鍛えてくるって一緒に出てっただ  
よ。今度の天下一武道会に出るって決まってからえらくやる気みて  
えだぞ？」

母さんの言葉に納得する。

確かに、俺が着くまで待つてなくてもあの二人なら自分達でも鍛え  
られるだろうしな

「分かった、じゃあ俺も言うてくるよ、18号達よろしくな」

「気を付けるんだよ」

「分かってるって、じゃー！」

そうして俺は二人がいるだろう場所に向けて飛び立つのだった。

# 修行開始だ！赤龍帝のスパルタ特訓！

side 悟誠

「おっ、いたいた」

気を辿って少し飛んでいると、二人の姿が見えてきた。

『どうやら二人で組手中のようだな』

そうみてえだ、それにしても悟天のあの髪つてもしかして……

『ああ、どうやら奴も超<sup>スーパー</sup>サイヤ人になれるらしい』

マジか……っーことはトランクスくんも？

『可能性はあるだろうな』

おうふ……次世代の子供は成長が早いな……

そんな風に二人の様子を見てみると、悟天の猛攻に押されてか、悟飯が空中へと逃げ出した。

しかし悟天はそれを追おうとせずにむくれている。

あれ？なんでアイツむくれてんだ？

『あの様子から察するに、孫悟天は武空術を使えんらしいな』

えっ……嘘だろマジか……武空術よりも先に超<sup>スーパー</sup>サイヤ人になるとか、順序がめちゃくちゃだな……

とりあえず話しかけてみるか

「おーい、二人ともなにしてんだー！」

すると二人が俺の方を見やる。

「あっ！誠にいちゃんだー！おーい！」

悟天が俺に気づいて手を降る。

そこに近づき二人のところに降りる。

「オス、二人とも元気そうじゃんか」

「はい、兄さんこそ元気そうですね」

「へへへっ」

嬉しそうな悟天を軽く撫でながら俺は悟飯をみる。

……

明らかに気の質が落ちてるな

「悟飯、おまえ修行サボってたな？」

「えっ… あはは、やっぱり分かつちやいますか？」

「分かるに決まってるだろ、まあだから俺に修行の相手を頼んだんだろうけどさ」

そうじゃなきゃ俺をここまで呼び出す必要ないもんな

「ええ、そうなんです。今日からご指導お願いします」

「おねがしまーす！」

頭を下げる悟飯と悟天。

流石は母さん、教育が良くできてるなあ…

「任せとけ、二人ともビシバシいくからな！」

「はい！」

うん、良い返事だ、これなら鍛え甲斐がある…ん？

『相棒、盛り上がっているとこ悪いが、来客のようだ』

ああ、気づいてるよドライブ。

「あつ… ビーデルさん…」

この悟飯の反応をみるに、どうやら悟飯絡みのようだ  
現に悟飯は気まずそうに近づいてくるジェットフライヤーを見つ  
めている。

「なんだ悟飯、先約があつたのか？」

「え、ええまあ少し… 空の飛び方を教えてほしいと頼まれちゃいま  
して」

若干吃りながらもそう答える悟飯。

ドライグ、どう思う？

『嘘は言っていないが全てを話しているわけではないようだ』

なるほどな、まあ大方、悟菜帝の正体がバレたとかで脅されて無理  
矢理約束させられたんだろう

まあ、それはそれとして、なかなかやるな悟飯の奴。

『おい、相棒？まさか…』

あそこまで綺麗なおっぱいの持ち主を持つてくるとは!!18号の  
より… ゴホンツいやいや、そんなことはないか

『…俺はナニも聞いていない聞いていない… 相棒のおかしな  
発言は聞いてない…』

このやろう… これならどうだ！

おっぱいは一日にしてならず！形や大きさ等は関係ない！おっぱ  
いに幸あれ!!

『ゴフウツ…!!』

ド、ドライグウウウウウツ!!!

しっかりしろ！傷は深いぞ!!

『相棒…俺もう駄目だ…後のことは…頼んだぞ…』  
ド、ドライグの龍圧が……

『と、そんなことはさておき』  
うおいッ！ここからが盛り上がる所だぞ!!!

『そんなことしてる場合か、孫悟飯の奴がどうやらあの娘を連れてきたようだぞ』

ん？あ、ホントだ…はあ、仕方ない

「よお、お嬢ちゃん、あの時ぶりだな」

「——俺の修行は厳しいぞ？ビシバシいくからな——」  
いっちよ、この子も鍛え上げてやるとしますか！

ん？悟飯、どうした？そんな顔して…心配すんなって、おまえもしつかり強くしてやるから！えっ？違う？

気を掴め！ビーデルのトリックマスター修行！

side 悟誠

「……ねえ、孫 悟飯くん」

「えっ… な、なんですか？」

俺を確認した野次馬娘ことビーデルが悟飯に問い掛ける。

「私は空を飛ぶ方法を教わるために来たのよ…な の

に！これはどういうこと!!」

「いや、えっと… この人は僕の兄さんでさ、武道会に備えて修行をつけてもらおうと思って呼んでたんだよ」

たじたじだなあ、悟飯のやつ

『いくら強かろうといつの時代も女は強いということだろう』

かもな…。俺も18号には頭が上がらないし…

まあ、とりあえずそんなことより今は…

未だに続いている二人のやりとりが途切れるのを見計らって声をかける。

「話を聞くに、そっちの子は武空術を習いにきた… ってことで良いのか？」

「ええ、そうなんです。けど、まさかこんなに早く来るとは思ってた…」

なるほどな、予想より大分早く来ちゃったってところか。

なら、俺がやることは一つだな！

「そうか、話はわかった。なら、折角来てもらったんだ。俺がついでに

見てやるよ」

「ええっ!? 兄さんがですか!？」

なんだ悟飯のやつ、そんな驚くほどのことか？

「ああ、どうせお前らを鍛える直すために来たんだ。一人や二人増えたところでたいしたことねえよ」

「は、ははは… 流石は兄さんだ」

何が流石なのか知らねえけど、とにかく

「そう言うわけだ、武空術を教えるついでにお嬢ちゃんも鍛えてやるけど、どうする?」

「本人の話を聞かないで勝手に決めないで！お断りよ!!」

ありや、やっぱその勝ち気な性格が邪魔するか… なら！

「そうか、それなら仕方ない、これじゃあ大会優勝どころか、悟飯にも勝てねえだろうにな」

「…!…:… ちよつと、それどういうことよ」

おつ、食い付いてきたな？

「言葉通りの意味だよ。今のお前じゃ悟飯どころかその悟天にだって勝てやしねえよ」

「ッ!! 良いじゃない、そこまで言うんならやってやるわよ!!」

よしよし、上手くいったな。

『上手く乗せたな、相棒』

ああ、こういう奴はちよつと煽ってやればすぐ乗ってくるからな『なるほど、相手の性格を利用したか。相棒にしてはやるじゃないか』

ドライブ、それ誉めてんのか？

『もちろんだ、俺が相棒を貶めるわけがなからう』

……うーん、なんか腑に落ちないけど、まあいいや、とにかくやるぞ！

「武空術を教えるにあたって、一つ確認したいことがある。えーっと、お前、名前は？」

「ビーデルよ」

「そうか、じゃあビーデル、武空術、空を飛ぶ術を学ぶにあたって一つ重要なものがある。『気』というものだが、知ってるか？」

「キ……？なによそれ」

やっぱ知らないか、まあ当然と言えば当然か。

「気つてのは……そうだな、悟天、あの岩に気攻波を撃つてくれ」

「え？うん！よく見ててねおねーさん」

そう言うのと悟天は右手から気攻波をポツと云音ともに撃ち出した。ドウンツと音を立て砕け散る岩。

「……………」

目、見開いて呆けちまって……女子のする顔じゃねえだろ

「サンキュー悟天、まあ、これが気つてやつだ。お前達のところでは何て言うんだ？」

「え？そうね……トリック……かしら？」

ん？トリック……？



「トリックとは全然ちがうよ。仕掛けなんかないもん」

「う、うるさいわね！知らないわよ！こんな魔術みたいな力!!」

悟飯にだけは威勢がいいなこの娘っ子。

それにしても知らないときたか、まあ予想通りではあるが…

「ね、ねえーひよっとしてキがないと空を飛べないの!？」

「だ、大丈夫だいじょうぶ。気は誰にでもあるものだから、コントロールが難しいだけでね」

「ほんと!？」

めちやくちや悟飯に食い付いてるビーデル。

ともかくビーデルに気の使い方を教えるところから始めねえとな

「あー、盛り上がっているとこ悪いが、話を進めさせてくれないか？」

「あつ、ごめんなさい… つい」

「すいません… 兄さん」

申し訳なさそうに謝る二人。そんな気にする事でもねえんだけどな。

「ともかく、まずは気のコントロールをビーデルに教えるところから始めるぞ。悟飯、お前が呼んだんだから責任持ってお前が教えてやれ。悟天、武空術は少し待っててくれ、その代わり先に修行見てやるからな」

「あ、はい！」

「うん！わかったよ！」

良い返事だ、さて、じゃあやるか！

青年指導中

「よし、悟天、思いつきりこい！あつ超<sup>スーパー</sup>サイヤ人にはなっちやダメだぞ？」

「どーして？不良だと思われるから？」

不良で… そういや母さんはあ<sup>超サイヤ人</sup>の姿を不良だって言ってたな。

「まあ、そんなとこだ。悟飯の友達に不良だなんて思われたくないだろう？」

「え？うーん… ボクは別にいいけど」

良いのかよ!?ま、まあ今はいいか

「ともかく、アレはなしだ、兄ちゃんも空を飛ぶのなしでやってやるから」

「…… ホントに飛ばない？」

…?なんか凄くジト目を向けられてるんだが

「ああ、絶対に飛ばない。約束だ」

「わかった、じゃあいくよ!!」

来た!さあて、どのくらい強いのか、見せて貰うぞ悟天!!

悟天と組み手をしていたらいつの間にか昼になっていた。  
俺達は、一度家にもどって昼食を取っていた。

「あ、ありがとう…。お昼いただきちゃって…。」

「しよугがあんめえ、一人だけ食わせねえわけいかねえかな」

母さんとビーデルのそんなやりとりをしながら飯を食っていたら、  
18号が話かけてきた。

「それで、修行はどんな感じなのさ？」

「ん？ああ、今はそのの奴に気を教えるところだからだからたいして進  
んじやいねえよ」

悟天の強さが想像以上だった事くらいだな

『確かにかなり鍛えられていたな、チチの育て方が良いらしい。相棒  
もウカウカしてたら追い抜かれるんじゃないか？』

冗談言うな、悟飯じゃあるまいし、そう簡単に抜かれるかよ……

『さらつと義弟を乏しめたな…。』

それだけサボってたあいつが悪い。

「そうかい、大会まであまり時間もないんだ。ゆつくりやってたら間  
に合わなくなるよ」

「分かってるさ、それまでには間に合わせる」

もうほとんど覚えちゃいないが、ドラグ・ソボールの展開ならこの  
後何かが起こったはずだし、それまでには備えておかねえと

そんな決意を胸に俺は母さんと18号の料理を掻き込むのだった。

「行儀悪いね…。掻き込むんじゃないよ！」

怒られた…  
解せぬ

気を御せよ！空を駆けろビーデル！

side 悟誠

「よし、悟天！思いっきり来い!!」

昼食後、再び移動した俺は再び悟天の相手をしていた。

「悟天！そっちに行つたぞ！捕まえろ!!」

現在俺達は野生動物捕獲に勤しんでいた。

理由は言わずもがな、悟飯がああ野次馬娘…。ビーデルに付きつきりだからなんだが……………」

「うん、任せて！誠兄ちゃん!… ツうわわあつ…!?!」

ドシンツと勢いよくすつ転ぶ悟天。それをバカにするように転んだ悟天の頭上に飛び乗ったカエルが一声鳴いてどこかへ逃げていく。

「んよつと、このお、待てえー!!」

「逃がすなー悟天ー!… さてと…」

悟天に声をかけた後、チラリと悟飯の方を見る。

視線の先には未だ気のなたるかを教え込んでいる悟飯の姿があつた。

…ありやあまだもうちつと掛かりそうだな

『全くだ…これでは孫悟天が孫悟飯を超えるのも時間の問題だな…』

そう言つてやるなよドライグ。アイツだつて弟に抜かされるなんて嫌だろうし、そうならないように俺がこうして合わせてんだからさ『別に気にすることはないだろう。アイツは自分が好きでサボつたんだらうからな』

ん…まあ、そもそもアイツは戦いが余り好きって訳でもないもん

な… というか、ドライグ。今日はいつになく悟飯に対して辛辣じゃないか？

『フンツ… オレが力を分け与えてやったというのに、それを碌に使いませぬ腐らせておるからな…』

ふーん、要するに悟飯が最近相手してくれねえから拗ねてんだな？

『なつ… 誰がそんなことを言った?!』

いや別に？ そんな風に聞こえただけだよ

『ちがぞ相棒!! 断じて違うぞ!! 確かに孫悟飯の方が良識があるから、相棒にいいとか、寧ろそろそろ鞍替えしたいと思わなくもないとか考えてなどいないからな?!』

おい!? それ全部オマエの本音かドライグウウウ

『ハツ…』

イヤなんだよそのハツ… はあ!! そんなにか?! そんなに酷いか俺?!?!?

『ま、まあ落ち着け相棒… どうやら、あの野次馬娘がようやく気を理解したようだぞ?』

露骨に話を変えやがった… ん？

ドライグの言葉にそちらを見るとそこには嬉しそうにしている悟飯と両掌から光り輝く小さな球を創り出しているヤジ… ビーデルの姿があった。

「出来たー！これが気だよー！やっぱり武道やってるからコツの掴み方が早いよビーデルさん！」

それを不思議そうに見ていたビーデルだったが、ふと気の球を消すと疲れたように両手を地面に付いていた。

「よお、やつと気が理解できるようになったみてえだな」

そんな俺に気がついた悟飯がこちらを見る。

「兄さん。ええ、なんとか気の問題までいけました」

「……悪かったわね！覚えが悪くて!!」

「ええっ……あ、いやだからさ……」

何を思ったのか悟飯に食って掛かるビーデル。

しかしすぐに気を取り直したように俺の方を見て言う。

「これでいいんでしょう？早く空を飛ぶ方法と修行をつけてくれない？」

ふうむ…… 氣の理解が出来始めたところで舞空術はちよつと難しいと思うしなあ…… 修行を見てやるつてもそもそもそれが出来ないきや話にならねえだろうし……。

「悪いが、それはまだだ、そこからさらにその氣をコントロール出来るようにならねえと、空を飛ぶ方法は教えてやれないな。修行を見てやるなんて尚更だ」

「ツ！なによ、まだ足りないつての!!」

おつとと、こつちにまで食って掛かってきやがった……

「ああ、そんなんじやまだまだヒョッコだよ、俺に教えてほしかったらしっかりと悟飯の言うことを聞いてしっかりと学ぶんだな」

それだけ言つて俺は悟天のもとへと向かった。

いつまでもほつとくとアイツ危なっかしいからな……

その一時間後、ちやつかりと氣のコントロールを覚えたビーデルがドヤ顔で俺を見ており、俺は奴が帰るまで舞空術の基本を悟天とビーデルに教えていくのだった。

「そういえば悟飯」

「… なんですか？」

「飯のときに母さんが言っただのを聞いてたんだが、お前ってああいう、女がタイプなのか？というか、いつ結婚すんだ？」

「ブツ——!!」



ようやく開始だ！満を持しての悟誠の修行！

side 悟空

オツス！オラ悟空！

こっちに出番回って来んのは久しぶりだなあ！

オラは今大界王星つちゆうとこで界王さまと修行してんだ。

前にやったあの世一武道会つてのに参戦した時の優勝商品が、この大界王星でいっちな強えっていう大界王さまに修行付けてもらえらるって話だったんだけど、その大界王さまにまだ修行付けてもらえねえからこうして界王さまと一緒に修行してんだ。

オラが死んでからもう七年くらいになんのかな？

みんなは元気にしてっかなあ……。

悟誠のやつもあん時よりも腕上げてんのかな？

オラが死んだ時はまだアイツの方が上だったけど今ならどうかかな？

オラもアレからかなり修行して強くなったんだ。新しい力も手に入れたし、追いついたとは思っただけだな……。

「相変わらず古臭い修行をしておるの〜」

ん？界王さまの他に誰か別の声が聞こえんな、コイツは……。  
……。

ああ！そうだ！界王さまと同じやつだ！えっと名前は確か……

「ん？おお、南の界王か。久しぶりだな」

！ああ、そうだった！南の界王さまだ！！

その後ろには別の気も感じる。コイツは知らねえ奴だ……。  
つと、そんなことより修行しねえと！悟誠もそうだけど、この世界にやオラより強え奴がいつペえいる。オラ、ソイツらと戦うために強くならなきゃならねえ……。

よーし、やつかあ！！

待ってる悟誠！いつかおめえを超えてみせつかんな！

「よっ—ッ！ほっ—ッ！んやっ—ッ！」

「んっ… —ッ!!」

悟天とビーデルが舞空術を使おうとピョンピョンと飛び跳ね、片や突っ立ったまま全身でリキんでいるのを見て俺は困惑していた。

「え、えつと…」

となりで見ていた悟飯もどう声をかけたらいいのかわからないのか、まともな言葉を話していない。

とりあえず俺は気のコントロールをうまく使いこなしてる悟天にアドバイスしてやるか

「俺は悟天に舞空術を教えるから、お前はそっちの子を教えてやれ」

「えっ… はい、分かりました」

そんなやり取りのあと、俺は悟天に近づきアドバイスを試みる。

「悟天、跳んじゃ駄目だ。全身の力を抜いて気を集中してみろ」

「…？うん」

ピタリと跳ねるのを止め真剣な表情になる悟天。

「……………」

フワリと風が静かに悟天を通り過ぎた時のことだった。

フワアツ… そんな擬音と共に悟天の身体が中に浮き上がった。

「… ふう？」

「おお！ そうそう、上手いぞ悟天!!」

まさか後も早く浮かべるようになるとは…

『相棒のときとは大違いだな』

煩いぞドライブ…

「わははっ♪ 浮いた浮いたあっ!!」

ふわりふわりと危なっかしく飛ぶ悟天を目で追う。

「悟天、あんま無理すんな、落ちたら大変だぞ？」

「大丈夫だよ!! って！ うわあぁっ!!」

そういった直後、浮いていた悟天の身体がいきなり落下を始めた

「!… 悟天ツ!!」

慌てて飛び込み両手で悟天を抱き止める。

そのまま地べたを滑り止まったところで息をつく

「ふう… 危なかったなあ、大丈夫だったか？ 悟天」

「う、うん… 僕は大丈夫だけど、誠兄ちゃんは？」

腕の中で凄く申し訳なきように悟天がいう。

「俺なら大丈夫さ、このくらい屁のかっぱだ！」

そう言うのと悟天はパアアツと音が聞こえてきそうな程顔を輝かせて言った。

「凄いや！ 誠兄ちゃんはやっぱすごいなあ！」

いや悟天よ、そんなことで顔を輝かせられても非常に困るぞ？

『そんなこと言いつつも顔は正直だな…』

う、うるさい！嬉しいもんは嬉しいんだから仕方ねえだろ！

「はは、ありがとな悟天。さて、あっちの方は」

チラリと二人の方を見る。うーん、まだ掛かりそうだな。

「よし、悟天、まだまだ練習だ！綺麗に飛べるようになるまで頑張るぞ！！」

「おー！！」

そうして再び悟天の舞空術の猛特訓を開始するのだった。



あの後、なんとかビーデルも身体を浮かべる事に成功したのを見て俺は修行を見てやることを提案した。

悟飯にはなぜか最初こそ反対されたが、理由を聞こうとしたら押し黙ったのでそのままやらせてもらうことにした。

「それで？まずは何をすれば良いの？」

「ん？ああ、じゃあコレを両腕と両脚に付けてくれ」

そうして手渡したのは父さんが俺を拾ってくれたばかりの頃に使っていた重いリストバンドだ。

家の物置にしまい込まれてたのを拝借してきたんだ。

「コレを？うっ…何よこれ…無茶苦茶重いじゃない…」

「これが強くなるための秘訣だ」

「…… 本当にこれで強くなれるのね？」

「ああ、間違いなくな」

俺もほぼソレでここまで来たようなものだし

「…… 分かった」

渋々といった様子で自身の付けていたバンドを外して父さんのお古を付け始めた。

その様子を見届けてから俺は言う。

「それを付けて日常生活と、いつもの特訓をしてみろ、きっと強くなれるからな」

「ふうん、なんかよくわかんないけど、明日も来ていい？」

「ん？俺は別に構わねえけど？悟飯、いいのか？」

「えっ…… えっと……」

なんだ？煮えきらない奴だな……

「なによ、私がいたら不満なの？」

「い、いやそんなことは……」

そんな煮えきらない悟飯の反応に、ビーデルは『ふうん』と意味ありげに呟いた後、懐からポイポイカプセルを取り出し、ソレを投げジェットフライヤーを出現させた

「何だ、帰るのか？」

「ええ、あまり遅くなるとパパが心配するからね、それじゃあ悟飯くん、そのお兄さんに弟くん。また明日ね」

「おう、ああそうそう！ちよいちよい」

「……？」

不思議そうに俺を見るビーデルに俺は耳元でコソツと伝えてやる。

？さつきチラツと悟飯と話してたんだがよ、お前のその髪、短い方が悟飯の好みらしいぜ？興味があるなら切るのも一つの手だと思っ  
ぜ??

そう言った途端ビーデルの顔が真っ赤に染まった。

「うっ煩いわね！そんなことアンタに関係ないでしょ!!」

そう喚くとジエツトフライヤーで飛んで行ってしまった。

その様子を俺達は見送るしかなかったのだった

「… 兄さん」

「なんだ？」

「女の子って、よく分かんないです……」

「…… そうかもな」

悟空の帰還！そして始まる天下一武道会！

side 悟誠

天下一武道会当日……………

俺達はブルマさん所有のジェットフライヤーに乗って海上を飛んでいた。

「ねえ、孫くんホントに来るかしら？」

「来ますよ、絶対に！」

「いやあ、悟空に会うのは何年ぶりじやろう… たのしみじやのう」  
操縦桿を握っていたブルマさんの言葉に悟飯と亀の爺さんが口を開く。

その声は何処か嬉しそうな声音だ。

かくいう俺もかなり嬉しいってのが本音だ。

なんと言っても俺が最後に父さんと会ったのは七年前のセルゲームの時間が最後……………

悟飯は前に父さんの声を聞いたらしいが、俺はその場にはいなかったから聞くことはかなわなかった。

だから久しぶりに会えるとなって俺もかなりたのしみである。

この数年で俺達も大分変わった……………

その中でもかなり変わったのは……………

「クリリンさん、その髪型じゃあお父さん気が付かないんじゃないかな？」

「はははっ、だろうな」

そう、ここ数年で大きく変わったのはクリリンさんだ。

数年前に蘇ったエルシャさんと結婚して髪を伸ばしている。

今はまだ亀の爺さんの家に居候させてもらっているらしい

「がははははっ!! いやホントに久しぶりだべ! みんな元気そうで良かった良がっだ!!」

そう朗らかに話すのは俺のもう一人のジ(ぶちのめすぞ生まれ変わり...) すみません...!!

ゴホンツ... 話を戻すと、彼の名は牛魔王。母さんの父ちゃん。つまり、俺の母方の爺ちゃんだ

俺や父さんの倍以上もある背丈が特徴の優しい爺さんだ。

普段はフライパン山つてとこに住んでるらしいけど、時々娘や孫の様子を見に遊びに来てくれる面倒見のいい性格で俺にも良くしてくれる。

そんな牛魔王爺ちゃんだが、俺は嫌いじゃない。

「そういえばヤムチャさんは出場しねえだか?」

爺ちゃんの前に座る母さんがその隣に座っているヤムチャさんにそんなことを問いかける。

しかしヤムチャさんは笑いながら

「出るわけありませんよ! もう出ても恥かくだけですからね。あははは...」

そう、ヤムチャさんは随分前に武闘家を引退している。

ついこの間までベジータ達サイヤ人や人造人間と戦ってたのが懐かしいぜ.....

と、そこで今までみんなの様子を見ていた悟飯が思い出したように口を開いた。

「ところで、兄さんにベジータさん。それに、悟天やトランクスくんも、武道会では超<sup>スーパー</sup>サイヤ人は無しって事にしませんか?」

「...ん?別に俺は構わねえけど」



「……何故だ」

悟飯の唐突な問いかけにベジータが聞き返すが、それに答えたのは悟飯ではなくブルマさんだった。

「わかんないの？タダでさえセルとの戦いの時にテレビに映ってて、どこかで見た顔だなあ……って思われてるかもしれないのよ？」

「……………」

ベジータは黙ってブルマさんの話を聞いている。

「そこで超<sup>スーパー</sup>サイヤ人になんて変身してみなさいよ、あつ！あの時の連中だ！って分かつちやうわ」

なるほど、それに悟飯に関しては街中で数回超<sup>スーパー</sup>サイヤ人に変身してて目撃されてる。

その正体を隠すためでもあるんだろう

「ええ、そうなるとうるさいんですよ。テレビとかが」

「確かに、テレビに騒がれるのは面倒だよな……」

「フンツ…… そんなヤツらぶつ飛ばしてやればいい」  
「いやいやベジータさん？何を言ってるんだよ……………」

「ベジータ、それはマズいって…… 下手にそんなことしたら武道会どころじゃなくなっちゃうよ」

俺の言葉にベジータは少し反応する。

「フンツ…… まあ、いいだろう。誰も超<sup>スーパー</sup>サイヤ人にならなければ条件は同じだ。オレの優位に変わりはない」

「おお…… 相変わらずすげえ自信…… こんだけ自信満々ってことはベジータのやつ、相当腕上げたんだな……………」

『相棒もそうウカウカしていられんな…』

ああ、そうだなドライグ！

「ボク達もいいよ！」

「うん！」

「俺も大丈夫だぜ！」

「良かった、ありがとうみんな！」

と、そこで悟飯が思い出したように俺に話しかけて来る。

「あつ…： そうだ、兄さんはドライグさんの使用も無しでいいですか？後は超<sup>スーパー</sup>サイヤ人龍も」

まあ、変身がダメならそりゃダメだよな、籠手に関しちや外せるわけでもねえから使わないってことにしておきやなんとかなるだろ。

『ということは俺の手番は今回は無さそうだな…：』

悪いドライグ…： また後でベジータに頼んで模擬戦させてもらうからさ

『ベジータか、奴が素直に受けてくれるとは思えんが…： いいだろう』  
サンキュな、とりあえずは…：…：…

「いいぜ悟飯。ドライグも納得してくれたしそれでやろう」

「良かった…： あの力は変身しなくても強くなっちゃいますから…：」

「オレはその方が助かるよ、そうじゃなきや勝率なんてあつてないよ  
うなもんだしさ」

そんなことを話し合いながら、俺達は武道会の会場へと向かうの  
だった。



会場の場所に到着し、その島に降り立った俺たちは今日帰って来るはずの父さんを探しながら歩いてた。

その道中に、セルゲームの時に何故か暴れ回っていたあの世界チャンピオンであるミスターサタンが到着し、何故か英雄扱いで崇められていた。

そんな光景を後目に俺達がさらに進むと、いつの間にか来ていたであろうピッコロさんの姿があった。

弟子である悟飯は嬉しそうに近づき楽しげに会話をしている。

そんなことがありつつも、俺達はさらに父さんを探して歩みを進める。

「どうしたんだべ悟空さは… もう選手控え室にでも行ってるんだべか…。」

辺りをキョロキョロと見回して母さんが呟く。

「母さん、もしかしたらまだ来てないのかもしれないぜ?」

「まだだど!?早く来ねえと選手登録始まってしまっただぞ!!」

凄いい剣幕で俺に詰め寄り俺を勢いよく揺さぶる母さん。

うっ…!がっ…!げえっ…!頼むからそんな揺らさないでくれえ…!!

「ちよっ母さん!!もうやめてあげてください!兄さんの顔が…!」

「へ?あっ…。」

俺の様子にようやく気が付いた母さんがパツとその手を離す。

ちよっ… 今離されたら…

!!!?

並行感覚が鈍った俺はそのまま踏ん張ることが出来ずそのまま背中から倒れていく。

あつヤバい……

そう思った時だった……。

【トサツ】

そんな軽い音と共に誰かに支えられた感触が背中に触れた。

いったい誰だ……？ そう思って振り返ってみると……。

「おっとと……大丈夫か？ 悟誠」

そこにはとても懐かしいずっと会いたがっていた男がにこやかに立っていた。

どこまで隠せる!? 戦士達の苦難の予選!

sideナレーション (界王)

「おっとと… 大丈夫か? 悟誠」

そう言っつて悟誠を抱きとめたのは悟飯や悟誠の父である、孫悟空だった。

「と、父さん!!!?」

「へへっ… ヤッホー——!」

「悟空っ!!!」

「おとうさん!!!」

「おいっ!!!」

それぞれが嬉しそうに彼の名を呼ぶ。

「あは——! 結構かわちまったかな… みんな。でも、元気だったか!」

「うう… グスツ…」

「…………… ははっ」

「…………… 悟誠さ…」

「…………… フンッ」

「……………」ポカーンッ

「よう帰って来たのう」

「孫くん…」

「ぐ……………悟空……………」

「……………ははっ」

「おとうさ——ん!!」

「悟空——っ!!!」

感極まった悟飯たちが悟空へと抱きつく。

「… ったく、帰ってくんのが遅いんだよ、親父…」

「ははっ、悪りいな…ん?」

超化した時のような呼び方をしてはいる悟誠も、そんなこと言いながら嬉しそうに頬をゆがめている。

そんな中、悟空がある人物に気がつく。

その人物は悟空と目が合うのを気づくと慌ててチチの後ろへと隠れてしまう。

チチがそれに気が付き隠れた人物… 悟天に声を掛ける。

「悟天、おとうさんだぞ!!」

「ひよええくく… オラにそっくりだと思ったら、やっぱりオラの子か——!!」

「ん… おとうさん…?」

その様子を見て悟空は抱きついていた者たちを退け、悟天へとゆつくり歩き出し、その近くに來ると、悟天に視線を合わせるように腰を落として軽く笑む。それを見た悟空は安心したのか……

「おとうさん——!!!」

勢いよく走っていき、悟空へと飛びついた。

悟空もそれを危なげなくキャッチすると抱き上げそのまま肩に乗っけてやる。

「元氣そうだな!!オラに似て強そうだ!!はははっ!」

「強いに決まってんだろ?父さんの息子で、俺の弟なんだから?」

「悟誠……。そうだな。オラとおめえの力が合わさりや、怖いもんなしだ!!」

そうして暫し笑いあい、悟天を構っていたところに占いババが声を掛けてくる。

「じゃあ、二十四時間後じゃぞ、よいな?」

「ああ、ありがとう占いババ!!」

そう言って帰って行く占いババを見送ってから悟空たちは受付に向かった。



受付にてやり取りをしている時……

「え!?」……「きゃっ」……「?」

「悟菜帝です！」

「え——!?なんだよそれ…?」

「兄さんから取ったんです。名前もカツコも凄く良いでしょ!？」

「あ… ああ、そうだな!はははっ！」

『父さん、言う時は言ってやらねえと…』

『いや、けどよ… 悟飯のやつ、気に入ってるみたいだからさ…』

そんなやり取りがあつたりもした…。

その後、トランク스가受付に大人とやらせてくれと駄々を捏ねるということで一悶着あつたが、無事に全員が受付を終え、控え室へと向かうのだった。



「頑張るだぞ! 悟空さ! 悟誠! 悟飯! 悟天! ガーッポリ賞金稼いでくるだぞ!!」

「母さん… 家にも生活あるから… 全部はやれねえよ?」

「ははは…。はいー!」

「さーて、久しぶりにひと暴れすっか!!」

やる気に満ち溢れる孫一家。



「手加減しないからな」

「ボクだって!!」

ライバル同士燃える二人のちびっ子。

「おとうさん、頑張ってくるからな——!!」

「……………クスッ」

娘のためにもと頑張ろうとしているクリリン一家。

「いってきま——す!!!」

こうして今度こそ悟空たちは選手控え室へと向かうのだった。



「にしても悟誠、おめえ遅しくなったなあ……」

「ん? まあな……。そりゃ七年も経つんだし、変わりもするさ」

「そっか……アレからもうそんなに経つか……」

悟空が思いを馳せるその横を18号が通り抜けていく。それを見た悟空が驚きの声を上げた。

「ん?——あれ!? 18号、18号じゃねえか!!!?」

「……………今頃気がついたか、バーク」

「ちよっ…… 18号!! 父さんにその言い方はないだろ!!!?」

「チツ… じゃあなんて言えばいいんだよ…」

「なっ… なんで18号がこんなところにいるんだ!!!?」

悟誠達のやり取りをみて、驚きを隠せない悟空が声を上げる。

「いや、実はな… 父さん。俺、彼女と結婚したんだ。もう子供もいる」

「へっ… さつきクリリンからも聞いたけど、おめえも結婚してたんか!!!?」

「まあな… ちよつと苦労はしたけど… 今は子供も出来てなんとかやってる」

「ひゃあ〜っ!!おっどれえたぞ… まさかクリリンも悟誠も結婚してるなんて思いもしなかったからよ…」

「けど、ロボットなのに子供できたのか…?」

「ロボットじゃねえよ。人間をほんの少し改造しただけなんだ、だから人間と一緒になんだよ」

「へええー… 悟誠、おめでどう!!」

「あ、おう、ありがとう!父さん」

そんなやり取りを交わした後、悟誠たちは移動を再開した。



控え室で準備を終えた悟誠たちは会場へと出てきていた。

「うっひゃあ~~~~ったくさんいらあ!!」

そんな驚いている悟空のもとに、黒服サングラスの人物が現れた。

「ややつ!? やややつ...!? キミたちは!!!」

「あっ!」

「やあ!」

悟空とクリリンは知っているのか、親しげに挨拶を返している。

「父さん、クリリンさん知り合い?」

「ああ、今まで出てきた天下一武道会の審判と実況をやったおつちちゃんさ、にしても老けたなあ...」

クリリン悟誠にせつめいしながら、感慨深げにその人を眺めている。

実況者もテンションを上げて嬉しそうに話している。

「今日はなんと素晴らしい日だ! まさかキミたちにまた会えるなんて!! いや~~~~なつかしいっ!! ず~~~~と待ってたよ!!」

と、そこで実況者が顔を近づけてゴソツと悟空に問う。

『セルを倒したのもミスター・サタンじゃなくてキミたちなんだろう? 私にはわかっていたよ』

「へへっ... 分かっちゃったか...」

「正直いってキミたちが出場しない天下一武道会は退屈そのものだったよ...。もう~~~~レベルがひくいひくい... みなさん仲間かね!」

「ああ、まあな」

「いや〜くけっくこうけっくこう!!たのもしいっ!!あ、それとあなた、もう前の時みたいには会場を破壊しないでくださいよ」

唐突に話をピツコロに振る実況者。

「さあな...」

軽く窘められる辺り、この実況者の中々大きな男のようである。  
そうして暫し話をした後、実況者は席へと戻っていった。

◆◆◆ side change ◆◆◆

その後、係員から予選説明がされ、訳の分からないパンチマシンだかパンチングマシンだか分からない機械の説明を受けた俺たちは何故か見本としてミスター・サタンのパンチを見せられる羽目になった。

結果... 137という数値を叩きだしてサタンは戻っていった。  
その後、順番は普通に回っていき、やがて俺たちの番になった。

「はい、次84番」

「...?わたしか」

マシンへゆつくりと向かう18号に俺はコソツと声を掛ける。

「あまり力込めるなよ?マシン壊したらマズいからさ」

「分かってる」

ホントに大丈夫なのかよ.....

『相棒の女房を信じてやれ... 相棒だって同じことをやるんだから

な』

そうだけどき……………」

そんなことをしてるうちに、18号がマシンの前に着き軽くマシンを叩いていた。結果はといえば……………」

《774》

「なっ… ななっ… 774!?!」

「い…!?!」

とんでもない数値に騒然となる会場。

「す、すみません故障したようです！ちよつとお待ちください！俺もコソリと近づき、話しかける。

「だからやり過ぎるなって言ったじゃねえか…!!」

「うるさいなあ… 加減が難しいんだよ！」

そんなやり取りをしているうちに確認が終わったらしい。

「な、直ったようなんですでもう一度…」

そしてもう一度そのマシンを殴る18号。今度の結果は……………」

(タンツ) 《203》

「…………… 203点…!?!」

次の俺の番では……………」

(ポンツ) 《196》

「85番… 196…!?!」

次のクリリンさん、エルシヤさんの番では

(ドンツ) 《192》

(チョンツ) 《190》

「86番… 87番… 192 190…」

続く父さん、ピッコロさんの番だと…

(ボスツ) 《186》

(ビンツ) 《210》

「… 88番、ひゃ… 186点。 89番… 210点…」

そこまでの結果を出した結果… 係員は故障だと判断したよう  
で…

「… こりやあ完全に壊れているようだね。新しいパンチマシンを  
用意しよう」

「はい」

そんなやり取りをしている係員を無視してベジータがパンチマシ  
ンの近くにやって来て言った。

「どいてろ」

「えっ？」

係員が不思議そうな顔をしたその直後だった。

(バゴツ!!)

ベジータが普通に腕を突き出しパンチマシンを殴り飛ばしやがっ  
た…

「…………… うそ…」



## 試合前の小休憩、力を蓄えろ戦士たち！

side 悟誠

予選あれの後、俺達は悟天とトランクスが出場するチビっ子部門の大会を見ていた。

……まあ、案の定というかなんとか……悟天とトランクス以外のチビっ子たちは二人に適いはしなかった。アレなら余り鍛え（られ）てない俺の子でも勝てるんじゃないかと思ってしまう程だ……。

逆に、我が弟、孫悟天と、ベジータの息子のトランクスの試合は結構見応えがあつたな……。

惜しいところで悟天が敗れちまったのは悔しかった……もう少し俺が鍛えてやれば良かったんだが……

それと、父さんや俺に何故かドヤ顔を晒してくるベジータにイラツとしたり……

決勝？まで勝ち進めたトランクスがあのアフロチャンピオン……もとい格闘技の世界チャンピオンのミスター・サタンと戦って（戦うというより戯れだった）たりと、まあ、色々あつた……。

そんなことかありつつも、現在俺達は会場の飯処にて腹ごしらえをしている。

父さんは言わずもがな、ベジータも出てくる料理にガッツいっている。

「……おい、良いのか？試合前にそんなに食って」

と、ここで見兼ねたピッコロさん呆れたように話しかけてくる。それに乗っかるようにして俺たちのことを見ていたクリリンさん口を開く。

「悟誠やベジータはともかく……大体死人なのに腹減るのか？」

その問いに父さんは食べる手を止めずに答える。



「ガツガツ……あの世じゃ……モグモグ……食っても食わなくてもどっちでも……ガツガツ……いいんだけど……メシは下界の方がずっとうめえや!!」

「あはは、何処に行っても父さんは父さんなんだな……」

『まあ、それがこの男らしいと言うことなんだろうよ……』

ああ、そうだなドライブ。父さんはやっぱりこうでなくっちゃな! そんな風にドライブと俺の中で会話していたところ、見覚えのあるグラサンに頭にタオルを巻いた男がやってきた。

そう、俺の下の弟よ悟飯だ。

後ろにはあのじゃじゃ馬娘こと、ミスター・サタンの娘であるビーデルがついている。

「ああ、やっぱりここでしたか」

「おお、悟飯、先に頂いてるよ」

「ん?おう、おめえの分まで頼んどいたぞ、食うだろ?」

「あ、はい、いただきます」

そうして悟飯も食事に加わり大食漢の光景が更に増え、ビーデルは啞然とそれを眺めているのであった……。

◆◆◆そして時は進み◆◆◆**閑話休題**◆◆◆

「ぶはあくっ!くったくったあつ!!」

「いやあ、かなり腹膨れたな」

「… あんたは食いすぎなんだよ」

おっと、18号から厳しい一言を貰っちゃった……  
気をつけようと思った矢先、俺の視界にある人物が飛び込んできた。

「「……………」」

ピッコロさんやベジータ、父さんですら歩みを止め、その人物を見ている。

その人物は俺達を見て声をかけてきた。

「こんにちは、あなた達が孫悟空さんと、孫悟誠さんですね？」

そう言って目の前に立つ謎の人物は俺と父さんの名前を呼びかけてくるのだった

正体はなんだ!? 謎の戦士シン!

side 悟誠

「な、何故オラたちのことを……?」

「……………」

唐突に声をかけてきたその人物に父さんが答え、俺は様子見で黙つたままその人物を見る。

その人物は薄紫の肌にもヒカンのような白い髪をした少年だった。

なあ、ドライグ。アイツ、明らかに地球人じゃねえよな?

『よく気がついたな、相棒、確かに奴は人間じゃなさそうだ』

人間じゃないって……ドライグ、アイツのこと知ってるのか?

『流石のオレでもそこまででは分からんな……だが、奴から感じる気配……只者ではないことだけは確かだ』

ドライグにも分からないのか……となると地道に探っていくしかないんだな……

俺がドライグと話している他所で、父さんは謎の少年と話していたのか、握手をしていた。

何事かと様子を伺っていると、少年は俺にも握手を求めてきた。

「孫悟誠さん、あなたも……」

「えっ? ああ、はい……」

求められるがまま俺も少年と握手を交わす。

「!!…… あなたは…… いえ、なんでもありません。あなたも、孫悟空さんに負けず劣らず良い魂をお持ちのようだ」

「はい? え…… えっと……」

なにやら言おうとして、切り替えるように微笑み、そんなことを告げる少年。

俺が何が何やら分かっていない間に、少年は手を離し俺たちに背を向けた。

「では、私たちは先に行っています。あなた達と戦えること、楽しみにしていますよ」

そう言っつてその少年は隣の長身の男と共に歩き去ってしまった。

「…………… な…………… 何者だ悟空……………」

「…………… わからね……………」

「…………… だが、オラたちだけが楽勝の試合じゃなくなったことは間違いないねえだろうな……………」

「ええ〜…………… そうかな？ たいしたことなさそうなのに……………。オレにはただの変なやつにしかけどな」

「チツチツチツ…………… 甘いですよクリリンさん。あの人、かなりの実力者です。ドライグも得体がしれないと言っていましたから」

「えっ…………… ドライグって確か、オマエの中にいるドラゴンなんだよな？ 確か、人造人間なんかの気配も探れるっついう……………」

「そうです。そのドライグですよ」

「うへえ…………… っつてことはまた難易度が跳ね上がるのか…………… 勘弁してくれよ……………」

心底嫌そうに顔を歪めるクリリンさんを隣を歩いていったエルシヤさんが宥めている。相変わらず仲睦まじそうだなによりだ……………。



その次は悟菜帝<sup>悟飯</sup>が八番を…  
その次の18号が九番……。  
そしてあの少年の番がやってきた。

「シン選手」

「はい」

そうしてあの少年が前に出て審判へと近づいていく。  
アイツ、シンって言うのか……。

『いや、相棒…アレはおそらく偽名だ』  
えっ…？なんで分かるんだドライグ

『ただの勘だ…特に理由はない』

勘て…なんだよそれ……

そんな会話をしていると、シンと呼ばれたその少年はくじを引き終え、三番を出していた。

その後も、続々と選手たちがくじを引いていき、やがて戦う順番が決定した。

そしてグラサン審判から声が掛けられる。

「はい——！！以上のように決定致しました——  
——っ！！」

そうして大きく試合の順番が張り出される  
そこには上から……

第一試合 クリリンVSプンター

第二試合 シンVSマジユニア

第三試合 ビーデルVSスポポビッチ

第四試合 キビトVS悟菜帝

第五試合 18号VSミスター・サタン

第六試合 孫悟空VSベジータ

第七試合 孫悟誠VSエルシャ

第八試合 マイティマスクVSヤムー

となっていた……………。

オレの相手はエルシャさんか、くうっ!!こんなところ歴代の先輩と戦えるなんてワクワクしてくるな!!

『なにを孫悟空のようなことを言っているのだ相棒…』

オレワクワクしてきたぞ!!って違うわ!!

『何を一人ノリツツコミをしているのだ…』

唐突な一人ノリツツコミをドライブに呆れられていると、エルシャさんが近づいてきて話しかけてきた。

「あなたが初戦の相手なのね、悟誠くん。まさか、こんなところで世代を越えた戦いをする羽目になるなんてね…。けど、やるからには手加減はしないわよ?」

「はい!こつちも全力でいきますよ!歴代最強の先輩の力見せてくださいー!」

俺がエルシャさんと火花を散らしている間、選手たちもそれぞれ言葉を交わし合いその火花を散らしていた。

「試合はすぐに始まります。選手の皆さんは控え室へどうぞ、控え室はこちらになります」

そう言っただすグラサンの審判の後を追って俺たちも歩きだす。

遂に始まるんだな… 天下一武道会が……………

内心でワクワクしている今の俺は知らない……………

この後、そんなことを言っただられるような状況ではなくなっていくことを……………。

訪れる暗雲。動き出した闇の者たち！

side 悟誠

あの後、宇久にクリリンさんの出る第一試合が始まった。クリリンさんお初戦の相手は、プンターとかいう太ったちよんまげの男だった。

対戦相手であるクリリンさんを煽りに煽り、挙句、敢えて自分を攻撃させるという愚策に出てあっさり打ちのめされていた。やめときやいいのに馬鹿な奴……

そして迎えた第二試合はピッコロさんとあの不思議な少年、シンだった。

どんな試合が見られるのかと注目していたのだが、意外なことにピッコロさんが棄権してしまい、シンの実力は分からずじまいだった……。

そして続く第三試合、現在行われている試合はともかく異様だった。

戦っているのはビーデルじゃじゃ馬娘とスポポビッチとかいうハゲの大男だ。

そこらの男であれば、じゃじゃ馬娘の敵じゃないと思っていたが、じゃじゃ馬娘がどれだけ攻めようとも倒れる心配がない。

殴れど蹴れど、首を折ろうが倒れることなくアイツに挑みかかっていく。

やがて体力が尽き始めたビーデルじゃじゃ馬娘が押され始め、やがて一方的に蹴られ始めた。

間一髪のところだ悟飯や俺から教わった武空術で空へ逃げるが、スポポビッチも同じように……いやそれ以上に高くまで飛び上がり、ビーデルが使えない気合砲で空へ逃げたビーデルじゃじゃ馬娘を会場まで弾き落とした。

これには父さんや俺たちも驚きを隠せなかったが、敢えて弱く撃つたというのとはすぐに理解出来た。



「あ…… あいつ…… なんで…… !!」

「…… ヤツは自分の能力を遥かに超えた力を持ってしまっているらしい……。」

「え…… ? どういうことなんだ? 父さん」

悟飯の言葉に父さんが答え、その言葉に俺が再び疑問を投げる。

「…… オラにもわからねえ…… どういうことだ……。」

そんなやり取りをしている間にもリング上での一方的な蹂躪は止まらない。

体力が尽き、動きが鈍いビーデルじゃじゃ馬娘をスポポビッチは嘲笑うかのよう  
にいたぶつていく。

チツ…… 胸糞悪いことしやがって…… !!

『…… 今出ていくなよ? 奴も様子はおかしいが、あの娘を殺すことはしないはずだ……』

…… ああ、分かっているさドライブ……。

『ならいい…… アイツも降参すればいいが、負けん気が強い奴だからな…… やろうとはせんだろう』

ああ、俺もそう思う…… じゃなきや、俺達に絡んでこようなんてしないはずだ……。

隣で必死に叫ぶ悟飯を見ながら俺は煮えくり返っている腹を無理矢理抑え込む。

あまりの怒りに自身の変装が解け、スーパー超サイヤ人になってしまっている悟飯。

それを父さんやクリリンさんが止めるが悟飯は聞かない。

今にも飛び出して行きそうな悟飯を他所に俺は会場に目を向ける。  
するとそこには会場の裾の壁に立っていたヤムーと呼ばれた選手が叫んでいた。

ヤムーはリング付近にまで近づくとスポポビッチに向けて叫んだ。

「我々のすべきことはこんなことではないはずだ、さつさと勝つてしまえ」

そんな言葉が俺の耳に聞こえてきて、俺はピクリと反応する。

やるべきこと……？ どういうことだ……？ 試合をしに来たという感じではなかった……じゃあ……

『今は様子を見ておけ、相棒』

あ、ああ、分かったよドライグ……

ヤムーに叱り飛ばされたスポポビッチはビーデルをそのまま場外へと投げ飛ばした。

地面に投げ飛ばされるビーデル。それを見ていた悟飯が超化を解き一目散にビーデルのもとへと駆けていった。

その時、リングを降りようとしているスポポビッチに何やら言っていたが、俺にはよく聞こえなかった。

そのままビーデルを抱えて医務室へ向かう悟飯、何かを見越して父さんは仙豆を貫いにカリン塔へと瞬間移動していった。

そしてすぐに戻ってきた父さんは一粒を悟飯に渡し、悟飯は急いで医務室へと走っていった。

少しして戻ってきた悟飯は急いで会場へと向かっていった。

遂に第三試合が始まろうとしていた……

「……………」

さつきから私の夫、悟誠がずっと黙ったまま口を開かない。

それに、先ほどの試合を見てからは醸す空気が変わった。

表情などには出てないが、アレは怒ってるな。

さつきの試合は私から見ても醜いものだった……………。

うちの旦那は仲間や親しくなった奴、少しでも知り合った奴を大切に  
にする優しすぎる性格だ。

そんな旦那が少しの期間だけとはいえ、鍛えた奴をいたぶられた。  
それは稽古をつけたものとしては複雑な思いだろう。

きつと今頃悟飯の腹の中は煮えくり返ってるに違いない……………。

そんな悟誠が視線を向ける先には次の対戦相手である孫悟飯とキ  
ビトとか言うやつの試合が始まろうとしている。

私もそちらに視線を向けた。

「……………」

「~~~~~」

そこに見えたのは戦いではなく何かをリング上で話す二人の姿だった。

どうやらあのキビトとか言うやつに孫悟飯が反発しているようだ。

「なんだよ、なんか話してんな……」

「……<sup>スーパー</sup>超サイヤ人になれ…… ってさ…… あいつ……」

ハゲのチビ…… クリリンとか言うやつ言葉に孫悟空が答える。

旦那は何も言わずにその試合を見つめている。すると……

「悟飯！」

今まで黙っていた緑の男、ピッコロが急に大声を上げた。

うるさいね…… 急に叫ぶなんてさ……

しかし大声に反応して孫悟飯がピッコロの方を見る。

ピッコロは黙ったまま頷いてた。

へえ、<sup>スーパー</sup>超サイヤ人になれて言うことか。

「な、なんだピッコロ！何かあるのか!?!」

孫悟空から戸惑いが入った問いが飛ぶ。

「な…… なにかはわからない…… だ…… だが……」

いつになく歯切れの悪いピッコロ。

なんなんだいさつきから、焦れたいね……!

そう思っていると、二試合前に戦ってたシンとかいう選手が孫悟空たちに近づいて口を開いた。

「悟飯さんを利用させていただきませ…… 申し訳ありません。そして皆さんは、これから何か起こってもしばらく動かないでいただきたいのです…… どうか、よろしく……」

その直後、うちの旦那が動き出したのだった。

シンに掴み掛かり胸ぐらを持ち上げるといふ形で……

爆発寸前!? 持ち堪えろ孫悟誠!!

side 悟誠

「おい… オマエ… 今なんて言った? もう一回言ってみろ…」

「…………… つ… ぐ… ぐ…!」

俺はシンの胸ぐらを掴み思い切り自分の方へと引き寄せ、睨みつける。

許せねえ… コイツは今なんて言った? 悟飯を利用するって言った…。ただでさえ稽古をつけた奴がボコされて腹が立って仕方ないって時にコイツは更に俺に油を注ぐのか? どうやら骨も残さず殺されたいらしい……………

「界王神さま!? 貴様… !! 無礼だ… …… つ!?!」

そう言つて割り込もうとしてきた赤い大男に殺気混じりの睨みを聞かせてやる。

恐らく今の俺の顔は激怒した赤龍帝ドライグのようになっていだろう。

現に大男はその場から大量の汗を流し動けないでいる。

他の出場者も気絶しているか目を逸らして冷や汗をダラダラと垂らしている。

「ぐ、悟誠… ちつと落ち着けて…」

その様子を見て父さんが慌てて声を掛けてくる。

「… 父さんは悔しくないのかよ、息子が利用されようとしてるんだぞ…」

「いや、話だけでも聞いてやったっていいだろ…?」

「何をするつもりかも語ろうとしない、それが嘘の可能性だつてある

「んだぞ…」

「け、けどよお…」

そこで父さんは何も言えなくなってしまう。当然だ、俺の言ってることは正しくはないかもしれないが、少なくとも間違いじゃないんだから

コイツがなんだろうが関係ない、真実を話す気がないなら、ここで… 殺す!!

そう決めて奴を締める手に力をさらに込めた時だった。

「は… 話します… 全てを…」

シンが苦しそうな表情のまま口を開いた。

「… 信用できると思うのか？」

人間かどうかとも怪しい… こうやって俺達を油断させて葬るつもりだろう…

「おい、悟誠… いい加減にしなよ？」

ふと、後ろから声が掛けられる。

「18号…」

「弟を利用するって話を聞いて内容も聞かずに怒る？ アンタはガキか、少しくらい話を聞けばどうなんだい？」

「… けど」

「… アンタの事だから、弟子見習いがやられた所に孫悟飯を利用するって言われて堪忍袋の緒が切れちゃったんだろう？ けどね、今ここでソイツを殺したら何も分からなくなるんだ、孫悟飯が利用される以上の酷い目に遭うかもしれない、お前の家族がみんな殺されることが

あるかもしれない…。この星そのものが消えてなくなるかもしれない…。そうなった時にアンタはどう責任を取るつもりだい？」

「……………」

俺が原因で、父さんや母さんが死ぬ…。？18号や娘…。仲間たちが…

それはダメだ…。そんなことになったら俺は生きていられる自信なんてない…………

魂だけの存在になったとしてもそこから更に死を選ぶだろう…………

そんなことになるのなら、少くくは話しを聞いてやってもいいかもしれない…………

そう思えたら、自然と奴を締める手の力は緩んでいた。

「ゲホツゲホツ…。うっ…。ゲホツ…。!!」

急に息が出来るようになり、激しく咳き込むシン。

その背中を18号が後ろから軽く摩っている。

そしてしばらくしてシンの息が整ったところでふと、18号が口を開いた。

「うちの旦那が悪かったね…。どうも怒りに我を忘れる癖があつてね…。」

「……………いえ、私も短慮過ぎました。申し訳ありません」

そうして息を整えたシンは表情を引き締め、言った。

「お話しします…。私たちの正体と、ここに來た理由を…。」



## 明かされる真実！界王神と魔道士ビビデイ

side 悟誠

「要するに、その魔人ブウってのを甦らせなきゃいいんだな？」

「その通りです……。しかしそのためには、魔道士バビデイを倒さなければならぬ……。」

そんな会話を聞きながら俺は前を飛ぶ二人を追って海の上を飛ぶ。

その後、18号に止められた俺は男から話を聞いた。

男によると、自分は界王神というらしく、宇宙の頂点に君臨する創造の神なのだそうだ。

そんな神がなぜあんなことをしたかと言えば、とある魔道士を見つけ、倒すためだということらしかった。

魔道士の手先があそこ武道会会場に現れることを読んで、あの場に潜伏していたとの事……。

そしてその魔道士の手先というのが少し前に弟子見習いを酷い目に合わせてくれたあの筋肉ハゲ、スポポビッチとかいう出場者達だった。

その後、キビトと悟飯の試合に乱入してきた二人が超化した悟飯に襲いかかり、彼方へと飛び去って行ったんだ……。

それをすぐさま追いかけた界王神さまが同じく空の彼方へと飛んで行った。

その後を追おうとしたところでちよつとした一悶着があつたのだが、それは置いておくかな……

襲われた悟飯はキビトが治すと言っていたのでそれを信じて俺たちもすぐさま界王神さまの後を追つたんだ。

そしてその道すがら、目的の魔道士バビディについて話を聞き、最初の会話に至る……

特に会話に口を挟むことなく後を追つて飛んでいると、悟飯たちが合流してきた。

刺されたというのに元気に飛んできた悟飯を見て俺たちが喜んでいると、界王神さまが口を挟んできた。

「!…… 降り始めましたよ……!」

その声に俺たちは気を引き締める。

すると当たりを見回していたキビトが訝しげに呟いた。

「…… おかしい…… この辺りも一応、調べたはずだが……」

その呟きを耳にしつつ、俺たちは近くの岩陰に身を隠し気配を殺し、様子を伺う。

そんな俺の視線の先にあったものは果てしなく広がる荒野の中に一軒だけポツンと立っている家のような建物だった。

なんつーか、ナメツク星人の家みたいな奴だな……………。

『相棒、あれは恐らく擬態の一種だ、横で孫悟空や界王神が話しているだろう。あの下に宇宙船とやらを隠しているんだらうよ。敵の存在に気づいていなければ、そんなことはせんだらうがな……………』

ドライグ…………… ああ、確かにその通りだな……………。

その後、ピッコロさんが攻撃の提案をするものの、それは界王神さまによって止められ、様子を見ることになった……………。

そうして少し様子を伺っていると、中から二人の人物が出てきた。片ややたらデカイ耳の大きな男かと思えば、片や小さい老人のような見た目のローブを纏った男のような人物……………。

なんか、やたらアンバランスな二人が出てきたけどなんだアイツら……………。

『相棒、気をつけろ…………… 特に後ろのあのデカイ奴にはな……………』

えっ…………… ? そんなにヤバいのか? ドライグ

『ああ、何故かはよく分からないが、とてつもなくおぞましい力を感じる……………。』

そんなに…………… 分かった、用心しとくよ……………。

そういった直後、事は唐突に動きだした……………。

# 強襲！暗黒魔界の王ダーブラ！

side 悟誠

『用心しろ。。。』

ドライグにそう忠告され、俺は五人の様子を伺う。。。少し様子を見てみると、五人の様子が変わった。

正確にはアジトに戻って来たらしいスポポビッチの方이었다。

スポポビッチとヤム  
二人が中から出てきた二人に向けて何かを手渡し、なにやら会話をしていた時だった。

スポポビッチが突然もがくように身を振らせ始めた。

な、なんだ。。。!?

更に様子を伺っていると、スポポビッチの姿が膨れ上がり始め、そして。。。。

【ボンッ】

そんな音を立てて弾け飛んだ。

「あっ。。。!!」

悟飯が驚愕した声を上げる。

『。。。惨いことをする。。。仲間じゃなかったのか。。。』

『いや、ありや仲間つつうより捨て駒だな。。。さしづめ使いパシリのいい奴をコマにして使う。。。胸糞悪い野郎だ。。。』

ドライグとバーダックさんが俺の中で会話するのを聞きながら俺は複雑な気持ちになる。。。。

こんなひでえこと。。。あるかよ。。。。

アイツらは奴らを信じて着いてきたんじゃないのか。。。洗脳されたにしたらって、それでも言うことを聞いて着いてきてくれてたんじゃないのかよ。。。。

これが。。。コレが魔道士のやり方かよ。。。!!

俺の中で怒りがふつふつと湧き上がる。

悟飯をやられた時とはまた違う怒りが湧いてきて、俺は飛び出しそうになる。

「!!やめろ悟誠!今は様子を見るんだ!!」

父さん: : ではなくクリリンさんが俺の様子に気づいて慌てて止めてくる。

「けっ: : けどっ: : !!」

「お前が怒る気持ちも分かる: : だが今はまだ動く時じゃない: : 。

もう少し、もう少しだけ待つんだ!」

: : : : : そうだ、怒るのは今じゃない: : : : 。ここで爆発させてもいいことなんて何も無い: : : 。今はこの怒りを溜めよう: : : 。来るべき時に備えて: : : : :

真剣な表情のクリリンさんの言葉に俺は冷静になり始める

「: : : : : 分かりました。クリリンさん、ありがとうございます。お陰で頭が冷えました: : : : : 」

「あ、ああ: : : : : それなら良かった: : : : : 」

「二人とも、見ろ: : : : : ヤムーとやらも殺られたぞ」

そんなピッコロさんの言葉に俺が前を見ると、そこでは確かにヤムーが爆散させられていた。

どうやらスポポビッチがやられたのを見て逃げ出した所を狙われたみたいだ: : : : :

逃げ出す奴まで: : : : : どこまで: : : : : ヤツらはどこまでやりや気が済みやがる: : : : : !!

怒りを溜め込みながら俺はヤツらの様子を伺う。

すると、魔道士バビディと呼ばれた男は再び中へと消えていき、  
ダーブラと呼ばれた大男のみが残った。

どういふことかと様子を見てみると、ダーブラが不意に不敵な笑み  
を浮かべてこちらを見ているじゃないか……

ま、まさか……!!

「バレているぞっ!!オレたちのこと……!!」

ベジータが慌てたように大声をあげる。

その後、ダーブラが動き出した。

一直線に俺たちの方へ飛んでくる。

やべえ……何とか迎え撃たねえと……!!

『相棒!奴の軌道上、狙われているのはキビトとやらだ!!』

なんだってっ……!!だとしたら守らねえと……!!

「バランスブレイク!!だああああああつ!!」

『Welsh Dragon Balance Breaker  
!!!!』

『そんな機会音を聞く前に俺は動き出し、渾身の蹴りを繰り出すの  
だった。』

キビトを守れ！悟誠決死の防衛戦！

sideクリリン

「させねえ!!いくぞドライブグ！バランスブレイク!!おらあああああ  
ああっ!!」

『Welsh Dragon Balance Breaker  
』

!!!!  
「ダーブラとか言う奴が動き出した途端、悟誠が例の赤い鎧を纏って  
飛び出した。」

「顔面に打ち込むように放たれる拳、それをダーブラは容易にそれを  
防いだ。」

「ほう...？ワタシの動きを察して迎撃してきたか... だが、それが  
どこまで通じるかな？」

「..... さあな、今度はその頭吹っ飛ばしてやれるかもな」  
す、すげえ... 今の悟誠の動き... 全く見えなかった.....

「いけません悟誠さん!!あなた一人では...!!」  
「界王神さまが慌てて声をかけるが、悟誠はその前に動き出して  
いた。」

「喰らえ!!ドラトルショットオ...!!」  
すると悟誠の手から紫色の閃光が迸る。  
閃光は一直線にダーブラへと迫るが.....

「..... フッ」

不敵な笑みと共に弾き飛ばされてしまう。

「チツ… やっぱあの程度じゃダメか」

悟誠も分かっていた上で撃つたらしい……

どうやら二人とも本気を出していないようだ……

そうして見ていると再び二人の姿が消えた。

ど、どこだ…!?

慌てて探ると、更に上空でぶつかり合っている二人の姿が見えた。

お、オレ… ここに着いてきて大丈夫だったのかな…… 着いて

いける気がしねえや……

オレは目の前の戦いからそんな予感を感じずにはいられなかった……

◆◆◆ S I D E C H A N G E ◆◆◆

ダーブラとかいう魔王と戦い出して少し……

クツソ… やっぱし強え… マトモに変身する時間がねえ…!!

ダーブラの攻撃を防ぎながら、俺も攻撃をしつつ隙を伺っているんだが… 全然そんな隙を見せやがらねえ……

『この変身は悪手だったかもしれない……』

ああ… というか、オレの変身は他よりも時間が掛かるからそこが難点だ……

こういう相手の時は本当に選択を迫られる……

そんなことをしながらダーブラに蹴りを放つもその足を掴まれ俺はぶん投げられてしまう。

「ハアッ!!」

「うわっ…!!」

余計なことをしていたせいで立て直しも出来ずに俺は地面に叩きつけられる。



「がはっ…。」

身体から息が吐き出される…。が、目だけはダーブラを捉える。するとダーブラが何か口をすぼめて体を逸らし始めた。

なんだ…。？いったい何をする気だ…。？

そしてダーブラがいきなり俺に向けて唾を吐きかけて来た。

唾…。！？なんでそんなものを…。

『相棒!!直ぐに伏せろ!!アレに当たるとんじやない!!』

……………っ!!(ゾクツ…!!)

オレは慌ててその場に倒れ、伏せる。

俺の上を通り過ぎた唾が地面に付着する……………

すると、その地面がいきなり色を変えて固まりやがった……………!!

「悟誠さん!!奴の唾に触れてはなりません!!奴の唾に触れたものは石化してしまいます!!」

界王神さまが後方から教えてくれる。

石化だって…。！？そんなもんだらひとたまりもないじゃね

えか!!

いや、だが待てよ？逆に考えれば、それ以外の脅威はないと考えてもいいのか……………？

「へへっ…。つまり奴の唾に気をつけりゃいいんだな？そんなら簡単だ、ぶっ飛ばす!!」

「フッフ…。愚か者め、その自信ごと貴様のキリを奪ってやる…。」

そして再び俺たちはぶっかかり合うのだった

乗り込め宇宙船!! 魔人ブウ復活を止めろ!!

side 悟誠

「はあッ... はあッ... はあッ...」

「フッフ、どうした？息が乱れているぞ？」

チツ... 分かってやがるくせに、イヤな野郎だ...  
戦い始めてしばらく、俺は未だにダーブラと対峙していた。

『何か手はないのか？相棒』

ドライグ、残念ながら何一つだ...。

『やはりか... そんな相棒に残念な知らせだ...』

な、なんだよ... まさか...

『そろそろ一禁手《バランス・ブレイク》化が切れる...』

なっ... !?なんでだよ!! まだかなり時間が残ってるはず...。

『アレだけ派手に力を使っていたんだ... 時間を大幅に使ってもおかしくはない...』

そっ... そんな... !?じゃあ...

『ああ、あと数手も打ち合わないうちに鎧が解除される...』

っ... !そんなの... どうしろうてんだよ!!

『どうにかやり過ごせ... いや、生き残れ、相棒...』

チツ... 無茶言ってくれんな... ドライグ... わかったよ、やってやる!!

男、孫 悟誠!! 孫家の長男の力、このデカブツに見せてやろうじやねえか!!

『フツ... 応、赤き龍帝の力... とくと見せてやろう!!』

そうした直後、オレの鎧が解除される。

「...! どうした？もう諦めたのか？」

「ハッ!!お前なんざ、アレを使うまでもないってことだよ...」  
さあ、来い... 手痛いカウンターを喰らわせてやる...」

「..... 大きく出た... ん?」

と、いきなりダーブラの野郎が動きを止めた。

なんだ... ? いきなり不自然に止まりやがった.....

『罨かもしれん、相棒、下手に動くなよ?』

わかってる...。何をしてくるつもりだ..... ?

「..... 小僧、残念だが、ここまでだ」

「なつなに... !!」

「お呼びが掛かってしまったのでね...。フツ、できる部下というものもツライものだ...」

そうして踵を返すダーブラ

「ま、待て!!逃げるってのか!!」

「..... 戦いたければおってくるがいい、その仲間達と共にな...」  
そうしてダーブラは宇宙船の中へと消えていってしまった。

「..... 言われなくても、行ってやるよ」

俺は父さんたちと合流すべく、その場を後にした。



「悟誠、おめえ、よく無事だったな...」

俺が戻ってくると、父さんがいの一にそう言ってきた。

「はは… 本当に運が良かったよ、途中で変身が解除されたと思ったらアイツ、何もせずに戻って行っちゃまって…」

「そうだ、まるで何かに戻るように言われたみたいにな…。」

「なんにしても大したことなくてよかった…。けどな悟誠、もうあんな無茶はするな…。そんなことで死んだら、元も子もねえんだぞ…」

「うっ…。確かにそうだけど…」

「と、そこに割り込んで来る者がいた。キビトだ…。」

「待て、孫 悟空、孫 悟誠が飛び出したのは私を守るためだ…。そうだろう?」

「!!このおっさん、気づいてたのか?!」

「!そりゃ、本当か?悟誠…?」

「…。こうなりや仕方ない…。説明するか。」

「ああ、俺はダーブラの奴が誰に狙いをつけているのか分かっていたから動いた…」

「そうして事のあらましを説明していくと、父さん達は納得してくれたようだった。」

「その後、キビトや界王神さま達が感謝をしてきたりと一幕もあったが、今はそんなことしている場合じゃないとそこで話は区切られた。」



「では、ダーブラはそう言っていたのですね」

「…。はい、確かにそう言っていました…」

「界王神さまの問いに俺はコクリと頷く。」

「フンツ、ならさつさと行こうぜ！どっちみち乗り込むつもりだったんだ、向こうから呼んでるならさつさと乗り込むだけだ」  
ベジータさんが強気にそう話す。

「お待ちなさい!!このまま乗り込んで敵の思うツボ!!罠の可能性が高い以上下手に乗り込むのは下策です!!」

「へへっ、悪いな界王神さま、オラ達、難しいこと考えんのは苦手です...」

そう父さんは界王神さまにそう告げると思い出したようにクリリンさんたちの方に向き.....。

「クリリン、ピツコロ、おめえ達は戻った方がいい。コレは思った以上にヤバそうだ」

「あ、ああ... そうさせてもらおうかな...」

「..... 癪だが、オレもそうさせてもらおう、もしドラゴンボールに何かあれば事だからな」

特に問題なく引き下がってくれた二人に安堵しつつ、俺は今後のことを考える.....。

ダーブラのやつは中で俺達を待ってる... 魔人ブウを倒すために俺は行かなきゃならない... 大丈夫だろうか... もし死んだらあの二人は俺を許してくれるだろうか.....

.....許してくれないかもしれない

だが、やっぱり俺はこの事を放っておけない... 何よりも.....

『何よりも... なんだ? 相棒』

ドライグ、強い相手と戦えると思うと、ワクワクしてくるじゃねえか!!

『……お前も、根っからの戦闘民族になったな、だが、そうでなく  
ては面白くない！戦闘民族サイヤ人、そして、このオレ、赤龍帝ドラ  
イグに楯突くものをぶっ飛ばしに行こうじゃないか!!!』

ああ、行こうぜドライグ!!強い奴と戦い……地球を守るために……  
!!

こうして、俺達はバビデイの宇宙船へと乗り込んで行くのだった。

待ち構える第一の刺客!!挑め先発ベジータ!!

side 悟誠

ダーブラの消えていった建物の入口に着き、中を覗き込む。  
中は下に降りていく構造らしく、穴が空いているだけだ。

「よし、いくぞ!」

「はいっ!」

父さんの声に悟飯が答え、そのまま俺たち四人は穴の中を降りていく。

降りていった先は、開けた空間だった。

「なんだ!?! ここは…… やけにさっぱりした部屋だな」

「あそこに」つだけ扉がありますよ。破って行ってみましょう!」

「待て待て、まだ全員揃ってないぜ?」

そう言つて悟飯を止める。直後、界王神さまとキビトさんが同じく降り立った。

「なんだ! 界王神さまも結局きたのか!」

「あなたたちがムチャをするからですよ……」

「私は、界王神様に従い護るのみ……」

いやホント……すみません…… 戦闘バカで……

「この船は一度中に入ってしまつてしまうと、もう出られませんよ…… 恐らく、バビディを倒さない限り……」

「へええ……??」

「ふん……いざとなればこの船ごとぶち壊してでも出てやるさ」  
相変わらず物騒だなベジータさん……。

しかしそれに界王神さまが猛反論する。

「いけません!! 強いショックを与えてしまうと魔人ブウが目覚めて  
しまいます……!!」

「…まだ、エネルギーが完全ではないとはいえ……。それでも、  
我々を殺し、僅かな時間でこの地球を滅ぼすくらいの破壊力は持って  
いるはず……。」

そんなヤバイ奴なのか… 魔人ブウ……。

そうして界王神さまの話聞いていたところ、ベジータさんの後ろ  
のドアが開いて、一人の人物が現れた。

ソイツは、白く縦に長い頭に、謎の白いコスチュームを纏って不敵  
に笑いながら口を開く。

「バビデイ様がおられるのはこの一番下のフロアだ……。ただ  
し……。」

「残念ながらこのオレを倒さなければ下へは行けない仕掛けになって  
いる……。つまりお前たちは、ここでおしまいということだ。クツ  
クツクツク……。」

やけに自信满满だけど… コイツ…… マジか……。

そう考えるオレと同意見だったのか、父さんが軽い口調で返した。

「いやあ、多分そんなことはねえと思うぞ」

「……なに？」

訝しむソイツを他所に俺たちは互いに向き合う。



「さて、ますまは誰からいきますか？」

「ここはジャンケンで決めようぜ！ 勝ったやつが最初だ!!」

「ふんっ…いいだろう」

「腕がなるな!! 負けないぜ!!」

俺を含めた四人全員が不敵に笑いながら手を出し合っている……そして……

「最初はグー…ジャンケンポン!!」

そして出たのは全員が握り拳のグー……

くっ…次こそは…!!

「二あいこでしょっ!! あいこでしょっ!! あいこでしょっ!! あいこでしょっ!!」

何度も何度もあいこが重なりなかなか勝負がつかない……。それを不思議そうに見る白い奴と界王神さま達……。

やがてこの勝負にも終わりがきたのか、ベジータさんがパーを出し、俺たちがグーで負けた……。

「よし、まずはオレからだ」

不敵に白い奴に向かうベジータさん。それを慌てて声をかける界王神さま。

「ひ、一人でたたかうきなのですか!?!」

「当然だ、あんな奴、一人で十分だろ」

まあ、俺もそう思うし、間違いないと思う……。

大人しく待っていてくれた白い奴も強気に始めた。

「ふひひひひつ… バビテイ様が強いエネルギーを持ったやつだから気をつけると仰ったが、どうやらただバカなだけらしいな…」  
うわあ… コイツら全然分かつちやいやがらねえ…。

「バカはバビテイってやつの方じゃないのか？ よく調べないから後悔することになるんだ。この世で一番強いヤツがよりによつてこの地球にいたとはな」

「いちばん強い？ がははは!!! コイツは本格的なバカだぜ！」

いや、馬鹿だろ本気で…。

ベジータさんの実力くらい把握しとかねえと話にならねえよ…。

「敵を舐めてはいけません！ バビテイはそこらじゅうから強い戦士だけを集めて仲間にいるのですよ!!」

何やら界王神さまが父さんたちに警告しているけど、それ意味がないと思うし…。

ベジータさんと白い奴はまだ話してるし…。早く始まらねえかなあ…。

と、思ってたたら唐突に話が終わって戦いが始まった。

高速で白い奴がベジータさん目掛けて蹴りを放ったが、ベジータさんは難なくそれを受け止め、蹴りを返す。

壁際まで飛ばされ、叩きつけられる白い奴。

「うぐつ… おのれ…」

そうして、顔を上げた時にはベジータさんは目の前にいて、再び蹴りあげられる。

天井まで蹴り上げられたソイツは壁を蹴り離脱を測る。

だが、それよりも早く動いたベジータさんに連打を喰らっている。そんなことが続いていたら、突如、部屋の姿が何処かの星のように

変わった。

それに気がついた白い奴が何やら強気に出始めるが、ベジータさんや俺たちにとって重力なんかはあっても無いに等しい。

そのまま、一瞬で距離を詰められた白い奴は、ベジータさんから至近距離で気功波を受け砕け散って行くのだった

## 攻め込め戦士たち!! 下層にて待ち受けるもの

side 悟誠

「ふんっ…。バビデイのヤロウ、つまらん相手を寄越しやがって……………」

ベジータさんが不機嫌そうにそう呟くのを見て俺は心の中で苦笑する。

あの程度の相手にベジータさんが遅れをとるとは、俺も思っただけで、まさかあんなあっさりとは……………」

やられた敵にも同情しちまうよ……………」

『相棒でも同じことになったと俺は思うが?』

まあ、俺もアイツ程度にやられる気はしないな。まだダーブラってやつの方が強かったよ

「おっ!! みるよ、下へ行く穴が空いたぞっ!!」

「エレベーターみたいになってるみたいですね、なんだかテレビゲームみたいですよ!!」

「くだらんゲームだ」

「お——い、悟誠に界王神!! 行こうぜ——っ」

っと、話し込みすぎた……………」

「いま行くよ、さ、界王神さま、行きましょう」

俺もそれだけ告げると、父さんたちの後を追って飛び降りていくのだった。



下の階へと降り立った俺たちは、次の相手が出てくるのを待っていた。

ジャンケンの順番で、次に戦うのは父さんだ。

「お——い、まだか——！ 早く出てこーい!!」

「くだらん、床をぶっ壊して一気に下に行つたらどうだ」

ベジータさん、不機嫌丸出しだよ……。さっきの戦闘の不満だけじゃなくて、父さんや俺と戦えると思つてたところにこんな邪魔が入つたから余計にイライラしてるんだろうな…………。

「い、いけません!! 先程も言ったように強い衝撃を与えてしまうと、フルパワーでないにしても魔人ブウが…………」

界王神さま、やたらソイツを警戒してるけどそんなになのか……？  
ダーブラとかもそうだったけど、さっきのヤツを見る限り、そんなに強いとは思えないんだけど…………

「ふん……。このぶんだと魔人ブウというやつも、大した事はないんじゃないか？ 悟誠だつてそう思ってるはずだ」

えっ、俺……？

「いやあ……。はは、まあ……。かもしれないっすね」

「チツ……。ムカつく野郎だ……。さっきの戦いだつて本気なんか出しちゃいけないくせに、あのダーブラとかいうやつ相手にあんな戦いをしやがって」

怖い怖い……。!! そこまで俺と戦いたいのかよ、いや分かるけど……。俺より父さんの方がずっと強くなつてると思うんだけど…………。

「えっ!? ダーブラが……。!? どういうことですか?」

「あのダーブラってのは、あんた達が恐れていたほどのヤロウじやな

さそうだつて言ってるんだ。さつき、外でのコイツと戦ってた時の動きを見てりやイヤでも分かる、アイツはツバさえ気をつけりやなんとかなりそうだった。反応出来なかったキビトがドジなだけだ……」  
うん、まあ……それは俺も思ってたよ。  
でも、なんか見捨てたくなかったんだから仕方ないだろ……。

「……………」

あ、界王神さまが啞然としてる……。

父さんにも同じこと聞いてるけど、似たようなこと返されてるし、しかもそれ聞いてまた啞然としてる……。

きつとサイヤ人のとんでもなさに驚いてるんだろうな

そんなことをしていても、敵さん、全く出てくる気配ないんだが……。

「おい~~~~!!早くしろつたらよーっ!! 今度はオラの番なんだよな~~~~!!」

あー……父さんが痺れを切らし始めた……。

と、思ったところで閉じていた扉が開く……。

「おっ!」

そんな父さんの声を他所に、出てきたのは…… 化け物だった。

うわあ…… 何だこのブサイクなヤロウ……

「うつひやあ~~~~っ!!なんだこいつは!!」

父さんですらあまりの造形に素っ頓狂な声をあげてるぞ……

『ゴホホホ…… どいつから食ってやろうかな』

ってコイツ喋れるのかよキモチワルっ!?

「オラがおめえの相手だ!! …… なんだかトロそうなやつだなあ……」

と、父さんってほんと物怖じしないよな…俺、気持ち悪くて仕方ないのに……

「あ…あれはもしかしてヤ…ヤコン…魔獣ヤコンでは!!!?」  
界王神さまがなにか呟いてるのを他所に二人の戦いが始まった

ヤコン（界王神さまがそう言った）が見た目からは想像出来ない速度で父さん目掛けて攻撃を仕掛けては間一髪で全てを避けられている。

多分父さん一人でなんとかなるよな、あれくらいのヤツ……  
そんなことを考えていると何処からか上の階の時にも聞こえてきたバビデイの声聞こえてきて、辺りが真つ暗闇へと変化した。  
父さんやヤコンはおろか、近くにいた悟飯や界王神さまの姿すら見えない……

何がどうなってるんだ…?  
と、思っていたらいきなり辺りが金色の光に包まれた。  
眩さに一瞬目が眩んだが、何が起こったのかは把握した。  
父さんが超サイヤ人を発動させたのだ。

金色の光が辺りを明るく照らし出す。  
これなら場の様子が良く見える……  
と、思っていたんだが、不意にヤコンが口を開くと、辺りを照らしていた光が急に暗くなってしまった。

界王神さま達は光を食べるとかなんとか……  
おいおい…なんか厄介そうだぞソレ……

『いや、相棒、どうやら孫悟空にはなにか考えがあるようだぞ』  
えっ…?

『見てみる…また金色の姿になっている』  
た、たしかにまた超サイヤ人になっている……  
い、いったい何をする気だ……?

少し様子を見ていたら、先程と同じように光を吸い出したヤコンがいきなり破裂した。

あー…なるほど、そういうことか

『考えたな、ヤコンとやらの光の蓄積許容量を遥かに超える光を喰わせる事でオーバーヒートのような状態にして倒す。戦闘に関しては本当に天才的だな…』

ああ、やつぱ父さんはすごい、こんな手で敵を倒すなんて俺には思いつかないぞ…

先に下に降りていく父さんを追って、俺もその後を追って飛び降りるのだった



降りてくぞ下層!! 次なる相手はダーブラ!!

side 三人称

宇宙船最下層、バビデイが水晶から様子を見て絶句して言う。

「……………ば……………爆発した……………ヤ……………ヤコンが……………な……………なん  
で……………なんで爆発したんだよ……………」

「……………愚かな奴だ……………どうやら敵の手に引つかかったようです  
な……………。奴の光のエネルギー限界を超えて食べすぎたから……………」

ダーブラの推測もあながち間違いではない……………

「ち……………ちがう……………へ……………変だったよいまは……………」

ヤ……………ヤコンは……………最後の一瞬で……………一瞬で……………い……………一気に膨  
れ上がった……………」

た……………ただ者じゃないよ……………あいつらやっぱり……………」

バビデイは何か違和感を感じ始めているようだ。

「……………いいです。わかりました。バビデイ様の不安を消してさ  
しあげましょう……………」

ダーブラも意を決したように話す。

「ステージ3はわたし自らいってさしあげましょう  
……………」

……………そしてたちまちのうちに魔人ブウの玉を奴らのエネルギーで  
いっぱいにしてみせますよ」

その言葉にバビデイは不安げに問いかける。

「ダ……………ダーブラ……………お……………おまえがやられたらもう おしまいなん  
だよ……………。勝算はあるんだろうね……………」

その言葉にダーブラは不敵に笑って……………

「勝算？ フツフツフツフツ… わたしは魔界の王なのですよ… 三千キリであろうが四千キリであろうが、私にパワーで勝るものなど全世界で存在しません…」

◆◆◆ side change ◆◆◆

さらに下層に降りてきた俺たちは次の対戦相手が出てくるのを待っていた。

「遅いなあ、いつまで待たせる気なんだろ」

悟飯が中々出てこない対戦相手に一人呟く。

「そう焦るなつて、きつと飛び切りの戦士を用意してくれてんだろ？  
ところで、天下一武道会はどうなつちまったかな」

「俺たち、まとめて抜けちやつたもんな…」  
もう失格になつて続けてるかな？

「フンツ オレはこんなところでつまらん野郎どもを相手するより、  
天下一武道会お前たちと戦いたかつたぜ」

「僕も、父さんや兄さんと戦うの楽しみにしてたんだけどな…」

「それは俺もだよ、今の俺が父さんにどれだけやれるか試したかつた  
んだけどな…」

「それはオラもさ、悟誠はあん時オラを超えてたかんな、あの姿の悟誠  
と戦つてみてえよ」

あははは… あれはデメリットが大きすぎて中々そうできないのが欠点だよな……」

「ははは… 十八号の奴、うまくやってくれてるかな……」

「そーいや悟飯、次おめえの番だけどちゃんと修行してたか？」

「え？ あ、はい、兄さんにつけてもらいました」

だってあんだけ鈍ってたら情けないもんな……」

俺があんなだったらジ（おい…）バーダックさんやドライブグにぶちのめされてるよ……」

『赤龍帝ともあろうものが落ちぶれていて良いわけがないだろう』

まあ、そうなんだけどさ……」

「あの時見たときは随分鈍っていたというのに、殆どその勘を取り戻しているな」

俺がやったんだ、中途半端にはさせねえぞ!!

と、そんな話をしていると扉が開き、次の対戦相手が現れた

最強はオレだ！魔人ベジータ爆誕！

side 悟誠

奥の扉が開き、中から現れたのはダーブラだった。

「ダ ダーブラ……!!」

界王神様が慌ててらっしやる……。

おいおい、もうコイツを出してきたのか？ 敵さん、いよいよもつて手がなくなってきたみてえだな

『いや、待て相棒…… 奴の雰囲気が違う…… 先程までとは大違いだ』  
なんだって!?

ドライグの言葉に俺はダーブラをよく見てみる。

ほ、本当だ…… さつき戦った時とは別人じゃねえか!! アイツ、殆ど本気出してやがらなかったな？

『バランス・ブレイカー禁 手だけとはいえ、俺達も随分と甘く見られたものだな……』  
ちえー…… これだったら三回戦に戦えるように勝てばよかったぜ……

そんなことはつゆ知らず、ダーブラが話し出す。

「ヤコンを倒し、ステージ3までこられたとは人間としては大したものだ、奇跡的とすら言える。褒めてやるぞ……」

「だがここまでだったな、ここからはこの私が相手をする事になってしまった」

コイツ…… 完全に俺達のことを舐めてやがる……

「ふん…… ナンバー1の貴様がもう登場ってことは、相当焦っているらしいな、バビディは……」

「フン……… 無駄口を叩くのはそれぐらいにしてさっさと掛かって  
こい貴様ら纏めてな」

ベジータさんの言葉にも余裕の態度を崩さないダーブラだったが、  
ここで食ってかかる者がいた

「だめだめ!!お前を倒すのは僕の番なんだ!!」

そう、この階層の順番である悟飯だった。

いやまあ、さつきある程度戦い方は見てるだろうし、今の悟飯なら  
さほど苦戦はしないだろうけど………

やっぱ俺がケリつけたかったよなあ………

『勝敗で負けたんだ、仕方あるまい』

そうだけどさあ………

「……… なんだと……… 舐めるのもいい加減にしろよ……… 貴様らの実  
力など既に知りえているのだぞ」

って、なんでそこで俺を見ながら言ってくるんだよ!!

「へっ……… 安心しろよ、俺だってあれが本気ってわけじゃねえからさ」

「なに………」

おーこわ……… 『私相手に本気を隠していただと………』とでも言いたげ  
な顔じゃねえの………

「だーかーらさあ!! お前の相手は僕だって言ってるだろ!!」

おっと、悟飯が痺れを切らして割り込んで来た、これ以上は邪魔し  
ないでおくか

「チツ……… ならまずは貴様から捻り潰してくれろ………!!」

刹那——二人の姿が掻き消えた。



悟飯とダーブラが戦い始めて少し、俺達は荒野に居た。

どうやら地球に近い環境の星へと場所を移したらしい

<sup>スーパー</sup>超サイヤ人へと変身した悟飯がダーブラへとラッシュを叩き込む

《バギイッ》

ダーブラも負けじとそれをガードしているが、振りかぶった悟飯の蹴りがダーブラのやつを蹴り飛ばす

吹き飛ばされたダーブラだったが、すぐさま体勢を立て直し大きく息を吸い込んだ

不味いっ なにかする気だ!!

直後、ダーブラの口から業火が吐き出された。

しかし……

《ビッツ!!》

悟飯の姿が掻き消える

「なっ……!!」

「こつちだ!! だりやあつっ!!」

おお!! 背後に回り込んでのスレッジハンマーツ!!

中々いい動きしてるじゃねえか悟飯のやつ、鍛え直した甲斐があつたつてもんだな

『しかし、勘を取り戻すのにはもう少し掛かりそうだな…… 見ろ、ベジータのやつを』

え? ベジータさんがどうかしたのか?

見てみるとベジータさんは妙にイライラした様子で二人の戦いを見守っていた。

おいおい、何をそんなにイラついてんだよ… 結構いい動きしてると思うんだけどなあ…………

『恐らくは武道会の中から合わせて先程の戦いのことに鬱憤が溜まっているのだろう… そして、孫悟飯のあの戦い方にもな…………』

あの戦い方って… 別に悪かないだろ？ あの時よりウンとよくなってるじゃないか

『ベジータはセルとの戦いの時のあの悟飯を期待していたんだろう、それがあの様な戦いをしているのでイラついているのではないか？

まあ、俺としてはあの時のオレの力も使つて欲しいがな』

あの時の… ねえ…………。

ドライグの力はともかく、あそこまでの力を引き出すにはちつとばつか時間が足りなかつたな…………

『一月であそこまで戻したんだ、上出来だろう、奴は納得していないよ  
うだがな…………』

ドライグとのやり取りの間も戦況は進んでいつている。

見れば、悟飯が超スピードでダーブラ目掛けて突っ込んでいく

「だ——っ!!!」

しかしダーブラは…………

《ペッ》

なっ…!? 野郎ツ!! ツバ吐きやがった!!

「いけない!! それに触れては!!」

界王神様の叫ぶ声、だが悟飯は…………

《ビッ!!》

その姿を消し、ツバを躲しながら再びダーブラの背後に回りこみ鋭い蹴りを叩き込んだ

「ぐはあっ…!!」

しかしダーブラもやられるままではない、すぐさま体勢を立て直す  
と虚空から剣を取りだし悟飯目掛けて襲いかかる。

《ガッ!!》

間一髪その刀身を白刃取りで止めた悟飯はそのままその刀身を降り割った

その様子を黙って見ていたベジータさんが不意に口を開いた

「くそ… イライラするぜ！ よし… このオレが終わらせてやる!!」

「そりやねえぞベジータ!! やらせてやれよ、別にそんなに悪くない戦いしてんじやねえか!!」

「そうっすよベジータさん、何をそんなにイラついてるんですか… 落ち着いてください」

「これが落ち着いていられるものか!! そもそもこんなお遊びはどうでもいいんだ!!」

うおっ!? なんだよ急に……

「オレはこんなことさっさと終わらせてお前たちと早くケリをつけたんだ!! そのためにあんなくだらん武道会にまで参加してやったんだ!!」

「くだらないって… あんたにとっちゃそうかもしれないがなあ、俺たちにとっちゃ楽しみだったんだよ!! 自分だけがそうだと思うってんじやねえよ!!」



『おい、落ち着け相棒』

ドライブグ… 悪い、ちよつと黙っててくれ…

「なっ… 貴様!! このオレが自分だけだとお!？」

「何をそんなにイラついてんのか知らねえけどな、俺だつて父さんやアンタ達と戦えると思つてずっとを楽しみにしてたんだ、こんな事になつてなんとも思つてないわけないだろうがっ!!」

「ぐっ…!!」

「お、おい… ベジータも悟誠も落ち着けよ、今オラ達がケンカしてる場合じゃねえだろ?」

父さんが見兼ねて仲裁に入ってくれる。

「… っ… 悪い、父さん… ちよつと熱くなつちまつた…」

「フンツ…」

ベジータさんも納得してないながらも矛を収めてくれたようだ。その様子を見ていたのか、ダーブラと悟飯の戦いは止まっていた。すると何を企んだか、周りの景色が急に元の宇宙船へと戻った。

「わっ…」

「なに!？」

驚き天井にぶつかる悟飯と、場面が急に変わり声を上げるベジータさん

ダーブラは床に降りるとそのまま奥の扉の中へと入っていく

「お おい!! 逃げるのかお前!!」

しかしダーブラは不敵に笑つて

「逃げる？ フツフツフ違うな…。このダーブラが戦うまでもない  
うってつけの戦士が見つかったのだ」

「な…。なんだって…。!?」

そうしてダーブラは奥へと消えてしまったのだった……



ダーブラが消えて少し…。俺達は困惑していた。

「どどういうことですか!? あいつ…」

「……よく分からねえが自分が戦うまでもねえいい戦士が見つ  
かったって……」

「んな事言っちゃってここに出てきてた奴らはみんな大した力持ってな  
かったじゃないすか」

それともそんな馬鹿みたいに強い奴のことを忘れてて思い出した  
のか？

「見つかった!? ……見つかったって、どういうことなんでしょ  
う…」

「はっ?!?!?!?  
!?!?!?」

界王神様がなにかに勘づいたその直後だった。

「!!!!?  
」

「うおおおおお…っ!!!」

な、なんだ!? 急にベジータさんが呻き出したぞ!?

「や やはりそうかつ!!!」

尚も悶え苦しむベジータさん

い、一体どうしたって言うんだ…?!?

「ぐああ…!!!」

ボツ!! と超<sup>トク</sup>サイヤ人へと変身するベジータさんは尚も呻き続ける

「く…くおおお…!!!」

「べ ベジータさんっ!! 悪い心をバビディに利用されようとしているのです!! 無心になりなさい!! 何も考えてはいけませんっ!!」

界王神様が必死に言葉を掛けていているけど、ベジータさんにはあまり効果はなさそうだ

「う……うるせえっ…!! ガ…ガタガタぬかすな…!!!」

「うわおおおおお…!!」

な、なんて迫力だ!! 空気がビリビリしてやがる!!

「べ ベジータ…!!」

ようやく呻き終えたベジータさんは俯いたその姿勢からその顔を上げた、そこには…!!

「はああ……」

額に禍々しい《M》の文字を刻み、その瞳に邪悪ものを滾らせた、あの頃のベジータがいた!!